

を抽出し註解を加へたもので、「太平記鈔」と共に類書中に重きをなしてゐる。刊本の外現存は國文註釋全書所収本がある。「高木(武)著者」世雄房日性。日性は京都洛東法寺(日蓮宗)の學僧で、典籍の註釋・編纂・刊行に大きな功績を残し、慶長十九年二月二十六日、六十一歳で入寂した。「成立」本書は要法寺版の一として、古活字を以て慶長頃(刊行せられ)てゐるから、その成立は慶長頃か、若しくは

傷に及ぶ。「二段、伯州城内」家老大星由良之助は蜂の争ひに不吉の前兆を知る。やがて鎌倉よりの凶報到り、家中一同の評定となるが、相家老斧九太夫は御用金の分配を主張し、算用が合はぬと言つて勘定役早野三左衛門を問責する。「三段、顔世御前館」由良之助は、師直と内應してゐる九太夫を欺くため、先君の後室顔世に懇慕と見せる。九太夫はこれを問詰するが、由良之助は却つて九太夫がお金藏から金子を盗んだ證據の小箱、並びに金子粉

して毎夜物嫁に出てゐる。所へこれもまた一家のため密かに祇園へ身を沈め、浮橋と名告つてゐた重太郎の妹おむつが、主家を逃れ來つて圓らずも娘に出會ひ、互に身の淺ましさを恥ぢ且つ嘆く。「七段、喜内浪宅」おむつは、おむつを伴つて歸る。家では舅喜内が長の病氣の上、我が子太郎は抱病を病んでゐる。所へ重太郎が久し振に歸つてくる。さる主に召抱へられて鎌倉へ下るとの事である。これを

を祝する。折から老母とおむつとが、おむつが奥で自害した事を告げ知らせる。「八段、山科閑居」寺岡平右衛門は、由良之助が敵討の所存なく、山科に田地を求め藏を建て、あまつさへ師直へ出入を願つてゐると聞き、その心底を確めんと、師直よりの上使、師直衛と偽つて由良之助を訪れ、鹽治の一子爲若の

首を討つて送り、一方萬一の場合は爲若の身代りに立てしめんと、女房おきたをして伴平吉を伴つて同時に由良之助を訪れしめる。併し由良之助はこれを看破し、且つその心底に感じ、連判狀に血判を許す。「九段、白洲」藥師寺治郎左衛門は、由良之助から討入の用意の品の調達を依頼された天河屋義平とその伴由松とを拷問に附し、由松は遂に死に至るが、義平は頑として白狀しない。「十段、討入」義士の討入。覺むればそれは拷問に疲れ果てた義平の夢であつた。そこへ寺岡平右衛門が早打で大望成就を知らせるので、義平は始めて一切を白狀して赦される。

「康富記」の源氏比丘尼のこと、「時慶卿記」の往生院比丘尼が「平家物語」を讀んだこと等の例が擧げられてゐる。これ等室町時代の物語僧の太平記讀と、江戸時代の太平記讀との關聯は明かでないが、江戸時代の初期には太平記讀の確かな例であらう(但し物語僧は「太平記」をのみ讀んだのではなく、「看聞御記」の物語僧が、山名奥州謀反事を語つたこと、

てその子孫に傳はつた。金澤には和田養元から傳授を受けたといはれる。高野休意の「理盡抄講釋」もあり、また「太平記抄」の著者なる要法寺日性の門弟佐々正益の太平記讀もあつたといふ(以上「理盡抄」のこと、主として神田本附屬の「覺」及び前田家尊經閣所藏「太平記理盡抄由來書」による)。「理盡抄講釋」は民間にも行はれるやうになつて、元祿の頃赤松清左衛門(或は見附清左衛門)といふものが淺草見附で講釋をなし、群集して大に行はれたといふ

の太平記講釋師赤松梅庵は、假説の人物であらうが、太平記讀の實狀を示してゐると思はれる。「人倫訓蒙圖彙」にある太平記讀の解説及び繪もよく實狀を傳へるものであるが、これと「日本永代藏」の權六が、神田の筋違橋で「太平記」の勸進讀をやる事、「元祿會我物語」の大津屋彌六が、太平記讀に旅姿をやつす事などは、太平記讀が多くみじめな存在であつたことを示す。太平記讀若しくは太平記講釋なる名稱は、元祿前後の諸書に數多く散見し、更に後々にまで及んでゐるが、後になると、必ずしも「太平記」をのみ讀んだのではなく、「中村雜記」の寶永五年の記載にも、「當時江戸にて太平記講尺とて席をしき世間近代の物語等をする人あり」とあつて、名は太平記讀であるが、實際は近世のものを読んだやうである。かくて「太閤記」「三河後風土記」「赤穂記」の如きものが行はれるやうになつて、一般の講釋に接続したのである。(講談參照)

【構想】「淨瑠璃譜」に「忠臣蔵にまさりしと大評判大入り也」とあるが當つてゐない。徒らに趣向の奇をのみ狙つた結果、人物の性格は捉へにくく、場面も取つて附けたやうなのが、多い。趣向も先蹤を追つたものが多く、創意に乏しく、七段目「喜内浪宅」が「鬼鹿毛無佐志鏡」の三段目を、その儘である如きは、その著しい例である。全體として聯絡の缺けてゐるのは合作の弊であらう。【影響】本作は、歌舞伎に移されて、翌明和四年春市村座で上演された外、幾回となく繰返されたが、殊に七段目「喜内浪宅」は今日迄演ぜられてゐる。又宮蘭節の「鳥邊山」は、本作の五段目「道行人目の重縫」から出たものである。なほ義士劇の系統については、「古今いろは評林」や「忠臣類聚」に詳しい。【高野(正)】

【参考】義士篇後篇解題高野辰之(名著文庫)○歌舞伎狂言細見飯塚友一郎○赤穂義士劇集解題(日本戯曲全集)○近世邦楽年表(義太夫節之部)○正・續・續々歌舞伎年代記

太平記讀(きよみ) 藝能の一種【別名】

【参考】中世文學の一觀點藤田徳太郎(歴史と國文學四ノ五)○室町時代書目解説後藤丹治(岩波講座日本文學)○講談落語今昔譚 關根默庵○太平記讀に就いて 青木辰治(國語教育六ノ六)○講談の變遷 江山有勁(書星四ノ一〇)○太平記讀について 龜田純一郎(國語と國文學八ノ一〇)

大瓶屋々(おおいんや)「鳥獸物の諸曲」を見よ。太平百物語(たいへいひゃくものがたり) 浮世草子(うきくさこ) 五卷【作者】菅生堂人惠忠居士と署名がある。【書工】高木幸助貞武【刊行】享保十七年。【諸本】徳川文藝類聚・近代日本文學大系等所收【解説】五卷五十話、動物説話最も多く、全篇の半數以上の二十八を數へる。動物中狐に關するもの九篇、猫に關するもの三篇、猿に關

【参考】義士篇後篇解題高野辰之(名著文庫)○歌舞伎狂言細見飯塚友一郎○赤穂義士劇集解題(日本戯曲全集)○近世邦楽年表(義太夫節之部)○正・續・續々歌舞伎年代記

太平記讀(きよみ) 藝能の一種【別名】

【参考】中世文學の一觀點藤田徳太郎(歴史と國文學四ノ五)○室町時代書目解説後藤丹治(岩波講座日本文學)○講談落語今昔譚 關根默庵○太平記讀に就いて 青木辰治(國語教育六ノ六)○講談の變遷 江山有勁(書星四ノ一〇)○太平記讀について 龜田純一郎(國語と國文學八ノ一〇)



(龜田純一郎) 太平記讀



するもの二篇、蛇に關するもの二篇、類に關するもの二篇、熊に關するもの二篇、狸に關するもの二篇、龜に關するもの二篇、蜘蛛に關するもの二篇、正體の解らぬ動物に關するもの三篇、次に天狗説話五篇がある。幽霊説話と見るべきものは十篇を數へる事が出来る。怪婚説話としては、一の八、調介菱繪の女と契りし事、三の三十、小吉妻の幽霊と物語せし事(白狐の靈)の二篇がある。その他、ろくろ首に關するもの、技藝説話・實話、鬼に關するもの各一篇がある。目次の終に「以上前編終、後編後より出し申し候」とあるが、後編は出版せられてゐない。強ひて百物語の數を揃へようとした爲め説話の構成が單純となり、座談的形式を持つやうになつてゐる。これは百物語系の説話が假名草子式小話より漸次小説的構成へと展開して來た徑路を逆に元へ戻らうとする傾を示してゐるものである。それだけ藝術的には價値の低いものとなつてゐる。「小泉」

太平樂 雅樂舞曲【名義】天下太平を祝ふ樂の意か。【異稱】武昌太平樂・項莊鴻門曲・巾舞・泰平樂・武將太平樂【性質】唐樂。新樂の中曲。太食調曲に屬する。道行に朝小子(拍子十二、末四拍子)を用ひ、破に武昌樂(二拍子二十)を用ひ、急に合歡鹽(拍子十六)を用ひる。舞があり四人で舞ふ。舞人は金の鎧を着甲をかぶり、劍を帯び、鉦をとり、魚袋と稱する魚形の弓袋を左腋より背に負ひ、右腰に胡録をつけ、戰陣に臨んだ有様にて舞ふ。初めは鉦をとり、後には鉦を地に置いて劍をぬき、これを打ち振りつつ舞ふ。非常に勇壯なものである。答舞には「倍鹽」を用ひ、或は「拍子」を用ひる。近來は新帝陛下の御即位禮に際し、「萬武樂」と共に必ずこの舞を行

はせ給ふ例となつてゐる。【沿革】「太平樂」と稱すべきものは、支那に多くある。唐の「武昌太平樂」は、「五方獅子舞」とも稱し、五方の獅子がその方の色に從つて毛を綴つて衣として舞ふといふが、この「太平樂」は、それとは全く別種である。又公莫舞即ち巾舞と混し、漢高祖鴻門の會で項莊の劍舞した事を以て、この樂であると稱する説もあるが、それは單にその舞容の似た所から出た附會の説であらう。



我が國には古く「武昌太平樂」として傳來したのを、仁明天皇の頃、樂制改革に際して「朝小子」「武昌樂」「合歡鹽」の三曲を組合せて一曲とし、これを「太平樂」と呼び、「皇帝破陣樂」の如く、常裝束に劍を帯び鉦を持つて舞うたのであるが、近代に至りその服裝を改め、「秦王破陣樂」に於ける服裝をその儘用ひて、鎧・甲冑を用ひるやうになつたものである。(田邊)

太平樂卷物

【作者】天竺老人(風來山人)【畫工】峰周【名稱】一名「お千代の傳」、太平樂は唐樂、江戸時代に勝手な言を吐くのを太平樂と云つたから兩義を掛けた意。お千代は篇中の女主人公の名。【刊行】單行本は未詳。「風來六々部集」(安永九年)にも入つてゐる。【諸本】「風來山人傑作集(帝國文庫)・風來山人集(有朋堂文庫)・狂文俳文集(近代日本文學大系)等所收。【題材】明かに山岡明阿彌作の「踊婦人傳(別項)」の構想に據つたものである。該作は三浦屋高尾が自分の妹女郎青柳の姉おせきが、入江町の夜鷹になつてゐるのを吉原へ連れ行かうと説服にかゝり、却つておせきの氣焰にやり込められると云ふ筋である。本篇中の船頭(船中の賣春婦)のお千代は寶曆頃實在した婦人で、この女の乗つた舟をお千代舟と稱した。

【梗概】妓に、ぼちや〜のお千代と稱する船頭があつた。頃しも夏の最中、橋町の藝者二人、仲間の小まきと舟で歸る途中、咄の種にお千代を船へ呼んで、「あつたら器量を持ちながら、いやしい商賣、せめて色里の河岸へなりと出なさる方がよくはあるまいか、もし又藝者になる氣なら私の妹分にしてひき廻して上げやんせう」と云へば、お千代はふき出して逆に大氣焰を吐いて、「昔から變らぬものは廓の風俗、年中行事、變り果てたのは女郎衆の體たらく」と、遊女の心のさもしさを罵り、次に「偪り前は高い衣裳持物を身につけて、十八九兩が物はある。お前方晝夜のつとめが二人して三歩づつ、分けた所が一步二朱、月三十日賣りつめても十兩あまり、それでそんな衣裳が出来ようかえ、うはべ許りは娘でも、裏は賣女からつりを取るお前方の身の上」と、

大寶律令

【作者】天竺老人(風來山人)【畫工】峰周【名稱】一名「お千代の傳」、太平樂は唐樂、江戸時代に勝手な言を吐くのを太平樂と云つたから兩義を掛けた意。お千代は篇中の女主人公の名。【刊行】單行本は未詳。「風來六々部集」(安永九年)にも入つてゐる。【諸本】「風來山人傑作集(帝國文庫)・風來山人集(有朋堂文庫)・狂文俳文集(近代日本文學大系)等所收。【題材】明かに山岡明阿彌作の「踊婦人傳(別項)」の構想に據つたものである。該作は三浦屋高尾が自分の妹女郎青柳の姉おせきが、入江町の夜鷹になつてゐるのを吉原へ連れ行かうと説服にかゝり、却つておせきの氣焰にやり込められると云ふ筋である。本篇中の船頭(船中の賣春婦)のお千代は寶曆頃實在した婦人で、この女の乗つた舟をお千代舟と稱した。

【梗概】妓に、ぼちや〜のお千代と稱する船頭があつた。頃しも夏の最中、橋町の藝者二人、仲間の小まきと舟で歸る途中、咄の種にお千代を船へ呼んで、「あつたら器量を持ちながら、いやしい商賣、せめて色里の河岸へなりと出なさる方がよくはあるまいか、もし又藝者になる氣なら私の妹分にしてひき廻して上げやんせう」と云へば、お千代はふき出して逆に大氣焰を吐いて、「昔から變らぬものは廓の風俗、年中行事、變り果てたのは女郎衆の體たらく」と、遊女の心のさもしさを罵り、次に「偪り前は高い衣裳持物を身につけて、十八九兩が物はある。お前方晝夜のつとめが二人して三歩づつ、分けた所が一步二朱、月三十日賣りつめても十兩あまり、それでそんな衣裳が出来ようかえ、うはべ許りは娘でも、裏は賣女からつりを取るお前方の身の上」と、

【作者】天竺老人(風來山人)【畫工】峰周【名稱】一名「お千代の傳」、太平樂は唐樂、江戸時代に勝手な言を吐くのを太平樂と云つたから兩義を掛けた意。お千代は篇中の女主人公の名。【刊行】單行本は未詳。「風來六々部集」(安永九年)にも入つてゐる。【諸本】「風來山人傑作集(帝國文庫)・風來山人集(有朋堂文庫)・狂文俳文集(近代日本文學大系)等所收。【題材】明かに山岡明阿彌作の「踊婦人傳(別項)」の構想に據つたものである。該作は三浦屋高尾が自分の妹女郎青柳の姉おせきが、入江町の夜鷹になつてゐるのを吉原へ連れ行かうと説服にかゝり、却つておせきの氣焰にやり込められると云ふ筋である。本篇中の船頭(船中の賣春婦)のお千代は寶曆頃實在した婦人で、この女の乗つた舟をお千代舟と稱した。

【作者】天竺老人(風來山人)【畫工】峰周【名稱】一名「お千代の傳」、太平樂は唐樂、江戸時代に勝手な言を吐くのを太平樂と云つたから兩義を掛けた意。お千代は篇中の女主人公の名。【刊行】單行本は未詳。「風來六々部集」(安永九年)にも入つてゐる。【諸本】「風來山人傑作集(帝國文庫)・風來山人集(有朋堂文庫)・狂文俳文集(近代日本文學大系)等所收。【題材】明かに山岡明阿彌作の「踊婦人傳(別項)」の構想に據つたものである。該作は三浦屋高尾が自分の妹女郎青柳の姉おせきが、入江町の夜鷹になつてゐるのを吉原へ連れ行かうと説服にかゝり、却つておせきの氣焰にやり込められると云ふ筋である。本篇中の船頭(船中の賣春婦)のお千代は寶曆頃實在した婦人で、この女の乗つた舟をお千代舟と稱した。



を用ひる。舞あり四人で舞ふ。舞人は金の  
鎧を着、甲をかぶり、劍を帯び、鉾をとり、魚  
袋と稱する魚形の弓袋を左腋より背に負ひ、  
右腰に胡録をつけ、戰陣に臨んだ有様にて舞  
ふ。初めは鉾をとり、後には鉾を地に置いて  
劍をぬき、これを打ち振りつつ舞ふ。非常に  
勇壯なものである。答舞には「倍膳」を用ひ、  
或は「狛神」を用ひる。近來は新帝陛下の御即  
位禮に際し、「萬歳樂」と共に必ずこの舞を行

我が國には古く「武昌太平樂」として傳來した  
のを、仁明天皇の頃、樂制改革に際して「朝小  
子」「武昌樂」「合歡鹽」の三曲を組合せて一曲  
とし、これを「太平樂」と呼び、「皇帝破陣樂」の  
如く、常裝束に劍を帯び鉾を持つて舞うたの  
であるが、近代に至りその服裝を改め、秦王  
破陣樂に於ける服裝をその儘用ひて、鎧・甲  
冑を用ひるやうになつたものである。(田邊)

逆に大氣焔を吐いて、「昔から變らぬものは廓  
の風俗、年中行事、變り果てたのは女郎衆の  
體たらく」と、遊女の心のさもしさを罵り、次  
に「借お前方は高い衣裳持物を身につけて、十  
八九兩が物はある。お前方晝夜のつとめが二  
人して三歩づつ、分けた所が一步二米、月三  
十日賣りつめても十兩あまり、それでそんな  
衣裳が出来ようかえ、うはべ許りは娘でも、  
裏は賣女からつりを取るお前方の身の上」と、

で編せられ、國家統治の根本法典を成した。  
我が國では天智天皇七年に編された所謂近江  
令を以て令編纂の嚆矢とする。この時律は未  
だ編せられるに及ばなかつたが、天武天皇の  
御代に律令共に編せられ、文武天皇に至つて  
更に又大規模の編纂が行はれ、大寶元年に出  
來上つたのが大寶律令である。而も元正天皇  
の養老年中には三度その編纂が行はれ、今日  
に傳はるものは實にこの最後の律令に外なら

ののであるが、大寶律令を以て劃時代的の  
とする考はその當時より行はれてゐた事、  
養老律令の編纂後も天平勝寶九年までは大寶  
律令が施行せられてゐた事、及び養老律令の  
内容は養老律令とさのみ大なる差異なかつた  
と考へられる事等の理由より、普通には大寶  
律令の名が最も流布し、便宜上養老律令の名  
に代つて用ひられることも亦甚だ多いのであ  
る。「内容」養老律は、名例・衛禁・職制・戸婚  
・廩庫・擅興・賊盜・鬪訟・詐僞・雜捕・斷獄の  
十二篇に分れ、養老令は官位・職員・後宮職員・  
東宮職員・家令職員・神祇・僧尼・戸・賦役・  
學・選叙・繼嗣・考課・祿・宮衛・軍防・儀制・衣  
服・營繕・公式・倉庫・廩牧・醫疾・假寧・喪葬・關  
市・捕亡・獄・雜の三十篇に分れ、各篇多くの條  
文より成つてゐるが、大寶律令も亦これと同  
じ組織であつたと考へられる(職員が、官位と  
あり、考課が考仕とあつたやうな篇名の差異  
はある)。そしてこの組織は、概ね支那のそれ  
に據つたものであるが、法令の内容に至つても  
彼に準據してゐる所は頗る多い。中には彼の  
條文をその儘移植した如き所も見うけられ  
る。併し概していへば、支那律令に向つて一  
應の批判を加へ、その不合理を修正し、國情  
に適應するを變改してゐるのであつて、編者  
の識見乃至苦心はこれを隨所に看取すること  
ができるのである。「價值」次に篇目によつ  
ても知られる通り、律令の規定する所は統治  
組織・國民生活のあらゆる方面に互つて居り、  
且つ奈良朝や平安朝初期にはかなり嚴格に施  
行せられたと考へられるから、當代の社會狀  
態を論ずるには、まづこれによつて基礎知識  
を得る事が最も肝要である。又その後も近世  
まで朝廷を中心として行はれた法は、律令法

及びそれから派生したものであつたから、廣  
く國史一般の理解に於ても、律令の知識を輕  
んずべきではない。  
【註釋書】現今に傳はる註釋書は、養老令に關  
したものでばかりであるが、次に主要なもの  
をあげる。令義解清原夏野等○令集解惟宗直本  
令抄一條兼良○標注令義解校本近藤芳樹○令義  
解講義小中村清矩  
【參考】律令考佐藤誠實(國學院雜誌五・六)○法制  
史之研究三浦周行○法制史論集中田憲○律  
令の研究瀧川政次郎

大菩薩峠 小説 【作者】中里  
介山【發表】明治末年頃起稿、大正二年九月  
初めて都新聞に發表、斷續約十年間に及ぶ。  
一時絶筆し、數年讀書沈思の後續稿、その一  
部分を東京日々新聞、國民新聞に掲載した。  
【刊行】大正七年春、文選植字印刷とも自力  
にて「鈴鹿山の巻」まで二卷刊行、翌八年十月  
から同九年十月までの間に「伯耆の安綱の巻」  
十二卷を自費出版。同十年五月、新たに書肆  
(春秋社)によつて、第一卷から刊行され、第十  
冊第二十卷「萬門三級」の巻に及んで一先づ完  
結。大正十二年、縮刷版刊行。續稿後冊數遞  
加、昭和二年普及版刊行、爾後普及版型のまゝ  
第十冊に及んで、現在なほ完結してゐない。  
【卷名】未曾有の長篇ゆゑ、今普及版によつて  
各冊の卷名を擧げて置く。

第一「甲源一刀流の巻」第二「鈴鹿山の巻」第三  
「壬生と島原の巻」第四「三輪の神杉の巻」第五  
「龍神の巻」第六「問の山の巻」以上第一冊○第  
七「東海道」の巻○第八「白根山の巻」第九「女子  
と小人の巻」第十「市中騒動」の巻○第十一「駒  
井能登守の巻」第十二「伯耆の安綱」の巻以上第  
二冊○第十三「如法暗夜の巻」第十四「お銀様  
の巻」第十五「慢心和尚の巻」第十六「道庵と鱈八

の巻」以上第三冊○第十七「黒野白雲」の巻○第  
十八「安房の國」の巻○第十九「小名路」の巻○第  
二十「萬門三級の巻」以上第四冊○第二十一「無明の  
巻」○第二十二「白骨の巻」○第二十三「他生の巻」上  
(以上第五冊)○第二十三「他生の巻」下○第二十四「流  
轉の巻」○第二十五「みちやの巻」(以上第六冊)○  
第二十六「めいろうの巻」○第二十七「鈴鹿」の巻○第二十八  
「Oscar」の巻(以上第七冊)○第二十九「年魚市の巻」  
(第八冊)○第三十「畜生谷」の巻○第三十一「勿來の  
巻」(以上第九冊)○第三十二「辨信」の巻(第十冊)。

【梗概】普及版第十冊には、著者撰定の精細な  
梗概がある。時代は徳川の末、机龍之助は武  
州御嶽山の奉納試合に、相手の宇津木文之丞  
を打殺す。その背後にはお濱なる女の魔像が  
絡んでゐる。文之丞の弟兵馬少年は龍之助を  
仇と狙ふ。龍之助は女と共に江戸に立ち退い  
て潜伏すること三年、荒んだ氣持からお濱と  
の生活が氣まづくなり、遂に女を斬つて新徴  
組の浪士と共に京都に向ふ。だが京都にも落  
つたかぜ大和路に入り、故あつて江戸へ歸る  
途中、妙な機縁から天誅組の浪士と十津川に  
立て籠る。戰敗れた落人の龍之助は、火藥で  
盲目となつた不自由な身で、紀州龍神の温泉  
に匿れてゐるうち、ある女の助けを得て、伊勢  
に渡り眼の療治をする。この間兵馬は俠盜七  
兵衛の助力を得て影の如く龍之助を追ふ。龍  
之助は江戸に歸るつもりで、東海道を下ると  
き、七兵衛の知るところとなり、いつしか三保  
松原で兵馬と出合ふ羽目になるが、七兵衛の  
敵役破落戸百藏なるものの悪戯から、思はず  
山の娘達の手引で遂に甲州に入る。とど甲府  
勤番の旗本神尾の邸に身を潜め、夜々幽鬼の  
如く市中に彷徨して辻斬りをする。兵馬と七  
兵衛も龍之助を追うて甲州入りをする。神尾  
が喰物にしようとした土家藤原家の女お銀様

を助けた龍之助は、この女と神尾の邸を出て  
先妻お濱の家に落ちる、併しお濱の一念で又  
血に狂ふことになる。二人は縁あつて江戸に  
出で、染井の化物屋敷とよぶ神尾の邸に匿れ  
る。龍之助の悪血はまだ鎮まらぬ。この頃か  
ら龍之助の生活に辨信なる小法師が伴ふ。龍  
之助はおわかと新たな關係から武州高尾山  
の蛇瀧に參籠して眼を養ふ。次いで月見寺に  
寓してお雪ちゃんに待つられる頃、いつ  
とはなく時々心境が和らぐ。お雪ちゃんの勸  
めで信州白骨の温泉に赴き冬籠りをする。だ  
がお雪ちゃんの遺瀨ない心の痛みから新たに  
二人だけの隱家を求めようとして加賀の白山  
に向ふ。その途中飛驒の高山で計らざる珍事  
に捲き込まれる。兵馬は龍之助を、辨信はお  
雪ちゃんを、それ、種々様々な目にあひつ  
つ尋ねもとめて來る。

【附言】この作が日本文學史上、比較を絶した  
長篇であり、一代の讀書界を風靡した大作で  
ある事はいふまでもないが、嚴密な意味の史  
的批評を下すことは作品未完の今日控へるを  
是とする。ただこの作の理解に役立つキイを  
二三述べれば、第一この作は全部一時の宿構  
になるものではなくて、著者と共に生長した  
小説なること、従つて最初はともかく、後に  
は著者の心境が即ち小説の趣向となること、  
又所謂主人公なるものが置かれてないこと、  
第二にこの作が、從來の日本文學上の、否國  
民生活上の傳統を大成した感じを與へるこ  
と、第三に著者は、所謂文壇とは接觸をもた  
ず、文壇的イデオロギイを離絶してゐること、  
第四に著者の藝術とは即ち宗教的光明の謂ひ  
であること等である。

【柳田泉】

だいぼさ だいほん



代名詞

「大倭語學手引草」に始めて見える。西洋文法の譯語から來たものである。「指詞」と稱したものである(韋野氏「日本文法」の如き)。「解説」事物の名をいはず、事物そのものを直に指していふ體言である。「種類」通常、これを人代名詞と指示代名詞に分つ。人代名詞は人をさしていふもの。指示代名詞は事物、場所、方向等をさしていふもので、人代名詞には自稱(談話者自ら言ふ)、對稱(對手をさしていふ)、他稱(談話者及び對手以外のものをいふ。或は一人稱二人稱・三人稱ともいふ)を區別し、指示代名詞には、近稱(談話者に近いもの)、中稱(對手に近いもの)、遠稱(談話者にも對手にも遠いもの)を區別してゐる。「特徴」國語に於ては指示代名詞は簡單であり、人代名詞は複雑である。それは人代名詞が待遇に支配される結果から來てゐる。われ／＼は談話をなす際に、常に對手が同等であるか、同等以下か、同等以上かと云ふことを意識においてゐる。代名詞に於て、それが最も著しく顯はれる。對話に於ける話者の態度は三通りに分けられる。話者と對手とが同等の間柄の場合(常態)、話者が對手に對して目下である場合(敬態)、話者が對手より目上である場合(僥態)である。殊に使用慣れた語は、次第に敬意が失せるから、それに代る者が、次第に補充されて愈々その數を加へる。「賞様」の如き、敬態にあらはれる尊稱も、元祿時代には低度の尊稱にかはり、寧ろ親愛の意味を含めて云つたが、今では甚だしい卑稱になつて僥態のみあらはれる。かくして一の尊稱が卑稱に墮ちると、これに代つて尊稱を現はす新しい語が必要になり、新しい代名詞が生れる。又同時に卑稱になつた

太陽神話

「神話學」と「神話學史」とに於て異なる意義を有してゐる。神話學の上では、太陽神

ものは、從來の卑稱の地位を奪ふ。これが國語の人代名詞の變化し、生滅する所以である。これに反して、指示代名詞は待遇上の支配を受けることが尠く、殆ど古い形をそのまま今日に踏襲してゐる。これが指示代名詞の極めて單純なる所以に外ならぬ。又他稱の人代名詞は、普通「かれ」「あれ」だけを擧げるが、も

と他稱はみな指示代名詞を轉用したものであるから、指示代名詞と同じく、「かれ」「あれ」があれば、又「これ」もあり、「それ」もある。古典文學は、皆この例に従つてゐる。現代語に於ては、外國語の影響を受けるやうになつてから、純粹の人代名詞としての「彼」「彼女」を用ひんとする様子が見えるが、まだ雅馴なる國語と成り切つてゐない。普通は「この人」「あの人」「この方」「あの方」などを用ひながら、同じく他稱としては固有なものはないと云つて差支ない。「この人」「あの人」「この方」「あの方」などが純粹な代名詞と感ぜられず、單語としての意識の弱いことは、現に待遇の意味を加へる時、「この」「あの」の下に、「御」を添へて、「この御方」「あの御方」など云ふのを見ても分る。

題目踊

即ち南無妙法蓮華經を唱へつ踊る所からいふ。「解説」古來、京都市外松ヶ崎の涌泉寺に行はれて名高い。この寺は、もと歡喜寺と云ひ、天台宗に屬してゐたが、日蓮の法孫日像が徳治元年七月、この寺に來て宗旨を改めた時、歸依した村民が歡喜踊躍したのが初めと傳へる。

太陽

「神話學」と「神話學史」とに於て異なる意義を有してゐる。神話學の上では、太陽神

創刊、昭和三年三月廢刊、博文館。「解説」博文館は明治二十年六月創業以來、諸雜誌の論説を抄録して「日本大家論集」と名づけ、月刊として發刊してゐたが、これが案外に成功した。後、他の小雜誌をも合併して、その後身として生れたのが「太陽」で、創刊は「文藝俱樂部」(別項)「少年世界」と同年であつた。當時の博文館は、出版界の鬼才大橋文太郎(乙羽)を迎へて編輯部を統率せしめ、當時なほ大學に在學中の高山樗牛は、文藝部主任として筆を執つてゐた。樗牛はその後三十年四月以降は全く編輯部内の人として活躍した。

當時の「太陽」編輯主任は坪谷水哉で、その下には、島谷部銑太郎(奉汀)、長谷川誠也(天溪)なども入社して多士濟々、宛然雜誌王國を築いてゐた。「太陽」は元來が政治社會雜誌で、創刊の當初から天下一流の名士を包容してゐたが、文藝方面に於ても、才華煥發の樗牛が美學の研究、文學批評に健筆を揮ひ、創作家の側に於ても、算村・紅葉を初め眉山・花圃・南翠・小波・露伴・麗水・一葉・澁柿園等の順で漸次誌上を飾つて行つた。兎に角三十餘年に亘つてゐるので、大抵の作者が一度は紹介されたのであつた。明治三十年六月は創業十周年に當り、「太陽」の第三卷第十二號を臨時増刊(菊判大)として、過去十年間の代表的名作を以て全員を埋めた。それは次の七篇であつた。

當世書生氣質(坪内逍遙)・當世商人氣質(巖谷小波)・淨雲(二葉亭四迷)・浮城物語(矢野龍溪)・大詩人(幸田露伴)・埋木(森鷗外)・二人女房(尾崎紅葉)・外に高山樗牛は「明治の小説」なる三十頁に互



(號刊創) 陽 太

る論文を發表した。後、明治四十年六月の創業二十周年には、第十三卷第九號を「明治名著集」と題し、明治初年からの著名な著述を覆刻して、約五百頁の記念號を出し、續いて四十二年二月の臨時増刊には、「明治文藝史」を刊行し、更に昭和二年六月の創業四十周年記念増刊には、「明治大正の文化」を紹介した。その間、三十九年から四十一年にかけての自然主義運動、主として舊套打破の方面に全力を注いだ本誌の熱狂的態度は、本誌として前後に餘り例のなかつた程で、「早稻田文學」(別項)

と共に、この運動の急先鋒であつた。當時「太陽」には、主筆として長谷川天溪がゐた。天溪は自然派の關將で、本誌上へ發表した「現實暴露の悲哀」は、當時の有名な論文であつた。外に天溪は、文藝取締問題、文藝院設立問題に就いても論じてゐた。平出修の創作「逆徒」を掲げて、大正二年の九月號は前後にたゞ一回の發賣禁止を食つた。「備考」「太陽」は四六倍判で、頁數も分厚く自ら雜誌界の王者を以て任じてゐたが、前記四種の記念號の内、第一、四のものは菊判であつた。なほ一二年、菊判に改めたこともあつたが、大體には四六倍判

く、初めその寺島なる一社中に屬して佛語をやリ、當時南阿州地方に遊歴してゐた二柳等とも相識つた。後、致仕して明和三年(推定)郷國を辭し京都に出た。「俳諧家譜拾遺」に據







彼の作つた感懐八句を讀めば、憂愁悲嘆の狀眞に憐むべきものがある。かくて妻子と共に殆ど路頭に迷ふ有様であつたが、兵庫に漂泊の旅の暫しの舎を求め、そこに三選居を結んだ。而も運命はなほも彼を惠まず、翌七年秋頃から病に犯され、京都に上つて病を養つたが、遂に復び起らずして歿した。【批評】大魯は蕪村に最も深く師事し、蕪村も亦我が門の囊錐であるとその才を賞した。而も彼は、師蕪村の單なる追隨者に終つたのではなかつた。彼の藝術的素質は寧ろ蕪村のそれとは全く違つたものであつた。元來大魯の性格は、直情徑行、物に激し易く、且つ放縱不羈であつたらしい。併し彼は決して惡むべき放蕩無頼の徒ではなかつた。牡丹折りし父の怒ぞなつ

ゆゑにすももをば草ふまき

大魯の校閲を経て出版したものなどがある。【門流及子孫】大阪の田邊百堂が若陰舎二世を繼ぎ、百堂の子齋齋又竹齋が更に三世を繼いだ。文政三年大魯五十回忌追善として空齋の編した「若陰集」に依つてその傳統は明かである。竹齋は又文政九年にも、大魯追善「名月帖」を撰んだ。但し百堂・竹齋等は實大魯から實際に俳系を承け繼いだものでなく、自ら勝手に若陰舎の號を冒したものでない。大魯には男子がなかつたと見え、その歿後、吉分禎吉といふ養子が跡を相續した。禎吉は春魯と號して俳諧も聊か嗜み、寛政六年には兵庫八棟精舎(俗稱築島寺)の境内に、「花鳥の揃へば春の暮るゝかな」といふ句を刻して父の墳を建てた。なほ大魯の遺弟青彦は、文化七年大魯の

かしき」といふ一句に、彼の性格の全面は見られると思ふ。表面だけは強くて、裏面は涙脆い彼であつた。大魯の藝術は要するに彼のこの性格に根ざしてゐる。随つて蕪村のやうな絢爛とか高雅とか評すべき所謂藝術の香の高いつは彼には求められない。激した儘感じた儘さうして悲しんだ儘の偽らない生活記録が大魯の俳諧であつた。蕪村のやうな手の込んだ技巧は固より全く見られない。ただ直截明快、言はうとする所をその儘に言ひ下してゐる。それは動もすれば平板な凡作となり終る事もあるが、而も直に讀者の胸を打ち、心に觸れる點に至つては、蕪村の句に求め難い特質を持つてゐる。彼の世に狭められた心と感傷的な嘆きとが、彼の作の中には深く滲ん

れも多くは舊態を保存してゐる。又各地に御田といふ行事があつて、田の耕耘の様を演じ出すが、その中の田植歌も勿論この部類に屬する。次に例を示す。○坂東殿原は弓は上手なるもの、空たつ鳥を射て

である。少くとも蕪村門にあつて最も異色に富む作家として、彼の作品は十分に鑑賞するに堪へるであらう。只惜しむべきは、彼の句は「若陰句選」に傳へるもの僅に二百句、更に逸句を集めても合計三百句に満たないことである。【作品・編著】作品は、彼の歿後、門流が遺稿を集め、蕪村の序と几董の跋とを得て、安永八年「若陰句選」と題して出版した(河東碧梧桐が解説を附して大正十三年十二月に出した摸刻本があり、又名家俳句集(有朋堂文庫)天明名家句選(俳書大系)等の中に纏刻されてある)。なほ彼の編に成るものに、「俳諧五子稿」(二冊、安永四年刊。浪花の書肆石原茂兵衛が言水・去來・素堂・活徳・來山五家の句を輯め、大魯の閨を乞うたもの)、「初學俳式道の枝折」(一冊、安永三年

大魯の校閲を経て出版したものなどがある。【門流及子孫】大阪の田邊百堂が若陰舎二世を繼ぎ、百堂の子齋齋又竹齋が更に三世を繼いだ。文政三年大魯五十回忌追善として空齋の編した「若陰集」に依つてその傳統は明かである。竹齋は又文政九年にも、大魯追善「名月帖」を撰んだ。但し百堂・竹齋等は實大魯から實際に俳系を承け繼いだものでなく、自ら勝手に若陰舎の號を冒したものでない。大魯には男子がなかつたと見え、その歿後、吉分禎吉といふ養子が跡を相續した。禎吉は春魯と號して俳諧も聊か嗜み、寛政六年には兵庫八棟精舎(俗稱築島寺)の境内に、「花鳥の揃へば春の暮るゝかな」といふ句を刻して父の墳を建てた。なほ大魯の遺弟青彦は、文化七年大魯の

大魯の校閲を経て出版したものなどがある。【門流及子孫】大阪の田邊百堂が若陰舎二世を繼ぎ、百堂の子齋齋又竹齋が更に三世を繼いだ。文政三年大魯五十回忌追善として空齋の編した「若陰集」に依つてその傳統は明かである。竹齋は又文政九年にも、大魯追善「名月帖」を撰んだ。但し百堂・竹齋等は實大魯から實際に俳系を承け繼いだものでなく、自ら勝手に若陰舎の號を冒したものでない。大魯には男子がなかつたと見え、その歿後、吉分禎吉といふ養子が跡を相續した。禎吉は春魯と號して俳諧も聊か嗜み、寛政六年には兵庫八棟精舎(俗稱築島寺)の境内に、「花鳥の揃へば春の暮るゝかな」といふ句を刻して父の墳を建てた。なほ大魯の遺弟青彦は、文化七年大魯の

時代以後中絶し、天明七年十二月二十七日の大嘗會に再興せられて(歌體品目)、今日に至つた。大嘗會には田圃を先づ奏し、次いで大伴・佐伯兩氏の久米舞、安部氏の吉志舞、内舎人の倭舞、夜に入つて五節を奏する例であつた。

三十三回忌に「霜月十三日」を撰び、嘗て蕪村から大魯に送つた手紙と大魯の遺句四章とを掲げ、門友の生き残り残つてゐる人々の追悼句を添へて出版した。

【参考】釋大魯若尾潤水(ホトトギス五ノ五)○若陰舎大魯類原退藏(同人五ノ五)○大魯雜記類原退藏(同人五ノ七・二)○大魯の交友類原退藏(同人六ノ五)○俳人大魯(大魯の主觀)西谷勢之介(早稻田文學二五二)【類原】第六天(1)「佛説物の謡曲」を見よ。

田植歌(たうえろ) 歌謡【名義】早少女が田に苗を植ゑる時に謡ふ歌の意。【沿革】起原は有史以前で、耕田播種の業の起ると殆ど同時に起つたのであらうが、これに用ひた歌は、「枕草子」に賀茂詣の途で、時鳥に關する歌を早少女の謡ふのを聞いたとて、「時鳥をれよかやつよ、をれなきてぞ我は田に立つ」と擧げてあるのを最古とする。いろ／＼の歌が歴代農民の間に謡はれて來た。近年農作改良の行はれてから大きに減退したが、それでもまだ僻遠の地では、古來から傳唱の歌を謡つてゐる。【種類】事に臨んで作成したもの、年々實際に用ひたものと、神事用のものと三種ある。臨時作成のものは、「榮花物語」治安三年の條、藤原道長が上東門院に田植の御覽に入れた時、奉行の者が新作した歌、「五月雨に裳裾ぬらして植うる田を、君が千とせの御株にせむ。植うるより數も知られず大空をくらにぞ積まむ御株の稻」の二首を、最古の例とする。年々實地に用ひたものは次第々々に作り出したもので、早少女たちが手もと足もとに氣をつけて、苗の根腰を折らず、深過ぎず淺過ぎぬやうに植ゑるやう、運動の緩急に調節させた曲節が附けてある。歌の形は長短不

定で、所によつては幾十句に及ぶものも謡ふが、最も多いのは七七五形のもの。歌意は前程を祝して、豊穰の様を述べるもの、田主の繁榮を讃歎するもの、鄙の戀をうたふもの、嫁姑の不和を述べるもの等が多く、處によつては田主の酷使を怨んで勞苦を訴へる歌もある。野趣の横溢は通有の性であるが、中國地方の山地や北陸東山兩道あたりの交通不便な地には、鎌倉時代あたりの古體を存するものがある。二三の例を示す。

田圃(別題)ともこの點に於て若干の關係を持つてゐる。(夜須禮歌參照)【田植神事歌】諸社の田歌中、伊勢太神宮田圃の田歌は審かにせぬが、「建久内宮年中行事」によれば、田歌は古くよりなかつたらしい。春日若宮

○此の田で千石とれたら、藏を立てます米藏を。お蔵の番には誰がよかる、一に無、二に雀、三に鶯時鳥。(埼玉縣)○今日の田植の田主様は、大金持と聞えた。奥の奥州、南部や津輕まで聞えた。外が濱までもナ聞えた。(新潟縣)○今日の田の家主の娘はどれがぞ、錦の小袖綴の帯。(神奈川縣)○わが子になさげかけるよりも、舅さん嫁御に情をかけなさい。(山梨縣)○あまり植ゑたれば腰がやめ候。お暇申す御亭主様。(山形縣)○梶原殿が軍見て、弓はぐ、矢はぐ、鏑めす。(神奈川縣)○昔の衆の物の上手には、飛驒の匠に、たてたり番匠、先づ一番に京の清水、六波羅堂や三十三間堂、御堂も立てし。出雲の國では大社やひのみさきはら、能義の清水、宇賀の庄下雲樹寺、伯耆の國で大山の地蔵堂檜皮葺。檜皮葺、黄金のたるき檜皮。(島根縣)○大阪の城が落ちたぞ、弓と矢と旗竿が流れる。(新潟縣)

神事用の多く舊曆の五月に、神田に田植の行事をした時に謡つたもので、住吉・諏訪・鹿島その他諸國の由緒ある神社に行はれた。こ

植歌で、中國地方の中部に行はれる歌なる事が知られる。朝歌四番、晝歌四番、晩歌四番、晝歌の間に酒來る時の歌と酒呑んで後の歌があり、最後に、あがり歌がある。その歌詞は現在もなほ行はれてゐるもので、「里藩集」所



儘さうして悲しんだ儘の偽らない生活記録が大魯の俳諧であつた。蕪村のやうな手の込んだ技巧は固より全く見られない。ただ直截明快、言はうとする所をその儘に言ひ下してゐる。それは動もすれば平板な凡作となり終る事もあるが、而も直に讀者の胸を打ち、心に觸れる點に至つては、蕪村の句に求め難い特質を持つてゐる。彼の世に狭はめられた心と感傷的な嘆息とが、彼の作の中には深く滲ん

帖」を撰んだ。但し百堂、竹齋等は、大魯から實際に俳系を承け繼いだものでなく、自ら勝手に肯陰舍の號を冒したものでない。大魯には男子がなかつたと見え、その後、吉分禎吉といふ養子が跡を相續した。禎吉は春魯と號して俳諧も聊か嗜み、寛政六年には兵庫八棟精舎(俗稱樂島寺)の境内に、「花鳥の揃へば春の暮るゝかな」といふ句を刻して父の墳を建てた。なほ大魯の遺弟者多は、文化七年大魯の

の修、藤原道長が上東門内田植の標を御覽に入れられた時、奉行の者が新作した歌、「五月雨に裳裾ぬらして植うる田を、君が千とせの御林にせむ。植うるより数も知られず大空をくらにぞ積まむ御林の稻の二首を、最古の例とする。年々實地に用ひたものは次第々々に作り出したもので、早少女たちが手もと足もとに氣をつけて、苗の根腰を折らず、深過ぎず浅過ぎぬやうに植ふるやう、運動の緩急に調節させた曲節が附けてある。歌の形は長短不

番匠、先づ一番に京の清水、六波羅堂や三十三間堂、御堂も立てし。出雲の國では大社やひのみさきはら、能義の清水、宇賀の庄で雲樹寺、伯耆の國で大山の地藏堂檜皮葺。檜皮葺、黄金のたるき檜皮。(鳥根縣)  
○大阪の城が落ちたぞ、弓と矢と旗竿が流れる。(新島縣)  
神事用のは多く舊曆の五月に、神田に田植の行事をした時に詠つたもので、住吉、諏訪、鹿島その他諸國の由緒ある神社に行はれた。こ

れも多くは舊曆を保存してゐる。又各地に御田といふ行事があつて、田の耕種の様を演じ出すが、その中の田植歌も勿論この部類に屬する。次に例を示す。

○坂東殿原は弓は上手なるもの、空たつ鳥を射て落したり。さても上手や空舞ふ鶴を落した。若い殿御がかけ馬射たる弓手は、さても射たなう、見事や弓の姿は。(廣島縣山縣郡新庄村郷社田植神事)

なほ大嘗會に用ひた田歌(別項)も、この類と見るべく、正月萬歳が詠つた田植も亦、田植歌として扱ふべきである。

【参考】古語集柴田寛 ○古事類苑神祇部産業部 ○俚語集文部省 ○俚語集拾遺高野山・大竹紫葉 ○田植草紙(日本歌謡集成所収) [高野]

田植の神事(たうちの「御田植祭」を見よ)。

田歌(たう) 歌謡【名稱】田植歌と同じ意味で、平安時代の雜藝(別項)の中、風俗歌の一種。【田植】天智天皇紀十年五月に、田植を奏した記事のあるのが初見である。次いで「續日本紀」天武天皇十四年正月十六日に「續日本紀」天武天皇十四年正月十六日に五節田植があり、その後、女踏歌が行はれ、同じく光仁天皇寶龜八年五月、渤海使節來朝の際田植を行ひ、「三代實錄」光孝天皇元慶八年十一月、大嘗會の際多治比氏田植を奏す等の記事が見える。雅樂寮にも田植師四人が置かれた(令集解)。弘仁十年の太政官符には、田植師一人となり、嘉祥元年の太政官符には、田植師二人と見える(類聚三代格)。「儀式」北山抄、「江家次第」等によれば、大嘗會の田植は多治比氏の舍人が供奉し、舞人十人とある。「皇太神宮儀式帳」には、二月に田を耕し、田植歌を歌ひ田植を奏する式が行はれた。かくて田植は大嘗會及び神事に行はれたが、室町

時代以後中絶し、天明七年十二月二十七日の大嘗會に再興せられて(歌謡品目)、今日に至つた。大嘗會には田植を先づ奏し、次いで大伴・佐伯兩氏の久米舞、安部氏の吉志舞、内舎人の倭舞、夜に入つて五節を奏する例であつた。この田植に歌はれる歌が田歌である。【大嘗會田歌】上古の田植は俚語より出たものであらう。平安朝初期の田歌は、大嘗會に悠紀主基の奏する風俗歌が官人の新作である如く、新作歌であつたらしいが、平安朝後期の田歌は、當時の民間の俚語が用ひられた。その歌を集めたものに、「大嘗會田歌」と題する寫本があり、その他に傳寂蓮筆と傳へる田歌、その他の田歌切が若干今日に残されてゐる。美濃田歌、筑紫田歌、陸奥國田歌、尾張田歌、五節田歌(天十四年正月十六日初めて奏せられた)、その他國名不明の田歌がある。歌詞は、神樂の前張や早歌、催馬樂・風俗歌(各別項)等と類似した所があり、囃子詞が多い。歌の形式は大體七七の調子で、囃子詞が入つて複雑な形となつてゐる。また短歌形式の歌も稀にある。而して全部を諸急返の三部に分つものが多し。即ち初めに普通の調子で、中途で急速の調子となり、更に初めの調子に返つて終ると云ふ組織になつてゐるのであらう。但し返は轉調の意で、調子を變へて繰返し歌ふ意かとも思はれる。近世再興の大嘗會の田歌は、律で、平調で歌はれる。この大嘗會田歌は、また民間、貴族の間に流行して雜藝の一となつた。「傀儡子記」や「新猿樂記」に云ふ田歌とは、この類であらうか。この田歌は、もと民間の豊年を祈る神事の田植歌に出たものと思はれるところがあつて、後世諸社で行はれる田植の神事歌と基を同じうし、

田歌(別項)ともこの點に於て若干の關係を持つてゐる。(夜須歌集参照)  
【田植神事歌】諸社の田歌中、伊勢太神宮田植の田歌は審かにせぬが、(建久内宮年中行事)によれば、田歌は古くよりなかつたらしい。春日若宮の田植神事の田歌は、今日も傳存せられてゐる。今は御田植祭(別項)は、毎年三月十五日に行はれる。もと二條天皇の長寛元年正月に始まつたもので、田植の歌四首より成る(明治七年刊、藤のしなひ)。即ち苗種・白玉・福萬石・粟の四首で、中にも白玉の如きは、大嘗會田歌の一節、「若苗取る手やは白玉、法華經書くこそ白玉なゆらや」と歌詞が似てゐて、大嘗會田歌と源を同じうしてゐることが明かである。鎌倉時代に入つては、盤梯神社所傳の御田植歌は、建治元年二月の奥書ある古寫本も存してゐて、その由來の古きことが察せられる。また住吉神社の御田植式は、毎年陰曆の五月二十八日に行はれ、今日も六月十四日に行はれてゐる。遊女が參拜し、八乙女の田舞がある。その田歌は、  
みましもしけや若苗取る手やは、白玉取る手こそ  
白玉なゆらや  
郭公をれよかやつよをれ鳴きてぞ我はよ田に立つ  
よ我はよ田に立つ

の如きもの六首より成つてゐるが、これは春日神社御田植祭の田歌、及び「枕草子」に出た田植歌を取り用ひて作りなしたものであらう。但しその起原は、この時代にまで溯ると思はれる。就中、第一歌の白玉は、天明七年再興の雅樂の田歌と歌詞が全く同一である。その他諸社に御田植歌は多い。  
【田植草紙】かく題する古寫本が二三存してゐる。その歌詞を見るに、室町時代以前の田

とあるものと、同源なることが分る。即ちこの地方に行はれる古代の田植歌の殘存したもので、平安朝の田歌とは全然趣が違ふが、近世田植歌の根原として、當代の民謡を知るのに大切な資料である。日本歌謡集成卷五所收。室町時代の田歌は舞の本の「伏見常盤」にも五首出てゐる。(田植歌・小歌参照) [藤田]  
【参考】陸奥國田歌解 黒川春村(近世文藝叢書俚語部) ○尾張田歌解 黒川春村(古謡集) ○梁塵



後録 佐佐木信綱(増訂梁塵秘抄) ○日本歌謡類  
棄下卷神事歌大和田建樹 ○日本歌謡史高野辰  
之 ○古事類苑樂舞部 ○國史大辭典田舞の項  
○田植神事及田歌 菅喜田和三郎(皇典講究所講  
演集) ○雅樂振張意見(田歌) 宮島春松(如蘭社  
話卷三十二) ○日本宗教風俗志加藤三郎  
當麻 註「佛説物の謡曲」を見よ。

當麻曼陀羅緣起

【解説】鎌倉光明寺所藏二卷。詞書によれば、  
奈良朝の昔、横佩の大臣なる人の姫君が、年  
若くして春の花にも心を染めず、秋の月にも



(藏寺明光) 起縁羅陀曼麻當

思ひを寄せず、専ら佛法に歸依して遂に大和  
國當麻寺に入り、生身の阿彌陀如來を拜まむ  
ことを祈念した。七日の後一人の比丘尼が來  
て百駄の蓮の莖を集めさせて絲を取りこれを  
五色に染め、やがておのが侍女をして大きな  
種葉浮土圖を織成せしめた。これが即ち當麻

曼陀羅であつて、姫はこの圖によつて親しく  
淨土の莊嚴を觀想し、やがて臨終の際には來  
迎引接されたが、この比丘尼が即ち阿彌陀の  
化身で侍女は觀音であつたといふ。この時織  
成したと傳ふる原本は今なほ當麻寺の寶藏に  
納められてゐるが、腐朽修補が甚しく原狀を  
摸索するのも困難な程である。この曼陀羅の  
緣起物語は後世次第に修飾され、遂には中將  
姫雲雀山の物語にも轉化して行くのであるが  
光明寺の繪卷は古今著聞集所載のものと同  
並んで物語としても最も古様を存するもので  
ある。その書様色彩極めて典麗で自由奔放  
の趣は乏しいが、描寫の飽くまで慎重で整頓  
してゐる點は、鎌倉繪卷の中でも平治物語繪  
卷(別項)等の系統に近いものであり、その筆者  
も同じく住吉慶恩と云はれてゐるが、元來慶  
恩とは「新因果經」の筆者法橋慶恩を後世に誤  
まり傳へたもので、而も慶恩がこの緣起を畫  
いたといふ根據も素よりない。蓋し鎌倉中葉  
頃の製作であつてその織麗雅な點に當代繪  
卷の特色を見るべきものである。(田中一)

田岡嶺雲 評論家【本名】佐代  
治【生歿】明治三年十月高知市外に生れ、大  
正元年九月歿す。享年四十三【閱歴】最初水  
産講習所に學び、次いで東京帝大文科の漢文  
選科に入り、支那文學を専攻した。卒業後、  
「江湖文學」「日本人」「帝國文學」「六合雜誌」な  
どに筆を執つた。彼の特色を發揮したのは「青  
年文」(別項誌上に於てであつた。「青年文」は  
二十八年の創刊で、嶺雲が主として筆を執り、  
奇警痛切にして情熱ある文章を以て、當時の  
文壇を論ぜるものは、常に作家の間に大なる  
波紋を作つた。その論文を集めた「嶺雲集」は、  
三十二年三月新聲社より刊行されて非常

なる歡迎を受け、當時論文集としては稀有の  
賣行きを示した。後、大日本圖書會社の「支那  
文學大綱」に、王漁洋・屈原・高青邱・蘇東坡な  
どを傳した。彼は直情徑行、よく人と争ふの  
で、同じところで一つの仕事をすることが出  
來ず、常に東西に放浪して、或は作州津山の  
中學教師となり、或は水戸の茨城新聞主筆と  
なり、或は前後二回、支那蘇州の學堂に教鞭  
を執り、或は北清事變に當つて、九州日報特  
派員として渡支し、更に中國日報主筆となつ  
たりした。中國報時代は當時の知事等の私  
行を許發したといふので、官吏侮辱の罪に問  
はれて下獄した(三十四年四月)。その時書いた  
ものに「下獄記」二卷がある。後、東京で創刊  
した日刊東亞新報の主筆となつたが、幾ばく  
もなく廢刊した。四十二年頃激しい春病に  
罹り、靜養に力むる傍ら、雜誌「黑白」に「明治  
逆臣傳」を書き、また「和譯漢文叢書」(全十二  
冊)を著した。それから「中央公論」に「數奇傳」  
と題する自傳を書き、一部に愛讀された。そ  
のうち病は益々進み、日光に轉地して療養し  
たが、大正元年遂に歿した。【著書】前記の  
外に「雲のちぎれ」「霹靂鞭」「壺中觀」「石川丈  
山」等がある。(高須)

西園寺公經の「鷹百首」(群書類從三五七)、持明  
院流には、藤原基春の「鷹經辨疑抄」(群書類  
從五四二)、「基成朝臣鷹狩記」(同五四二)丹鶴齋書  
本には基成を基盛に作つてゐる)、「鷹口傳」(同五四  
三)、「實鷹似鳩拙抄」(同五四六)、又藤原定家撰  
といはるゝものに、「鷹三百首」(群書類從三五  
七)、「小倉問答」一名「定家問答」(群書類從五四  
二)がある。この他「根津松鶴軒記」一名「根津  
家鷹書」(群書類從三五七)、「鷹開書」(群書類從  
五四三)、「鷹秘抄」(同五四四)、「養鷹秘抄」(同五  
四五)、「小笠原政清著「鷹書」」(小笠原長時著「當  
流鷹方口傳」(齋藤朝倉兩家鷹書」(群書類從五  
四六)、「荒井流鷹書」(同五四八)、「諏訪流鷹書」  
「吉田流鷹書」(白鷹記」(群書類從三五六)、「養鷹  
記」(同上)、慈鎮和尚作「鷹百首」(同三五七)、「蒙  
求鷹往來」(續群書類從三五五)、「近衛龍山公作  
「鷹百首」(同五四九)、「梵燈庵鷹飼百韻連歌」(同  
五五〇)、「策鷹和歌文字抄」(同上)がある。又江  
戸時代の御鷹野留書類を集めたものに、小宮  
山李之進著「御鷹野留書」二卷がある。(石村)

高尾船字文

【曲亭馬琴】「畫工」榮松齋長喜【刊行】寛  
政七年刊、葛屋重三郎板。「江戸作者部類」(別  
項)には、明辰の春とある。【諸本】寛政七  
年刊本は中本で、各冊長喜の口畫一葉あり、  
後天保六年葛屋重三郎・柴屋文七合板にて、歌  
川國貞の畫を挿み、半紙本として翌年再版刊  
行さる。赤松庄太郎・中村屋藤五郎版【題材】  
世界を歌舞伎の「伽羅先代萩」(別項)から取つ  
て、「忠義水滸傳」(別項)の觀案に撮合したもの  
である。「江戸作者部類」には、「棧椒録」(今古  
奇觀)等からも觀案したと云つてゐる。  
【梗概】(一)足利義滿の命を受け、奥羽の巡察  
使に立つた山名洪氏は、松島瑞雲寺で藤中將



思ひを寄せず、専ら佛法に歸依して遂に大和國富麻寺に入り、生身の阿彌陀如來を拜まむことを祈念した。七日の後一人の比丘尼が来て百駄の蓮の莖を集めさせて絲を取りこれを五色に染め、やがておのが侍女をして大きな経巻を土間に敷かせしめた。これが即ち富麻



産講習所に學び、次いで東京帝大文科の漢文選科に入り、支那文學を専攻した。卒業後、「江湖文學」日本人、「帝國文學」六合雜誌などに筆を執つた。彼の特色を發揮したのは「青年文」(別項)誌上に於てであつた。「青年文」は二十八年の創刊で、嶺雲が主として筆を執り、奇警痛切にして情熱ある文章を以て、當時の文壇を論ぜざるものは、常に作家の間に大なる波紋を作つた。その論文を集めた「嶺雲搖曳」は、三十二年三月新聲社より刊行されて非常

【總説】「貞丈雜記」卷十五鷹類之部「古今要覽稿」卷六人事部放鷹の條、「武家名目抄」卷三百七十七雜部十一、「古事類苑」遊戲部十四放鷹等に、その大體が記されてある。【沿革故實】弘仁九年五月、鷹所より撰進した「新修鷹經」(群書類從三五六)を初めとして九條流には、九條良經の詠といふ「後京極殿鷹三百首」(群書類從三五七)、二條流には、二條良基の「嵯峨野物語」(群書類從三五八)、「後善光院殿鷹百首」(群書類從三五九)、西園寺流には、

年刊本は中本で、各冊長喜の口畫一葉あり、後天保六年葛屋重三郎・柴屋文七合板にて、歌川國貞の畫を挿み、半紙本として翌年再版刊行さる。赤松庄太郎・中村屋勝五郎版【題材】世界を歌舞伎の「伽羅先代萩」(別項)から取つて、「忠義水滸傳」(別項)の續案に撮合したものである。「江戸作者部類」には、「英叔録」(古今奇觀)等からも續案したと云つてゐる。【梗概】(一)足利義滿の命を受け、奥羽の巡察使に立つた山名洪氏は、松島瑞雲寺で藤中將

奥方の願を遂げ、雀の形したる雀を捉めて、遂つた。雀を開くと白氣上りて數十羽の雀飛び出で忽ち白練と化し、中央に十八といふ二字が現はれた。これが後に珍事の起る兆であつた。その後義政が將軍となり、弟頼兼を奥羽の太守に任ずる。頼兼の叔父典膳鬼貫は輔佐として臣列にあつたが、執權仁木佐衛門と心を合せて奥州の押領を謀る。或る日鬼貫の使者仁木への密書を携へ、誤つて雷鶴之介を訪ふ。爲めに雷より駭しき詮議を受け、遂に鎌倉細川勝元を頼りて行き、淺草川の邊りに宿つて力士絹川谷藏と知り、師弟の約をなして暫らく止まる。

計は密に進んだ。頼兼は空閑の隙に放鷹を遊し、花街の放生會に、鷹三十人を放ち、遂に遊女高尾を身請けした。家督に定められた若君鶴若丸は或る日追鳥狩を催した。秘藏の鷹が榎の梢にかゝつたので、近習頭荒獅子男之介は榎を根こぎにして鷹を捕へる。若君は殊の外満足されて酒を命ぜられる。渡會銀

【高尾】高尾は情夫玉田十三郎を慕ひ、頼兼の持つた密書を盗み出して、十三郎と添ふ手がかりとしようとしたので、頼兼は怒つて高尾を斬る。高尾の母は娘の仇を報いんと、鬼貫仁木に密告し、高尾の初七日の夜頼兼を船に招きて討取らうと計つたが、かねて釣人となつて様子を探つてゐる男之介が泳いで来て大敵を引受け、頼兼等を義兵の籠る金華山の水寨に逃がす。(五)落ち延びた頼兼等は浮世渡平が酒店に休んだが、悪漢の彼は毒酒を以て谷藏を倒し、燃えさしの木で頼兼に打つてかゝる。頼兼、蘭奢待の下駄で受け止めたが、火は下駄に移つて香煙立ち、谷藏の毒氣は解かれる。かくて遂に渡平は頼兼の尻に刺された。

【高崎正風】(一)今昔物語語を見よ。高崎正風(たかさきまさかぜ)歌人(生歿)天保七年三月鹿兒島に生れ、明治四十五年二月二十八日東京に歿す。享年七十七【開歴】家世々島津氏に仕へ、父を温恭といふ。父は藩主齊興の繼嗣を定める際、養黨のために謀られ罪を獲て自刃した。當時十六歳の正風も土籍を削がれて大島に謫せられたが、讀書三年、苦心を重ね、釋されて歸藩した。少壯にして學を好み、早く八田知紀に就いて歌道を學んだが、幕末多事の際には藩命を帯びて國事に奔走した。即ち文久二年の伏見寺田屋の變、同三年の七卿落等には彼の力が與つて大であつた。明治元年征討將軍官の參謀となり、四年少議官に任じ、尋いで歐米諸國を視察した。七年大久保利通が全權辦理大臣として清國に赴くに隨ひ、九年御歌掛を、十九年御歌掛長を命ぜられた。次いで二十年男爵を授けられ、二十二年宮中顧問官に任じ、二十八年樞密顧問官となり、正二位勳一等に叙せられた。正風性虛懷、特に明治天皇の寵遇を受けた。【著作】進講筆記(たづがね集)千種の花(埋木廻花)歌がたり(別項)。「歌風」桂園派の流れをくみ、「古今集」のなだらかな調を理想としてゐるために、その傾向も温雅流麗である。同時に桂園派の有する繊細な傾向をも繼承し



高尾の願を遂げ、雀の形したる雀を捉めて、遂つた。雀を開くと白氣上りて數十羽の雀飛び出で忽ち白練と化し、中央に十八といふ二字が現はれた。これが後に珍事の起る兆であつた。その後義政が將軍となり、弟頼兼を奥羽の太守に任ずる。頼兼の叔父典膳鬼貫は輔佐として臣列にあつたが、執權仁木佐衛門と心を合せて奥州の押領を謀る。或る日鬼貫の使者仁木への密書を携へ、誤つて雷鶴之介を訪ふ。爲めに雷より駭しき詮議を受け、遂に鎌倉細川勝元を頼りて行き、淺草川の邊りに宿つて力士絹川谷藏と知り、師弟の約をなして暫らく止まる。

(頁初・繪口)文字船尾高

兵衛のさした酒には、しびれ薬が入つてゐたので、男之介は全く自由を失ふ。時に叢の中から火を發して四方に燃え擴がる。母の政岡は若君を抱いて途方に暮れるが、黒龍といふ狎が流に身を浸して男之介の顔に注いだので毒氣を散じ、男之介は若君の守刀源家重代の名劍で、火を追ひ散らし難を逃れる。(四)頼

高尾の願を遂げ、雀の形したる雀を捉めて、遂つた。雀を開くと白氣上りて數十羽の雀飛び出で忽ち白練と化し、中央に十八といふ二字が現はれた。これが後に珍事の起る兆であつた。その後義政が將軍となり、弟頼兼を奥羽の太守に任ずる。頼兼の叔父典膳鬼貫は輔佐として臣列にあつたが、執權仁木佐衛門と心を合せて奥州の押領を謀る。或る日鬼貫の使者仁木への密書を携へ、誤つて雷鶴之介を訪ふ。爲めに雷より駭しき詮議を受け、遂に鎌倉細川勝元を頼りて行き、淺草川の邊りに宿つて力士絹川谷藏と知り、師弟の約をなして暫らく止まる。

たかくに たかさき



てゐる。左にその例を擧げる。

うぐひすのこまほかりしてあらし山朝しづかなる  
花の蔭かな（嵐山にてよめりし中に）  
秋風にふきやぶられてくさか江の八江のはらすま  
たき葉ぞなき（既秋江）  
〔相原〕

高砂 住吉物の謡曲を見よ。

孝標女 歌人・物語作者

菅原氏、本名未詳【生歿】寛弘五年生れ、歿年未詳。但し康平元年、夫俊通の歿した時に五十一であつた。【閨歴】父孝標は、菅原道真の子孫で、上總介・常陸介等になつたが、不遇な人であつた。兄定義は、大學頭・文章博士等になり、學問の人であつた。母は藤原倫寧の女で、文學の才能があつたらしい。母の兄の長能、姉の道綱母等は、いづれも有名な藝術家である。又繼母は上總大輔とよばれた人で、これも有名な歌人である。孝標女の文學的才能は、かうした環境の中に成長した。【少女時代】十歳まで京で暮した。その當時、「源氏物語」は既に成立して、一般に愛讀されてゐたらしい。十歳の時、父が上總介に任じられたので、繼母・兄弟等と共に、父に従つて任國に下つた。任地にあつては、等身の佛像を作り、その前にぬかづいて早く京に上り、物語のくさぐさを讀むことを祈つてゐた。寛仁四年の秋の終り、十三の時、京に向つて出發した。その年の十二月二日に、やうやく着京して、一品修子内親王邸である三條の宮の西に住んだ。まもなく繼母は離縁して家を去つた。四年の間、馴れ親しんだ彼女は、繼母と別れるのが悲しかった。十四の年に、疫病が流行して乳母がなくなり、更に侍従大納言行成の姫君がなくなつたので、いたく悲しんだ。彼女は、その淋しさを物語によつて慰めてゐた。

十六歳の時、火災にあつて家が焼け、姫君の身替りとして、可愛がつてゐた猫も焼け死んでしまつた。【中年時代】二十五歳の時、父は六十の老齡をもつて常陸介となり、はる／＼任地に下つた。やがて父は歸つてきたが、家庭はうらさびて、しみ／＼と現實を凝視する機會が與へられた。彼女は家庭の事情で已むを得ず祐子内親王に御奉公することになつた。橋俊通と結婚したころは、少女時代のやうな華やかな空想は、現實の冷たい色でぬりかへられてゐたやうである。やがて一子仲俊が生まれ、母性に目ざめる日が來た。後冷泉天皇即位の大嘗會の御祝の日、一人、京を後に初瀬に思ひ立つたのをはじめとして、石山に、初瀬に、大寮に、屢々參詣した。物語をあこがれる心は、一度現實の洗禮を受けて、今度は神佛と夢とを追求するやうになつた。【老年時代】天喜五年七月三十日に、夫俊通は信濃守に任ぜられ、八月二十七日に任國へ下つた。仲俊も父と共に出發した。然るに、その翌年四月には、夫は任國から歸つてきて、九月二十五日に發病、十月五日、五十七歳でこの世を去つた。彼女は、ただ一つの夢を、せめてもの希望として淋しい生活を送つた。【更級日記】その他によつて、知ることの出来る孝標女の事蹟は、こゝまでである。【著作】孝標女の著作として疑ひのないものは、「更級日記」（別項）である。なほ、彼女の作とされてゐるものに、次の數書がある。「濱松中納言物語」「夜半の寢さめ」（各別項）「みづからくゆるあさくら」（物語参照）

【人物】孝標女は、きはめて幻想的な人であつた。少女時代から物語や傳説を好み、夢や幻を愛し、神や佛を信じた。實生活と夢幻の世界とが、區別する事の出来ないくらゐ密接な關係をもつてゐたことが、「更級日記」によつて知ることが出来る。彼女の作と稱せらるゝ「濱松中納言物語」も、「夜半の寢さめ」も、共に等しく幻想的な傾向を持つてゐる。歌人としての孝標女は、非常に優秀な作家ではないが、勅撰集中に十四首入つてゐる。【参考】御物更級日記複製本解説（校註更級日記佐佐木信綱）○改訂更級日記略解關根正直○更科日記講義 大塚彦太郎○更級日記錯簡考 玉井幸助○更級日記新註同上○更級日記評釋 宮田和一郎

高須 梅溪 評論家

【閨歴】明治十三年四月、大阪船場に生れた。十七歳にして大阪天神橋の爲替貯金管理所に勤務。同僚中に、中村吉藏・山川智應などがゐた。その際、文學上の同志を糾合して浪華青年文學會を組織し、雑誌「よしあし草」を發行した。同三十一年の冬、東上して新聲社（別項）に入り、主筆佐藤橋香（義亮）を助けて「新聲」を編輯した。爾來、同三十四年、早稻田大學文學科に入るまで、主として文藝時評に執筆、その當時の評論を集め、社中同人と合著で「三十棒」「沙上偶語」等を刊行し、それと前後して、論文「青年觀」及び美文集「暮雲」を公にした。同三十八年、早稻田大學卒業、間もなく有樂社刊の雑誌「世界的青年」の主幹となり、一年の後、「東西南北」を主宰した。四年、國民新聞社に入り、一年間在社した後、東京毎日新聞に入つて、社會部長兼文藝・家庭部長となつたが、更に二六新報に轉じて家庭部・文藝部を主宰した。これ亦一年前後でやめ、爾後、全く著作生活を續けた。同四十五年「平民の人々」「源氏の人々」「日蓮聖人及其周圍」

高瀬 舟 小説

【作者】森鷗外【發表】大正五年一月號「中央公論」【刊行】大正七年短篇集「高瀬舟」春陽堂。鷗外全集第四卷、現代日本文學全集第三卷所收。

【梗概】徳川時代に、京都の罪人が遠島を申渡されると、親類が牢屋敷で暇乞することを許され、そこから罪人は高瀬川を下る小舟に乗つて大阪へ廻された。それを護送するのは京都奉行配下の同心だつたが、罪人の親類のうち重立つた一人を同船させる事が許され、慣例になつてゐた。或る春の夕、三十歳ばかりになる喜助といふ弟殺しの罪人が、住所不定の男とて送つて來る親類もなく只一人舟に乗つた。態度がいかにも神妙な上に晴れやかな面持で目には微かながら輝きさへある。これまで護送した罪人とあまり違ふので、同心羽田庄兵衛は、不思議に思つて泣きも悲し

等を出版、大正三年、雑誌「新評論」を刊行し、社友土田杏村等の助力を得て、文明批評の新開展に盡した。同四年、「十八世紀史」「十九世紀史」各二卷を執筆。同九年、「中央公論」に始めて「酒中の天地」を發表して以來、諸雑誌に寄稿。十年、オリエンタリズムを提唱し、十四年五月、雑誌「東方之星」を刊行。又昭和三年九月、同志と共に新東方協會を創立して、雑誌「日本時代」を出し、爾後、兩雑誌を主宰してゐる。【著書】前記の外、「國民之日本史」の中の「平安時代」「鎌倉時代」各一冊、「江戸時代」三冊（以上早稻田大學出版部）。「日現代文學十二講」本近世文學十二講「東洋思想十六講」「東洋文藝十六講」「日本思想十六講」（以上新潮社）等を公けにした。その他、學藝に關する編著が多い。異色あるものに、「大隈公八十五年史」（全三冊）がある。【金子】



秋の終り、十三の時、京に向つて出發した。寛仁四年のその年の十二月二日に、やうやく着京して、一品修子内親王邸である三條の宮の西に住んだ。まもなく繼母は離縁して家を去つた。四年の間、馴れ親しんだ彼女は、繼母と別れるのが悲しかった。十四の年に、疫病が流行して乳母がなくなり、更に侍従大納言行成の姫君がなくなつたので、いたく悲しんだ。彼女は、その淋しさを物語によつて慰めてゐた。

その他によつて、知ることの出来る孝標女の事蹟は、こゝまでである。【著作】孝標女の著作として疑ひのないものは、「更級日記」(別項)である。なほ、彼女の作とされてゐるものに、次の數書がある。「濱松中納言物語」「夜の寝ざめ」(各別項)「みづからくゆるあさくら」(物語参照)【人物】孝標女は、きはめて幻想的な人であつた。少女時代から物語や傳説を好み、夢や幻を愛し、神や佛を信じた。實生活と夢幻の世界

後して、論文「青年觀」及び美文集「暮雲」を公にした。同三十八年、早稲田大學卒業。間もなく有樂社創刊の雑誌「世界的青年」の主幹となり、一年の後、「東西南北」を主宰した。四十年、國民新聞社に入り、一年間在社した後、東京毎日新聞に入つて、社會部長兼文藝・家庭部長となつたが、更に二六新報に轉じて家庭部長となつた。これ亦一年前後でやめ、爾後、全く著作生活を續けた。同四十五年「平家の人々」(源氏の人々)「日蓮聖人及其周囲」

つて大阪へ廻された。それを護送するのは京都町奉行配下の同心だつたが、罪人の親類のうち重立つた一人を同船させる事が黙許される慣例になつてゐた。或る春の夕、三十歳ばかりになる喜助といふ弟殺しの罪人が、住所不定の男とて送つて来る親類もなく只一人舟に乗つた。態度がいかに神妙な上に晴れやかな面持で目には微かながら輝きさへある。これまで護送した罪人とあまり違ふので、同心羽田庄兵衛は、不思議に思つて泣きも悲し

て、成程世間で笑をしてゐる人には鳥へ往くのが悲しい事だ。しかし京都といふ結構な土地でも私は言ふに言はれぬ苦しみを來た。それから、これまでどこ云つて私のゐる所とはなかつたのに、お上で鳥にゐると仰しやつて下さるのは誠に有り難い。それさへあるに今度御手當として鳥目二百文下さつた。これは私が今日までかうして懐に入れて持つことの出来なかつたのです。いくら根限り働いても、右から左と人手に渡さなくてはならなかつたが、お上の食物を戴いてゐる以上、いつまでも二百文を持ち續けることが出来る。仕事の元手にもされると楽しみです。かういふ意味のことを答へた。庄兵衛は扶持米で足らぬ自分の暮しの事を今更に考へさせられ、鳥目二百文を貯蓄と見て喜んでゐる喜助の、足を知る心に感心させられた。それから弟殺しの事情を包まず聞かせてくれと云ふと、喜助は「早く両親に別れた二人は助け合つてこれまで生きて來たが、去年の秋弟は病に倒れて、北山の掘立小屋に寝つき、私は仕事歸りに食べ物を買つて歸るのを常としてゐた。或る日歸つて見ると、弟は血まみれになつてゐる。驚いて聞きたすと、どうせ癒らない病氣だから早く死んで兄さんに樂をさせたい。剃刀で切りそこねたから、どうか手を借して抜いてくれ、さうすれば死ぬるからとの事だつた。私が醫者を呼ばうとする

【解説】この作に就いては作者自身「高瀬舟縁起」の一文を草してゐる。初め、この作の題材を「翁草」で讀んで二つの大きい問題が含まれてゐると思つた。一は財産の觀念で、所有慾には限界が見出されぬ管であるのに、二百文を財産として喜んだことに興味を感じた。今一つは死にかゝつて苦しんでゐる人を死なせざるの可否を考へさせられる事にひどく興味を惹いたと書いてゐる。不思議な罪人の心情と、庄兵衛の感銘とを、作者は簡潔ながらも柔い筆致で趣深く語つてゐる。近年、脚色上演されて好評を博した。【小島】

【高田早苗】(たかた さなへ) 評論家・教育家【號】半峰【閱歴】萬延元年二月、江戸深川に生れた。明治九年大學豫備門に入り、同十一年東京大學文學部に學び、十五年卒業。直に東京専門學校の創立計畫に參し、その講師となつた。専攻せる科は政治であつたが、文學に深い興味を持ち、造詣また深かつた。「中央學術雜誌」(別項)に、數號に亘つて連載した「當世書生氣質」の批評は、泰西の文藝論の旨趣に基いて明徹せる觀察を下したもので、明治に嚴正なる文藝批評の出た嚆矢とも言ふべく、續いて東海散士の「佳人之奇遇」、田口鼎軒の「日本開化小史」(各別項)の批評を試みて、著者との

【高館】(たかたか) 幸若舞曲(三十六番の二)二卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古板本



高田早苗 紅葉は殆ど去つたが、同紙と終始

【高田早苗】(たかた さなへ) 評論家・教育家【號】半峰【閱歴】萬延元年二月、江戸深川に生れた。明治九年大學豫備門に入り、同十一年東京大學文學部に學び、十五年卒業。直に東京専門學校の創立計畫に參し、その講師となつた。専攻せる科は政治であつたが、文學に深い興味を持ち、造詣また深かつた。「中央學術雜誌」(別項)に、數號に亘つて連載した「當世書生氣質」の批評は、泰西の文藝論の旨趣に基いて明徹せる觀察を下したもので、明治に嚴正なる文藝批評の出た嚆矢とも言ふべく、續いて東海散士の「佳人之奇遇」、田口鼎軒の「日本開化小史」(各別項)の批評を試みて、著者との

【高館】(たかたか) 幸若舞曲(三十六番の二)二卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古板本

【鷹筑波集】(たかづか はつむ) 俳諧集 五册【編者】山本西武【名義】宗鑑の「新撰犬筑波」(別項)に對した題名で、貞徳の跋の末に、題號の理由を詠んだ狂歌が三首あつて、その中に、「よき犬のさぐりにつけて取あつめかりに名づくるたかつくばかな」とある。【成立】寛永十五年五月【刊行】寛永十九年初秋【諸本】貞門俳諧集(俳書大系)所収【解説】貞徳

【鷹筑波集】(たかづか はつむ) 俳諧集 五册【編者】山本西武【名義】宗鑑の「新撰犬筑波」(別項)に對した題名で、貞徳の跋の末に、題號の理由を詠んだ狂歌が三首あつて、その中に、「よき犬のさぐりにつけて取あつめかりに名づくるたかつくばかな」とある。【成立】寛永十五年五月【刊行】寛永十九年初秋【諸本】貞門俳諧集(俳書大系)所収【解説】貞徳







者名は凡て實名であるが、姓通稱を頭記してある。僧には寺名が記してある。甚だ稀に職業等を記したものが除外例である。第五卷の初めに、秀吉(發句一句、附句二十四章)・由己・利休・結巴・幽齋その他の作を特に載せてある。【價值】三十年來と云へば、慶長十四年頃からの作がある譯で、貞門初期の作が本集によつて置はれることが、先づ本集の價值で

但馬守高久、號靜齋。高尚、初め國學と歌とを同國笠岡の小寺清先及び京の人梅井一室に學び、後、本居宣長を師とし、最も文を作るに長じた。寛政十一年從五位に叙せられ、長門守に任ぜられた。天保六年社家頭の職を養孫高起に譲つた。子高豐は父に先だつて歿した。その著書の刊記されたもの十五部三十二卷、何れも廣く行はれてゐる。【著書】伊勢物語(新釋六卷(文政元年刊))、大敵後々釋一卷(文化十年刊)、○日本紀の御局の考一卷(文化九年刊)

山道の露のまよひに旅人のおくれし友を呼ぶ聲ぞ  
はれて後竹の葉風に散る露は雨にまされるまどの  
うちかな  
等、一例である。家集には「松屋自撰歌集」があり、「神の御蔭日記」「出雲路日記」などにも歌がある。(歌のしるべ参照) 【以上窪田】  
【参考】藤井高傳傳、井上通泰(南天莊雜草の内)  
高ねおろし(窪田) 隨筆(二卷) 【著者】

橋氏文考注に、それ等の逸文が集録されてゐる。【内容】完本が傳はらないから、完全なる内容を知ることができないが、現在の逸文よりすれば、三つの部分に分れる。第一は高橋氏の祖磐鹿六郎命が景行天皇の東巡に従駕し、上總國に於て堅魚及び白蛤を得て調理して獻つた所、痛く御意に適ひ數々の賞賜があつた事の物語である。第二は六郎命薨去の物語であつて、その時賜はつた宣命が載せられてゐる。第三は附帶文書ともいふべきもので、橋氏の學問を裁決して高橋氏の優先を認定し

命の語は、「日本書紀二姓氏録等」にも見えない。かくの如き委曲を記されたものは外にはない。又景行天皇の如き古い時代のものとせられた宣命も、外には傳はらない。即ち高橋氏に古くより傳承せられた家の物語は、如何なる他の古書よりも、こゝに最も詳細に見られるので、この意味に於て、本書は古代史の史料として獨特の位置を占めるのであるが、唯現在の形に整理せられたのは延暦年間以降り、又成立の由來が必ずしも純粹とは言はれぬから、これを史料とするには十分の吟味を要する。 【坂本】

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

して名を文壇に馳せた。明治二十五年、井上哲次郎博士が「教育と宗教の衝突」(別項)と題する論文を公にして、基督教を排撃するや、植村正久・大西祝・本多庸一・横井時雄等は皆筆を揃へて駁撃した。彼も亦奮然起つて、偽哲學者の大辟論(國民之友)などを公にした。これは最も多く注意を引いた論文で、井上博士に對する痛烈な巨彈であつた。民友社との關係を絶つと共に、時文批評の筆を捨てて教鞭を執り(た三十二年の交、雜誌「小天地」を主宰したが暫時にして止んだ)、國民英學會に關係すること四十年に及んだ。この間その究理癖から心靈學の研究に耽つて幾多の著書を出し又希臘・羅典・英・佛等の古典を翻譯して讀書界を益した事が少くなかつた。現に駒澤大學に英文學の教鞭を執つて後進の誘致に努めてゐる。翻譯界の故老、批評界の先輩として、彼の足跡は大なるものがある。【著譯書】「哲學・宗教」佛道新論○釋迦論○世界三聖論○宇宙觀○人生觀○新哲學の曙光○一元哲學○戰爭哲學○神祕哲學○排偽哲學論○基督活論○社會主義活論○一年有半と舊式の唯物論等。【心靈學】心靈萬能論○靈怪の研究○心靈哲學之現狀○靈媒術講話○幽明の靈的交通○レイモンド等。【文學書】チャイルド江湖漂々録○ファウスト○カーライル論說集○ゲーテ感想錄○レリアス瞑想錄○ベーコン論說集○ラ・ロシフニ寸鐵○プルトーク英雄傳○カーライル佛國革命史○杜伯品藻等。【柳田(泉)】

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

【参考】高橋氏文考注(伴信友全集第三) 小説八編二十四冊 【作者】假名垣魯文 【畫工】守川周重 【刊行】明治十二年二月。明治名者全集(東京堂)所收。  
【梗概】暴悪なる父と、淫蕩の母の血を分けた阿傳は、上州の農家に育て上げられて、十六の時、既に親の目を忍んで賭博場に出入するうち、同じ仲間の高橋波之助と契を結ぶ。茲に端なくも十七年振で佐渡から刑期を終へて郷里へ戻つた博徒鬼清と呼ぶる、お傳の實父が現はれて、何時もお傳夫婦に難題を言ひ掛け、は金の無心を迫つた。そこで夫婦は鬼清に隠れて何處へか退かうと決心し、一先づお傳俗縁の同國藤川村光松寺に身を寄せてゐる間に、夫波之助は癩病に罹る。お傳は夫の治療代を稼ぐため、人を介して當地柳町櫻屋といふ女郎屋から身の代金五拾圓を詐取して病夫と共に出奔したが、山中で波之助は追手のために谷底に突き落されて生死不明となる。一方お傳は色仕掛けで虎口を逃れ、死んだと思

たかはし



酒の友として頗る親交があつた。當時又同縣人たる東海散士(柴四郎)に知られ、屢々そのために文章を草したことがある。明治十八年刊の東海散士の政治小説、「佳人之奇遇(別項)」は、實に柴氏の立案によつて太華及び天因が草したものであるといふ。二十一年、雜誌「少年園(別項)」の編輯主任となり、少年子弟の啓蒙教育に盡すところがあつた。この頃から漸く文壇の人となり、饗庭篁村・森田思軒・幸田露伴等と交り、詩酒徵逐の風流を試みて謂ゆる根岸派(別項)の一人と目され、小説家として少年文學者として世間に名を知られたのもその間のことである。三十年の交、友人石井研堂を助けて「小國民(別項)」の編輯に當り、三十四年に及んだが、爾後文筆社會から隱退した。嘗て支那に遊んだことがある。

【人物・作品】太華は別にこれといふ學歴もないが、よく和漢の古典に通じ、殊に繪畫・美術に精しく、江戸時代の戯作文學及び浮世繪についても深い造詣がある。小説の名を知られてゐるものは、極めて少く、「舞衣」「有馬竹」「雪おろし」「寶はなし」等に過ぎない。少年文學には、「河村瑞軒」「太閤秀吉」「新太郎少將」「子供のてがら」等がある。太華の名が一時文壇に聞えたのは、作品の價值によるよりも、寧ろその博識の力であつた。ただ文學によつて、少年の啓蒙教育に盡した功は認むべきである。

高橋連蟲麻呂之歌集

【著者】高橋連蟲麻呂【成立】未詳。ただ彼の生きてゐる中に編まれたものと思はれる故に、彼の生存してゐた確證のある天平年間(の末頃とすべきであらうか)【内容】本書は現存しない。ただ「萬葉集」中所々に本書から

歌をとつた由が記してあるので、かゝる歌集が存在して「萬葉集」編纂の折その原本となつた事を知り得るのである。今日「萬葉集」中に見ゆる本書の作品は、卷九雜歌部に長歌十首、短歌十三首。同相聞部に長歌一首、短歌一首。同挽歌部に長歌二首、短歌三首。總計長歌十

三首、短歌十七首である。この外に、卷三雜歌部「不盡の嶺」の歌の次、及び卷八夏雜歌部「筑波根」の歌の次に、共に「右一首、高橋連蟲麻呂之歌中「出」」と云ふ註がある。これは、「笠金村歌集」にも似た例がある。「歌の下」の字の有つたのが筆寫などの際に脱落したものと解されてゐるが、これは誤脱ではあるまい。「笠朝臣金村歌集」にも「歌中「出」」とある所が三ヶ所ある。これ等を悉く「集」字が脱落したと見ることが出来ない。故にこれは故意にか偶然にか、「歌集中「出」」と記すべきを「歌中「出」」と最初から書いたものであらうと見ておきたい(笠朝臣金村歌集参照)。高橋連蟲麻呂の作品は本書を除けば、僅に卷六天平四年の、藤原宇合をおくる長歌・反歌各々一首のみである。本書中には、異色ある傳説歌人たる高橋連蟲麻呂の姿を窺ふに足る浦島傳説の歌、筑波山燿歌會の歌、菟原處女の歌等の多くの秀作が見られる。(連蟲麻呂参照)

【参考】和歌史の研究佐佐木信綱(萬葉集新考 井上通泰) 萬葉集九卷考森本治吉(國語と國文學 昭和三ノ一) 高橋振 上代歌謠【名稱】高橋曲の意味で、高橋と云ふ歌句を持つ本歌の替歌であるから、かく名づけたのであらう。惟馬樂の律歌の澤田川には「高橋渡す」と云ふ語があり、「琴歌譜」所載の阿遊施扶理も「高橋」と云ふ語で始まつてゐる。これ等と關係がある

高橋振

【著者】高橋振 上代歌謠【名稱】高橋曲の意味で、高橋と云ふ歌句を持つ本歌の替歌であるから、かく名づけたのであらう。惟馬樂の律歌の澤田川には「高橋渡す」と云ふ語があり、「琴歌譜」所載の阿遊施扶理も「高橋」と云ふ語で始まつてゐる。これ等と關係がある

るであらうか。【出典】「琴歌譜」に一首出づ。【歌詞】同書の和琴の譜を附し、引聲の符を記した歌詞を分り易く書くと次の如くなる。道の邊の、藤と櫻と、品めくも、ナア、イヨ品めく、品めくも、言ふなるかもよ、藤と櫻と、藤と櫻と形式は短歌體で、二段に分つて奏せられるのである。

高島素之 評論家【生歿】明治十九年一月、群馬縣前橋に生れ、昭和三年十二月二十三日、東京に歿した。享年四十三。【閱歴】前橋中學卒業後、堺枯川の經營する賣文社の社員となつて、初期社會主義運動に参加してゐたが、後、同志と別れて國家社會主義を旗幟として、別個の運動をはじめ、上杉慎吉博士とともに經緯學堂を起し、大化會にも關係して、急角度を描いて反動化した。諸事意の如くならず、晩年には、主として著述に従つてゐた。【譯著】カール・マルクスの「資本論」の全譯をはじめ、カウツキーの「資本論解説」、リウイスの「社會主義と進化論」、ラファルゲの「財産の進化」、モルガンの「古代社會」等多くの翻譯の外、「社會問題辭典(新潮社刊)」、「論想談「社會進化思想講話」等の著述がある。わけても「資本論」の翻譯は、彼の半生の心血を注いだもので、最初大體閣から出版されたものを三度び稿をかへて成つたのが、現在行はれてゐる譯本である。彼自らは修正派社會主義に共鳴し、所謂マルクス主義運動に對しては反對してゐたが、マルクスの大著を日本語にうつしたことは、日本の社會主義文獻史の上から見て、最も大なる功勞者と言へるであらう。

高島素之 評論家【生歿】明治十九年一月、群馬縣前橋に生れ、昭和三年十二月二十三日、東京に歿した。享年四十三。【閱歴】前橋中學卒業後、堺枯川の經營する賣文社の社員となつて、初期社會主義運動に参加してゐたが、後、同志と別れて國家社會主義を旗幟として、別個の運動をはじめ、上杉慎吉博士とともに經緯學堂を起し、大化會にも關係して、急角度を描いて反動化した。諸事意の如くならず、晩年には、主として著述に従つてゐた。【譯著】カール・マルクスの「資本論」の全譯をはじめ、カウツキーの「資本論解説」、リウイスの「社會主義と進化論」、ラファルゲの「財産の進化」、モルガンの「古代社會」等多くの翻譯の外、「社會問題辭典(新潮社刊)」、「論想談「社會進化思想講話」等の著述がある。わけても「資本論」の翻譯は、彼の半生の心血を注いだもので、最初大體閣から出版されたものを三度び稿をかへて成つたのが、現在行はれてゐる譯本である。彼自らは修正派社會主義に共鳴し、所謂マルクス主義運動に對しては反對してゐたが、マルクスの大著を日本語にうつしたことは、日本の社會主義文獻史の上から見て、最も大なる功勞者と言へるであらう。

高島素之

【著者】高島素之 評論家【生歿】明治十九年一月、群馬縣前橋に生れ、昭和三年十二月二十三日、東京に歿した。享年四十三。【閱歴】前橋中學卒業後、堺枯川の經營する賣文社の社員となつて、初期社會主義運動に参加してゐたが、後、同志と別れて國家社會主義を旗幟として、別個の運動をはじめ、上杉慎吉博士とともに經緯學堂を起し、大化會にも關係して、急角度を描いて反動化した。諸事意の如くならず、晩年には、主として著述に従つてゐた。【譯著】カール・マルクスの「資本論」の全譯をはじめ、カウツキーの「資本論解説」、リウイスの「社會主義と進化論」、ラファルゲの「財産の進化」、モルガンの「古代社會」等多くの翻譯の外、「社會問題辭典(新潮社刊)」、「論想談「社會進化思想講話」等の著述がある。わけても「資本論」の翻譯は、彼の半生の心血を注いだもので、最初大體閣から出版されたものを三度び稿をかへて成つたのが、現在行はれてゐる譯本である。彼自らは修正派社會主義に共鳴し、所謂マルクス主義運動に對しては反對してゐたが、マルクスの大著を日本語にうつしたことは、日本の社會主義文獻史の上から見て、最も大なる功勞者と言へるであらう。

三郎、後、求徳と改め、又直吉と稱し、戊辰の頃、政と名乗つたが、維新後、畫號の藍泉を通稱とした。【別號】柳亭種彦三世・紫翠山房・甘々坊・一葉舎・轉思堂・轉々堂等々。【生歿】天保九年五月十二日下谷世俗鳩組といふ所に生れ、明治十八年十一月十八日淺草千束村に於て病歿(神經痛・動脈瘤)。享年四十八。【閱歴】高島家は世々幕府の御坊主で御本丸奥勤の役であつた。少時から和漢の稗史・小説を好み、殊に種彦の作を愛した。若くして博く雜書に涉り、戲文・俳諧・茶湯・書畫等皆善くし、一方演劇を好み、花柳界に沈溺する癖があり、怠惰で、親類・同僚に疎まれたといふ。慶應の初め頃、若隱居して繪筆三昧に暮してゐたが、時勢が時勢だつたので、持前の氣概から多少公事に奔走した。維新後は再び繪に



高島素之 持前の氣概から多少公事に奔走した。維新後は再び繪に

隠れてゐたが、明治三年、弟の死に會つて沼津に赴き足掛三年を過した。明治五年東京日日新聞の創刊に際し、招かれてその記者となり、同八年平假名繪入新聞の起るや、その編輯となつたが、翌九年辭して讀賣新聞に入つた。饗庭篁村はこの頃藍泉の引立を受けたのだといふ。十一年京阪に遊び、歸後、「曙新聞」芳譚雜誌等に雜報・續物の筆を執つて文名漸く揚つた。十五年一月初代柳亭の門弟の勧めによつて柳亭の號を嗣ぎ、爾後柳亭種彦と稱した。この年七月大阪の大東日報に聘されて下阪し、翌十六年歸京、「芳譚雜誌」歌舞伎新報「東京繪入新聞」繪入朝野新聞等に續々續き

たが、病癒えず翌年歿した。【人物】藍泉は花柳場裏の遊を好んだだけ、交際家でもあり世



其の博識の力であつた。ただ文學によつて、少年の啓蒙教育に盡した功は認むべきである。

### 高橋連麻呂之歌集

【著者】高橋連麻呂【成立】未詳。ただ彼の生きてゐる中に編まれたものと思はれる故に、彼の生存してゐた確證のある天平年間(710-720)の末頃とすべきであらうか。【内容】本書は現存しない。ただ「萬葉集」中所に本書から

くの秀作が見られる。(高橋連麻呂参照) 【参考】和歌史の研究佐佐木信綱「萬葉集新考 井上通泰」(萬葉集九卷考森本治吉「國語と國文學」昭和三ノ一)

### 高橋振

【著者】高橋振【上代歌謡】高橋振の意味で、高橋と云ふ歌句を持つ本歌の替歌であるから、かく名づけたのであらう。催馬樂の律歌の澤田川には「高橋渡す」と云ふ語があり、「琴歌譜」所載の阿波御扶理も「高橋の」と云ふ語で始まつてゐる。これ等と關係があ

述がある。わけても「資本論」の翻譯は、彼の半生の心血を注いだもので、最初大樽閣から出版されたものを三度び稿をかへて成つたのが、現在行はれてゐる譯本である。彼自らは修正派社會主義に共鳴し、所謂マルクス主義運動に對しては反對してゐたが、マルクスの大著を日本語にうつしたことは、日本の社會主義文學史の上から見て、最も大なる功勞者と言へるであらう。

同八年平假名繪入新聞の起るや、その編輯となつたが、翌九年辭して讀賣新聞に入つた。櫻庭算村はこの頃藍泉の引立を受けたのだといふ。十一年京阪に遊び、歸後、「曙新聞」(芳譚雜誌)等に雜報・續物の筆を執つて文名漸く揚つた。十五年一月初代柳亭の門弟の勤めによつて柳亭の號を嗣ぎ、爾後柳亭種彦と稱した。この年七月大阪の大東日報に聘されて下版し、翌十六年歸京、「芳譚雜誌」(歌舞伎新報)「東京繪入新聞」(繪入朝野新聞)等に續々續き

【著者】怪化百物語○小説鐵道ばなし○五月

【著者】梅柳新話○巷説兒手拍○三巴里奇説

【著者】楓時故郷の錦木○岡山紀聞筆命毛○晝夜帶

【著者】加茂川染○蝶鳥筑波裾模様○怪談深閨屏○春

【著者】色黄金花○花兄譽片腕○女夫番操鏡○御伽話

【著者】手遊八景○黑白染分韻○柳亭叢書○短篇集

【著者】對模樣萩と尾花」等。

【史的地位】明治初期の文壇で、代表的に挙げられる名は假名垣魯文(別項)であるが、魯文及び假名垣派と相對して一敵國をなしてゐたのが、藍泉即ち柳亭種彦と柳亭派とであつた。

だが魯文の全盛期は大體明治五六年から十年前後までと見てよく、これに代つて十一年から十七八年頃までの文壇に主盟の位置をもつたものは藍泉であつたといへよう。従來の文學史では藍泉を見ること輕きに失してゐるが、見直す必要がある。前田香雪・南新二・櫻庭算村(各別項)を客將とし、柳洲亭藍江・柳條亭華彦・柳場亭真彦・柳葉亭繁彦を門下とし、柳下亭種員・四方梅彦を後援とした柳亭派の

【著者】高屏風くだ物がたり

【著者】假名字子二卷二册【作者】未詳【名稱】高屏風は、俠客など六法肌の無頼漢の異名。「を

いてみる、とかくろくにはたつまいやつじやとの、高屏風の見たて」とある。嫖客のくりごとの意。【成立】萬治三年の春云々の發語あり、即ち萬治三年がこの書の成立の年と推定される。【諸本】流布本は、大正四年京都佐々木華月氏の覆刻したもの一種のみで、原本は小山曉杜氏藏、中形本で挿繪十四面あり、山東京山舊藏自筆の書入あるもの。

【梗概】六法肌の男が四人、吉原を見物する事に筆を起し、遊女の美しい姿を見て、傍の人にその名を聞く。通りすがりの常樂齋といふ通人の醫者が、一々精しく話して聞かせる。先づ三つ木瓜の紋は吉田様。三枝の松は千歳様。巴の紋は勝山様。葛の紋はときは様。これを當今四天王と持て囃す。この外三浦の采女、新丁のげき、角丁の若狭、二丁目の小太夫など何れ劣らぬ太夫だと云ふ。そこへ又二人優れた美人が現はれる。あれは誰かと言へば、「これこそ今の世のわかつての御太夫、四天王にもかたをならぶる此所の七君のすい一、高島屋のよし野、三浦屋の高尾だと答へ、これより二人の品評に移り、次に、よし野(いほりの下に桐の紋)、高尾(紅葉の紋)、長門(地扇の内に桐の紋)、かほる(葛の紋)、からさき(一ツ松の紋)、ふじ(山形に一ツ巴の紋)、初山(花

もつかうの紋)など七君の紋所、品評に興を添へる。嫖客四人は假號を用ひ、こてふ、岩つゝ、じ、秋のしか、そせつと稱して、各々勝山・ときは・よしだ・千歳に馴染を重ね、しげく通つてをるうちに、ときはは承應三年八月三日に、よしだは同十月廿六日に、ちとせは同十二月十七日に身請けされた。それより四人は勝山・からさき・高尾・よし野に親しんで、又一しきり通ふうちに、明曆三年の大火に遭遇して元吉原は焼け、新吉原に移轉する事となつた。その當座は見すばらしい有様で、萬治となつても、未だはかた／＼しく復興しなかつたが、同二年の春頃はさすがに、昔にまして繁華の地となつた吉原の光景を叙し、「花やかなむかしにまんぢ二年哉」といふ名妓よし野の句を記してゐる。その年の十月二十六日、よし野は身請けされ、十二月五日に高尾は病死し、同廿六日に、ときはが身請けされて三名花が散つて了ひ、その翌三年の春の如きは、吉原は一時火の消えたやうに淋しくなつたといふ。

【解説】この物語は、その頃の巷談を扱つた小説的作品とも見られるが、實は小説的作品と見せかけた吉原細見が本體で、四人の嫖客は種々話題の端緒を引き出す傀儡に過ぎぬ。殊にこの書を著名にしたのは、高尾の病死の記事である。これは、京山の「歴世女裝考」(高尾考)及び小山氏藏本の書入にもある通り、京山が高尾の事蹟研究中、偶然この書を得て、例の高尾の三又斬殺の証説を否認する典據としたところから、本書は單に高尾の事のみ記したもののやうに世に思はれてゐるが、内容は當時吉原における有名な女郎等の品評である。その中でも高尾は才色勝れてをり、又他の女郎は多く身請けの幸運に浴したのに、高尾だ

けは、十九歳の全盛中に歿したので、殊に可惜せられて、比較的記事が多いと云ふだけで、高尾のためにこの作が出来たとは信する事が出来ぬ。さればその作者についても、高尾の客の何人が書いたやうに、京山などは言つてをるが、作者が高尾の馴染でないことは、高尾歿後、茶屋の噂が、全盛當時には身請けなどと騒いでゐたものが、病氣となつてからは、一人としてこれを引取り、養生させると云つた者のなかつた事を述べて、馴染客の輕薄を罵つてゐる所を見ても、嫖客側ではなく、むしろ常樂齋などの廓通が、新吉原宣傳のため、小説的に當時の事情を面白く綴つたもので、一種風變りの案内書と思はれる。

【参考】歴世女裝考山東京山○高尾考同上(續 無石十種第一)

### 幸文

【姓名】木下氏、通稱氏藏、初名義質【號】朝三亭、亮々舍、無庵居士、風濤漁者【生歿】安永八年、備中國淺口郡長尾村に生れ、文政四年(二四八)十一月二日歿す。享年四十三【墓所】長尾村御堂山【家系】父は木下八郎右衛門義錦、兄一人、姉二人、弟一人があつた。先祖は、同村の小野氏の家宰であつたが、後に獨立した。家が渚といふ處にあつたので、小野氏を屋敷といふに對し、ないざの屋敷と言つてゐた。幸文はこの家を、風濤亭と名づけてゐた。【閱歴】十二三歳の頃から和歌を詠み文章を作つてゐた。この頃は木下多見藏義壽と言つてゐた。澄月の歿したのは、寛政十年、幸文十七歳の時である。幸文が澄月に學んでゐたのは、十七歳以前である。幸文はこの頃から既に令名があつた。澄月の歿後、慈延の門に入つた。寛政十二年頃、慈延を通して有賀長收の養子に望



まれたこともある。又彼は、慈延の門にある頃から、道の上の先輩として景樹を敬し、その門を訪れてゐた。幸文が景樹を尊しとする念は、日に日に深くなつて行つた。慈延は、そのために、いたく力を落してゐた。文化元年二月、幸文は遂に上岡崎村に移り、景樹の家近くに居を構へた。この年三月、赤尾左京の紹介で、桂園の門に入つた。これは幸文が二十三歳、景樹が三十四歳の時のことである。この事が桂園門の人々を喜ばし、慈延を怒らせた。桂園門に入つてからの幸文は、深く景樹に力とされ、また幸文も深く景樹に傾倒してゐた。上岡崎にゐる時は、家を朝三亭と名づけてゐた。文政二年難波に移つてからは、前栽に竹を植ゑ、亮々舎と號した。京都に出た初めの頃は筆耕を業とし、後には専ら和歌の師匠をしてゐた。著しく貧しかったのは、作品に「貧窮百首」のあるのを見てもわかる。禪を誠拙和尙に學び、無庵居士と言つてゐた。詩と畫とを良くし、畫は劍路雲泉に學び、この方の號を風濤漁者と稱してゐた。前後に二妻があり、嗣子はなかつた。同門の熊谷直好と親交があつた。【著書】亮々草紙○亮々遺稿(各別項)。【作風】その歌は放膽な心の持つ自由と、純真な心の持つ弱さとを併せ持つてゐる。かうした作品は、今少し強くなるべきであらうが、幸文はそこに達せずして歿した。(亮々遺稿参照)

**高天原** たかまがはら 神話 【名義】「たかまがはら」は、「たか」(高)と「あま」(天)との約であり、「はら」は國原・海原の「はら」で、廣く平かなるところを意味する。併し記紀その他の古文獻に現はれた高天原は、特殊の意義を有し、天上界にあつて神々の居住地をなし、而してその

地の形態・情勢、及びそこに於ける生活等は、下なる國土のそれと相同似してゐたと考へられた。【解説】諸民族に見出される垂直的宇宙觀の一産物である。即ち宇宙は神々の住む處、人間の住む處、死人の住む處より成ると觀じ、而して三者を垂直的に想定し、最上層に神々の棲所を置いたのが高天原である。従つて一種の理想郷であるが全然空想的なものではなく、古代日本民族が人間世界を高貴化し、昇華した姿であること、なほ希臘の宗教及び神話に於ける神々の天界の居住地オリムポス(Olympus)が、同國のオリムポス山の高貴化であるのと趣を同じうしてゐる。切言すれば民衆の思考を支配する Continence theory の一發露である。従つて高天原の實際的所在地を釋ねて、常陸となし(新井白石)、豊前となし(多田爾嶺)、若しくは日向・肥後・近江等となし、更にまた海外の或る地となすが如きは、宗教政治的理想郷と皇室發祥の地とを混同するものでなくてはならぬ。その觀想には、皇室の御祖先の郷土の意味があり、また實際生活の反映投出があるとしても、史實そのものではない。

**高天原系神話** たかまがはら 神話 【解説】また天孫系神話とも呼び得るであらう。高天原に坐すと信ぜられた神々及び高天原から葦原・中國に降臨した神々とその子孫とに關する神話群を意味する。我が國にはその國土的地位の關係から、古く多くの民族が混融してゐる。従つてその精神文化的産物の一としての神話も亦互に異なる民族文化を母胎とする若干の系統が、密接に抱着してゐる。而して吾人はその主要なものを三つの大きな説話團に分つことが出来る。高天原系神話はそ

の二であり、出雲系神話はその二であり、筑紫系神話はその三である。高天原神話は、所謂天孫民族が有した説話群で、その大きな特色は、北方民族の宗教である薩滿教の色調を可なり濃厚に内蔵させてゐること、皇祖神の政治的觀念と太陽神の宗教的觀念とがその主流をなして、しかも兩者が不可分離的に融合してゐること、呪術宗教的及び政治的な権能を有した女司祭の要素が、その底流をなしてゐること、建國的的政治的精神を統一原理としてゐること等である。

**高政** たかまさ 俳人 【姓】菅谷氏(菅野谷ともある)。【號】惣本寺・伴傳連社【生歿】不詳。但し元祿十五年(三六二)に、輦士の「花見車」の出た頃にはまだ存命してゐたことが知られる。【閑歴】京都に宗因の俳風を樹立した京談林の中心人物で、自ら惣本寺伴傳連社と號し、惣本寺といふ額を打つてゐた。惣本寺は京談林の惣本寺であるとの意であるが、伴傳連社は大阪の西鶴の阿蘭陀流と對抗する意のものであつたらう。【誹諧破邪顯正】(別項)によると、延寶五六年頃、既に毎年の歳旦に惣本寺引付とて板行してゐたといふが、伴傳連社も同時頃から稱してゐたものらしい。然るに延寶六年の夏、師宗因を自亭に招いて一會を催したので、彼の地位は愈々搖ぎなきものとなつた。この勢に乗じてか、翌年自己及び如風・春澄・春惠・正長・政定・定之・一方・清風・鶴一・信徳・如泉・仙庵等の獨吟、兩吟、連吟等を集め、「惣本寺俳諧(別項)」と題して公にしたので、これが端なくも貞門との論争を捲起す動機となつたのである。事實又彼の作風は自らバテレンと名乗るほど談林中でも怪奇に過

ぎるものであつた。又彼は同じ上方でありながら、大阪の中堅の西鶴・惟中とは却つて反撥し、延寶五年には西鶴の「大句數(別項)」の向ふを張つて、多武峯の紀子の「大矢數(別項)」の後桶をしたので、西鶴と不和となり、かくて翌六年、江戸の松意が上洛して西鶴と「虎蹊の橋」(別項)の三吟をした時には、彼は加はらなかつた。惟中も、延寶八年隨流に對して「破邪顯正返答」を書いた時、高政の攻撃されるのを却つて是認し、惣本寺の額を打つたことを排撃してゐる。併し高政は作及び行為にその態度が示され、言説を以てしないのが彼の態度であつた。かくて彼は元祿末年頃迄も存命しつつ、蕉風に對して談林としての運動をすることもなく、蕉風と交渉を持つこともなくして終つてゐる。「花見車」によると、相當の連衆を擁して氣樂な點者生活をしてゐたらしく、要するに、俳壇的隱者となつてゐたらしい。

**隆正** たか 國學者 【姓名】姓は山本、今井、野々口・大國。名は秀文・秀清・隆正。字は子蝶。通稱・中衛・一造・匠作・仲。【號】戴雪天隱・如意山人・佐紀之屋・葵園・居射室・眞瓊園【生歿】寛政四年十一月二十九日、江戸外樓田津和野藩邸に生れ、明治四年八月十七日、東京大名小路徳大寺家令邸に歿す。享年八十。

【著書】「多武峯少將物語」(別項)は、彼の出家が周囲のものを悲しませた事を取扱つてゐる。【作風】「家集・高光集」群書類從卷二五一所載本と歌仙歌集本とは全く同じく、歌の數四十三首である。出家を思ひ立つた頃月をみて詠

【著書】赤松義晴(別項)「隆正は石見國津和野藩士今井秀清の子、十五歳平田篤胤に就いて國學を修め、次いで昌平齋に入つて漢籍を古賀精里に學んだ。十九歳、昌平齋を辭して藩邸に歸つた。すでにして本居宣長

○神理入門用語説二(二)刊、主として神話の活用を述べたもの。○活語活法活理抄三卷或は四卷(寫)。(用言)「本行」「借行」「枝」とは三種があると云つて、それ等を説いたもの。(二)文字五十音に關するもの。○音調神解卷數未定(百餘卷も

四春門に音調學を學び、その學說に於ては、皇國尊崇の思想のために、獨斷に走つてゐるものが多く、卓見もないではないが、全體としては、學術的價値は餘り高くない。「歌人と

して」その歌集眞爾園翁歌集」は約二千の和



持つてゐる。かうした作品は、今少し強くなるべきであらうが、幸文はそこに達せずして歿した。(亮々遺稿参照)

### 高天原

「たかみかみ」と「あま(天)との約であり、「はら」は國原・海原の「はら」で、廣く平かなるところを意味する。併し記紀その他の古文獻に現はれた高天原は、特殊の意義を有し、天上界にあつて神々の居住地をなし、而してその

高天原に坐すと信ぜられた神々及び高天原から葦原・中國に降臨した神々とその子孫とに關する神話群を意味する。我が國にはその國土的地位の關係から、古く多くの民族が混融してゐる。従つてその精神文化的産物の一としての神話も亦互に異なる民族文化を母胎とする若干の系統が、密接に抱着してゐる。而して吾人はその主要なものを三つの大きな説話群に分つことが出来る。高天原系神話はそ

寶六年の夏、師宗因を自亭に招いて一會を催した時、宗因が「末茂れ守武流の物本寺」と祝したので、彼の地位は愈々搖ぎなきものとなつた。この勢に乗じてか、翌年自己及び如風・春澄・春惠・正長・政定・定之・一方・清風・鶴一・信徳・如泉・仙庵等の獨吟、兩吟、連吟等を集め、「歌中中庸(別項)」と題して公にしたので、これが端なくも貞門との論争を捲起す動機となつたのである。事實又彼の作風は自ら「パレレン」と名乗るほど談林中でも怪奇に過

歴代滑稽傳森川許六〇誹諧家諺早川丈石〇俳家奇人談竹内玄々二〇誹諧名家録加舎白雄〇誹諧家大系圖生川春明〇俳諧人物便覽三浦若海

### 隆正

たかみかみ 國學者「姓名」姓は山本、今井、野々口、大國。名は秀文・秀清、隆正。字は子蝶。通稱・中衛・一造・匠作・仲。【號】戴雪、天隱、如意山人、佐紀之屋、葵園、居射室、眞瓊園【生歿】寛政四年十一月二十九日、江戸外櫻田津和野藩邸に生れ、明治四年八月十七日、東京大名小路徳大寺家家令邸に歿す。享年八十。

【著者】赤松義隆(別項) 隆正は石見國津和野藩士今井秀隆の子、十五歳平田篤胤に就いて國學を修め、次いで昌平齋に入つて漢籍を古賀精里に學んだ。十九歳、昌平齋を辭して藩邸に歸つた。すでにして本居宣長の學風を慕ひ、その門人村田春門に音韻學・國典等を學んだ。文化十四年家を嗣ぎ、ついで長崎に遊んで蘭學・理學を學習し、傍ら梵書を涉獵したが、文政十一年、藩に在つては本志の遂げられないのを思ひ、亡命して江戸に出て、また京都に赴き、天保十二年以後は、京都に家塾を開いて勤王の大義を鼓吹し、鷹司政通・阿部正弘・徳川齊昭、その他の知遇を受けて國典を講じた。嘉永四年藩侯より諭告されて原籍に復し、藩の養老館の教授となり、京都より津和野及び江戸の藩邸に赴いて子弟を教へた。明治維新後徴士となり、次いでまた内國事務局權判事、神祇事務局權判事、宣教使御用係等を勤めた。門人中最も顯れたる人々に、福羽美静・玉松操などがある。大正四年、維新の際の功績により従四位を贈られた。

【著作】【語學書】(一)活用手爾波に關するもの。○通略延約辨一卷、天保五年成。刊。漢淵の「語意考」(別項)の通略延約の説、及びこれに關する語説を詳論したもので、注意すべき説がある。もと、「ことばのすみなは」と題して、起稿したもの(第一集である)。(二)人天合離對格一卷(寫)(用言に「人爲」と「天然」とあつて活用が異なる事を述べたもので、「詞の通略」(別項)の詞の自他の説を受けたものである。「ことばのすみなは」の第二集)○言葉の正みち一卷、天保七年八月自序。刊。國語は萬國の語に勝れてゐるが、それは活語がある故である事、國語の法則は、萬世に渡るべき理法が具はつてゐる事、音韻、五十音、指辭(代名詞)等の事を記してゐる。

【参考】津和野藩士奉公事蹟井上瑞士〇大國隆正恒松隆慶〇大國隆正の事蹟大森金五郎(歴史地理五一ノ一二四) (森田田・窪田)

### 高光

たかみかみ 歌人(三十六歌仙の一)【姓】藤原【別稱】多武峯少將入道【法號】如覺【歿年】正曆五年(一六五三)三月【閏歴】師輔の八男、母は雅子内親王、天德四年右近衛少將に任じ、五年従五位上に敘し、備後權介を兼ねた。天曆三年三月晦日、宮中に召されて「花も鳥も春のをくりす」といふ題にて詩を作り、大和歌をそへた。八年母の薨去、天德四年父の薨去、康保四年村上天皇の崩御にあつて、それら哀悼の歌をよんだ。父の寵愛を受けてゐたが、世の中をはかなくのみ覺え、應和元年十二月遂に妻、女、同腹の妹愛宮、乳母を初め、多くの兄弟姉妹にそむいて比叡山に登り、増賀上人に就いて入道した。初めは横川に住み、應和二年多武峯に草庵を結び、極樂房と稱

した。「多武峯少將物語」(別項)は、彼の出家が周囲のものを悲しませた事を取扱つてゐる。【作目】家集「高光集」。群書類從卷二五一所載本と歌仙歌集本とは全く同じく、歌の數四十三首である。出家を思ひ立つた頃月をみて詠んだ歌、「かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくも澄める月かな」(拾遺集)は、本集では、「村上の御門かくれさせ給ひての頃月を見て」とあり、「榮華物語」には中宮崩御の折とあり、「撰集抄」では、「つかさ申しけるにかなはで歎きに沈み給ひけるころ、九月十三日の夜に月前述懐といふ題にて、内裏に歌合の侍りしに」とある。○勅撰集に入る歌は、拾遺四、その他凡そ十九首、合計凡そ二十三首。【多武峯少將物語】中にも歌がある。○高光日記一卷(本朝書目録)「多武峯少將物語」と同書ともいふ。

【参考】歌仙傳(尊卑分脈)榮華物語、月宴、大鏡〇多武峯略記〇大日本史二二五〇國文學全史平安朝篇〇河社。

### 高光日記

たかみかみ 「多武峯少將物語」を見よ。

### 他我身之上

たかみかみ 假名字子 六卷【作者】山岡元隣【成立】明曆二年【諸本】初版は、明曆三年正月、寺町通圓福寺前の町秋田屋平左衛門刊行。享保十三年正月再版。近世文藝叢書第三所收。【解説】この書は、漫筆的短文集で、世俗を警め、人の心得になるべきことを説いたものである。即ち平常誰も口癖にする卑近な俚諺などを擧げて、これを解釋し、それに就いて世人の行動を評し、可否を論じ、誤りを指摘し、正道に導かんと努めたものである。例へば、卷之三、五「うり言葉にかい言葉の事」として、

世話に賣言葉に買言葉、けんによなければむねよ



大國隆正(福羽美静藏)

【著者】赤松義隆(別項) 隆正は石見國津和野藩士今井秀隆の子、十五歳平田篤胤に就いて國學を修め、次いで昌平齋に入つて漢籍を古賀精里に學んだ。十九歳、昌平齋を辭して藩邸に歸つた。すでにして本居宣長の學風を慕ひ、その門人村田春門に音韻學・國典等を學んだ。文化十四年家を嗣ぎ、ついで長崎に遊んで蘭學・理學を學習し、傍ら梵書を涉獵したが、文政十一年、藩に在つては本志の遂げられないのを思ひ、亡命して江戸に出て、また京都に赴き、天保十二年以後は、京都に家塾を開いて勤王の大義を鼓吹し、鷹司政通・阿部正弘・徳川齊昭、その他の知遇を受けて國典を講じた。嘉永四年藩侯より諭告されて原籍に復し、藩の養老館の教授となり、京都より津和野及び江戸の藩邸に赴いて子弟を教へた。明治維新後徴士となり、次いでまた内國事務局權判事、神祇事務局權判事、宣教使御用係等を勤めた。門人中最も顯れたる人々に、福羽美静・玉松操などがある。大正四年、維新の際の功績により従四位を贈られた。

【著作】【語學書】(一)活用手爾波に關するもの。○通略延約辨一卷、天保五年成。刊。漢淵の「語意考」(別項)の通略延約の説、及びこれに關する語説を詳論したもので、注意すべき説がある。もと、「ことばのすみなは」と題して、起稿したもの(第一集である)。(二)人天合離對格一卷(寫)(用言に「人爲」と「天然」とあつて活用が異なる事を述べたもので、「詞の通略」(別項)の詞の自他の説を受けたものである。「ことばのすみなは」の第二集)○言葉の正みち一卷、天保七年八月自序。刊。國語は萬國の語に勝れてゐるが、それは活語がある故である事、國語の法則は、萬世に渡るべき理法が具はつてゐる事、音韻、五十音、指辭(代名詞)等の事を記してゐる。

【参考】津和野藩士奉公事蹟井上瑞士〇大國隆正恒松隆慶〇大國隆正の事蹟大森金五郎(歴史地理五一ノ一二四) (森田田・窪田)

### 高光

たかみかみ 歌人(三十六歌仙の一)【姓】藤原【別稱】多武峯少將入道【法號】如覺【歿年】正曆五年(一六五三)三月【閏歴】師輔の八男、母は雅子内親王、天德四年右近衛少將に任じ、五年従五位上に敘し、備後權介を兼ねた。天曆三年三月晦日、宮中に召されて「花も鳥も春のをくりす」といふ題にて詩を作り、大和歌をそへた。八年母の薨去、天德四年父の薨去、康保四年村上天皇の崩御にあつて、それら哀悼の歌をよんだ。父の寵愛を受けてゐたが、世の中をはかなくのみ覺え、應和元年十二月遂に妻、女、同腹の妹愛宮、乳母を初め、多くの兄弟姉妹にそむいて比叡山に登り、増賀上人に就いて入道した。初めは横川に住み、應和二年多武峯に草庵を結び、極樂房と稱

した。「多武峯少將物語」(別項)は、彼の出家が周囲のものを悲しませた事を取扱つてゐる。【作目】家集「高光集」。群書類從卷二五一所載本と歌仙歌集本とは全く同じく、歌の數四十三首である。出家を思ひ立つた頃月をみて詠んだ歌、「かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくも澄める月かな」(拾遺集)は、本集では、「村上の御門かくれさせ給ひての頃月を見て」とあり、「榮華物語」には中宮崩御の折とあり、「撰集抄」では、「つかさ申しけるにかなはで歎きに沈み給ひけるころ、九月十三日の夜に月前述懐といふ題にて、内裏に歌合の侍りしに」とある。○勅撰集に入る歌は、拾遺四、その他凡そ十九首、合計凡そ二十三首。【多武峯少將物語】中にも歌がある。○高光日記一卷(本朝書目録)「多武峯少將物語」と同書ともいふ。

【参考】歌仙傳(尊卑分脈)榮華物語、月宴、大鏡〇多武峯略記〇大日本史二二五〇國文學全史平安朝篇〇河社。

### 高光日記

たかみかみ 「多武峯少將物語」を見よ。

### 他我身之上

たかみかみ 假名字子 六卷【作者】山岡元隣【成立】明曆二年【諸本】初版は、明曆三年正月、寺町通圓福寺前の町秋田屋平左衛門刊行。享保十三年正月再版。近世文藝叢書第三所收。【解説】この書は、漫筆的短文集で、世俗を警め、人の心得になるべきことを説いたものである。即ち平常誰も口癖にする卑近な俚諺などを擧げて、これを解釋し、それに就いて世人の行動を評し、可否を論じ、誤りを指摘し、正道に導かんと努めたものである。例へば、卷之三、五「うり言葉にかい言葉の事」として、

世話に賣言葉に買言葉、けんによなければむねよ







に、我心さへよくもちたれば、人も我ことをそし  
るまじきのしめし也、けんによなればはむねさは  
がすといふによくかなへり。

とあり、その他瓜のつるにはなすびはならぬ  
といふ語を引いて、因果の理を説き、我が身  
つみて人のいたさをするで、怒の字を解き、  
阿波守のいけんには、榮しき庄屋の一番息

「高天」の音便とする説もある。「むす  
す」は、生成を意味し、「ひ」は靈妙  
な物を表はす。従つて「むすび」は、産靈の義  
であるとするのが普通の解釋であるが、また  
「むすび」を「たま」と同義語となし、靈魂の義  
となす者もある。一名を高木神ともいふ(古事  
記、舊事記)。「解説」天地初發の時、天之御中  
主神・神産巢日神(神皇產靈神)と共に、高天原  
に出現した神である(古事記、古語拾遺、日本書紀

古代希臘人は、これをエロス(Eros)と観じた。  
高皇產靈神及び神皇產靈神も、かくの如き意  
味の生成力であつたらう。従つて強ひてこれ  
を天之御中主命の力若しくは活動と結びつけ  
て考へるにも當らず、また靈魂と交渉させる  
要もなからう。ただその生成力が二元的にな  
つてゐるのは、支那の陰陽説のやうに生成が  
兩性によつて行はれるからであるか、或は本  
來別個に考へ出された生成神があつて二柱に  
對立させられたからであるかは確言し難い。

が阿波守となると共に歸京した。この間ただ  
乗馬を事として學業を顧みなかつた。嵯峨天  
皇はこれを聞き給ひ、岑守の子にしてなほ一  
介の弓馬の士となり終らんとするかと歎息遊  
ばされた。彼はこの御言葉に拜して大に慚愧  
し、驕然として學業に志したといふ。弘仁十  
三年九月(二十歳)初めて文章生に補せられ、  
天長七年(二十九歳)藏人となり、又式部少丞と  
なる。この年四月父を亡つた。同九年從五位  
下に叙せられ、太宰少貳となつた。勅によつ

て任地に赴かず。同十年、嵯峨夏野等と共に  
「金義解」の撰に與つた。この年仁明帝に御讓  
位あり、翌承和元年遣唐副使となつて一旦出  
發したが、暴風に遭つて還り、同四年再び出發  
した。然るに再び暴風に遭ひ、正使藤原常嗣  
の船破損し、常嗣の奏請によつて副使の船を  
正使の乗用に充てることに決し、翌五年出發  
したが、篁は大に憤り、病と稱して乗船せず、  
西道諸を作つて遣唐使のことを諷刺した。こ  
のこと嵯峨上皇の逆鱗に觸れ、國法を枉げた  
條によつて、絞刑に處せらるべきところを、  
罪一等を減ぜられて、隱岐國に配流された(十  
二月十五日)。この時の作、謫行吟七十韻は當時  
人口に膾炙したといふが、今は傳はらない。  
「古今集」の「和田の原八十鳥かけてこぎいで  
ぬと人には告げよ蟹のつり舟」(巻九)、「思ひき  
やひなの別におとろへて蟹のなはたぎいさり  
せむとは」(巻十八)の二首は、この時の作であ  
る。同七年四月赦されて召還され、翌年九月  
勅によつて本爵に復され、十月刑部大輔とな  
つた。翌年五月陸奥守、八月東宮學士を兼ね、  
同十四年參議に任ぜられた。かくて仁壽二年  
病重りて朝せず、錢穀を賜はり、十二月從三  
位に叙せられた。【著作】「和歌」勅撰集に入  
つてゐる歌は、古今集六、新古今二、續古今  
一、玉葉二、新千載一、計十二首。私撰集に  
入つてゐるものは、新撰和歌四、金玉集二。  
○外に「小野篁集」(二卷、圖書寮藏)と稱するも  
のが傳へられて居り、「篁日記」(河海抄、花鳥餘  
情)「篁物語」などとも呼ばれてゐるが、篁の自  
記ではなく、後人の作つた物語である。内容  
は、篁がまだ大學の學生であつた頃、異腹の妹  
に書を教へてゐるうち親しくなつて通じた。  
親はこれを知つて妹を一室に閉ぢ込めて篁を

遠ざけようとした。篁は若屋の外に來つて妹  
を懇め飲食を運んだ。妹は魂となつて男の身  
に添はうと盟ひ、食を絶つて死んだ。その夜篁  
が泣き悲しんでゐると妹の姿が現はれ、悲し  
いことを語つたが手にも觸れなかつた。三七  
日の間は亡靈が鮮かに現はれ、篁は悲歎の涙  
にくれた。依つて涙を集めて硯の水とし、法華  
經を書寫し、これを比叡山に收めて供養に資  
した。三年もたつと亡靈の出現も微かになつ  
たので、時の右大臣の三の君の聲になつたと  
いふ筋を取扱つてゐる。物語化の程度は低く  
筋の變化や表現力は貧弱である。篁は三人稱  
で描かれてゐるが、篁を題材としてゐる事は  
明瞭である。妹との關係は「古今集」卷十六に  
妹の死を悼む歌があるのに依つたものであら  
うし、右大臣の聲になつた事は「本朝文粹」卷  
七に右大臣の娘を妻に乞うた文があるのに依  
つたものであらう。書中には三十一首の歌が  
あり、その内九首は篁の作その他として「新古  
今集」以下に採録されてゐる。而して三十一首  
は短歌としての獨立性が乏しく、二人以上の  
作者があるとも明瞭には考へられないから、  
本書の文と共に假作ではないかと考へられ  
る。書中には「古今集」中の篁の歌を用  
ひてゐないのは不思議である。構想の上から  
亡靈の出てゐること、人間の執心を強く描いてゐ  
ること等の宗教的色彩は、平安朝末期の思想  
ではないかと考へられる。本書の成立は、「新  
古今集」以前ではあらうが、さほど古いもので  
はなく、書中の和歌が弘仁期の作であらうな  
どとは到底考へられない。「詩文」野相公集五  
卷。「本朝書籍目錄」詩家の部にこの名が見え  
るが今は傳はらない。その他「經國集」和漢朗

詠集(「本朝文粹」本朝文粹に等に見えてゐる。  
人物・作風)夙に博識英才を以て重んぜられ  
てゐたが、自ら持すること高く、狷介不羈であ  
つた。遣唐副使として常嗣の下にあるを潔し  
とせず、遂に配流されるに至つたのも、その一  
つの現はれである。勿論その反面には多感多  
情な詩人的性格を多分に有してゐた爲めであ  
るが、この故に野狂とさへ稱された。併し文  
才最も高く一世を壓し、帝龍を一身に集め、殊  
に詞藻の富麗は人を驚かすに足るものがあつ  
た。嵯峨天皇、嘗て篁の才を試みさせ給ふと  
て「白氏文集」の中から「閉閣唯聞朝暮鼓、登樓  
空望往來船」の句を抜き、わざと空を遙と改め  
て篁に示させ給ふと、彼は直に、誠に佳作であ  
るが遙を空に改めたなら一層よくなると申上  
げた。當時「白氏文集」は未だ民間には流布さ  
れてゐなかつたので、天皇は篁の詩情が白樂  
天のそれと相通するものがあるのに驚かせ給  
うたなどとさへ傳へられ、篁に關するこの種  
の傳記は外にも多々ある(宇治拾遺、大日本史、古  
事談、江談抄等)。これ等は要するに傳説であつ  
て信じ難いが、その名聲を視ふには十分であ  
らう。「扶桑略記」(卷二十)には「小野篁は詩家  
の宗匠なり」と記してゐる。併し、氣格は盛唐  
に通るも、造語に疎陋があるとも評せられて  
ゐる。又彼は書に通じ、草隸共に拔群で、二  
王(王羲之・王獻之)の風があつたといふ。又古來  
下野の足利學校(別項)は、篁の家塾であつたと  
も傳へられてゐる。【山岸、西下】

【参考】續日本後記(卷五六・七)○文德實錄卷  
四○古今集目錄○公卿補任○國文學全史平  
安朝篇藤原作太郎○新たに知られた小野篁  
日記(後藤丹治)國語と國文學昭和二〇二二  
**高村光太郎** たかむらう 詩人【號】初め  
が阿波守となると共に歸京した。この間ただ  
乗馬を事として學業を顧みなかつた。嵯峨天  
皇はこれを聞き給ひ、岑守の子にしてなほ一  
介の弓馬の士となり終らんとするかと歎息遊  
ばされた。彼はこの御言葉に拜して大に慚愧  
し、驕然として學業に志したといふ。弘仁十  
三年九月(二十歳)初めて文章生に補せられ、  
天長七年(二十九歳)藏人となり、又式部少丞と  
なる。この年四月父を亡つた。同九年從五位  
下に叙せられ、太宰少貳となつた。勅によつ

たかむら











と、一方の子を持たぬ長者が、初めて人生の寂寞を感じたといふ風に語つて居り、肥後ではその口碑を受け入れ易くするために、浦山といふ地名を援用した傳説もあつた。これは子を持つて苦勞する普通の農民に、心強い一種の教訓を與へたかと思はれ、長者が子無くして神佛に祈願を掛けたといふ話は、後には會津の鶴塚のやうに、鶴を子として淋しく終つたといふやうな言ひ傳へにも移りかはつてゐる。しかもこれはただ後々の新しい傾向であつて、最初は恐らく「吾蘇志略」の、箕作翁と童觀翁との寶鏡への如く、長者の富の力の無邊際を叙説した、花やかなる語り興じたものであらうと思ふ。今日その痕跡のなほ残つてゐるのは、若狭の八百比丘尼が幼少の頃に、人魚の肉を食べたといふ話の前段だが、これなどもやはり、人間の福分には限りがあつて、あたらず不老長生の術の眼の前に存するのを、多くの長者は知らなかつたといふ寓意が窺はれる。次には壹岐島などの百合若物語に、二人の長者が寶鏡をしたことを發端としたものもあるが、これも善き兒を持つてゐた百合若の父の方が勝ちであつた。日本は要するに子を愛し、家の持續を珍重する説話が次々に成長し、展開して行くべき國柄であつた。その傾向が、今もきれいな傳説の上に、幽かな例證となつてその跡を留めてゐるのである。(長者屋敷參照)

【柳田(國)】

**寶田壽助** たからだ 脚本作者【別號】向榮樓傾堂・東嶽山人【生歿】寛政九年、江戸に生れ、天保九年(二四九八)二月十九日同地に歿す。享年四十二。【閨歴】神田の質屋の子で、操淨瑠璃の作者となつて松川實作と云つたが、二代松井幸三に引立てられて歌舞伎の

作者となり、三代尾上菊五郎附となつてゐたが、長島壽阿彌に勧められ、寶田壽來の跡をついで壽助と改めたのが天保四年正月の河原崎座、立作者に昇進したのは天保六年十一月の森田座であつた。【著作】契比翼、櫻梅(天保八年九月河原崎座。小さん金五郎)○世界平氏梅(天保八年十一月河原崎座。藤通ひの景清)○花(天保六年十一月森田座。松山のお辰)○菅原流國字會我(天保七年三月森田座。曾我の世界へ「忠臣蔵」と「菅原」の趣向を加へしもの)○八犬傳評判樓閣(天保七年四月森田座。江戸に於ける最初の八犬傳)。

【参考】作者店御

**寶田壽來** たからだ 脚本作者【本名】鈴木和八郎【俳名】閑雅【別號】劇神仙【生歿】元文五年江戸に生れ、寛政八年(二四五〇)八月十七日同地に歿す。享年五十七。【閨歴】神田の住人である。増山金八の門に入つて劇界に名は出したが、立作者にはならなかつた。初代瀬川如草や、中村重助を助けて一齣つつを執筆するのみであつたが、それでも非常に有名なのは、常磐津淨瑠璃(積戀雪關扉)關の扉參照を作つた爲めであつた。當時の劇壇での博識家で、芝居の方は一種の道樂であつたともいはれてゐる。

【参考】名人忌辰録 關根只誠

**薪能** たきつけ 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻新の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新嘗祭訓抄)から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

じ(至徳二年記)、世阿彌の時から二月に勤めることに定まつた。爾來猿樂四座(別項)、殊に金春座の重い勤めとして毎年演じて來た。

【参考】能樂盛衰記上卷 池内信嘉

**瀧口入道** たきつけ 歴史小説【著者】高山樗牛【刊行】明治二十七年二月讀賣新聞(醫賞賞選。後、單行本として春陽堂より出版。樗牛全集。現代日本文學全集所収)。

【梗概】齋藤瀧口時頼は、小松内府重盛に仕へて當年二十三、身の丈六尺に近く、武骨一遍の勇士であつたが、治承三年の春、平相國清盛が、西八條の花見の宴に列り、その日の餘興に、「春鶯囀」を舞つて衆目をあつめた少女、中宮の曹司横笛の艶姿を見てから戀に悩み、夜毎に書を横笛に贈つたが何の返事もない。思ひ餘つて父茂頼に横笛を妻に迎へたいと言ふと、頑固一徹の父は世にも人にも知られた人の娘を貰へ、御室邊の郷家の娘など以下の外だと叱りつける。さらば出家を許されたいと乞ふと、父は怒つて親子の縁を断つとまで言ふ。決心した時頼はそれとなく重盛に暇乞ひに行くと、その子維盛の行末を頼まれた。時頼出家の噂が中宮へ傳はると、横笛は自分のために武士をすてさせた罪の深きを思ひ、一夜嵯峨野の奥の往生院に時頼を訪ね、夜中戸の外に立つてゐたが、彼は戸を開けようとしない。横笛は遂に髪をおろし、深草に庵を結んだが、幾ばくもなく世を去つた。それを聞いた時頼は、隣れを催し、墓とは名ばかりの彼女を葬つた土饅頭の前に後世を弔つた。そのうちに平家は西國に没落する。時頼が都へ來て見ると、平家の榮華の跡は見るよしもない一面の焦土だ。彼は竊かに重盛の墓を訪うて、頼まれた責を果さない罪を詫言ひ、高野

に登つて山深き草庵に籠つた。そこへ都の妻子に心ひかれた維盛が訪ねて來る。時頼は屋島での最後の一戦を勧めたが、その勇氣のない維盛は、和歌の浦に身を投じて死んだ。この悲痛な出來事に打たれて時頼も、同じ浦べに腹掻き切つて維盛の後を追つた。時に年二十六であつた。

【批評】結構は大體「平家物語」(別項)により、平家の文章に馬琴調をまぜ、散文詩といへるほど流麗で韻律的だ。初めから、この題材を詩として描いたので、抒情味の勝つた吟嘆的なものになつて、人物の性格や、心理の動きが型に入つた傾きがある。この作が讀賣新聞の懸賞小説の一等入選と決した時、匿名なので、何人の作であるかが問題となつたが、當時大學在學中の二十三歳の青年の手に成るものと分つて更に世人を驚かした。樗牛の出世作として、また後年の樗牛と併せて考へるべきものであるが、彼はその後再び小説の筆を執らなかつた。

【高須】

**瀧口横笛** たきつけ 「娘歌加留多」を見よ。

**たきつけ** 假名草子 一卷【作者】未詳【刊行】延寶五年【諸本】江戸時代文藝資料第四所収【内容】「もえくひ」二げしすみ(各別項)と共に三部作といふべきもの。三十歳前後の男と老人との二人の通客が島原歸りの道すがら、話し合ひうなづきあつてゆく。後をつけて聞いて見ると、それは老年の男が色道の粹を語り聞かせながら行くのであつた。そこで耳を敬つて聞き得たところを書きつけたといふ形になつてゐる。二人の會話が主であつて、問々説明の文を挿んでゐる。丹波口の茶屋より廊へ通ふ情趣を叙したあたりの文章は、「枕草子」の筆致に倣つてゐるあとが見え



た。その傾向が、今もきれぐれの傳説の上に、幽かな例證となつてその跡を留めてゐるのである。(長者屋敷參照)

**實田壽助** (じゆすけ) 脚本作者【別號】向榮樓傾堂・東螺山人【生歿】寛政九年、江戸に生れ、天保九年(二四九八)二月十九日同地に歿す。享年四十二。【開歴】神田の質屋の子で、操淨瑠璃の作者となつて松川實作と云つたが、二代松井幸三に引立てられて歌舞伎の

【参考】名人忌辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演

【参考】名人居辰録 關根只誠

**薪能** (たきぎ) 能樂【名義】奈良興福寺の南大門の芝の上で、二月に七日間行はれる春日神社の神事能で、能樂の古態を傳へたものである。【沿革】「天武紀」四年正月の條に記された獻薪の儀式の轉化にて、二月三日興福寺の西金堂、同日東金堂で行はれた新宴歌訓抄から起つたもの。初めは風俗歌を誦ひ舞つたものであるが、至徳の頃には猿樂を演



田口卯吉

田口卯吉 (たぐち) 經濟學者・史論家【本名】鉦、字は子玉、卯吉は通稱【號】鼎軒、又嘗て黃東山樵・島山機知・牛嶺逸士等の別號を用ひた。【生歿】安政二年四月二十九日、江戸目白臺に生れ、明治三十八年四月十三日日本郷西片町に歿す。享年五十一。【開歴】田口家は徳川家の徒士で、祖父慎左衛門は佐藤一齋の長子。田口家に入り、旗本西山氏の子樞郎を養子として長女町子に配す。鼎軒はその子。五歳の時父を喪ひ、十二歳幕府に出仕して徒士見習となつたが、間もなく明治維新に會つて家祿を失ひ、横濱の商家に寄寓した。十五歳

【参考】鼎軒田口卯吉全集 ○田口鼎軒先生傳



鹽島仁吉(明治四十五年經濟雜誌社)○文明史家  
並に社會改良論者としての田口鼎軒 森戸辰  
男(我等昭和二ノ六)

田口掬汀(たぐち) 小説家 【本名】鏡  
次郎【閱歴】明治八年一月十八日、秋田縣仙  
北郡角館町に生る。父は人形師であつた。小  
學校を出てから商家の丁稚となり、十八九歳  
から二十二歳頃までは洋服の註文取をやつた  
り、郡役所の雇になつたりした。それから秋  
田新聞の通信をした。二十五歳の時、新聲社  
(別項)社長たりし佐藤義亮に抜擢されて、「新  
聲」記者となり、編輯に従事した。明治三十四  
年金港堂の懸賞小説に應募「人の罪」當選、單  
行出版となる。翌年大阪毎日新聞に、小説「新  
生涯」を連載。明治三十六年新聲社を退き、  
萬朝報に入る。小説「女天波」を同紙に掲げ、  
翌年「伯爵夫人」(別項)を掲げた。明治四十年  
萬朝報を退き、佐藤紅緑・柳川春葉と共に、川  
上晋二郎の經營する大阪帝國座々附作者とな  
つた。明治四十年の秋、大阪毎日新聞社に入  
り、専ら新聞小説に筆を執つて「第一人」「任  
合者」「北の國」「續篇伯爵夫人」等を發表した。  
大正三年同社を退き、同四年「中央美術」を創  
刊した。この間大阪朝日新聞に「ふたおもて」  
「まごころ」の二長篇を掲げたが、大正五年以  
來創作の筆を絶ち美術批評に従ふ。大正五年  
錦木清方・平福百穂・結城素明・松岡映丘・吉川  
靈華等と邦畫研究の團體金鈴社を起し、毎年  
一回同人の制作を展覧した。大正八年中央美  
術展覽會を創設し繼續十ヶ年に亘り、新人飛  
躍の機關として、美術運動史上の一存在とな  
つた。また大正十五年以來東京府の囑託とな  
つて府美術館の經營に參畫してゐる。新聞小  
説の外新演劇の脚本として川上晋二郎が上演

せし「祖國」(サルツウ作)「天風組」、伊井蓉峰上  
演の「熱血」(トスカの編案)、帝國劇場女優劇の  
「國境」(梓なおさばき)「留守宅」の外、喜劇「嘘  
の世界」(見得くらべ)「泣男」等がある。(城戸)  
謫天情仙(たけくらべ)「野口寧齋」を見よ。  
拓本(たけくらべ)「法帖」を見よ。

詫磨派(たけくらべ) 繪畫【解説】詫磨の文字は  
託摩、詫磨・宅間・宅磨など用ひられてゐるが、  
藤田男爵家所藏の國寶十六羅漢圖には、詫磨  
法眼榮智筆と落款されてゐる。詫磨派は藤原  
時代に興り鎌倉末期まで佛畫家として世に榮  
えた。この派の祖ともいふべき爲氏は天曆頃  
の人と稱せられ、次いで白河天皇の頃、爲成が  
出て、宇治平等院の壁畫を作つたといはれて  
殊に有名になつた。鎌倉時代には澄賢・勝賢・  
良賢等の名手が出て、その末期には榮賀が出  
た。元來詫磨派は在來の佛畫の手法に宋畫の  
筆法を加へて、著しく畫風を變じたのである。  
要するに鎌倉初期に於ける佛畫界の一新派で  
あつたのである。この派の畫人として名高い  
のは、爲氏・爲成・爲遠等に次いで勝賢が傑出  
し、爲行・成忍・榮賀・了尊等である。(藤懸)

たけくらべ 傳説【名義】地名のタ  
ケクラベが、多くは以前の國郡の堺の峠に存  
することは、夙に旅人によつて注意せられて  
ゐる。傳説の或はこれを説明するのではない  
かと思ふものも、次々採集比較せられるやう  
になつた。その中でも殊に有名なる一つは富  
士の東南面に横はり伏す愛鷹山であるが、こ  
れは大昔諸越といふ國から富士と背競べをし  
ようとして、こゝまで歩んで來たのを、足柄明  
神が憎んでその頭を蹴飛ばした爲めに、根張  
りは雄大であるが、たけは至つて低いのだと、  
語り傳へてゐたさうである。九州では阿蘇の

一隅に立つてゐる猫岳が、これも主山を凌が  
うとしてその神の怒りにふれ、竹の筥を以て  
散々に頭を打たれた。それ故今もこの山ばか  
りは嶺に多くの凹凸が有るのだと謂はれる。  
山陰の方でも伯耆大山の隣に在る韓山は、「か  
ら」といふ國から長競べに來た山で、大山の神  
様に木履で踏まれた爲めに、その頂が今なほ  
少しばかり傾いてゐるといふ。以上三つの實  
例の中で、富士の場合だけは兩山の間に通路  
があつた。今の大宮の町よりやゝ下の方を斜  
めに、十里木といふ峠を越えて、須山から足柄  
の方へ行く路が、寶永の噴火以前までは、盛  
んに使用せられてゐたのである。だからこの  
筋を通る旅客が、左右に二つの山を仰ぎつつ、  
屢々この傳説を聽いてあるいたことは想像せ  
られるが、果してこれと同様の奇抜なる口碑  
が、曾て他の諸國の長競べといふ峠にも附隨  
してゐて、後に忘却せられたものと見てよい  
かどうかは、さう手輕には決し得ない。山が  
高さを競うたといふ傳説は、多分は古來の説  
話の土着したものと思はれるが、弘く全日本  
に分布してゐる。富士を相手としたものでは  
信州淺間、これは文藝の上にもくりかへし利  
用せられた昔語であつた。常陸の筑波山は、  
高きでは争はうとしたのでないが、これも富  
士の山より立ちすぐれてゐたといふことが、  
古くからの語り草である。伊豆の半島の山々  
にも、やはり山の姿の美しさを比べたといふ  
神の嫉みの物語があつた。高きの争ひとして  
は、加賀の白山が富士の噂をすることを忌む  
といふ話があり、越中の立山は又その白山と  
競うてゐた。東北では出羽の鳥海山が、背競  
べに負けて口惜しさの餘りに、飛んで海上に  
出て飛鳥となつたと謂ひ、津輕の岩木山も南

部の岩手山も、富士と争つたといふ話はない  
代りに、同じく附近の山の頂を研つて飛ばせ  
たといふ言ひ傳へは残つてゐる。大和では三  
山の争ひはただ舊記に録せられるのみである  
が、伊勢の境に立つ高見山が、多武峰と高き  
を競うて、負けてその頭が飛んだといふ話  
があり、更に一方が藤原鎌足を祀るといふに對  
して、これは蘇我入鹿の祭場であるかの如き  
解釋さへ起つた。その他三河の本宮山と石巻  
山、さては九州にも所々の高山に、かういふ半  
ば笑話化した傳承は數多く、本來は一時に双  
方の山を望み見る平地で、言ひ始めたこと  
であつたかも知れぬが、今は主として何れか一  
方の山の麓での傳説として行はれてゐるのみ  
である。それが各自の郷土を鎮護する名山の  
尊信と結び附いてゐたこと迄は想像し得られ  
るが、これによつて直ちに我が土地の境の山  
に、タケクラベの名を附與することは難かつ  
たらう。多くの峠路には二つの峰、若しくは  
長高き二柱の岩があつた。道路は往々にして  
迂回してこの中間を過ぎるやうに設けられて  
ゐた。これが我が國固有の守護思想に基くも  
ので、神の認諾なき者の容易にその並び立つ  
間を通り得なかつた信仰を利用したらしきこ  
とは、必ず男女を以てその二つの神を喚んで  
ゐたのを見てもわかる。それをタケクラベと  
謂ふに至つたのは、恐らく轉用であつたらう。  
即ち遠近の山々が高さを競うたといふ物語が  
普及し、一方に男女相對する峰又は大岩が、異  
郷人の接近を禁止するものだといふ信仰が、  
一旦衰へ弛んでから後の、第二の變化であつ  
たらうと思ふ。(柳田國)

たけくらべ(四十二の物争)を見よ。  
多氣競(たけくらべ) 人情本 七編 二十一卷

【作者】三草春馬【畫工】歌川國貞【時】名  
稱】靈前説と角書がある。書名は三人の娘の  
生立を描き、戀の競争の意味で丈鏡の音を借  
りたものである。【刊行】初・二・三編天保十  
年、四・五編同十三年、六・七編嘉永年間【題

抛主花登屋繁菜の義侠などが出てゐる。  
【解説】この戀の四角關係が、如何に解決する  
か、何時姉妹が名乗り合ふか、其處に興味の中  
心があり、作者の山があつたのであらうが、  
結末に至らず作者は歿した。しかし筋が可な

うと、驚嘆で人望のある龍華寺の信如を味方  
に頼んだ。一方正太と仲好の大黒屋の美登利  
は全盛の遊女を姉に持つお俠な少女で、我儘  
一杯に振舞つてゐた。華やかな祭禮の夕、美

らせである。殊に美登利の描寫は際立つてゐ  
る。彼女が性的變化の微妙な局所を、心理的  
に描破してゐる邊、さすが女性の筆である。  
また雅俗折衷の自在な名文で、吉原情調を美



來創作の筆を絶ち美術批評に従ふ。大正五年  
楠木清方・平福百穂・結城素明・松岡映丘・吉川  
靈華等と邦畫研究の團體金鈴社を起し、毎年  
一回同人の制作を展覧した。大正八年中央美  
術展覽會を創設し繼續十ヶ年に亘り、新人飛  
躍の機關として、美術運動史上の一存在とな  
つた。また大正十五年以來東京府の囑託とな  
つて府美術館の經營に參畫してゐる。新聞小  
説の外新劇の脚本として川上音二郎が上演

ゐる。傳説の或はこれを説明するのではない  
かと思ふものも、次々採集比較せられるやう  
になつた。その中でも殊に有名なる一つは富  
士の東南面に横はり伏す愛鷹山であるが、こ  
れは大昔諸越といふ國から富士と背競べをし  
ようとして、こゝまで歩んで來たのを、足柄明  
神が憎んでその頭を蹴飛ばした爲めに、根張  
りは雄大であるが、たけは至つて低いのだと、  
語り傳へてゐたさうである。九州では阿蘇の

士の山より立ちすぐれてゐたといふことが、  
古くからの語り草である。伊豆の半島の山々  
にも、やはり山の姿の美しさを比べたといふ  
神の嫉みの物語があつた。高きの争ひとして  
は、加賀の白山が富士の噂をすることを思む  
といふ話があり、越中の立山は又その白山と  
競つてゐた。東北では出羽の鳥海山が、背競  
べに負けて口惜しさの餘りに、飛んで海上に  
出て飛鳥となつたと謂ひ、津輕の岩木山も南

みたのを見ては、恐らく輾用であつたらう。  
謂ふに至つたのは、恐らく輾用であつたらう。  
即ち遠近の山々が高さを競つたといふ物語が  
普及し、一方に男女相對する峰又は大山が、異  
郷人の接近を禁止するものなどといふ信仰が、  
一旦衰へ弛んでから後の、第二の變化であつ  
たらうと思ふ。  
【柳田國】

たけくらべ「四十二の物争」を見よ。  
多氣競「人情本」七編 二十一卷

【作者】三草春馬【書名】遊園地【名  
稱】遊園地と角書がある。書名は三人の娘の  
生立を描き、戀の競争の意味で丈鏡の音を借  
りたものである。【刊行】初・三編天保十  
年、四・五編同十三年、六・七編嘉永年間【題  
材】松竹梅を名のる三人の姉妹の復讐談が  
講釋種にある。これ等を思ひ寄せたのであら  
う。その他、「東海道名所記」「北郭道引節用」  
「尤の草紙等」を引き、吉原の古風俗を描かん  
と努めてゐる。

【梗概】吉原遊廓を田舎者が、大勢でひやか  
歩き松葉屋の前に佇み、常盤木と云ふ遊女が、  
十五年前大地震に死んだと噂される新田の太  
郎助の娘お松に酷似してゐると口々に言ひ騷  
いで去つた。實際この遊女がお松であつた。  
彼女の父太郎助は大地震で、家族散り、  
なり、お松・お竹・お梅の三人姉妹は隣家の悪  
者惣太に連れられ、別れてしまひ、お松は遊女  
となり常盤木と云ひ、お竹・お梅は共に吉原藝  
者になつてゐるのだが、幼時別れた事なので  
互に顔に見覚えがなかつた。常盤木はお梅の  
情人とは知らず、富豪の若旦那勇次郎を見染  
め、自ら茶屋蓬萊屋に呼びて契を結び、自分の  
實妹と知らず、お梅がその馴染と知つて妬心  
からお梅は浮氣であると告げる。勇次郎はこ  
れを信じお梅と喧嘩をする。常盤木は思ひの  
儘に勇次郎と逢へず、お梅と勇次郎とが仲直  
りしたと聞き嫉妬に耐へず、藝者お竹を煽動  
して勇次郎を横取りせしめんとした。お竹が  
勇次郎と仲睦しく語る様子を聞き、お梅は夢  
中になつて乗り込んで行つた。三人は姉妹で  
あるとも知らず、勇次郎をめぐつて戀の争闘  
を續けてゐる。その間に太郎助は妻お作に死  
なれ後妻を連れて江戸に出て來る話、お梅の

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

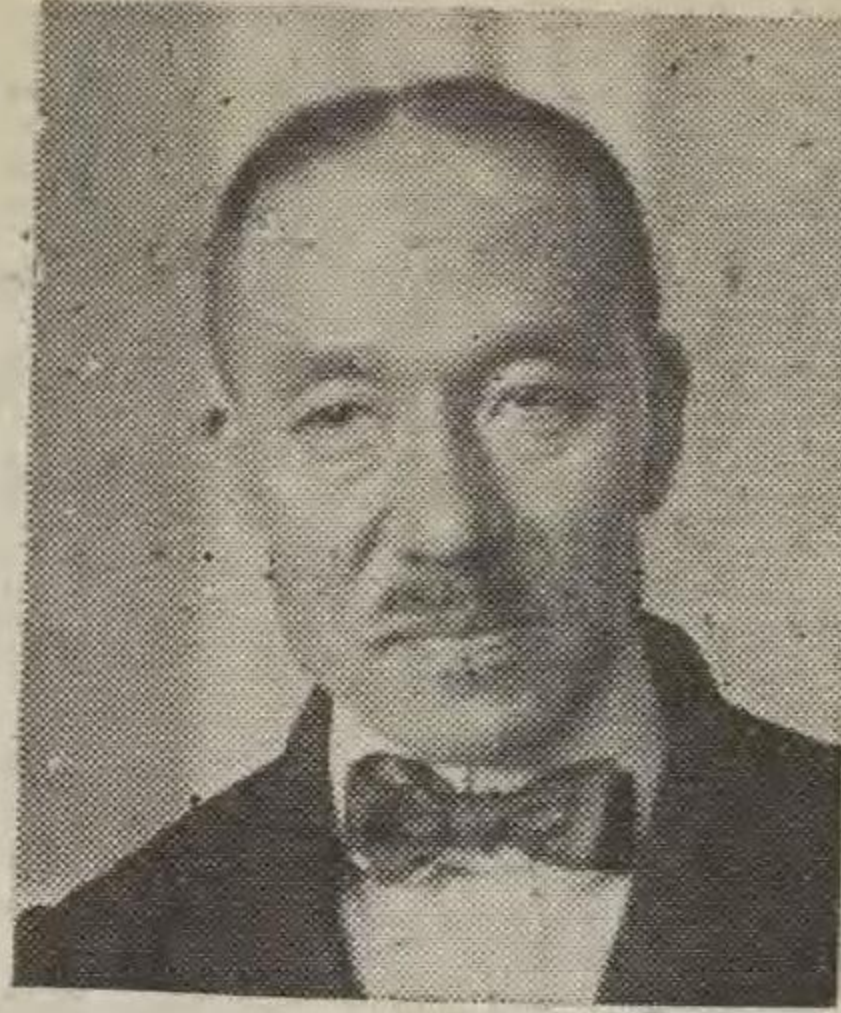
【梗概】遊廓に續く下谷大音寺界隈は、土地柄  
子供までが一體にまてゐる中に、頭の長吉  
は横町組の我鬼大將で、表町の大人びて愛敬  
ある田中屋の正太郎達と張合つてゐた。千束  
神社の夏祭を機に、長吉は相手に一泡吹かさ

たけくらべ たけごし

九五五



年頃、西園寺公望、陸奥宗光等の援助により、雑誌「世界之日本」を發行し、世界主義を鼓吹した。同誌上、社論を執筆し、殊に人物評に於て一異彩を放つたが、それ等を集めて「萍聚絮散記」と題して發行した。「世界之日本」は西園寺公の所論、陸奥宗光の隨筆などを収め、文藝趣味に富み、「芝居見たま」といふやうな形式も、この雑誌で始められたものであり、雑誌界に一異彩を放つたが、數年ならず廢刊した。三十三年、文部省勅任参事官に任ぜられ、翌年衆議院議員となつて政界に活躍した。その間、讀賣新聞を主宰したことがある(四十二年、大正四年大隈内閣時代の衆議院議員總選挙の際、前橋で落選す



又三越竹 年。大正四年大隈内閣時代の衆議院議員總選挙の際、前橋で落選す

るや、心機一轉して修史の事に従ひ、「日本經濟史」の編著に従事した。それが完成して公刊せられたのは大正九年である。全部八卷菊判五千六百頁の大冊で、經濟史として國史を見た最初の纏まつた大著である。同年、宮内省臨時帝室編修局編修官長となり、大正十二年、貴族院議員に勅選せられた。昭和元年、大阪毎日・東京日日の顧問として入社、時々隨筆の類を執筆し、昭和三年「西園寺公傳」を同紙上に掲げ、數ヶ月で完成した。

【著作】新日本史(マコウレー)○日本經濟史○西園寺公傳○南國記○支那論○三又書簡○人民讀本(惜春雜誌)○臺灣統治志(英文)○三又文集等。(日本經濟史は、昭和五年に英文に譯して刊行した)【批評】時事新報時代には、福澤

式の平易な文章も巧みであつたが、後マコウレー等の英國文章家の影響を受けて、高雅で流麗な三又一流の文體を樹立するに至つた。明治時文界の一人としては有力であり、その清新さが當時の讀者を惹きつけた。併し彼の文體は、全く彼獨自のものであつて、思想として特殊なものがなないために、時代に影響するほどのものではなかつた。

竹崎順子

傳記(著者)徳富健次郎(蘆花)【刊行】大正十二年四月、福永書店。蘆花全集第十五卷所収【内容】竹崎順子は矢島忠左衛門の三女に生れ、十六歳の時竹崎律次郎に嫁し、結婚後あらゆる辛苦を嘗めて三十八年間貞節を盡し、五十三歳にて夫律次郎に死別した。夫の死後十年間子女の教養に心を砕いたが、六十三歳の時基督教を知つて受洗し、六十四歳で熊本女學會の主任となり、六十六歳で熊本女學校の校長となり、明治三十八年三月七日、八十一歳にて死するまで、同校の校長を勤めとほした女傑である。順子の妹久子は、徳富一敬の妻で、著者の母である。久子の妹つせ子は、横井小楠の妻、つせ子の妹は、日本婦人矯風會を創設した矢島樺子である。【解説】著者が同志社在學時代、失戀の結果、死を欲して鹿兒島に走つた時、これを慰撫してその心に平和を與へたのがこの書の主人公竹崎順子であつた。故に著者は、「生みの母と共に、竹崎順子、横井つせ子を合せて、我に三人の母上あり」と云つてゐる。明治三十八年三月、順子の病むを聞き、著者は熊本に往いて最後の對面をした。その時順子より傳記の編成を依頼された。併し著者はこの餘りに清く且つ堅實なる老教育家の傳記を書くに、自己の不適當である事を思つて容易に

筆を執らなかつた。然るに順子の歿後十五年にして、著者は自己を以て基督の再現であるといふ自信を得、世界一周の旅より歸來して後、順子の墓を訪ね、その苦心經營せる女學校にて講演し、こゝに初めてその傳記に筆を染めたのである。著者は自ら「詩と豫言と審判と大觀と渾然として融け合ふ不思議な生命の書、現前にして永劫、日本の書にして正に世界の書なり」と公言せる「日本から日本へ」を書いた後、再臨の基督が第一の事業として、死者竹崎順子とその父母兄妹一族を、墓中より再生せしめたのがこの著である。著者はこの書を發行するや、順子の校長たりし女學校に對して二千部を寄附した。この書は單なる一女史の傳記でなく、明治維新の裏面史であり、日本に於ける基督教東漸史であり、肥後文明の側面史である。本書の發行するや、雜誌「開拓者」は、「徳富健次郎氏の他の一切の著述がこの世の中から全く無くなつても、この一冊さへ残ればそれで遺憾はあるまい」と評した。著者が人物史傳の著書中、最も優れた著である。(沖野)

竹崎季長繪詞

「蒙古襲來繪詞」を見よ。

竹柴其水

脚本作者【姓名】岡田氏、幼名鏡之助。一時竹柴新藏ともいふ。

【生歿】弘化四年十月、京橋區本村木町六丁目に生れ、大正十二年二月七日歿。享年七十七。【墓所】東京府下大崎町高徳院【閱歴】材木問屋の長男で、幼少から芝居を好み、先代守田勘彌を頼つて寄食し、守田座に出勤し、三代櫻田治助の門弟格として狂言作者の課程を踏み始め、鬨斗進三と稱してゐたが、明治六年四月から黙阿彌の弟子となつて竹柴進三と

呼んだ。同十七年、新當座に於て立作者に進み、同二十年、師の俳號其水を襲いだ。同二十七年、明治座成るに及んで、同座の立作者として、先代市川左團次のために續々新作を發表し、傍ら師黙阿彌歿後に於けるその遺族並びに著作脚本の保護に任じてゐたが、明治四十年頃劇場を引退し、爾後は時々新作を發表してゐた。【人物・著作】人物は極めて篤實で、芝居道の人らしくない、責任感の強い、寡黙な性質であつた。その點は師黙阿彌の一面を反映してゐたと傳へられてゐる。著作の脚本は九代市川團十郎を對象としたものもあるが、五代尾上菊五郎、先代市川左團次等を中心として執筆上演されたものが多く、全著作の數は、時代・世話浄瑠璃等にわたつて約七十種に上つてゐる。左にその主なるものと初演年月とを摘記する。

- 千石船帆影白濱(仙石騷動)明治二十一年新當座
- 那智瀧誓言文覺(文覺勸進帳)三月同座
- 神明恵和合取組(め組の喧嘩)三月同座
- 臯月晴上野朝風(上野戦争)五月同座
- 一刀流成田掛額(松田の仇討)五月同座
- 遠山櫻天保日記(遠山左衛門)一月同座
- 名高秋田義民傳(義民傳之助)一月同座
- 三人片輪(所作事)同三十一一年
- 山田長政(軍配)同三十二年
- 夢物語(高野長英)同九年
- 櫓太鼓出世取組(谷風の名譽)同三十三年
- 水澤湯鴨着唐犬(唐大權兵衛)同三十四年
- 日本晴露領雪解(近藤重藏)同三十五年
- 墨塗女(滑稽浄瑠璃)同四十年
- 享和春兩國紀聞(お妻八郎兵衛)同四十三年
- 百組出世(高の者出世)同四十四年



年 貴族院議員に勅選せられた。昭和元年、大阪毎日・東京日日の顧問として入社、時々隨筆の類を執筆し、昭和三年「西園寺公傳」を同紙上に掲げ、數ヶ月で完成した。

【著作】新日本史○マコウレリ○日本經濟史○西園寺公傳○兩國記○支那論○三又書簡○人民讀本○情春雜誌○臺灣統治志○英文○三又文集等。(日本經濟史は、昭和五年に英文に譯して刊行した)【批評】時事新報時代には、福澤

れを感撫してその心に平和を與へたのがこの書の主人公竹崎順子であつた。故に著者は、「生みの母と共に、竹崎順子、横井つせ子を合せて、我に三人の母上あり」と云つてゐる。明治三十八年三月、順子の病むを聞き、著者は熊本に往いて最後の對面をした。その時順子より傳記の編成を依頼された。併し著者はこの餘りに清く且つ堅實なる老教育家の傳記を書くに、自己の不適當である事を思つて容易に

田氏、幼名鏡之助。一時竹柴新藏ともいふ。【生歿】弘化四年十月、京橋區本村木町六丁目に生れ、大正十二年二月七日歿。享年七十七。【墓所】東京府下大崎町高徳院【閱歴】材木問屋の長男で、幼少から芝居を好み、先代守田勘彌を頼つて寄食し、守田座に出動し、三代櫻田治助の門弟格として狂言作者の課程を踏み始め、野斗進三と稱してゐたが、明治六年四月から黙阿彌の弟子となつて竹柴進三と

三人片輪(所作事)同三十二年  
山田長政(警軍部)同三十二年  
夢物語(高野長英)同三十二年  
櫓太鼓出世取組(谷風の名譽)同三十三年  
水澤湯瀧着唐犬(唐大權兵衛)同三十四年  
日本晴露雪解(近藤重藏)同三十五年  
墨塗女(滑稽浄瑠璃)同四十年  
享利春兩國紀聞(お妻八郎兵衛)同四十三年  
百組出世(高の者出世)同四十四年

右の中「文覺」は九代團十郎の演じた活歴劇の一であり、「め組」上野戦争等は五代菊五郎を中心としたもの、「松田の仇討」遠山櫻等は先代左團次の當り狂言であつた。

【作風・史的地位】作風は初期に於ては師黙阿彌の作風を完全に追つたものであつたが、明治三十年前後からは、文學者連の醸す機運に導かれてか、半ば活歴があつた新作を可なり發表したが、世に迎へられるといふところまでには至らなかつた。従つて餘り明治演劇史上に特筆すべき價値を持つてゐない。狂言作者としても三代河竹新七(別項)と共に、その殿將役を勤めてゐるのであるが、其水の歩んだ道は、半活歴式であつたところに特色があつたと云へる。過渡期の作物として見れば、或る研究の對象にもなり得るが、獨立して見る時には歌舞伎劇の上からも、新興劇の上からも、取出して論議すべき價値をあまり持つてゐない。

【参考】續々歌舞伎年代記田村成義○明治劇壇五十年史關根默庵○河竹默阿彌河竹繁俊○日本戲曲全集第三十二編

武島羽衣(たけしま) 詩人・歌人【本名】又次郎【閱歴】明治五年東京に生る。同二十九年東京帝國大學文科大學國文學科卒業、東京音楽學校教授、東京女子高等師範學校教授、御歌所寄人等に歴任した。所謂赤門系の擬古派詩人である。【著作】花紅葉(桂月・雨江と合著)(別項)○霓裳微吟(明治三十六年)○文學概論○修辭學○新撰詠歌法○霓裳歌話等。【批評】擬古派詩人としては優雅は雨江に劣り、勁拔は桂月に劣つたが、「詩神」「ぬれ燕」「魂まつ

り」小夜社等の佳篇あり、「小夜社」は獨逸の詩人ビュルゲルのレノオレの換骨奪胎で、批評家高山樗牛はこれを賞してスコットの英譯詩以上の出来榮えと云つた。が、感情も微温的で措辭の特に巧みなるものもなく、ただ佳麗の詩情に於て成功したといふにとどまり、樗牛の稱讚は過褒であつた。後、短歌に轉じたが、その方面にも著しき創意はない。併し新詩壇開拓者としての功績は認めらるべきであらう。

【参考】明治文學史 岩城準太郎○明治大正詩史 卷上 日夏耿之介

竹塚東子(たけつか) 落語家・戯作者【號】風水坊と號し、別號を素淡齋又は東紫といふ。【生歿】生歿は明かでない。文化十四五年頃歿す。【閱歴】千住在の竹塚の農夫であつたが、戯作の才があり、天明頃俳諧を法橋越谷吾山に學び、戯作は山東京傳の門人となつたらしい。狂歌にも巧であつた。落語家としても一家を成した。鶴遊亭東里はその門人である。その後、鶴遊亭・鶴聲亭を名乗る落語家も二三出るに至つた。【著作】豊のいろは(三卷)文化九年刊。同六年刊の「春慶茶番狂言」の畫と外題とを改めて再刊したものである。【日夏】

別に出雲を編いてゐたものもあつたので、竹田家としては何代目かの出雲が、竹本座の座本をつぎ(竹本座参照)、初代出雲と名乗つたのである。作者出雲はその伴で、竹本座として二代目に當る。伴は小出雲とて、共に作道に従つたが、寶曆三年七月歿した。【閱歴】父出雲が筑後を助けて座本の位置に坐り、竹本座の復活を計つた關係や、累代竹田芝居の經營や機巧の脚色に經驗を持つた事實がある上に、作者近松門左衛門が作道にかけては青年時代から親切に薫陶を垂れられた。かくして座本兼作者たるべき修養時代を

へられ、他は合作物である。主な合作者は、長谷川千四・文耕堂・三好松谷・並木千柳・吉田冠子等である。彼の單獨作は、比較的早い年代になされたが、「大内裏大友眞鳥」「三莊太夫五人娘」「蘆屋道満大内鑑」(各別項)の如きには、改作種ではあるが、彼の脚色の特徴たる舞臺を爲生かした効果が十分判斷せられる。延享から寛延に互つて、千柳・松谷との合作の下に、一代の名作が相續して現はれた。延享三年の「菅原傳授手習鑑」、同四年の「義經千本櫻」、寛延元年の「假名手本忠臣蔵」「双蝶々曲輪日記」(各別項)等がこれである。但し、「双蝶々」は操では不成功で、歌舞伎に輸入されて好評を得た。この頃、彼の作劇は最も油が乗つた時代であつて、取材の排置、一曲の整理、舞臺裝置の活用に於て、筑後時代の缺を補ひ、全く前代未聞の完成を示したと言ひ得る。また戯曲の構想法を利用して近松の作意以上に、義の精神を具體的に強調した。彼の名篇が殆ど原形に近く、今日の歌舞伎にまで傳存する所以のものは、右の如き内容と様式との、巧みなる戯曲的統整にあつたかと思はれる。彼の生涯の作中、世話物は極めて尠い。概していへば、時代物作者とすべきであらう。



竹田出雲(たけいで) 陶を垂れられた。かくして座本兼作者たるべき修養時代を

【参考】續々歌舞伎年代記田村成義○明治劇壇五十年史關根默庵○河竹默阿彌河竹繁俊○日本戲曲全集第三十二編

武島羽衣(たけしま) 詩人・歌人【本名】又次郎【閱歴】明治五年東京に生る。同二十九年東京帝國大學文科大學國文學科卒業、東京音楽學校教授、東京女子高等師範學校教授、御歌所寄人等に歴任した。所謂赤門系の擬古派詩人である。【著作】花紅葉(桂月・雨江と合著)(別項)○霓裳微吟(明治三十六年)○文學概論○修辭學○新撰詠歌法○霓裳歌話等。【批評】擬古派詩人としては優雅は雨江に劣り、勁拔は桂月に劣つたが、「詩神」「ぬれ燕」「魂まつ

【参考】明治文學史 岩城準太郎○明治大正詩史 卷上 日夏耿之介

竹塚東子(たけつか) 落語家・戯作者【號】風水坊と號し、別號を素淡齋又は東紫といふ。【生歿】生歿は明かでない。文化十四五年頃歿す。【閱歴】千住在の竹塚の農夫であつたが、戯作の才があり、天明頃俳諧を法橋越谷吾山に學び、戯作は山東京傳の門人となつたらしい。狂歌にも巧であつた。落語家としても一家を成した。鶴遊亭東里はその門人である。その後、鶴遊亭・鶴聲亭を名乗る落語家も二三出るに至つた。【著作】豊のいろは(三卷)文化九年刊。同六年刊の「春慶茶番狂言」の畫と外題とを改めて再刊したものである。【日夏】

【参考】竹田出雲の傳西澤一風(傳奇作書初編) ○歌舞伎事始(爲永一蝶) ○竹田出雲と其作品(黒木勘藏(近世演劇考)) ○竹田出雲および竹田近江(前島春三(近代國文學の研究)) ○海音出雲(守隨) ○雲浄瑠璃集解説(帝國文庫)

武田仰天(たけだてん) 小説家【本名】穎【生歿】安政元年七月生、歿年未詳【閱歴】大阪堂島中二丁目に生れ、漢籍を高木越橋に、

【参考】竹田出雲の傳西澤一風(傳奇作書初編) ○歌舞伎事始(爲永一蝶) ○竹田出雲と其作品(黒木勘藏(近世演劇考)) ○竹田出雲および竹田近江(前島春三(近代國文學の研究)) ○海音出雲(守隨) ○雲浄瑠璃集解説(帝國文庫)

武田仰天(たけだてん) 小説家【本名】穎【生歿】安政元年七月生、歿年未詳【閱歴】大阪堂島中二丁目に生れ、漢籍を高木越橋に、

たけしま たけだぎ



漢詩文を近藤南州に、南書を水原梅屋に學び、又堺の縣立河泉學校に學んだ。明治二十二年「都の花」に「三都の花」を發表して以來、渡邊霞亭(別項)と共に關西文壇の重鎮となり、大阪朝日新聞に小説を連載し、傍ら二十四年から二十五年にかけて大阪の雜誌「なにはがた」に「寒念佛」その他數篇の小説を寄せた。三十年頃、東京朝日新聞に關係し、「諏訪の都」三川越合戦「弓矢八幡」等、主として興味中心の歴史小説を連載し好評を得た。健筆にして多作なことは渡邊霞亭に譲らなかつた。その代表作には「明智光秀」「天晴才」二等有る。「高須」

武田交來(たけだ) 戯作者【本名】武田勝次(かたけ) 山内人・松阿彌【歿年】明治十五年歿。享年五十六。【閨歴】東京の人。深川に住して筆耕を業とし、明治十二三年頃合巻草双紙及び芝居筋書様の三冊合巻物を多く出してゐる。【著作】明治十三年六月十一日刊「霜夜鐘十時辻」五編十五冊は默阿彌の原作を合巻草双紙に抜装改作したものであるが、原作が有名であつたのと、一つは大蘇芳年の挿畫に表紙畫などが本書をより以上に價値づけたものらしく、當時好評を博した。同じく同年作で、相州眞土村の農民暴動事件を扱つた「冠松貞士夜暴動」二編六冊も、當時の時事問題を扱つた點で有名である。これ又芳年の挿畫、口繪、表紙繪などが特に光つてゐる。その他十四年作「倭洋羨横濱美談」三冊讀切合巻物がある。これも當時東京繪入新聞に連載された横濱居留地商館英人コレンスとその洋妾二人との三角關係を綴つた一種の勸懲小説であるが、ただ描かれた場所が新開港地であり、外人をモデルとした點が、好奇的興味を惹き、文化史的に見て多少の意義があら

う。合巻草双紙は以上の三種に過ぎないが、他は十一年から十五年頃までに、芝居草双紙三冊物約十二三篇を出してゐる。【参考】寫實主義以前の小説石川巖日本文學講座(新舊時代)三〇五〇明治文化全集時事小説篇(石川巖)

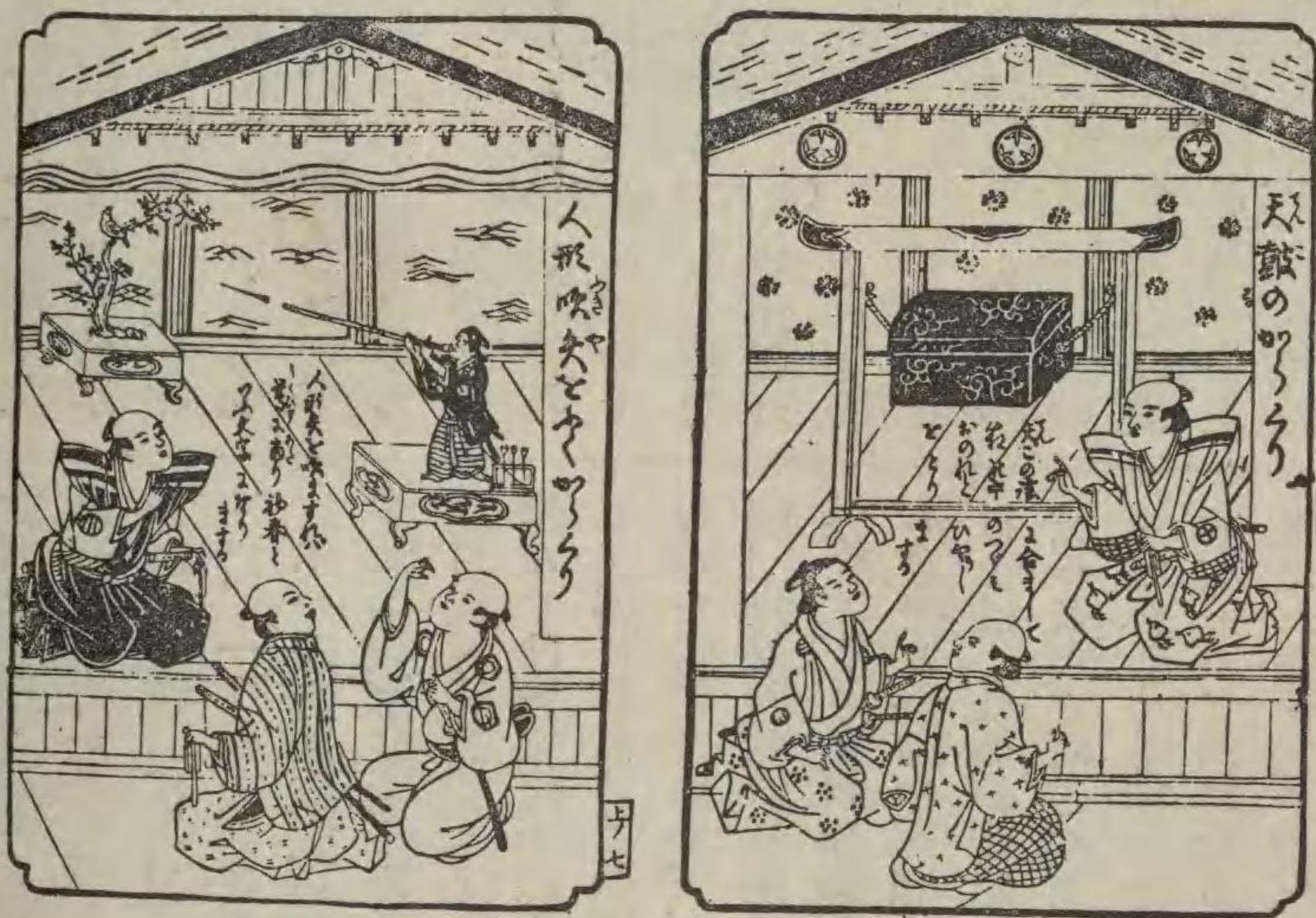
竹田治藏(たけだ) 脚本作者【姓名】本名は未詳。次藏とも書く。通稱、讃岐屋治藏【閨歴】正確な家系に就いては、所傳がない。人形遣吉田宇藏を弟に持つてゐたといふ説がある。初め竹田出雲の門に淨瑠璃の作を學んだが、當時漸く操芝居の衰へ、歌舞伎芝居の繁榮に乗じて淨瑠璃作者の歌舞伎へ轉向する者が續出したが、彼もこの趨勢に乗じたと思えて、やがて並木正三(別項)に就いて歌舞伎脚本の作に志した。但し正三との交渉は完全な師弟關係ではないらしい。併し彼の苦心は現はれて寶曆初期には既に名作者と謳はれた。主として大阪中の芝居にゐた。ただ作者生涯は短かつたらしく、寶曆年代を最盛期とした。

【作品】「清水清玄六道巡」(寶曆十二年七月、大阪中の芝居、清水清玄の書替)と「秋葉權現廻船話」(寶曆十二年十一月同座、二の替り狂言。日本左衛門)とが、彼一代に最も名を擧げた名作である。又何れも中村歌右衛門の出世藝となつた。「清玄」は、近松半二によつて更に作り替へられ、「秋葉權現」は、その儘の筋が書き替へられて後世に傳はつた。その他「銀閣寺新始」(寶曆九年同座)や、「假名草紙國性爺賞録」(寶曆十年、同座)等も右に次ぐ彼の傑作と言はれた。彼は、淨瑠璃作者としての經驗があつた爲めに、舞臺技巧には極めて優れた才を示した。歌右衛門の如き實惠方の役を爲生かすべき作家としては、最も勝れてゐた。並木正三の作と較べ

ては、自然味が遙かに濃く流れてゐる。彼は作法の態度として、第一氣轉、第二大膽、第三上根、第四記憶、第五堪忍の五條を授けられたと傳へられてゐる。【守隨】

【参考】戲財録並木五瓶(傳奇作書初編下、續編上・中西澤一風)當世芝居氣質半井金隨

竹田芝居(たけだ) 演劇【名稱】竹田近江の芝居の意である。代々座本は竹田近江を名乗つた。【沿革】大阪道頓堀立慶町太左衛門橋南詰東入ル濱側に在つた。寛文二年の創設、座本は初代竹田近江で、機巧芝居の最も古い座であつた。寛保元年には三代近江が江戸へ下り、堺町の中村勘三郎座の向ひで、同年三月から九月まで機巧並に子供芝居を興行した(我衣)。なほ、この三代近江と共に、竹田出雲(千前軒)も江戸へ下つたのである。この頃が竹田芝居の全盛時代であつた。寶曆年間には三代近江は道頓堀を資本的に席捲して竹田芝居を初めとし、出羽・中・竹本の四座本を兼攝するに至つた。然るに寶曆十一年十二月近江は忘年會に贅を盡した廉で入牢した。これは當時に於ける綱紀肅正による收賄與力同心の檢舉に連坐したもので、近江は彼等の賄金を四座經營に利用してゐたのであつた。かくて資金の道は杜絶し、一方、寶曆十三年出羽芝



竹田芝居の演劇(機巧)

居から出火し、竹田芝居も類焼の厄に遭ひ、一時竹本座で、操・機巧の合併興行をなし、後座本の居宅地へ移轉、辛くも再興したが、機巧座としては廢滅の運命を辿つた。これは一面に於て機巧そのものの持つ弱點からでもあつた。即ち機巧は珍奇を眼目とするものであるから、觀衆の眼が高くなると共に、機巧のみでは見物を引附けなくなつた。然るに一方には歌舞伎の異常な興隆を見、殊に作者に鬼才並木正三が出て、舞臺の改良、眼を驚かすものがあつた。追道上道具・廻舞臺・宙乘などの案出に對しては、到底機巧の子供騙しの舞臺では拮抗すべくもなく、且つ名優の輩出によつて全く壓倒された。そこで、竹田芝居は觀覽料を廉くし、子供芝居を演じて餘命を保つた。即ち狂言の建て方は、(一)踊り、(二)前かたり、(三)狂言、(四)大からく笑劇、(五)同上、といふ如き組方を常法としてゐた。尤もこの番組は後世の事で、第一期は機巧専門、第二期は踊り・子供芝居・からくりの三段組とし、後にはこの五段の番組を編成してゐたが、これとても操淨瑠璃と共に、益々衰へて行くばかりであつたが、明和五年三月、遂に退轉の餘儀なきに至つた。近江の退轉後は、大場

に版せられて、化装舞臺には歌舞伎の中芝居となり、天保十三年には市内劇場五座と限られた内、漸く「竹田近江」の名代のみを残した。【座本】「初代」諱は清房、阿波國美馬郡半田町に生る。江戸在住時代に子供の砂遊びを見

ては、自然味が遙かに濃く流れてゐる。彼は作法の態度として、第一氣轉、第二大膽、第三上根、第四記憶、第五堪忍の五條を授けられたと傳へられてゐる。【守隨】

【参考】戲財録並木五瓶(傳奇作書初編下、續編上・中西澤一風)當世芝居氣質半井金隨

て取て本文となしつと云つてゐる。この中、高岡にて得たりといふ古板本の正體は、今なほ不明である。次にこれ等の諸本に、内題あり、無きもあり、抄本・古板本になく、寫本に「竹」とりの翁の物語とあり、今はこれ



の時事問題を扱った點で有名である。これ又芳年の挿畫・口繪・表紙繪などが特に光つてゐる。その他十四年作「倭洋交横演美談」三冊讀切合巻物がある。これも當時東京繪入新聞に連載された横濱居留地商館英人コレンスとその洋妾二人との三角關係を綴つた一種の勸懲小説であるが、ただ描かれた場所が新開港地であり、外人をモデルとした點が、好奇的興味を惹き、文化史的に見て多少の意義があら

玄は、近松半二によつて更に作り替へられ、「秋葉權現」は、その儘の筋が書き替へられて後世に傳はつた。その他「銀閣寺新始」(寶曆九年同座)や、「假名草紙國性筆實録」(寶曆十年、同座)等も右に次ぐ彼の傑作と言はれた。彼は、淨瑠璃作者としての經驗があつた爲めに、舞臺技巧には極めて優れた才を示した。歌右衛門の如き寶座方の役を爲生かすべき作家としては、最も勝れてゐた。並木正三の作と較べ

のものとせざる(玉の小櫛)に對し、「源氏物語」中の記事を用いて、延喜以前のものとし、昌喜が「松浦宮物語」の奥書によつて、貞觀の比より古きものとせるに對し、右の奥書が疑はしいと云つてゐる。作者に就いては、源順とする説の非なることに就いて、「河海抄」(花鳥餘情)「弄花抄」の記事によりて考證した昌喜の説を引用してゐる。出處に就いては、この物語は唐土天竺の故事傳説に基けりとしたの對し、宣長の排外思想の影響を受けた大平が、他國の書に材料を取りたるにあらで、我が國の舊記に見えたる事實によりて書けるものなりと云へる説を紹介してゐる。次に凡例に於て、古典の本文に誤脱ある所以は、卷子本又は列綴、或は胡蝶裝等製本の形式にあること、この物語にも異本多ければ、校合の際、同種のもの多き方に從ひ、又たとひ同種のもの多きとも、どうかと思はるゝものは從はず、又何れも通じて誤脱なりと思はれるものは、私意によつて改めたること、私意によつて加除改變を企てたる場合には、委細にその由を斷りおきたること、但し、てにはの誤りを正したる場合は一々斷らずとて、校定上の用意について述べ、次に諸本について、「小山氏が抄、普く世に行はるゝ板本を始として、佐野春樹といふ人の寛政十二年に校合たる本、是は寫本にて橋本稻彦より御蘭常言といふ人の寫傳たる本なり。其は古き寫本を本行として、安永二年武村美伎が古寫本、林鮎主が古寫本、上田百樹が平信之と校合たる本、又活板本など悉く書入たる本なり。又健冬が越中高岡にて得たりとて賣たりけるは、甚古き板本にてよきこと多かり。又羣書類從の本、又文政四年の春難波にて得たる一寫本などを能考按定

て取て本文となしつゝと云つてゐる。この中、高岡にて得たりといふ古板本の正體は、今なほ不明である。次にこれ等の諸本に、内題あるもあり、無きもあり、抄本・古板本になく、寫本に「竹とりの翁の物語」とあり、今はこれを取つて外題とせし由を斷り、この書に引用せる諸本の性質及び略號に就いての注意を述べて、「竹取物語」の特殊なる語法、訓み方に就いて、古色あることを説き、本書の結構に就いて、全文を九段に分け、五卷に配當した次第を述べてゐる。次に竹取翁物語附録として、この物語に關係あるらしき故事にして、考證を要すべき長文のものを集めてある。次に、「今昔物語」に載たる此物語并諸書の異説」として、「今昔物語」及び「詞林採葉抄」の本文をあげ、古書を引いて考證し、最後に、「不死藥」の條に、「本草和名」第十六を引いて説明してゐる。次に本文は、先づ「竹取物語」の全文を九文段に分ち、更に小節に分け、節ごとに本文を示し、その後に二字づつ下げて解釋を試みてゐる。解釋中には諸本の考異を示し、語句の解釋は精細をきはめてゐる。廣く古書中に引例を求め、師説を紹述し、同門の朋輩の説、門弟の説等、苟くも參考すべきものはせず、ことごとく集成網羅した。眞淵・宣長・道麻呂・服・土清等の説は多くこれを擧げ、自説を附してゐる。【價值】「竹取物語」研究として、最も詳密なるものである。廣く和漢梵の古書を參考引用し、物語の典據を考證し、作者・時代を考へ、諸本を比較し、語句の解釋を精密にして、諸説を折衷調和する點に努力してをり、奇説のない代りに、甚だ正確である。併し網羅主義である所から、近世諸家



（草） 番組は後世の事で、第一期は機巧専門、第二期は踊り・子供芝居からくりの三段組とし、後にはこの五段の番組を編成してゐたが、これとても操淨瑠璃と共に、益々衰へて行くばかりであつたが、明和五年三月、遂に退轉の餘儀なきに至つた。近江の退轉後は、大場

に應せられて、化政庚辰には歌舞伎の中芝居となり、天保十三年には市内劇場五座と限られた内、漸く「竹田近江」の名代のみを残した。【座本】「初代」諱は清房、阿波國美馬郡半田町に生る。江戸在住時代に子供砂遊びを見て砂時計を工夫し、又京都にて機巧人形を製造し、雲上に調進して、萬治元年十二月、竹田出雲掾藤原清房と受領した。翌二年近江大掾に改めた。この時、或はその後、近江系と出雲系の二軒の竹田家系が成立した。そして初代近江の名で寛文二年に道頓堀に竹田芝居を願ひ出で、免されて興行した。この初代の歿したのは寶永元年七月三日、享年八十一。この間、受領の萬治元年から四十七年に及んでゐる。【二代】諱は清孝、正徳二年に受領し、享保十四年九月十九日歿した(二代と初代との歿年が、從來混淆されてゐた)。初代との血縁關係は未詳。【三代】諱は清英、元文五年十二月二十四日受領し、寛保二年九月二日に歿した。近江系の人で出雲系には關係がない。【四代】諱は清一、明和四年二月十六日に受領した。近江の受領はこの四代までである。五代以降は竹田縫殿之助を名乗つた。そして五代・六代・七代は四代目清一から父子直系相續で、八代目だけは四代清一から分派した出雲系の孫が相續してゐる。(竹本慶參照)【石割】

竹取翁物語解 (たけとりの翁の物語) 註釋書 五卷首卷一卷【著者】田中大秀【成立】小山儀の「竹取物語抄」(別項)に、自らの考證を加へて置いたものを基として、文化九年秋、一わたりの註釋を終り、翌年春、本居大平に見せ、同年秋よりなほよく考正して、十一月完成した由を首卷に自記してゐる。この年版下を書き始めたらし、文政十一年三月淨書の功を畢つた。同年十一月附の本居大平の序がある。なほ五卷の終りに、天保元年春鈴木浪の自筆にかゝる漢文の跋がある。【刊行】天保二年。明治二十八年、新に坪内雄藏の序を加へ、名古屋の書肆矢野平兵衛が再刊した。【内容】この書は、首卷に於て「竹取物語」を讀む心得、書名・時代・作者・出處・凡例などに就いて論證し、一巻より五巻までの間に、詳細なる註解を試みられてゐる。讀む心得に就いては師宣長の「玉の小櫛」の説を祖述し、物のあはれを知るべきたよりとして、この物語をよむべきであると言ひ、書名に就いては「たけとり」とよむべしといふ「抄」の入江昌喜の説を紹述し、「たけとり」と通はして用ひるも苦しからずと云ひ、著作時代に就いては、宣長が延喜以後

のものとせざる(玉の小櫛)に對し、「源氏物語」中の記事を用いて、延喜以前のものとし、昌喜が「松浦宮物語」の奥書によつて、貞觀の比より古きものとせるに對し、右の奥書が疑はしいと云つてゐる。作者に就いては、源順とする説の非なることに就いて、「河海抄」(花鳥餘情)「弄花抄」の記事によりて考證した昌喜の説を引用してゐる。出處に就いては、この物語は唐土天竺の故事傳説に基けりとしたの對し、宣長の排外思想の影響を受けた大平が、他國の書に材料を取りたるにあらで、我が國の舊記に見えたる事實によりて書けるものなりと云へる説を紹介してゐる。次に凡例に於て、古典の本文に誤脱ある所以は、卷子本又は列綴、或は胡蝶裝等製本の形式にあること、この物語にも異本多ければ、校合の際、同種のもの多き方に從ひ、又たとひ同種のもの多きとも、どうかと思はるゝものは從はず、又何れも通じて誤脱なりと思はれるものは、私意によつて改めたること、私意によつて加除改變を企てたる場合には、委細にその由を斷りおきたること、但し、てにはの誤りを正したる場合は一々斷らずとて、校定上の用意について述べ、次に諸本について、「小山氏が抄、普く世に行はるゝ板本を始として、佐野春樹といふ人の寛政十二年に校合たる本、是は寫本にて橋本稻彦より御蘭常言といふ人の寫傳たる本なり。其は古き寫本を本行として、安永二年武村美伎が古寫本、林鮎主が古寫本、上田百樹が平信之と校合たる本、又活板本など悉く書入たる本なり。又健冬が越中高岡にて得たりとて賣たりけるは、甚古き板本にてよきこと多かり。又羣書類從の本、又文政四年の春難波にて得たる一寫本などを能考按定

て取て本文となしつゝと云つてゐる。この中、高岡にて得たりといふ古板本の正體は、今なほ不明である。次にこれ等の諸本に、内題あるもあり、無きもあり、抄本・古板本になく、寫本に「竹とりの翁の物語」とあり、今はこれを取つて外題とせし由を斷り、この書に引用せる諸本の性質及び略號に就いての注意を述べて、「竹取物語」の特殊なる語法、訓み方に就いて、古色あることを説き、本書の結構に就いて、全文を九段に分け、五卷に配當した次第を述べてゐる。次に竹取翁物語附録として、この物語に關係あるらしき故事にして、考證を要すべき長文のものを集めてある。次に、「今昔物語」に載たる此物語并諸書の異説」として、「今昔物語」及び「詞林採葉抄」の本文をあげ、古書を引いて考證し、最後に、「不死藥」の條に、「本草和名」第十六を引いて説明してゐる。次に本文は、先づ「竹取物語」の全文を九文段に分ち、更に小節に分け、節ごとに本文を示し、その後に二字づつ下げて解釋を試みてゐる。解釋中には諸本の考異を示し、語句の解釋は精細をきはめてゐる。廣く古書中に引例を求め、師説を紹述し、同門の朋輩の説、門弟の説等、苟くも參考すべきものはせず、ことごとく集成網羅した。眞淵・宣長・道麻呂・服・土清等の説は多くこれを擧げ、自説を附してゐる。【價值】「竹取物語」研究として、最も詳密なるものである。廣く和漢梵の古書を參考引用し、物語の典據を考證し、作者・時代を考へ、諸本を比較し、語句の解釋を精密にして、諸説を折衷調和する點に努力してをり、奇説のない代りに、甚だ正確である。併し網羅主義である所から、近世諸家

たけとも たけとり







の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

【梗概】今は昔、竹取の翁といふものがあつた。ある日、山に行つて筒の光る竹を見出したので、それを切つて見ると、内に三寸ばかり

の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

の寫本中注意すべきは、内閣文庫・宮内省圖書寮・彰考館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學・前田侯爵家等の藏本であつて、各々相當の異同がある。就中、三手文庫藏の今井似閑本は最も異同が多い。國文大觀・日本文學全書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

たけとり



の手代義介の妹である。「十三・十四編」綾瀬家の老女瀧川の話によれば、なよ竹は侍女腹で、子の無い北の方が嫉妬の極、殺さうとするのを、貝桶に入れ、百兩と歌とを添へて捨てたとの事である。針助の留守中、女房お蓮は仁平次と密通する。劍客山中熊五郎の助太刀で女敵を討つ。山中は吉田家へ抱へられる。清川は盗賊火鼠の皮五郎を討ち、女御御祕藏の香盒、玉の枝を取りかへす。「十五・十六編」石作の皇子等の五人は、梅若丸を戀の仇と怨み、女御の香盒證議を申付ける。清川の差出す香盒を獻じて御褒美に預る。なよ竹が大内の丹後の局の部屋にゐる事を梅若丸は知る。熊五郎と故郷で契つた醫師風田朗庵の娘おせんの亡魂が、於仙に乗り移り、熊五郎方へ駆込む。朗庵は娘おせんを尋ねて上京の途中で、娘が殺害された事を知る。熊五郎を下手人と思つたが、事情を聞いて疑も晴れ、於仙を我娘として熊五郎と結婚させる。「十七・十八編」梅若丸となよ竹とは文を通はせる。丹後の局がこれを知り、梅若丸を綾瀬家へ婿入させる事に取決める。綾瀬家では竹取の翁の行方を搜索する。鎌倉で葦會所を營む浪人白野伊四郎の妻は、竹取の翁の只一人の姪である。巡禮姿で尋ねて来た竹取の翁夫婦は、多額の金を恵む。翁はなよ竹に對面する。願かなつて梅若丸は婿入をする。

【解説】古典譚案の潮流に棹し、對女性的態度から、「修紫田舎源氏」(別項)に對立し、先蹤の「松梅竹取物語」に、より多く「竹取物語」の色彩を附ける考へだつたらしい。梅若丸を帝の位置にする、悲劇的の終局をお目出度に結ぶ。その初めは趣向の自信もあり、興味もあり、梅若丸傳説なども詮議したらしい。併し高齡と十九年の歲月とは、漸次に興味を消磨して、後半は接足し接足し創作してゐるに過ぎぬ。この點は作者も自覺してゐた。各編を悉く十何段に分つたのは、「隅田春藝者容氣」(別項)を更に進めた所ぞ珍らしい。「竹取物語」より得た所は、五人の公卿、主人公、僅かな人物名、文章の極一小部分に附焼風な摸擬のあとを見るのみである。第四編以後は、殆ど「竹取物語」の色彩はなく、第十五編に於て、思ひ出した如くそれに觸れてゐる。梅若丸はやゝ武家風に取扱ひ、なよ竹は市井の小娘に等しく、公卿や皇子なども、それらしくない。大力で男まさりの女傑清川が光り、「松梅竹取物語」の今井子の延長である。説話に重複、矛盾があり、文章に誤謬があるが、七十歳からの創作であり、合卷の事であるから責むべきでもない。寧ろ古典「竹取物語」の譚案として老作者の努力を認むべきであらう。【小池】

【著者】小山篁。【名稱】「竹取物語抄」又は「竹取物語補註抄」ともいふ。【成立】上巻のはじめに、「天明癸卯秋八月望日國頼惟完書于須磨蓬廬之下」とある漢文の序があり、次に「入江まさとし」の假名の序がある。下巻の終りに、著者の母なる人の跋があり、その次に、「天明三年癸卯九月、弟翔仲驥謹識」とある漢文の跋がある。これ等によつて、この書は、儀の病中に執筆せられ、空しく遺稿となれるを、入江昌喜が取りまとめ、頭註を施し、校正を加へ、やうやく天明三年、儀の死後九年にして功を終へたことが分る。【刊行】天明四年四月【内容】先づ本文を小節に分けてかゝり、簡單なる註解をその次に加へ、頭にやゝ詳密なる考證を附してある。頭註は昌喜の説である。

下巻の終りに、「竹取物語縁起」と題して、竹取の作者、竹取の名義、たけとりとよむ事、竹の中に人ある事等について、契沖の説「萬葉集」大和物語「寶樓閣經」等を引き、「詞林採葉抄」「國名風土記」等に類似の説話のあることをのべ、「寶樓閣經」以外にも似たる事ありとて「奈女者婆經」を引き、更に「博物志」を引いてゐる。また物語の中にかぐや姫が言に、帝に仕へさせなばきえうせなんと云へることにつき、支那の類似せる故事を引き、最後に淺間大明神とかぐや姫との關係、熱田明神と白鳥、白鳥と楊貴妃との關係を、土俗民譚の方面より説明してゐる。而して昌喜は鼈頭に於て、作者が源順にあらざることを「河海抄」及び「花鳥餘情」を引いて考證し、「松浦物語」の奥に、「貞觀三年四月十八日云々」とあるよりして、物語の祖たる「竹取」は、少くとも「松浦物語」成立以前、即ち貞觀の頃より古きものなりと云ひ、タケトリ、タカトリの稱呼について、六百番歌合の記事を引證して、タカトリとよぶ方古體なりと論じ、この物語の名を一名「赫夜姫物語」ともよぶことを、源氏蓬生の巻を引いて述べ、天智天皇近江宮に崩じ給ふにあらずとなす「詞林採葉抄」の誤なることを論じ、舊本「今昔物語」卷二十八の記事を掲げ、その記事と「うづほ物語」又は「源氏物語」中、「竹取物語」と關係ある箇所を比較して、これ等が、今の「竹取物語」の本文と同じきが故に、この本が正本にて、「巡歴記」の鶯並に「風土記の説信用すべからずと論じてゐる。また「風土記」に、「馬ヲ心ニイレテ飼ハレシユエ、飼ノ國ト云ヒシヲ、カナガキニ甲斐ト書」と云ふ説を「本朝逸史」古事記等によつて考證し、例の國と書ける事なしと、「風土記」の

信ずべからざることを論證してゐる。【價值】「竹取物語」の註釋書として最初にあらはれたもので、和漢の書を引證すること、可なり詳細であるが、語句の解釋は少く、註釋書として、さしてすぐれたものではない。ただ鼈頭に加へられた昌喜の説には新説があり、考證も亦詳細に互つてゐる。

【著者小傳】著者字は伯鳳、半兵衛と稱した。儒者。國學者。浪速の人。賣藥を業とした。入江昌喜の從兄にあたる。讀書を好み、和漢の奇書を集めて一々讀破した。故事出典等多くこれを記憶し、叩けば響の應ずるが如く、時人目して奇怪としたといふ。幼時より多病。安永三年十二月二十九日歿した。年二十五。墓は、大阪谷町八丁目重願寺にある。本書及び「玉餘魚」「臆說辨」等の著がある。【池田】

【竹の木戸】たけのきの小説【作者】國木田獨歩【發表】明治四十一年一月「中央公論」【刊行】同四十二年八月、「第二獨歩集」收載。獨歩全集後編・國木田獨歩全集第三卷等所收。

【梗概】大庭といふ會社員の家は、或る郊外地であつた。その隣りに植木屋夫婦が住んでゐた。その女房はお源といつて氣丈な女であつた。大庭の家のお徳といふ女中とは喋り仲間だつた。二つの家は生籬で隔つてゐるが、植木屋には井戸がないので、大庭の家から貫ひ水をしてゐた。所がその間の生籬を切り開いて木戸をつける事を植木屋から申込んだ。そして竹の木戸をつくる事にした。女中のお徳は不服だつたが、それでもお源とはよく喋り合つてゐた。そのうち冬になつて炭が入用な時期が来た。植木屋は仕事か思ふやうに行かぬ。それに負け勝ちで、炭も十分に買へなかつた。大庭の家の軒下の佐倉炭が、お源の氣



梅若丸は婿入をする。

【解説】古典饗宴の潮流に棹し、對女性的の態度から、「修紫田舎源氏」(別項)に對立し、先蹤の「松竹取物語」に、より多く「竹取物語」の色彩を附ける考へだつたらしい。梅若丸を帝の位置にする、悲劇的の終局をお目出度に結ぶ。その初めは趣向の自信もあり、興味もあり、梅若丸傳説なども詮議したらしい。併し高

著者の母なる人の跋があり、その次に「天明三年癸卯九月、弟翔仲鳥謙識とある漢文の跋がある。これ等によつて、この書は、儀の病中に執筆せられ、空しく遺稿となれるを、入江昌喜が取りまとめ、頭註を施し、校正を加へ、やうやく天明三年、儀の死後九年にして功を終へたことが分る。【刊行】天明四年四月【内容】先づ本文を小節に分けてかゝげ、簡單なる註解をその次に加へ、頭にやゝ詳密なる考證を附してある。頭註は昌喜の説である。

を論じ、舊本「今昔物語」卷二十八の記事を掲げ、その記事と「うづぼ物語」又は「源氏物語」中、「竹取物語」と關係ある箇所を比較して、これ等が、今の「竹取物語」の本文と同じき故に、この本が正本にて、巡歴記の營姫並に「風土記の説信用すべからずと論じてある。また「風土記」に、「馬ヲ心ニイレテ飼ハレシユエ、飼ノ國ト云ヒシヲ、カナガキニ甲斐ト書」と云ふ説を「本朝逸史」(古事記)等によつて考證し、飼の國と書ける事なしと、「風土記」の

だつた。二つの家は生籬で隔つてゐたが、植木屋には井戸がないので、大庭の家から貫ひ水をしてゐた。所がその間の生籬を切り開いて木戸をつける事を植木屋から申込んだ。そして竹の木戸をつくる事にした。女中のお徳は不服だつたが、それでもお源とはよく喋り合つてゐた。そのうち冬になつて炭が入用な時期が来た。植木屋は仕事か思ふやうに行かず、それに負け勝ちで、炭も十分に買へなかつた。大庭の家の軒下の佐倉炭が、お源の氣

【批評】家の内の描寫、人物の性格の書き分けなど簡潔で明確で、たしかに傑作の一つである。二つの家の對照がまた生活相をはつきり浮ばせてゐる。生活苦といふ問題が、現實味をもつて考へさせる點まで到達してゐる。植木屋の女房の死はあまり突然で、不自然であるといふ批評が當時多かつたが、それは獨歩の從來の作を通じて、常に死が突如として來る表出の常法である。作者の晩年の作の一つである。 [吉江]

【竹の里歌】(著者)正岡子規(竹の里人)【解説】生前、明治十五年頃から自作の長短歌を盡く記入し、「竹の里歌」と題してあつたのを、歿後、門人伊藤左千夫・香取秀眞・岡麓・長塚節・藤原・安江秋水・森田義郎等が選し、長歌十五首・旋頭歌十二首・短歌五百四十四首を以て、子規遺稿第一編として、明治三十七年十一月、東京俳書堂から出版になつた。然るに、不幸にして子規自筆の「竹の里歌」は水害のために失くなつたので、古泉千樞・齋藤茂吉の二人が、その全歌集編輯を志

し、齋藤茂吉編「正岡子規遺稿」(大正十年、アルス)、齋藤茂吉・古泉千樞共編「竹の里歌全集」(十二年、アルス)がやうやく世に出た。これは俳書堂版の「竹の里歌」を増補したもので、公にされた子規の歌を大體盡くした観もある。即ち明治三十年以降、短歌千三百四十一首・長歌十六首・旋頭歌十二首である。ついで、「子規全集」(アルス)の發刊となり、その第六卷中(大正十五年四月)に、明治十五年からの作を輯めた。これは「竹の里歌全集」よりも、もつと増補したものである。ついで、子規全集刊行會編輯で、「定本子規歌集」(昭和三年、アルス)が出た。この「定本」が今のところ一番多くの歌をあつめてゐる。その他、選抄本としては、岩波文庫本「子規歌集」(同年、岩波書店)、現代短歌全集本「正岡子規集」(五年、改造社)等がある。(子規・根岸短歌會參照) [齋藤(茂)]

【竹杖爲輕】(著者)森維萬象を見よ。【竹雪】(著者)「續子物の謠曲」を見よ。【武林無想庵】(著者)小説家・翻譯家【本名】初め盤雄、後、盛一【閱歴】明治十三年二月、北海道札幌に生る。東京府立一中・第一高等學校を経て、東大文科に入り、中學以來の級友小山内薫等と共に、雑誌「七人」を出し、以後小説戯曲に筆を執つた。大正に入つて雑誌「モザイク」に據つて以來は、主として翻譯に従事し、「ドオデ」の「サフォ」、アルチバセエフの「サニン」等を上梓したが、後者は文壇に行はれて一部にサアニズムの唱道を見た。當時問題の女たりし中平文子と結婚後、渡歐して漂泊の生活を始む。大正の末年一時歸朝したが、再び佛蘭西に赴き引續き滞在中、雑誌「改造」に多くの創作を寄せた。その作品は

【批評】家の内の描寫、人物の性格の書き分けなど簡潔で明確で、たしかに傑作の一つである。二つの家の對照がまた生活相をはつきり浮ばせてゐる。生活苦といふ問題が、現實味をもつて考へさせる點まで到達してゐる。植木屋の女房の死はあまり突然で、不自然であるといふ批評が當時多かつたが、それは獨歩の從來の作を通じて、常に死が突如として來る表出の常法である。作者の晩年の作の一つである。 [吉江]

【竹の里歌】(著者)正岡子規(竹の里人)【解説】生前、明治十五年頃から自作の長短歌を盡く記入し、「竹の里歌」と題してあつたのを、歿後、門人伊藤左千夫・香取秀眞・岡麓・長塚節・藤原・安江秋水・森田義郎等が選し、長歌十五首・旋頭歌十二首・短歌五百四十四首を以て、子規遺稿第一編として、明治三十七年十一月、東京俳書堂から出版になつた。然るに、不幸にして子規自筆の「竹の里歌」は水害のために失くなつたので、古泉千樞・齋藤茂吉の二人が、その全歌集編輯を志

し、齋藤茂吉編「正岡子規遺稿」(大正十年、アルス)、齋藤茂吉・古泉千樞共編「竹の里歌全集」(十二年、アルス)がやうやく世に出た。これは俳書堂版の「竹の里歌」を増補したもので、公にされた子規の歌を大體盡くした観もある。即ち明治三十年以降、短歌千三百四十一首・長歌十六首・旋頭歌十二首である。ついで、「子規全集」(アルス)の發刊となり、その第六卷中(大正十五年四月)に、明治十五年からの作を輯めた。これは「竹の里歌全集」よりも、もつと増補したものである。ついで、子規全集刊行會編輯で、「定本子規歌集」(昭和三年、アルス)が出た。この「定本」が今のところ一番多くの歌をあつめてゐる。その他、選抄本としては、岩波文庫本「子規歌集」(同年、岩波書店)、現代短歌全集本「正岡子規集」(五年、改造社)等がある。(子規・根岸短歌會參照) [齋藤(茂)]

【竹杖爲輕】(著者)森維萬象を見よ。【竹雪】(著者)「續子物の謠曲」を見よ。【武林無想庵】(著者)小説家・翻譯家【本名】初め盤雄、後、盛一【閱歴】明治十三年二月、北海道札幌に生る。東京府立一中・第一高等學校を経て、東大文科に入り、中學以來の級友小山内薫等と共に、雑誌「七人」を出し、以後小説戯曲に筆を執つた。大正に入つて雑誌「モザイク」に據つて以來は、主として翻譯に従事し、「ドオデ」の「サフォ」、アルチバセエフの「サニン」等を上梓したが、後者は文壇に行はれて一部にサアニズムの唱道を見た。當時問題の女たりし中平文子と結婚後、渡歐して漂泊の生活を始む。大正の末年一時歸朝したが、再び佛蘭西に赴き引續き滞在中、雑誌「改造」に多くの創作を寄せた。その作品は

【批評】家の内の描寫、人物の性格の書き分けなど簡潔で明確で、たしかに傑作の一つである。二つの家の對照がまた生活相をはつきり浮ばせてゐる。生活苦といふ問題が、現實味をもつて考へさせる點まで到達してゐる。植木屋の女房の死はあまり突然で、不自然であるといふ批評が當時多かつたが、それは獨歩の從來の作を通じて、常に死が突如として來る表出の常法である。作者の晩年の作の一つである。 [吉江]

【竹の里歌】(著者)正岡子規(竹の里人)【解説】生前、明治十五年頃から自作の長短歌を盡く記入し、「竹の里歌」と題してあつたのを、歿後、門人伊藤左千夫・香取秀眞・岡麓・長塚節・藤原・安江秋水・森田義郎等が選し、長歌十五首・旋頭歌十二首・短歌五百四十四首を以て、子規遺稿第一編として、明治三十七年十一月、東京俳書堂から出版になつた。然るに、不幸にして子規自筆の「竹の里歌」は水害のために失くなつたので、古泉千樞・齋藤茂吉の二人が、その全歌集編輯を志

し、齋藤茂吉編「正岡子規遺稿」(大正十年、アルス)、齋藤茂吉・古泉千樞共編「竹の里歌全集」(十二年、アルス)がやうやく世に出た。これは俳書堂版の「竹の里歌」を増補したもので、公にされた子規の歌を大體盡くした観もある。即ち明治三十年以降、短歌千三百四十一首・長歌十六首・旋頭歌十二首である。ついで、「子規全集」(アルス)の發刊となり、その第六卷中(大正十五年四月)に、明治十五年からの作を輯めた。これは「竹の里歌全集」よりも、もつと増補したものである。ついで、子規全集刊行會編輯で、「定本子規歌集」(昭和三年、アルス)が出た。この「定本」が今のところ一番多くの歌をあつめてゐる。その他、選抄本としては、岩波文庫本「子規歌集」(同年、岩波書店)、現代短歌全集本「正岡子規集」(五年、改造社)等がある。(子規・根岸短歌會參照) [齋藤(茂)]

【竹杖爲輕】(著者)森維萬象を見よ。【竹雪】(著者)「續子物の謠曲」を見よ。【武林無想庵】(著者)小説家・翻譯家【本名】初め盤雄、後、盛一【閱歴】明治十三年二月、北海道札幌に生る。東京府立一中・第一高等學校を経て、東大文科に入り、中學以來の級友小山内薫等と共に、雑誌「七人」を出し、以後小説戯曲に筆を執つた。大正に入つて雑誌「モザイク」に據つて以來は、主として翻譯に従事し、「ドオデ」の「サフォ」、アルチバセエフの「サニン」等を上梓したが、後者は文壇に行はれて一部にサアニズムの唱道を見た。當時問題の女たりし中平文子と結婚後、渡歐して漂泊の生活を始む。大正の末年一時歸朝したが、再び佛蘭西に赴き引續き滞在中、雑誌「改造」に多くの創作を寄せた。その作品は



の後の竹本座は必ずしも好成绩を挙げ得ず、伊藤出羽の操、竹田の水機巧の大众的な興行に厭せられて經營難に陥つた。恰も元禄十六年四月、曾根崎天神の森で北新地の遊女と醬油屋の手代の相對死があり、直にこれを淨瑠璃に仕組んで翌月「曾根崎心中」(別項)を上演した。この興行が非常に成功して筑後掾は十八年間の興行の不成績による負債を清算することが出来た。續いてその後「遊女誠草」を出したが、寶永元年秋、筑後掾は長年の興行上の疲勞から閑地に就くべく座本を引退した。

〔竹田出雲の座本時代〕竹本座の座主であつた(操年代記)、當時の興行界の才物竹田出雲、外記は、筑後掾の藝を惜しんで再勤を勧め、座本を自ら引受ける事を申し出た。即ち寶永二年十月兩者の提携成り、筑後掾は再び舞臺に復活した。かくて竹本座の興行が竹田出雲の手に移つたのは、寶永二年三月興行からで(倒冠雜誌)、表面へ出雲が出て来たのは同二年十一月の顔見世興行の「用明天皇職人鑑」の時からである。近松門左衛門が作者として竹本座に抱へられ下阪したのもこの時であつた。かくて出雲が座本となつた後の竹本座は、「用明天皇職人鑑」に於て、出語り・出遣ひといふ人形舞臺の劃期的革命を遂げ(操芝居の舞臺参照)、人形の衣裳道具等次第に華美に赴きて面目一新し、舞臺上の技巧は機巧を應用し、作者近松は圓熟期に入り、人形劇新興の機運に向つた。かくて正徳四年九月竹本座は筑後掾を喪つたが、竹本政太夫が二代義太夫と改め、正徳五年十一月興行の「國姓爺合戦」(別項)の大成功はいよいよ竹本座に幸運を齎らし、元禄十六年の豊竹座(別項)の機巧による兩座の對立は、操の全盛時代を招來した。そして人

形の進歩發達は、竹本・豊竹兩演による工夫の結果と見るべく、延享年代には「淨瑠璃譜」の筆者をして「操の流行その極に達し、歌舞伎は無きが如し」と言はせた。「衰退時代」かくて竹本・豊竹兩座の對立時代は、かなり長く續いたが、竹本座は寶永三年、女形人形の名手辰松八郎兵衛を豊竹座に引抜かれ、延享四年三月には、名人吉田文三郎の父で、竹本座創立當時からの立役人形の名手竹本三郎兵衛を喪ひ、かくて竹本座に残つた唯一の人形の名手文三郎は、父の歿後漸く我意の振舞多く、寛延元年「忠臣蔵」書卸上演の際に、紋下竹本此太夫と衝突して、事毎に専横募り、内部的に破綻を生じた(吉田文三郎参照)。搦て加へて寶曆元年には作者並木宗輔(別項)歿し、續いて同六年座本竹田出雲(干前軒)も歿した。出雲の歿後は、竹本座の座本は竹田芝居の座本三代竹田近江が兼攝するに至つたが、その近江も、同十一年、豪奢を極めたといふ理由の下に入牢失脚し、竹本座も機巧の竹田芝居と共に漸く衰運に向つた(竹田芝居参照)。この間に吉田文三郎は新座本近江の怒りを買い江戸に下つた。一方當時に於ける歌舞伎の異常な興隆に厭せられ、人氣を完全に失つてしまつた。その上、二代目政太夫、竹本大和掾と相次いで歿した爲め、竹本座は明和四年十二月、遂に中絶した。跡座は歌舞伎芝居となつたが、操淨瑠璃は大阪の名物であるとして、明和六年七月・十二月と屢々再興を企てたが成らず、竹本・豊竹兩座合同を計畫したが、これも水泡に歸し、明和八年正月、近松半二の舞臺本位の作「妹春山婦女庭訓」(別項)を上演し、江戸より文吾の二代吉田文三郎を迎へ、座本は竹田新松で蓋を開け、四五年来の不入を一時に返返へ

したが、これを最後の興行として竹本座の實質は潰滅した。初代義太夫が櫓を揚げて以來實に八十七年に及んだ。尤も竹本座は流祖の名に因んで「筑後芝居」と呼ばれてゐたが、寶曆九年に、「大西芝居」と改めてゐるから(大歌舞伎外題年鑑)、文三郎の退座と共に、竹本座は事實上、退轉したものと見てよい(竹本筑後掾、竹田芝居参照)。

竹本攝津大掾

〔姓名〕二見金助。幼名吉太郎。〔藝名〕竹本南部太夫。二代越路太夫。〔生歿〕天保七年三月十五日、大阪順慶町三丁目塗物問屋伊勢屋に生れ、大正六年十月九日歿す。享年八十二。〔法名〕春曉院殿越峰攝翁居士。〔系統〕竹本筑後の弟子、大和掾の系統に、竹本春太夫がある。五代竹本春太夫が、三代野澤吉兵衛を伴うて弘化元年江戸に下つて名を成した。この二人に育てられたのが、後の攝津大掾の



竹本攝津大掾

二代越路太夫である。五代春太夫は、久しく江戸に修業したから、江戸肥前の餘風は豊竹脈を引く事及び文樂座の櫓下は、一時春太夫系で占めたものが、津太夫又は綱太夫系に移つたといふことをこゝに見通してはならぬ。〔閨歴〕父は森七郎、母は故あつて森家から離別されたので、母と共にその實家に歸つた。後

釣鐘町上の町大工大和屋事二見伊八に貫はれた。養父伊八は素人淨瑠璃の好者であつた所から、十一歳の頃から三味線を學び初め、二十歳で養父の許しを得て藝人として起つ事に決心し、三代野澤吉兵衛の門へ入つた。野澤吉兵衛は初代竹本越路太夫の子である。その頃の吉兵衛は自ら一座を組織して地方興行を企ててゐたので、その高弟五代春太夫の門に入られ、竹本南部太夫と名乗つた。吉兵衛は萬延元年南部太夫が二十五歳の時、彼を眞打にして江戸に下り、各所の寄席を打つた。この時吉兵衛の父越路太夫の名を嗣いで、二代越路太夫と改名したが、攝津一代の修業時代で、吉兵衛も亦克く導いた。文久二年七月吉兵衛は江戸で歿したので、大阪に歸り、慶應元年三月稻荷文樂軒芝居へ春太夫と共に出勤した。これが文樂座(別項)と結んだ最初である。この時各太夫に缺勤多く、彼が代役して好評であつた。初代豊竹古頼太夫が唯一の競争者であつたが、明治十一年二月二十四日暗殺された。一方世間は王政復古の大變動の際に九州の旅へ出た。文樂座も不運が續いた。かくて明治十六年四月、越路太夫は名實共に文樂座の櫓下となつた。そして文樂座が御靈社内へ新築移轉したのが同十七年九月。越路は全盛期を續けた末、同三十五年九月十日、豫ねて龍遇を辱うしてゐた小松宮殿下から「攝津大掾」の名を賜つた。大正二年四月、「種昔噺」徳太夫住家を語つて引退し、靜かに餘生を送つた。〔藝風〕ほぼ五代春太夫と一致した語り口で、「艶物」に得意であつた。「先代萩」の御殿、「中將姫」の雪責、「廿四孝」の十種香、「朝顔」の島田宿、「合邦辻」の合邦住家等が最も得意で、度々繰返した。併し吉田屋の如

明治三十五年一月に僅かに一度語つたのみだが絶妙の評がある。恐らく三代長門が得意の語り物であり、團平の三味線でも有名な「志度寺」、或は五代春太夫が皮肉物とした「帯屋」の如きは、彼の不得意とする所であつた。舞臺の豆所は、この志度寺の皮肉物

を五郎兵衛に傳へ、翻案して御西と號し、餘生を淨瑠璃で送つたが、今播磨と呼ばれた。五郎兵衛は二十三歳の頃、理兵衛が道頓堀で新作「上東門院」を語つた時、そのワキを語つた。これが彼の初舞臺である。後延寶の頃

治加賀掾が、大阪に下つて京四郎芝居で西舞作の「曆」(別項)を提げて義太夫に挑戦したが、結局加賀掾の失敗が(竹本座参照)、却つて義太夫の人氣を煽つた結果になつた。こゝに於て彼は、新進作家近松門左衛門に新作を乞ひ、

で興行も順調に進み(竹本座参照)、筑後は専ら藝道に精進したが、正徳四年八月、「歌加留多」を最後の舞臺として世を去つた。〔藝風〕五郎兵衛時代は、野良聲の大音であつたらしい。「西行物語」の夜盜の修羅を語つた



人形の衣裳道具等次第に華美に赴きて面目一新し、舞臺上の技巧は機巧を應用し、作者近松は圓熟期に入り、人形劇新興の機運に向つた。かくて正徳四年九月竹本座は筑後掾を喪つたが、竹本政太夫が二代義太夫と改め、正徳五年十一月興行の「國姓爺合戦(別項)」の大成功はいよいよ竹本座に幸運を齎らし、元祿十六年の豊竹座(別項)の播磨げによる兩座の對立は、操の全盛時代を招來した。そして人

その上二代目政太夫竹本大和掾と相次いで歿した爲め、竹本座は明和四年十二月、遂に中絶した。跡座は歌舞伎芝居となつたが、操淨瑠璃は大阪の名物であるとして、明和六年七月、十二月と屢々再興を企てたが成らず、竹本、豊竹兩座合同を計畫したが、これも水泡に歸し、明和八年正月、近松半二の舞臺本位の作「妹春山婦女庭訓(別項)」を上演し、江戸より文吾の二代吉田文三郎を迎へ、座本は竹田新松で蓋を開け、四五年來の不入を一時に返返へ

二代越路太夫である。五代春太夫は、久しく江戸に修業したから、江戸肥前の餘風は豊竹脈を引く事及び文樂座の播下は、一時春太夫系で占めたものが、津太夫又は綱太夫系に移つたといふことをこゝに見通してはならぬ。【閱歴】父は森七郎、母は故あつて森家から離別されたので、母と共にその實家に歸つた。後

へ新築移轉したのが同十七年九月。越路は全盛期を續けた末、同三十五年九月十日、豫ねて龍遇を辱うしてゐた小松宮殿下から「播津大掾」の名を賜つた。大正二年四月、「播磨新徳太夫住家を語つて引退し、靜かに餘生を送つた。【藝風】ほぼ五代春太夫と一致した語り口で、「艶物」に得意であつた。「先代萩」の御殿、「中將姫」の雪貴、「十四孝」の十種香、「朝顔」の島田宿、「合邦社」の合邦住家等が最も得意で、度々繰返した。併し「吉田屋」の如

明治三十五年一月に僅かに一度語つたのだが絶妙の評がある。恐らく三代長門が得意の語り物であり、團平の三味線でも有名な「志度寺」、或は五代春太夫が皮肉物とした「帯屋」の如きは、彼の不得意とする所であつたらう。攝津の短所はこの悲壯淋漓な語り物にあつた。壯大味をその最も得意とした三味線の豊澤團平と攝津との分離の根柢は、内面的にはこゝに原因があつた。【門系】越路の高弟は三代竹本越路太夫である。本名は貴田常次郎、泉州堺の人。大正十一年二月、大文字屋を限り病氣のため休座、遂に起らず、同十三年三月十八日、六十歳で歿した。これで文樂座の播下に春太夫系が絶滅した。【石割】

五郎兵衛に傳へ、制して作西と號し、餘生を淨瑠璃で送つたが、今播磨と呼ばれた。五郎兵衛は二十三歳の頃、理兵衛が道頓堀で新作「上東門院」を語つた時、そのワキを語つた。これが彼の初舞臺である。後延寶の頃大阪虎屋喜太夫芝居を勤めた。その後上京して延寶五年正月宇治嘉太夫芝居で「西行物語」を語り、始めて世間から認められた。これに力を得て、清水理太夫と名乗り、同年十二月二十六歳、京四條河原に櫓をあげ、その後竹本義太夫と改め、再び興行したが、成功しなかつた。「神武天皇」「松浦五郎」などがこの時上演された。この頃、宇治加賀掾(別項)から離れた興行師の竹屋庄兵衛は、義太夫の藝に望みを馳し、一座を組織して西國筋へ旅興行に出た。安藝宮島の市の季節を當込んだ興行を打止めに歸阪し、道頓堀戎橋南詰に操の櫓を揚げた。これが竹本座である。この時期を貞享二年二月、義太夫三十五歳の時とするのが通説であつたが、義太夫が櫓揚第二次興行の「藍染川」や、六回目の興行の「賢女手習鑑」及びこれと競演した西鶴の「曆」等の正本の刊記によつて、貞享元年二月説もある。かくて義太夫は、宇治加賀掾の正本「世繼曾我」「藍染川」「以呂波物語」「心五成魂」「賢女手習鑑」新曆一などを矢継早に上演した。そして彼の櫓揚と同時に播磨の弟子で、盲人の法師で歌三味線を弾いてゐた尾崎權右衛門が、竹澤權右衛門と改名して、義太夫節(別項)の三味線の始祖となつた。而して「世繼曾我」が義太夫節樹立の第一歩であつた。櫓揚の翌年京の宇

治加賀掾が、大阪に下つて京四條芝居で西鶴の「曆(別項)」を掲げて義太夫に挑戦したが、結局加賀掾の失敗が(竹本座参照)、却つて義太夫の人氣を煽つた結果になつた。こゝに於て彼は、新進作家近松門左衛門に新作を乞ひ、その作「出世景世(別項)」を以てその前途を祝福された。元祿十四年五月受領して竹本筑後掾藤原博教と稱し、受領祝ひには「蟬丸(別項)」が上演された。時に五十一歳、名實共に上方淨瑠璃の覇者となつた。併し興行的には必ずしも成功でなく、經營困難に陥り、元祿十六年

て興行も順調に進み(竹本座参照)、筑後は専ら藝道に精進したが、正徳四年八月、「蟬丸」を喜取後の舞臺として世を去つた。【藝風】五郎兵衛時代は、野良聲の大音であつたらしい。「西行物語」の夜盜の修羅を語つた時のことに就いて、「元來大音にて甲乙ともに揃ひ、組板に釘かすがひを打つたる如く、何程の大入にても届かぬといふ事なし。字どめ字頭の文字消えず、文のあやよく聞えければ、見物悦ぶ事限りなし(操年代記)」と傳へられてゐる。併し理太夫と名乗つた當時の不成績を見ると藝もいまだ若かつたものらしい。義太夫時代の彼は、練磨に枕を碎き、自信もつき、「世繼曾我」は甚だ好評であつた。「聲曲類纂」に「播磨が流は地節長うして音を表とし、節を裏にこめて語り、又京都の宇治嘉太夫(加賀掾)が流は地節短うして音を裏に隠し、節を細かに語り、兩流いまだ節章句全からず、いでや播磨の長きを縮め、宇治の短きを伸ばし、音の表裏を備へ、節の長短を交へて、序破急を定め一流を立てんと日夜に工夫をこらし、終に自ら得る所有りて語り出しけるに世舉つて賞美しける」とあるのは、創始期の義太夫節の要を盡したものである。義太夫が「當流」と言ひ、當時の民心に共鳴を見たのは、在來の古淨瑠璃その他の曲節を持つ音の總てを集大成した點にある。即ち集大成であると共に、當流の新節であつたところに、義太夫節の新興藝術としての創作的價值と、民衆的である一面とを併有してゐる。古きを温ねて新しきをも捨てず、囚はれざる自由にして自然なる民衆の聲であつたところに、當時の民衆の支持を得た。筑後掾が民衆詩人と呼ばれる所以は、この點に存し、新興藝術としての義太夫

### 竹本筑後掾

【本名】五郎兵衛【藝名】清水理太夫、竹本義太夫【生歿】慶安四年大阪東郊天王寺村南堀越の農家に生れ、正徳四年(三三七)九月十日大阪千日前法善寺東門東入ルの自宅に歿す。享年六十四。【法名】釋道喜【墓所】天王寺南、土塔山起願寺【閱歴】五郎兵衛は生來美音で、當時流行の淨瑠璃を好み、聲柄大音で爽かに、甲乙も備はつてゐたといふ。初め清水理兵衛に就いて修業した。理兵衛は安居天神の南隣り、逢坂の清水を取込んだ天神山にあつた。天王寺八軒の内と言はれた料亭徳屋の主人で、當時、大阪を風靡してゐた井上播磨掾の弟子であり、又從弟の間柄であつたとも傳へる。理兵衛は勤められるまゝに芝居へ出ると、「清水々々」として唯されたので、藝名を清水理兵衛と名乗つた。五郎兵衛はこの理兵衛の淨瑠璃を聞き覚え、遂に入門したのであつた。貞享二年播磨の歿後は、その口傳與義

### 竹本頼母

【本名】五郎兵衛【藝名】清水理太夫、竹本義太夫【生歿】慶安四年大阪東郊天王寺村南堀越の農家に生れ、正徳四年(三三七)九月十日大阪千日前法善寺東門東入ルの自宅に歿す。享年六十四。【法名】釋道喜【墓所】天王寺南、土塔山起願寺【閱歴】五郎兵衛は生來美音で、當時流行の淨瑠璃を好み、聲柄大音で爽かに、甲乙も備はつてゐたといふ。初め清水理兵衛に就いて修業した。理兵衛は安居天神の南隣り、逢坂の清水を取込んだ天神山にあつた。天王寺八軒の内と言はれた料亭徳屋の主人で、當時、大阪を風靡してゐた井上播磨掾の弟子であり、又從弟の間柄であつたとも傳へる。理兵衛は勤められるまゝに芝居へ出ると、「清水々々」として唯されたので、藝名を清水理兵衛と名乗つた。五郎兵衛はこの理兵衛の淨瑠璃を聞き覚え、遂に入門したのであつた。貞享二年播磨の歿後は、その口傳與義



(藏氏吟蓬谷木) 掾後筑本竹

五月、「曾根崎心中(別項)」の大成功によつて、過去十八年間の損失を漸く回復したのを機會に、翌寶永元年秋座本を引退して、念佛三昧の生活に入つた。蓋し興行的に恵まれなかつたので、寂寞の感を深くした爲めであらう。時に彼五十四歳。翌二年、竹田出雲(外記)がこの竹本座の状態を見て、筑後の藝を惜しみ、座本を引受けたので、筑後掾は座本に抱へられた形式で再び竹本座に現はれた。近松が作者として竹本座に抱へられたのもこの時である。かくて竹本座は主として出雲の力によつ

たけもと

たけもと

たけもと



節の眞生命も亦こゝにある。従つて彼の樂壇に於ける功績は、その一代に近松の作約百篇、その他の新作凡そ四十篇を作曲上演したといふその事實よりも、寧ろその美音に豊かな藝術を盛つた元祿期の代表的な民衆詩人であつたといふ點に認めらるべきであらう。「鸚鵡が袖」(別項)の序は、彼の藝術觀を知るに重要な文獻である。【門系】筑後後後の後継者では、二代義太夫の竹本政太夫(竹本播磨少孫參照)を中心として遺弟竹本頼母・竹本喜内・内匠理太夫・竹本文太夫などが竹本座の本壘を守つて、義太夫節を大成した。以上のうち、竹本頼母は、古くからの高弟で、新町西口に住まつてゐて、油屋渡世であつたが、生來美聲の上、その語り口華美で、座敷をも勤めた。筑後後後は、よく後進政太夫を助けた。殊に聲音に缺けてゐた政太夫に取つては、頼母の助力は缺くべからざるものであつた。(竹本座・義太夫節參照)

**竹本長門太夫(三代)** たけもと ながと 淨瑠璃太夫

【本名】佐久間傳次郎 【別名】松長軒(作者名)。初め、藝名を竹本實太夫といつた。【生歿】寛政十二年九月二十一日に生れ、元治元年(二五二四)十月十九日歿す。享年六十五。【法名】長秀院仁融義傳禪家門【系統】竹本筑後後後の門葉で榮えた竹本播磨少孫(別項)系統の外に竹本大和掾系統がある。大和掾の門から長門太夫系・彌太夫系・春太夫系・咲太夫系などが出て大名手を生んだ。初代長門太夫は寛延元年の吉田文三郎の忠臣蔵騒動の折(吉田文三郎參照)、豊竹座から竹本座へ移つた名手である。而してこの三代は天才といはれた名人である。四代長門は文樂座の櫓下太夫であつたが、故實考證を好み、三代竹本

筆太夫の「淨るり大系圖」三冊二十二卷(天保十三年十月刊行)を増補して著はした。【閱歴】大阪島の内宗右衛門町、更紗屋佐久間傳兵衛の子。後、父傳兵衛が天王寺河堀口なる杜若の名所若松屋を買つて料亭を營んでゐた縁故から、長門も後に河堀口の廣大な座敷と庭園を持つて住んでゐた。故に仲間では、「河堀口の太夫」と稱し、附近ではこの邸を「太夫のお城」と呼んでゐた。彼は、初めは慰みに淨るりを語つてゐたが、漸く本職たらんとして修行し、文政五年二十三歳で、淡路小林六太夫座の四枚目となり、「薄雲」の鍛冶屋を語つて出藍の譽あり、翌年四代染太夫に入門して、竹本實太夫を名乗つてからも、屢々名聲を揚げ、遂に認められて竹本長門太夫を名乗り、義太夫以來の大立物となつた。武道によろしく、チャリによく、艶物によく、廣く而も深い藝術を持つてゐた。されば天保の改革以來、大打撃を蒙つた人形淨瑠璃界を、衰弊の極から救ひ、明治期の更生に導いたのは、全く三代長門の大きな藝と、不撓不屈の精進の力によつてである。故に彼の周圍後輩には七代目咲太夫、五代湊太夫、四代長門太夫、初代長尾太夫、初代古軼太夫、六代目綱太夫、四代目住太夫等の直系の名人上手を數へることが出来る。又人形としては初代吉田玉造を淡路路から起用し、三味線には二代豊澤團平(別項)を抜擢したのも長門である。眞に彼は人形淨瑠璃中興の祖といふべきであつた。嘉永五年に道頓堀竹田芝居で、竹本多満太夫と合作の「花雲佐倉囃」宗五郎住家の段を自作自演して大當りを取つた。元治元年八月稻荷東小屋で興行中、病を得て終に斃れた。天保八年、文樂座へ突如説經講語座なる者が現はれて、恐喝し

た事件も、彼はよくこれと戦つて、勝訴を得た如き功勞者であるが、その語るところの古名作に自由に入詞を施したことは、非難されるべきである。【石割】

**竹本播磨少孫** たけもと せうそん 淨瑠璃太夫

【姓名】水原氏、通稱中紅屋長右衛門。幼名長四郎 【號】文正翁 【藝名】初め若竹政太夫・二代竹本義太夫 【生歿】元祿四年大阪島の内三津寺町に生れ、延享元年(二四〇四)七月二十五日歿す。享年五十四 【法名】不開院乾外孤雲居士 【墓所】天王寺六萬體町天瑞寺 【閱歴】中紅屋は資産家であつたが、長四郎は、前髪立の頃から稀に見る淨瑠璃の巧者で、勤められて竹本筑後後後(別項)に入門、技の進むと共に芝居出勤を願つたが、許されぬので、西澤一風を仲介として豊竹座(別項)が京興行の寶永七年、始めて若竹政太夫と名乗つて豊竹座の芝居を勤めた。豊竹座が京から歸阪後は、曾根崎芝居などで舞臺の修業を積んだ。その工夫鍛錬を聴いた筑後は、正徳二年、丁度三年目に手許に呼戻し、同三月竹本座の「丹波與作」道中双六の段を、和歌竹政太夫で語らせた。正徳四年、筑後の歿後、座本の竹田出雲と作者の近松門左衛門は、櫓下太夫として、筑後生前の意を忖度し、政太夫を推した。同年十月筑後の跡を嗣ぎ、竹本政太夫と改姓し、「嵯峨天皇甘露雨」を上演した。頼母・理太夫以下よく後進の政太夫を助けた竹本座參照。翌正徳五年十一月「國姓爺合戦」(別項)上演には、三段目獅子城を政太夫、四段目九仙山景事を頼母が勤め、古今の當りをとつて竹本座の經濟も持直され政太夫の人氣も高まつた。彼は音聲は非力ではあつたが、淨瑠璃は聲によらず、腹による事を案じ、加ふるに「東

風」の華やかなツボに工夫があり、美聲の竹本頼母の助力の功、與つて筑後の創始した義太夫節をこゝに大成したので、彼の史的地位は牢乎たるものがある。近松晩年の圓熟した名作、殊に世話物の多くは、政太夫によつて曲中の人情・情景を専ら描出する事に成功した。享保十九年二月一日、推されて二代竹本義太夫を嗣いだ。翌二十年十一月、受領して竹本上總少孫藤原喜教と稱した。受領祝の出語り「天神記冥加松」で、この時、芝居表へ祝進物を飾ることが初まつた。元文二年正月二十八日、「御所櫻堀川夜討」の時、再び竹本播磨少孫と受領、「冥加松」を改めて、「菅承相冥加松梅」を祝に語つた。この床本は自書草で、播磨少孫の嗣子中紅屋長右衛門喜治から、播磨少孫七回忌の寛延三年に、二代政太夫に譲られて今日に傳はつてゐる。延享元年三月、「兒源氏道中軍記」興行中、病氣にて休場、遂に歿した。【人物・藝風】天王寺納骨堂なる穂積以貫撰する「播磨少孫淨瑠璃」に、業伍扮戲、而躬不屑與齒、踴々涼々、木訥自守、剪徹尾幅不事粧飾、相其貌則處々然野人、蓋天賦之所使然、可以想見其爲人也」と、よく彼の風手を盡してゐる。播磨が生前門弟順四軒に口授したといふ「音曲口傳書」(別項)に、わが音に應じて語る事を修行せよと述べてゐる。

**田澤稻舟** たざわ いなふね 小説家

【本名】錦子 【生歿】明治十一年に生れ、同二十九年に歿す。今寫本で傳はつてゐる。又門人頼々亭音近(錦木周太)が師の號を襲いで、二世夷振亭月丸となつた。【野崎】

初代は播磨西成郡傳法村の産。通稱傳法屋。七で、「傳法屋風」といふ一流を残した名人である。この初代から染太夫系九代までと竹本組太夫五代まで、及び竹本綱太夫七代までを出した。(攝津大掾參照) 【石割】

五目段「ふみゆるまの段」(十六)曾我五人兄弟「とせう」矢立の形、「十七」天智天皇「三」段目三社のたくせん、「十八」以呂波物語「いろは」の前道行、「十九」世繼曾我「ふみかりせいぞろへ」、「二十」同三段目「とせう」十はん切、「廿一」同五段目「ふらうらうのまひ」、「廿二」盛久「へはん

遺稿に「田毎の月」一冊があつたが刊行するに至らず、今寫本で傳はつてゐる。又門人頼々亭音近(錦木周太)が師の號を襲いで、二世夷振亭月丸となつた。【野崎】

るもある。卷末に木綿について記した漢文の一篇がある。金石・草木・禽獸・虫魚・服器などの漢名をあつめて漢詩文を作るに資したもので、必ずしも通俗を目的としたものではないやうである。【龜田】



竹本筑後後援の門葉で榮えた竹本播磨少掾(別項)系統の外に竹本大和掾系統がある。大和掾の門から長門太夫系・彌太夫系・春太夫系・咲太夫系などが出て大名手を生んだ。初代長門太夫は寛延元年の吉田文三郎の忠臣蔵騒動の折(吉田文三郎参照)、豊竹座から竹本座へ移つた名手である。而してこの三代は天才といはれた名人である。四代長門は文樂座の槽下太夫ではあつたが、故實考證を好み、三代竹本

來、又人形としては初代吉田玉造を淡路から起用し、三味線には二代豊澤團平(別項)を抜擢したのも長門である。眞に彼は人形淨瑠璃中興の祖といふべきであつた。嘉永五年に道頓堀竹田芝居で、竹本多満太夫と合作の「花雲佐倉曙」宗五郎住家の段を自作自演して大當りを取つた。元治元年八月稻荷東小屋で興行中、病を得て終に斃れた。天保八年、文樂座へ突如説話語座なる者が現はれて、恐喝し

た。同年十月筑後の跡を嗣ぎ、竹本政太夫と改姓し、「嵯峨天皇甘露雨」を上演した。頼母・理太夫以下よく後進の政太夫を助けた(竹本座参照)。翌正徳五年十一月「國姓爺合戦(別項)」上演には、三段目獅子城を政太夫、四段目九仙山景事を頼母が勤め、古今の當りをもつて竹本座の經濟も直され政太夫の人氣も高まつた。彼は音聲は非力ではあつたが、淨瑠璃は聲によらず、腹による事を案じ、加ふるに「東

て語る事を修行せよと述べてゐる。【門系】「二代」播磨少掾晩年の弟子。雜喉場の産として雜喉場重兵衛とも呼ばれ、後、大阪新町西口にゐたので「西口の政太夫」とも呼ばれた。「三代」天性の上手と言はれた名人で、通稱播磨屋利兵衛、鹽町筋元勘四郎町にゐたので「鹽町の政太夫」と稱された。文化年中門人氏太夫に四代政太夫を譲つた。なほ播磨少掾の門葉で、別に竹本築太夫の系統がある。

初代は播磨西成傳法村の産、通稱傳法屋七で、「傳法屋風」といふ一流を残した名人である。この初代から築太夫系九代までと竹本組太夫五代まで、及び竹本綱太夫七代までを出した。(攝津大掾参照) 【石割】

五「同段」へみちの段、「十六」曾我五人兄弟「とせう」失立の段、「十七」天智天皇「三」段目三社のたくせん、「十八」以呂波物語「いろは」の前道行、「十九」世繼曾我「へみちりせいでろへ」、「二十」同三段目「へとせう」十はん切、「廿一」同五段目「へふりうのまひ」、「廿二」盛久「へはん」じ大けいづ、「廿三」悦賀樂平太「へ大名の役目づくし」、「廿四」虎が石三段目「へとおもひぶみ」、「廿五」根元曾我「へ兄弟のは、みちり行、「廿六」薩摩守忠慶「へさくの前みち行、「廿七」大曾我「へおにわうどう三郎みち行、「廿八」一心五戒魂「へもんがく上人ぢやうまひ。

遺稿に「田毎の月」一冊があつたが刊行するに至らず、今寫本で傳はつてゐる。又門人類々亭音近(錦木周太)が師の號を襲いで、二世夷振亭月丸となつた。(野崎) 【田澤稻舟】小説家【本名】錦子【生歿】明治十一年に生れ、同二十九年九月歿す。享年十九【閱歴】稻舟は山形縣鶴岡の醫師田澤清の女。文學修業のため上京、縁あつて山田美妙の妻となつた。彼女はその當時の新しい女といふべき型を備へ、殊に感情が強く、神經質であつた。些細の事から離別となり、淋しい思ひを抱いて歸郷し、催眠劑を服用のため十九歳を一期として世を去つた。死因につき種々の噂を生み、美妙の冷酷を憤つて服毒自殺したとも云はれるが、石橋

るもある。卷末に本編について記した漢文の一篇がある。金石・草木・禽獸・虫魚・服器などの漢名をあつめて漢詩文を作るに資したもので、必ずしも通俗を目的としたものではないやうである。 【田馬皇女】歌人【生歿】生年未詳。和銅元年(三六八)六月薨す(日本書紀)。「御墓」大和國城上郡の吉隱の猪養の岡(萬葉集卷二挽歌に據る)。「系圖」天武天皇の皇女、御母は水上娘(藤原鎌足の女)。「閱歴」經歷は殆ど知れない。唯一の資料は、「萬葉集」卷二相關部にある三首の皇女の歌の題詞で、これを寄せ集めて見ることによつて、青年時代の皇女の姿の一部を知り得るのみである。三つの題詞とは、「但馬皇女、在高市皇子宮時、思、穂積皇子、御歌一首、秋の田の云々」、「勅穂積皇子、遣、近江、志賀、山寺、時、但馬皇女御作歌一首、後れぬて云々、但馬皇女、在高市、皇子宮時、竊接、穂積皇子、事既形、而御作歌一首、人言を云々」。以上の三つは、事柄の實際の順から云ふと、第一、第三、第二の順に見るべきで、穂積皇子と密かに婚されたことが發覺したから、皇子に勅命が下つて近江へうつされたものである。何故この二人の結婚が裂かれたかは明かでない。二人は異母兄弟である故、當時としては近親結婚として引き分けねばならなかつた、とは考へられな

竹本祕傳丸【初稿】義太夫節段物集枕本一冊【解説】最初に「竹本祕傳丸淨瑠璃口傳書」と題して、初段之事 凡戀、二段目の事 凡しゆら、三段目の事 凡秋歎、四段目の事 凡道行、五段目の事 凡問答、はまる拍子逢拍子と云事 素淨るりの事、四歩六歩至極の祕傳、地詞ふしの事、節章祕傳書の小見出しを置きて説明し、末に「口傳あらまし如此 竹本氏」と署し、次に「淨るり作者」として「京近松門左衛門きやうけんも作る」、「大坂錦文流今は出羽の作者」、「同只丸はいかしの點者」を列記し、竹本筑後後援門弟として新町西口竹本頼母以下十八人、なぐさみ淨るり總名寄として、安堂寺町藥屋彦十郎以下四十九人、法師三味線總名寄として、新町北中町茶や町今川以下三十五人、新町にて名有法師として、くるはの内 利都以下十人、芝居を勤給ふ引手衆として、心齋橋清水だに竹澤權右衛門以下五人を列記し、末に西澤氏與志集と署す。

以上二十八章を十五行本に収録し、奥付は「右此本者依爲懇望文句音節等悉校合加祕蜜令開版者也 竹本筑後後援 大坂上久寶寺町三丁目正木屋九左衛門板團」とある。刊年は未詳であるが、元祿中か寶永の初め頃であらう。本書と同形同類の書に、「淨瑠璃見取丸」淨瑠璃小菊丸の二種が、これより前に發行されてゐる。この三書は互に内容の重複しないやうに編集されたものである。 【藤井】

【著者】林道春【成立・刊行】慶長十七年起稿、寛永七年刊(活字版)、慶安二年再版。【諸本】二卷本と五卷本とあるが、内容に於ては殆ど變りはない。後に「正増補多識篇」と標したものが出てゐる(五卷五冊)。内容は原本よりは勿論豊富になつて居り、漢字には凡て假名を付け、組織も整理されてゐる。【解説】分類體の漢和字書である。先づ部門を水・火・土・金・玉・石以下二十七部に分ち、部に從つて漢語を出し、これに漢字で和訓を註してある。稀れに片假名で訓を註し、異名を附したとこ

【田馬皇女】歌人【生歿】生年未詳。和銅元年(三六八)六月薨す(日本書紀)。「御墓」大和國城上郡の吉隱の猪養の岡(萬葉集卷二挽歌に據る)。「系圖」天武天皇の皇女、御母は水上娘(藤原鎌足の女)。「閱歴」經歷は殆ど知れない。唯一の資料は、「萬葉集」卷二相關部にある三首の皇女の歌の題詞で、これを寄せ集めて見ることによつて、青年時代の皇女の姿の一部を知り得るのみである。三つの題詞とは、「但馬皇女、在高市皇子宮時、思、穂積皇子、御歌一首、秋の田の云々」、「勅穂積皇子、遣、近江、志賀、山寺、時、但馬皇女御作歌一首、後れぬて云々、但馬皇女、在高市、皇子宮時、竊接、穂積皇子、事既形、而御作歌一首、人言を云々」。以上の三つは、事柄の實際の順から云ふと、第一、第三、第二の順に見るべきで、穂積皇子と密かに婚されたことが發覺したから、皇子に勅命が下つて近江へうつされたものである。何故この二人の結婚が裂かれたかは明かでない。二人は異母兄弟である故、當時としては近親結婚として引き分けねばならなかつた、とは考へられな

【甲賀三郎】諸天づくし、「二」同二段目「へかぬいふみち行」、「三」同四段目「へあふみ八景」、「四」十二段之二段目「へうつ、のわたし守」、「五」信田小太郎「へ神おろしの段」、「六」同二段目「へおとしなさまめ」、「七」同三段目「へ小きくひめみち行」、「八」新板腰越狀「へ若草姫みち行」、「九」藍染川「へ初段梅の名寄」、「十」同三段目「へ辨の君道行」、「十一」百日曾我「へけいせいといないささし」、「十二」遊君三世相「へ二段目さん伊物語」、「十三」同三段目「へみこの口よせ」、「十四」同四段目「へはるひめ道行」、「十

【田毎月丸】瑞照院心月自性居士【墓所】信州上田大輪寺【閱歴】信州上田藩主松平侯の家臣で、同城下鎌原口で生れた。天明の初め江戸藩邸詰の頃より朱樂菅江に就いて狂歌を學び、又蜀山・橋洲・木網等とも交遊し、歸藩の後大に斯道を奨勵し、門下生數十名を養成するに至つた。されば上田に狂歌の地盤を作つたのは月丸の力で、文化頃は月丸の社中か六樹園側の作家かで、全盛の狂歌界を占領した。

【多識篇】語學書二卷二册(別本五卷)【著者】林道春【成立・刊行】慶長十七年起稿、寛永七年刊(活字版)、慶安二年再版。【諸本】二卷本と五卷本とあるが、内容に於ては殆ど變りはない。後に「正増補多識篇」と標したものが出てゐる(五卷五冊)。内容は原本よりは勿論豊富になつて居り、漢字には凡て假名を付け、組織も整理されてゐる。【解説】分類體の漢和字書である。先づ部門を水・火・土・金・玉・石以下二十七部に分ち、部に從つて漢語を出し、これに漢字で和訓を註してある。稀れに片假名で訓を註し、異名を附したとこ

【但馬皇女】歌人【生歿】生年未詳。和銅元年(三六八)六月薨す(日本書紀)。「御墓」大和國城上郡の吉隱の猪養の岡(萬葉集卷二挽歌に據る)。「系圖」天武天皇の皇女、御母は水上娘(藤原鎌足の女)。「閱歴」經歷は殆ど知れない。唯一の資料は、「萬葉集」卷二相關部にある三首の皇女の歌の題詞で、これを寄せ集めて見ることによつて、青年時代の皇女の姿の一部を知り得るのみである。三つの題詞とは、「但馬皇女、在高市皇子宮時、思、穂積皇子、御歌一首、秋の田の云々」、「勅穂積皇子、遣、近江、志賀、山寺、時、但馬皇女御作歌一首、後れぬて云々、但馬皇女、在高市、皇子宮時、竊接、穂積皇子、事既形、而御作歌一首、人言を云々」。以上の三つは、事柄の實際の順から云ふと、第一、第三、第二の順に見るべきで、穂積皇子と密かに婚されたことが發覺したから、皇子に勅命が下つて近江へうつされたものである。何故この二人の結婚が裂かれたかは明かでない。二人は異母兄弟である故、當時としては近親結婚として引き分けねばならなかつた、とは考へられな

【甲賀三郎】諸天づくし、「二」同二段目「へかぬいふみち行」、「三」同四段目「へあふみ八景」、「四」十二段之二段目「へうつ、のわたし守」、「五」信田小太郎「へ神おろしの段」、「六」同二段目「へおとしなさまめ」、「七」同三段目「へ小きくひめみち行」、「八」新板腰越狀「へ若草姫みち行」、「九」藍染川「へ初段梅の名寄」、「十」同三段目「へ辨の君道行」、「十一」百日曾我「へけいせいといないささし」、「十二」遊君三世相「へ二段目さん伊物語」、「十三」同三段目「へみこの口よせ」、「十四」同四段目「へはるひめ道行」、「十

【田毎月丸】瑞照院心月自性居士【墓所】信州上田大輪寺【閱歴】信州上田藩主松平侯の家臣で、同城下鎌原口で生れた。天明の初め江戸藩邸詰の頃より朱樂菅江に就いて狂歌を學び、又蜀山・橋洲・木網等とも交遊し、歸藩の後大に斯道を奨勵し、門下生數十名を養成するに至つた。されば上田に狂歌の地盤を作つたのは月丸の力で、文化頃は月丸の社中か六樹園側の作家かで、全盛の狂歌界を占領した。

【多識篇】語學書二卷二册(別本五卷)【著者】林道春【成立・刊行】慶長十七年起稿、寛永七年刊(活字版)、慶安二年再版。【諸本】二卷本と五卷本とあるが、内容に於ては殆ど變りはない。後に「正増補多識篇」と標したものが出てゐる(五卷五冊)。内容は原本よりは勿論豊富になつて居り、漢字には凡て假名を付け、組織も整理されてゐる。【解説】分類體の漢和字書である。先づ部門を水・火・土・金・玉・石以下二十七部に分ち、部に從つて漢語を出し、これに漢字で和訓を註してある。稀れに片假名で訓を註し、異名を附したとこ

【但馬皇女】歌人【生歿】生年未詳。和銅元年(三六八)六月薨す(日本書紀)。「御墓」大和國城上郡の吉隱の猪養の岡(萬葉集卷二挽歌に據る)。「系圖」天武天皇の皇女、御母は水上娘(藤原鎌足の女)。「閱歴」經歷は殆ど知れない。唯一の資料は、「萬葉集」卷二相關部にある三首の皇女の歌の題詞で、これを寄せ集めて見ることによつて、青年時代の皇女の姿の一部を知り得るのみである。三つの題詞とは、「但馬皇女、在高市皇子宮時、思、穂積皇子、御歌一首、秋の田の云々」、「勅穂積皇子、遣、近江、志賀、山寺、時、但馬皇女御作歌一首、後れぬて云々、但馬皇女、在高市、皇子宮時、竊接、穂積皇子、事既形、而御作歌一首、人言を云々」。以上の三つは、事柄の實際の順から云ふと、第一、第三、第二の順に見るべきで、穂積皇子と密かに婚されたことが發覺したから、皇子に勅命が下つて近江へうつされたものである。何故この二人の結婚が裂かれたかは明かでない。二人は異母兄弟である故、當時としては近親結婚として引き分けねばならなかつた、とは考へられな

たけもと たじまの



して卷二挽歌部の、穂積皇子の「但馬皇女薨後」云々。零る雪はあけにな落りそ云々の歌は、皇子の思慕が皇女の死後も、なほ如何に深かつたかを示す。皇女の方からも同様であつたと思はれる。二人の戀は、皇女の薨するまで、尠くとも、十一年間は持續してゐたことが知られる。【作風】「萬葉集」卷二相聞部に、三首の短歌。卷八秋雜歌部に、「但馬皇女御歌一首」と題詞のある短歌一首、計四首である（最後の一首は、題詞の下に小字で「一書云子部王作」とあつて、果して皇女の作か疑はしい）。皆、穂積皇子に對する戀歌である。「後れる戀ひつづあらずは追ひ及かむ、道の隈に標結へ吾が夫」の一首には、近江へやられた夫の君を慕ふ強い熱情が歌はれてゐるが、他の三首には「秋の田の穂向きの依れる片依りに君によりなな」の如く巧みに喩へを用ひて、たりふりかまはず突きつめた戀情よりも、精神的な戀の境地を現はしてゐる。故に、人を根柢から感動せしめるやうな強さが無いかはり、あくどさや、しつこさが見えず、歌品のある如何にも身分重き皇女にふさはしい歌風が、自然に現はれてゐる。〔森本〕

太政官藤原「標」を見よ。  
太政官符「符」を見よ。

多情多恨 小説 【作者】尾崎紅葉  
【發表】明治二十九年二月二十六日以降  
讀賣新聞連載。【刊行】紅葉全集第六卷 現代  
日本文學全集第六卷所収。

【梗概】最愛の妻、類さんに死なれた鷺見柳之助は、毎日亡き妻の事を思つては、何をすれば氣もなく涙と溜息とに遺瀆ない寂しい日を送つてゐる。二七日の今日は雨に暮れて、夜となると寂しさに堪へられぬ儘、酒で心を紛ら

さうとする。そこへ親友の葉山誠也がやつて来て、色々元氣をつけて慰めようとするが、柳之助はその言葉の尾について、又しても返らぬ歎きを繰り返す。お坊ちゃんで少し戀物で人見知りをする柳之助には、女では類さん、男では誠也、天下にこの二人より外好きな人はなかつたのである。さて類さんにはお鳥と云ふ妹があつて、姉の跡に直す下心から母親は、お鳥を柳之助の許へやつて家事の始末をさせるが、柳之助はその心を籠めた親切な世話振りがあるさくてならない。仕舞には堪らなく厭になつて、勤先の學校から歸ると家を外に類さんの墓へばかり行くのだつた。今日も墓参りをして更に新しい涙を絞つた。家へ歸るのが厭で葉山の許へ行つたが、そこには矢張り大嫌ひな葉山の妻お種がある。お種は古風な窮屈な女で、どうしても親しめないのだが、葉山だけに逢ひたくて訪ねて行つて、お鳥の一件を話すと、通人の葉山は母親の意を察して一緒になれと勧める。柳之助は腹を立ててお鳥が歸らぬなら自分が家を飛び出すと無茶を云ふので、葉山は仕方なく策を授ける。その結果お鳥は憤つて歸り母親も來なくなつて、もとの火の消えたやうな寂しい生活になつた。それを見て葉山は、自分の家に同居させて元氣をつけようとし、お種は何やかや、働るので、柳之助は次第にお種に懐しきを持つやうになり、姉のやうなあしらひに依つてその寂しさが少しづつ慰められた。その時葉山が旅行に出たので、柳之助は二階に一人ゐる寂しさに堪へないで、お種の針仕事を茶の間に入り浸りなつて勉強までするやうになつた。勿論類さんへの愛慕が薄らぐどころでなく、二階に一人ゐなければならぬ夜とな

ると寂しさが沁々と身に迫る。その思ひの堪へ難きに、或る夜更けにお種の部屋へ這入つて行つた。勿論他意のない事なので、お種は迷惑ながらもその心のいぢらしさに曉まで話相手となつて慰めた。柳之助のこの非常識な行爲は葉山の老父の疑ひを呼んだ。夜はお種の傍に寝、晝は病氣と稱してお種を隠居所に置く事にし、葉山が歸るや、柳之助の同居を断れと言ひ出した。葉山は柳之助を信するものゝまた老父の心を憐れに忍びず、さりとて親切に呼んだものを今更出てくれとも言ひ難かつたが、思ひ切つて事情を柳之助に語つた。柳之助は憤激して泣いたが、遂に事を分けた葉山の言葉に、得心して近所の下宿に越して行き、又もとの寂しい生活に返つた。床の正面にお種の肖像を掲げ、お種の寫眞を床柱に懸けたばかり、幅もなければ花もなしに。【批評】この作では、筋が主でなく亡妻に對する纏綿たる愛慕の情を抱く人間が主で、柳之助の性格を丸彫りにしようとする懸命に努力して、興味中心の小説を書かうといふ態度を捨ててゐる。眞剣に迫つてゐるが、殊に柳之助が兄タイプに甘える心理や、段々お種に好意を感じて行く徑路やは、就中色彩を帯びて、殆ど至れり盡せりである。多少の不満はあつても、柳之助の如き人間は、一個の新しい性格描寫であるし、慎重な四つ相撲をとつて、而も作品に悠然たる風格を生じてゐる。更にその文章に至つては、言文一致の時代的模範文と云つてよからう。作者自身も、「我家の米の飯を以て任じてゐたやうに、彼一代の傑作である。」

多情佛心 小説 【作者】里見諒  
【發表】大正十一年十二月より、翌年十二月ま  
で時事新報に連載。【刊行】大正十三年四月  
(前篇)、同八月(後篇)、新潮社。現代日本文學  
全集第二十九卷・明治大正文學全集第四十三  
卷所収。  
【梗概】冒頭に、少年期、青年期の戀を歌つた「あき」よるの二節から成る序詩がある。役者の萩原瀧十郎は料理屋よし野の女將おもん病氣見舞に文士の三好を誘ひ、又おもんの義妹お澄が會ひたがつてゐたので藤代信之をも無理に誘つた。信之は嘗て自分が芝居で卒倒した時、一方ならぬ世話になつた人がおもんであつたことを知る。おもんは信之の初心な態度に堪らなく心を惹かれるが、信之は却つてお澄の方に好意を持つた。瀧十郎の妹で今は横濱名うての不良少女鈴江が仲間の西山普烈と一緒に信之をゆすりに來た。その後すつかり深くなつて了つたお澄が、父信策の一生の敵であつた窪井金五郎の愛妾であることを知つて、自棄になつて飲み、更にカフエー黒猫で飲んで、女將の美津枝に好感を持つたが、それは友人三好の情人であつた。信之はお澄の所で父の遺傳らしい癌腫のための吐血をした。三好は瀧十郎から美津枝を取持つやうに頼まれたのを機會に、美津枝との間の倦怠に刺戟を求めようとして二人で瀧十郎を誘ひ出した。そして三好だけ別れて二人は赤坂の待合に行つた。吐血して後の信之はともすると死の不安に脅され、自分の生き方を吟味する氣持になつたが、やつぱり、眞心のまゝ生きるといふ從來の考へ方を訂正する氣にはなれなかつた。そして相變らず他所目には放蕩無頼とも見える生活を續けた。或る日、又普烈が信之をゆすりに來たが、その心持の汚さを信之から責められて、普烈は泣いて悔い

た。かうして信之はわけもなく東京の生活に執着してゐるが、花の便りを聞く頃になると、嘗て京都で、愛の最高標示である金鶏勳章即ち死ぬ時には必ず逢ふといふ約束の標を與へてある里奴が、今大阪で胸を病んでゐるのを

見舞ひたい氣持もあつて旅に出た。その旅の

【批評】想は、複雑な戀の諸態様を描き分け

その癖の歌女に與へた名を以て、直ちにそ



多情多恨 小説 【作者】尾崎紅葉【發表】明治二十九年二月二十六日以降讀賣新聞連載。【刊行】紅葉全集第六卷、現代日本文學全集第六卷所收。

【梗概】最愛の妻、類さんに死なれた蒼見柳之助は、毎日亡き妻の事を思つては、何をすれば元氣もなく涙と溜息とに遺瀾ない寂しい日を送つてゐる。二七日の今日は雨に暮れて、夜となると寂しさに堪へられぬ儘、酒で心を紛ら

せて元氣をつけようとし、お種は何やかや、お種は柳之助の如き人間は、一個の新しい性格描寫であるし、慎重な四つ相撲をとつて、而も作品に悠然たる風格を生じてゐる。更にその文章に至つては、言文一致の時代的模範文と云つてよからう。作者自身も、「我家の米の飯を以て任じてゐたやうに、彼一代の傑作である。」

多情佛心 小説 【作者】里見祥太郎【發表】大正十一年十二月より翌年十二月まで

意に刺戟を求めようとして二人で瀧十郎を誘ひ出した。そして三好だけ別れて二人は赤坂の待合に行つた。吐血して後の信之はともすると死の不安に脅され、自分の生き方を吟味する氣持になつたが、やつぱり、真心のまゝ生きるといふ從來の考へ方を訂正する氣にはなれなかつた。そして相變らず他所目には放蕩無頼とも見える生活を續けた。或る日、又普烈が信之をゆすりに来たが、その心持の汚さを信之から責められて、普烈は泣いて悔い

た。かうして信之はわけもなく東京の生活に執着してゐたが、花の便りを聞く頃になると、嘗て京都で、愛の最高標示である金鶏勳章即ち死ぬ時には必ず逢ふといふ約束の標を與へてある里奴が、今大阪で胸を病んでゐるのを

【批評】想は、複雑な戀愛の諸態様を描き分けようとする意圖を孕んでゐる。が、この作に於けるより重要な作者の意圖は、さうした戀愛の諸態様の描破を通しての、その抱懐する所謂まごころ哲學の具現である。だから凡ての戀愛諸態様は、やがて主人公のまごころ主義の發展成長を語るかに排列されてゐる。かういふ些かの無理さからか、やゝ不自然な作爲と、それ故その眞摯さの稀薄にされた感じとが生じたことは争へない。のみならず作品全體に互つて、餘りにも通俗小説的な偶然が多過ぎるとは云へ、作者のまごころ主義への熱意が掘り下げた觀念形體は、兎に角限界的な境まで盡されてゐる。彼の代表作の一つとするに足る作品である。

【批評】よく纏まつて、物語の筋が緊張して終りまでたるみのないところは、浪六の時代小説中有数のものであらう。露幸の性格、その意地と俠氣が、聊か冗いやうにも思はれるが、先づよく描けてゐると思ふ。殊に封間相當の凡人型なところに面白味がある。小太夫と紋彌は、あまり明瞭な印象を残さないが、川田兵庫の方が割にはつきりしてゐる。結末の逆へるが、矢張り讀者の心に残る。浪六の時代物に通有な缺點が、幾分にもせよ伴つてはゐるが、當時としては先づ佳作と目すべきものであらう。

その當節の歌女に與へた名を以て、直ちにその一派の藝術運動の主義の名としたもので、意味はない。獨佛辭書で偶然見出した小さい木馬を意味するダダ(Dada)といふ言葉が、單に形が短小で、而も暗示性をもつ語として選ばれたに過ぎぬ。【解説】近代藝術上の一様式の名稱。歐洲大戰中、歐洲各國の所謂危險思想家・自由思想家の隱遁所であつた瑞西、殊にそのチューリッヒで、一九一六年の春カバレー・ヴォルテール(Cabaret Voltaire)といふ小寄席風の小さい酒場で、ドイツから逃れて、その情人のエンミー・ヘンニクス(E Emmy Hennings)と共にこの酒場を經營してゐるフーゴ・バル(Hugo Ball)と、ルーマニアから逃走したトリスタン・ツァラー(Tristan Tzara)、マルセル・ヤンロ(Marcel Janco)の二人、ドイツから逃れて来たリヒアルト・ヒールゼンベック(Richard Heisenbeck)、フランスから逃げて来たアンヌ・アルプ(Anne Aloup)の五人によつて、ダダイスムといふ團體が作られた。バルはカンディンスキーの友達であるが、ミュンヘンで表現主義の劇場を起さうと企てたことがある。ツァラーとヤンコとは、ルーマニアの浪漫的なコスモポリタンであり、ヒールゼンベックはドイツの表現主義者であつたが、戦線から逃走して来た作家であり、アルプは開戦當時愛國運動に熱中したが、パリでピカソ、ブラックと識り、立體主義の運動に加はり、後こゝに逃げて来た作家である。彼等はこの寄席で自分の作品を展覽したり、歌ひ踊つたり、詩を朗讀したりした。バルとツァラーとは、チューリッヒで、「ダダの畫室」を建て、抽象藝術、又は最新藝術と稱し、ツァラーは又ダダの新聞を發行して

【参考】里見祥氏とまごころ片岡良一【片岡】  
【黄昏に】れたが 歌集 【作者】土岐哀果  
【刊行】明治四十五年二月、東雲堂【内容】第一歌集 TAKIWARAI に次ぐもので、すべて一首を三行に誌し、三百餘首を収めてゐる。自然主義時代における青年の現實生活感を率直痛切にうたつた作風を特色とする。石川啄木にデザケエトしてゐる。(金子)

たそや行燈 たそや 小説 【作者】ちぬの浦浪六村上浪六【發表】明治二十七年十二月、東京朝日新聞。【刊行】浪六全集所收。

【名義】歐洲大戰中、戦線から逃れて瑞西のチューリッヒの酒場に集まつた一群の作家が、

【ダダイスム】藝術論 (英) Dadaism

【名義】歐洲大戰中、戦線から逃れて瑞西のチューリッヒの酒場に集まつた一群の作家が、

【ダダイスム】藝術論 (英) Dadaism

【名義】歐洲大戰中、戦線から逃れて瑞西のチューリッヒの酒場に集まつた一群の作家が、

【ダダイスム】藝術論 (英) Dadaism



各國への主義を宣傳した。又初め立體主義で後にオルフィズムに轉じたピカビアは、パリに於てダダイズムに加はつたが、アポリネールの死後、ニューヨークに歸り、その主義を宣傳した。ドイツでは、ヒュールゼンベック、ラオウル・ハウスマン (Raoul Hausmann) 等が一九一七年歸國し、ベルリンにダダイズム革命本部を置いて政治運動を始め、共產主義的思想を宣傳し、又表現主義が藝術の世界に止まつて實生活に出でない事を攻撃した。又ダダは未來主義の同存主義を取入れ、同時に多くの詩を朗讀したが、これも未來主義に於けるとはその意味を異にして、彼等の求むる主觀表現のために用ひる。かやうにダダイズムは、未來主義の方法の一部を取入れ、その客觀主義的態度を排斥してゐる。又ダダイズムは立體主義のピカソの影響により、畫面に砂や毛髪や切手・新聞などを貼り附けるが、この點に於てもダダイズムは、立體主義の方法の一部を取入れて、その客觀主義的態度を排斥してゐる。ダダイズムの三つの原理は、喧嘩 (Brutismus)、同時性 (Simultaneität) と繪畫上の新材料であるとダダイストは言明する。ダダイズムの運動は、繪畫・音樂・舞踊・詩歌の上に互るといふよりも、寧ろかゝる限界を意識的に破壊するのみならず藝術と生活との限界をも認めない。ダダイズムの藝術上目的とするところは、未來主義・立體主義等の表現方法を取入れ、表現主義の直接表現の方法によつて實生活を表現するにある。ダダイズムの詩人としてはツゲネル (F. V. Wagnier) がある。實際のその作詩上に於ては、單に破壊的・肉體的題材を斷片的・感覺的に表現するに過ぎない。

【参考】Huelsbeck, R.: *En avant! Da-da. Leipzig, Wien, Zürich, 1920.* 【渡邊】  
 忠臣 ただおみ 漢詩人 【姓】島田朝臣 【字】達音 【生歿】天長五年生れ、寛平三年(一五五〇)の七八月頃に歿した。享年六十四 【家系】遠祖は神八井耳命である。忠臣以前の人々には、島田臣宮成・島田朝臣清田(日本後紀の編纂にも關與した學者である)・島田朝臣吉子・島田朝臣惟上・島田朝臣貞繼・和泉守善長・因幡守善宗等が知られてゐる。弟良臣は、「文徳實錄」序中にも見え、元慶二年には從五位下行大外記で、「文徳實錄」の編輯にも携はつてゐた。  
 【學統】菅原是善に師事し、又大内記菅原宗岳の門にも入つてゐた。但し家は累代儒家であるから、父祖の庭訓も少くないと思はれる。  
 【閑歴】十六歳、五律一首を作つた(家集上)。貞觀元年(三十二歳)、能文の故を以て假に加賀權大掾となつて(當時越前少掾從七位、渤海國の副使周元伯と唱和した。三十六歳文章生となり三十九歳少外記に任ぜられた。四十二歳の春從五位下、二月因幡權介。元慶二年(五十一歳)八月、皇弟貞保親王が、披香舎で始めて「蒙求」を讀み給ふ時、終つて忠臣等に詩を賦せしめられた。十二月、攝日宮の託宣を奏上して、新羅の來寇に備ふべきを説いた(當時太宰少貳從五位下)。翌年從五位上。元慶七年四月、假に玄蕃頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典藥頭である。同四年六月十三日「周易」の講を畢り、七八月の頃逝した。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩閑に住した事も家集にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

并抄中、官位唐名部第三に、島田忠臣撰也と見える) ○田達音集十卷(通憲入道藏書目錄) ○田氏家集三卷(別項) 【詩風・人物】詩人として道真とよく、その詩に白氏の風が多いのは當時一般の風潮であらう。詩を通して見る人物は篤實博識、眞の學者らしさを想はせる。「延喜以後詩」序に、「當代之詩匠」と評した言葉は、溢美ではない。道眞の如き才氣は無かつたやうに思はれるが、詩の體製は深重とも稱すべきであらう。ただその詩の傳はるものは僅に三卷二百二十餘首に過ぎない。  
 【参考】三代實錄 ○江談抄卷二(雜事) ○菅家文草(卷一五) ○雜言奉和 ○類題古詩 (山岸) 直香 ただ 國學者 【姓名】橋本氏。初名直雄。通稱龜松、後彦八。【號】蕪園 【生歿】文化四年、上野國山田郡境野村に生れ、明治二十二年七月、東京に歿した。享年八十三。  
 【法名】指月院直心淨香居士 【墓所】東京本郷區駒込蓬萊町大林寺 【閑歴】直香、屋號を鳥屋といひ、代々の飛脚問屋であつた。直香に至つて傍ら機業をも營んだが、不幸にして家道振はず、つひに意を決して江戸に出て、文學を以て身を立んとし、橋守部の門に入つて、國典和歌を學んだ。時に年四十餘。なほ若くして黒川春村の教を受けたこともあつたといふ。爾來、守部の愛重するところとなり、ます／＼研鑽倦まず、つひに一家を成し、ことに畢生の業として「萬葉集」を研究した。初め赤坂一ツ木町辨天山に卜居し、後、赤坂米川神社祠畔に移つて子弟に教授した。その門に入る者極めて多かつたといふ。直香資性温雅にして恭儉、頗る君子の風があつた。【著作】萬葉集抄二十卷(内三卷刊) ○上野歌解二卷 ○歌仙部類女房部二册(三十六歌仙部類抄十八卷

の内) ○姓氏錄補關四十卷 ○作者部類傳 ○國史雜傳抄 ○百人一首小倉梯 ○職原私抄十卷 ○旋頭歌解三卷(別項) ○諏訪詣之記二卷 ○題詠復葉集六卷。【業績】先づ「萬葉集」の研究を擧ぐべきであらう。「上野歌解」の如き、眞淵が「萬葉集」の遠江歌の解を行つたのと相並んで注目すべく、「旋頭歌解」もまた旋頭歌論として最も詳密なものである。その他全體に、その研究は質實なる研究態度が見られる。  
 【参考】上野人物志岡部福藏 ○群馬縣史第三卷 (群馬縣教育會編) 敲 (叩) たた 歌謠 【名義】室町時代から胸叩とて、裸體で、頭に編頭巾を載せ、腰に鉾籠をつけ、手で胸を叩いて、早口に歌つて物を貰つて歩いた者があつた。その曲風から



(集圖家訓倫人) き た た

出たので、この名があるらしい。【沿革】江戸時代に入つては、叩の與二郎といふ頭が京都の悲田寺内にゐて、春秋二季の彼岸又は所々の祭禮の頃に口早にしゃべり廻つて物を乞ふ

てゐた。元禄三年版の「人物訓家訓集」には、萬歳と組み合せて、編笠をつけた者が門松の前で、つれ歌で、扇で拍子を取つてゐるところを描いてあるのを見れば、正月にも門附をしたのであらう。歌の古いものは知られないが、延寶四年に成つた「淋敷座之感」には、吉

年五十六【墓所】京都靈巖寺 【閑歴】忠臣は小原東作雄英の第二子。出でて徳井田氏を名乗つた。雄英、初め等岡の代官に仕へ、後江戸に出でて幕府に仕へた。文化八年、忠臣は父と共に平田篤胤の門に入り、同十年、江戸から京に上つて香川景樹の門に入つて和歌を

比較的達吟の方で、即興・即詠を直ちに短冊に書くと云ふ風であつたらしい。それだけに

むた。然るに或る夜立ち開くとともに家にの障口を耳にし、日頃の試合に偽りの勝利を媚びられてゐた事を知つた。彼は恥辱と激怒とに衝撃されると共に、今迄の生活と誇りの悉くに、凡て空虚を感じて堪へ難い淋しさに襲はれた。そして自分の力量を確



識的に破壊するのみならず藝術と生活との境界をも認めない。ダダイズムの藝術上目的とするところは、未來主義・立體主義等の表現方法を取入れ、表現主義の直接表現の方法によつて實生活を表現するにある。ダダイズムの詩人としてはグネル (E. V. Maeterlinck) がある。實際のその作詩上に於ては、單に破壊的・肉體的題材を斷片的・感覺的に表現するに過ぎぬ。

假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

年五十六「墓所」京都靈巖寺「開歷」忠友は小原東作雄英の第二子。出でて穂井田氏を名乗つた。雄英、初め笠岡の代官に仕へ、後江戸に出でて幕府に仕へた。文化八年、忠友は父と共に平田篤胤の門に入り、同十年、江戸から京に上つて香川景樹の門に入つて和歌を學んだが、殊に心を考古の學に潜め、好んで國史を讀み、最も奈良朝の事物に精通し、景樹から「忠友はわが書匣なり」と敬重された。人々からは「奈良屋」と異名されたりもした。文化十三年には大阪にも住んだ。一時奈良奉行梶野良材の屬吏となつて、正倉院の御物を調査し、その文書を整理したことなどもある。知友には、松岡歸厚・鈴鹿連胤・赤尾可官・八田知紀・貫名海屋・伴信友・西田直養の諸人があり、信友、また忠友を稱して「英才の仁」と云つた。直養はその隨筆の中に、奈良に忠友を訪ふことなどを書いてゐる。【著書】穂井田忠友集 一冊 正宗敦夫編(觀古雜帖 埋磨發香家集を収む。日本古典全集所収) ○穂井田忠友家集 一冊 彌富濱雄編(中外錢史二卷(天保元年成。日本經濟叢書所収) ○文氏墓誌考實一卷(天保二年十月成。甲子夜話續編) ○高根おろし二卷(天保五年成。國書刊行會編百家隨筆第二所収) ○續日本紀問答一卷(天保十一年成。續史籍集覽所収) ○埋磨發香印部一卷(天保十一年成) ○觀古雜帖第一卷一卷(天保十二年成) (以上藤)

【歌風】師風を受けて平明清新。その佳作は、「古今集」中の佳作を見るかの感がある。ただ平明なだけに、中には一般的に陥つた卑俗な作がないでもない。古語の使ひやうなども手に入つたもので、流石にその學者としての位置を辱めないが、而も學者的臭味は比較的少い。これも忠友の天分を語るものであらう。

【忠友】國學者・考古學者【姓名】穂井田(穂北)氏。通稱、靱負・縹助・久間次郎・源助【號】蓼我【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年(二五〇七)九月十九日京都に歿す。享年五十六(下)。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

面白の浮世遊や、夕べにぬめり町を上から下へ見渡せば、扱ても見事や美しや、餘多の上葉葉がござんす。主は知らねども格子からちよいと招く。しかも鹿の子の、ずんど意氣よしが。ナコノチヨイトシヨ。先つも名高き吉野様、外山に咲きしお姿を、一目見しより胸が心もうちうかへとなり果てて、コトバやりてが袖をぞつとひく。年は幾つと問うたれば、(下略)(吉原太夫浮世たき)の如きもの。や、後れて行はれた「早口うたせ」はこれから出たらしい。元祿の頃にはさう下品なものと思はれなかつたか、「諸國遊里好色由來揃」に、「鳥羽の三四郎は中にもたさきといふ事すぐれし也」と見えてゐる。又近松門左衛門作の「天鼓」の中に、「やんらめてたや千町や萬町の鳥追が参りて、福の神いはひこめ、しらげの米やろ、眞白げの米やろ、米やろが定には、福と戀と参りて……」の鳥追歌の肩にタ、キと記してあれば、鳥追歌(別項)をも諷つて廻つたことが知られる。「人倫訓蒙圖彙」のタ、キの説明に「千町萬町の鳥追と自ら名のるなり」とあれば、鳥追は京都では叩のなす業であつたのであらうか。 (高野(辰)

【忠友】國學者・考古學者【姓名】穂井田(穂北)氏。通稱、靱負・縹助・久間次郎・源助【號】蓼我【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年(二五〇七)九月十九日京都に歿す。享年五十六(下)。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

【忠直卿行狀記】「ただなほさやう 小説【作者】菊池寛【發表】大正七年九月「中央公論」【刊行】菊池寛全集をはじめ、多くの選集、改訂文庫等に収む。

【梗概】越前少將忠直卿は、驍勇無双の秀康の子と生れ、幼い時の遊び事は勿論、圍碁將棋雙六にかけても、また弓馬槍劍の武術に於ても、嘗て引けを取つたといふことがなかつた。何を試みてもその技倆は忽ちに上達し、周圍の者に打勝つのが常だつたので、家臣とは異なる我が稟質の優越さを年と共に確信するばかりだつた。而も元和元年大阪城を攻め落す際には、自ら率ゐる越前勢が拔群の働きをなして一番乗りの功名を収めるに及んで、遂に天下の諸侯一人もわれに優る者なしとの矜恃と自尊とを禁じ得なかつた。祖父の家康がこの武勳を賞して初花の茶入を與へ「日本焚燬」とまで稱揚したので、彼の得々たる驕慢心はその絶頂に達した。そして福井なる居城に凱陣した後も、日毎臣下を集めて武技を練り、彼等を散々に破つてはその誇りを養ふの糧として

【批評】短篇ながら、これは作者の文壇的地位

【忠友】國學者・考古學者【姓名】穂井田(穂北)氏。通稱、靱負・縹助・久間次郎・源助【號】蓼我【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年(二五〇七)九月十九日京都に歿す。享年五十六(下)。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

【忠友】國學者・考古學者【姓名】穂井田(穂北)氏。通稱、靱負・縹助・久間次郎・源助【號】蓼我【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年(二五〇七)九月十九日京都に歿す。享年五十六(下)。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

【忠友】國學者・考古學者【姓名】穂井田(穂北)氏。通稱、靱負・縹助・久間次郎・源助【號】蓼我【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年(二五〇七)九月十九日京都に歿す。享年五十六(下)。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

【忠友】國學者・考古學者【姓名】穂井田(穂北)氏。通稱、靱負・縹助・久間次郎・源助【號】蓼我【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年(二五〇七)九月十九日京都に歿す。享年五十六(下)。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

【忠友】國學者・考古學者【姓名】穂井田(穂北)氏。通稱、靱負・縹助・久間次郎・源助【號】蓼我【生歿】寛政四年、備中に生れ、弘化四年(二五〇七)九月十九日京都に歿す。享年五十六(下)。翌年從五位ノ上。元慶七年四月、假に玄菟頭の事を行つて渤海國大使裝類に對した(實は美濃介)。寛平元年(六十二歳)十月十九日、「周易」の御讀をなし、翌年仲春、釋奠に「論語」を講じた。時に典義頭である。同四年六月十三日周易の講を畢り、七八月の頃逝いた。家集中には交友多く、互に唱和の詩を残してゐる。晩年には無量詩園に住した事も家集中にうかがはれる。【著作】百官唐名抄(拾

ただとも ただなほ



(象圖蒙)



を確立した出世作たると共に、彼の創生にか  
かる所謂テーマ小説の特質を體した代表的名  
作である。史傳中の暴戾なる暴君を捉へ來つ  
て逆説的な新觀察を下し、人間の深き洞見  
と鋭い心理の剔抉に依つてこれを孤獨地獄に  
陥れられた権力者の苦惱の姿として現前し、  
以て主題を見事に生かして忠直卿の行實に人  
間的根據を與へてゐる。取材の奇警多彩に加  
ふるに自家の人生的解釋を盛り、しかも簡勁  
明確なる手法で描き出したこの作は、當時平  
俗巧緻を事とした文學に飽いた人々に異常な  
悦びを以て迎へられ、更に一世にこの流風の  
作品を流行せしむる端緒となつた位である。

作品的價値の優秀さを以てしては勿論、作者  
にとつても更に文壇にとつても一期を劃した  
歴史的作品としても、大正文學中銘記せらる  
べきである。なほこの作は脚色されて大正八  
年三月、文藝座第三回公演に上場され、以來  
守田勘彌の當り藝となつた。 【水木】

**忠央** ただなか 故實家 【姓】 水野氏。幼名健  
吉。通稱 藤四郎 【號】 丹鶴。黃菊壽園。鶴峰  
【生歿】 文化十一年に生れ、元治二年(三五二五)  
二月廿五日紀州新宮に歿す。享年五十二 【墓  
所】 紀伊國東牟婁郡新宮本廣寺 【閏歴】 對馬  
守忠啓の子、代々紀伊侯御附家老の家で、紀  
伊國新宮城主として祿三萬五千石を食んだ。  
文化十三年諸大夫となつて土佐守と稱し、天  
保六年八月十六日、父の隠居するに及んで、  
家督を相續した。萬延元年六月四日、新宮に  
隠居を命ぜられたが、元治元年特に免され、爾  
來鶴峰と稱した。忠央は文學を好み、有職故  
實に通じ、藏書數萬卷、その丹鶴書院に藏せ  
しもの、皆希顔の書のみであつたといふ。新  
宮城は別名を丹鶴城といふので、丹鶴書院又

は鶴峰の名が命ぜられたのである。又篤學の  
士を招聘して、丹鶴叢書(別項)を編集刊行し  
たが、その校正の嚴密、製版の精美は世の舉  
つて讚稱する所である。又丹鶴外書と稱し、  
史籍年表・十四卷系圖・同書引便覽等を刊行し  
た。外に「朝野部類」千とせのためし(寫)一  
卷等がある。 【石村】

**正述心緒歌** ただなか **【名義】** 「萬葉  
集」の分類法の一で、直接的に自分の思を表現  
する歌であつて「寄物陳思歌」及び「譬喻歌」  
(各別項)の二つに對立する。「毛詩」の賦・比・  
興に基く三分類だと言はれてゐる(賦が正述  
心緒)。興が寄物陳思。比が譬喻。而してこの  
名目の見える「萬葉集」十一・十二兩卷を見る  
と、この名目は「柿本朝臣人麿之歌集」からと  
つた歌群の中に二ヶ所(卷十一に一所、卷十二に  
一所)と、「人麿歌集」の歌群以外の場所に二ヶ  
所(同上)と、四ヶ所に見えてゐる(萬葉集の卷  
には見えない)。だからこの分類法は、武田氏  
も「上代國文學の研究」中で疑つてゐられるや  
うに、元來は「人麿歌集」にあつた名目で、それ  
を卷十一・十二の編纂者が眞似て、「人麿歌集」  
以外から採つた歌群に同じ名目を用ひたもの  
かも知れない。 【用例】 「萬葉集」第十一卷「た  
らちねの母が手離れ」の歌から同卷「戀ふる事  
慰めかねて」の歌まで四十六首——これは「柿  
本朝臣人麿之歌集」から採録したもの。次に  
同卷「たらちねの母に障らば」の歌から、「月夜  
好み妹に逢はむと直道から」の歌まで九十一  
首。次に、第十二卷の巻頭から十首——これ  
は、「人麿歌集」から採録のもの。次に、同卷  
「吾が香子を今か今かと」の歌から「白たへの  
たもと寛けく」の歌まで、九十九首。以上四ヶ  
所、二百五十六首。

【性質】 前述の如く卷十一・十二だけにある名  
目である。然るに、この兩卷は、巻頭に「古  
今相聞往來歌類」(卷十一には「歌類之上」、卷十二  
には「歌類之下」とある)と題してある。古や今  
の相聞往來の歌と云ふ意味だから、この「正  
述心緒歌」も、相聞往來歌の一種と見られて  
ゐたのである。その相聞歌のうち、譬や序詞  
を含まないで、自分の感情をそのまま言ひ現  
はしたのが、「正述心緒歌」である。「何時は  
しも戀ひぬ時とにあらねども夕方まけて戀ふ  
はすべなし」(卷十一・人麿歌集)「我が香子が朝  
けの姿よく見ずて今日の間を戀ひ暮らすかも  
(卷十二・同上)の如くで、他の卷の「相聞歌」と  
言ふのと同性質の歌である。但し實際に於て  
は、「寄物陳思歌」と見るべき作も、この部目  
の中に混入されてゐる。例へば「石上振の神  
杉神さびし戀をも我は更にするかも」(卷十一・  
人麿歌集)「縁兒の爲こそ乳母は求むと言へ乳  
飲めや君が乳母求むらむ」(卷十二)の如きで、  
これ等は、當然「寄物陳思歌」寄物陳思歌であつ  
て、直接に思をのべた歌ではない。これ等は、  
「人麿歌集」の編纂者や、卷十一・十二の編纂者  
が、誤つて混入したものと見做すべきであ  
る。同時に「寄物陳思歌」の中に、「正述心緒歌」  
と見るべき作が混入してゐる反對の例も亦あ  
る。要するに「正述心緒」の分類は、表現態度  
の上から來た進んだ分類法である。 【森本】

**忠度** ただなか 歌人 【姓】 平 【歿年】 壽永三  
年(一八四四)二月。享年四十一。 【家系】 忠盛  
の子、清盛の弟 【閏歴】 左兵衛佐・薩摩守に任  
じ正四位下に叙した。精力が人に勝れ源氏の  
軍と諸所に戰つたが效なく、一門と共に西海

に走つた。平家の軍が一ノ谷に敗れて彼も戰  
死した。當時誰とも知られなかつたのを、箆  
に結びつけた歌に、「行きくれて木の下かけを  
宿とせば花やこよひの主ならまし」とあつた  
ので、忠度と判つたといふ。西海に走つた後、  
一度京に引返して、深夜俊成を五條の邸に訪  
れて詠草を託した。俊成は「千載集」一首だ  
け、「さざ波や志賀の都はあれにしを昔ながら  
の山櫻かな」を入れ、朝敵の故に讀人不知とし  
たといふ話は有名である(平家物語)。 【作品】  
家集「平忠度朝臣集」一卷。群書類從卷二五七  
所載本、寛文七年刊の「忠度集」、内閣文庫藏  
の「平忠度詠草」(内題忠度百首等)があるが、何  
れも同系統にて、春二十・夏十・秋二十・冬十。  
戀二十・雜二十三(他人の歌三首)である。但し  
類從本は戀が二首缺け、奥に「石之本者薩摩守  
忠度朝臣俊成卿のもと遣し侍りし自筆の本  
を大樹より出され云々」とある。「さざ波や」の  
歌は「萬葉歌合」に故郷花として春にあり、雜  
に盛方朝臣書き置きたりける「萬葉集」を返す  
時の歌がある。勅撰集に入る歌は「千載集」以  
下凡そ十一首。 【参考】 大日本史一四五〇參考源平盛衰記〇  
平家物語〇諸曲忠度 【西下】

**忠肅** ただなか 國學者 【姓名】 野田氏、通稱  
善兵衛 【號】 その家を六兒樓といふ。 【生歿】  
慶安二年に生れ、享保四年(一三七九)歿す。享  
年七十一(或は七十二) 【墓所】 攝津武庫郡入江  
【學統】 初め下河邊長流に從ひ、後契沖に學ん  
だ。契沖との關係は、契沖の萬葉集講義も聽  
き、契沖の追悼歌も詠んでゐるから相當密接  
であつたと思はれる。堂上にも出入して歌は  
竹内惟庸に就いて學んだ。 【閏歴】 攝津武庫郡  
入江の相當の素封家に生れたが、遺稿による



伊國新宮城主として祿三萬五千石を食んだ。文化十三年諸大夫となつて土佐守と稱し、天保六年八月十六日、父の隠居するに及んで、家督を相續した。萬延元年六月四日、新宮に隠居を命ぜられたが、元治元年特に免され、爾來鶴峰と稱した。忠実は文學を好み、有職故實に通じ、藏書數萬卷、その丹鶴書院に藏せしもの、皆希觀の書のみであつたといふ。新宮城は別名を丹鶴城といふので、丹鶴書院又

と元禄十五年頃父相傳の田地を譲り買つたところから、學問に興味をもつて家産を傾けたのであらう。又氣概のある世才に乏しい人物であつたやうである。同十六年には娘も失つた。その著「萬葉集五句類句」は或る人を介して靈元上皇の勅覽に供へ、次に上皇の仰せによつて「三代集類句」を撰んだと傳へられてゐる。これは竹内惟庸の盡力によつたものであらうか。晩年の感懷として「淵明が田園燕について官を辭して故郷に歸る。泉郎(忠肅)の魁は秋風に蓬を破られ、南江を去つて北京の乞食と成らんとは、天我を捨てめや」等あるのを見ると晩年は悲痛なる境遇であつたらしい。【著作】萬葉集類句十二冊(元禄十一年成。萬葉集の短歌を一句から五句までの類句にしたもの)。○萬葉集類句三冊(元禄十二年成。萬葉集の短歌の結末の字を分にしたもの)。○古今五句類句五冊(帝國圖書館藏)。○後撰類句五冊(同上)。○拾遺類句五冊(同上)。○新古今類句五冊(同上)。○新勅撰類句五冊(同上)。○續後撰類句五冊(同上)。これ等の類句の組織は各勅撰集の全歌を五通に書き、第一冊は第一句の語尾(二字)を伊呂波順に排列して第一句類句となし、第二冊は第二句の語尾(二字)を同じく伊呂波順に排列して二句類句を作り、かくして第五句までそれごとくに伊呂波順に排列して類句を作つてゐるのである。○萬葉集調林類聚七冊(竹園藏。全體の組織は萬葉集の短歌を春夏秋冬・天・時・節・木・草・獸・鳥・魚・蟲・食・衣・居所・雜物・地・天・時・天皇・若人等に分ち、更にそれごとくを小目に分つて歌を擧げてあるのである。且つ上欄に卷數をあげ下欄に作者を記してゐる。即ち萬葉集の分類である)。○柏傳一冊(八箇之秘傳と題簽がある。八箇の柏の秘名及びそれの證歌があげられてあり、その他柏傳餘考として種々の記が記されてある。傳授的傾向が

と見るべき作が混入してゐる反對の例も亦ある。要するに「正述心緒」の分類は、表現態度の上から來た進んだ分類法である。【森本】忠信(一)列官物の諸曲を見よ。忠度(一)平家物の諸曲を見よ。忠度の(一)歌人(姓)平(歿年)壽永三年(二八四)二月。享年四十一。【家系】忠盛の子、清盛の弟【閏歴】左兵衛佐、薩摩守に任じ正四位下に叙した。臂力が人に勝れ源氏の軍と諸所に戰つたが效なく、一門と共に西海

【忠肅】國學者【姓名】野田氏、通稱善兵衛【號】その家を六兒樓といふ。【生歿】慶安二年に生れ、享保四年(一三九九)歿す。享年七十一(或は七十二)【墓所】攝津武庫郡入江【學統】初め下河邊長流に從ひ、後契沖に學んだ。契沖との關係は、契沖の萬葉集講義も聴き、契沖の追憶歌も詠んでゐるから相當密接であつたと思はれる。堂上にも出入して歌は竹内惟庸に就いて學んだ。【閏歴】攝津武庫郡入江の相當の素封家に生れたが、遺稿による

【人物】富家に生れて、若年時代を順境に成長した爲め、世才には乏しかつたやうで、そのためには産をも破つたのであるが、熱情的な氣概のある人物であつた。併し學問上には細緻な研鑽の痕を残してゐる所を見ても、相當に綿密な性格ではあつたらしい。要するに學に遊んだ人と見るべきである。【業績】忠肅の業績は「柏傳」の如きもあるが、主として「萬葉集」及び勅撰和歌集の索引に、力を費した點を認むべきである。それ等の索引が、かなり早い時代にこれほどの成果を示したのは注意すべきである。

【参考】野田忠肅翁と其詠歌(吉川良秀(みをつくし)大正一五ノ三・四・五・六)○野田忠肅のことども(吉井太郎(國學院雜誌大正一五ノ五)○契沖傳(久松)○契沖全集(久松)○忠見(一)歌人(三十六歌仙の二)【姓名】壬生。幼名、多多。後に忠實・忠見と改む(百人一首一夕話)【閏歴】忠見の子である。幼童の時、内裏に召されたが乗物がなくて參る事ができない旨を奏すると、然らば竹馬に乗つて參れと重ねて仰せ下されたので「竹馬は筋がちにしていと弱し今夕かげに乗りてまゐらん」の歌に依つて、夕方に參る事を鹿毛に託して奏した(袋草紙三)。天曆八年「延喜の御時躬恒がさぶらひける例にて御厨子所にさぶらはせん」の宣旨を賜つた(歌仙傳・歌集)。又同十年三月、麗景殿女御の歌合を左右一人で行う(袋草紙二)。天德二年攝津大目に任じ(歌仙傳)、同四年の歌合には特に召し上げられた。家集に、「京のたよりなれば津の國に住まんとて行く」津の國に年比身を沈めて籠りゐたるをそのさきの帝きこしめして召し上げさせ給ひ

【参考】歌仙傳(袋草紙)○大日本史(二一九)○百人一首一夕話○國文學全史(平安朝篇)○忠見集(一)歌集(一)卷【作者】壬生忠見【諸本】(イ)群書類從卷二二六二所載本、(ロ)歌仙歌集本。歌數は、(イ)百九十二首、(ロ)百六十八首、共通のもの凡そ百五十首で順序も異なるから別系統のものであらう。袋草紙に引用されてゐるものは、(ロ)の系統本である。【内容】(イ)本は初めに屏風・障子の歌五組五十七首、麗景殿の歌合の歌二十四首を掲げ、然る後各種の歌を載せてゐる。詞書中には、「おほやけより錢ふたつ給へるに」二絶給はせて「納め殿より夏衣給へるに」二絶に下るに由あるうかれ女に「田舎なる家の焼けたるを」等の如く、生活を露骨に出したものが多し。(忠見參照)【西下】

【忠通】歌人・詩人【姓】藤原【法號】圓觀【別號】法性寺入道前關白太政大臣【生歿】永長二年(承徳元年)に生れ、長寛二年(一一八二)二月十九日歿す。享年六十八【家系】父は忠實、母は右大臣顯房の女從二位源師子。弟に頼長あり、子に忠實、忠實の孫に忠實。嘉承二年十一歳にて元服。正五位下に叙せられ昇殿を許された。爾來逐年榮進して、鳥羽・崇徳・近衛・後白河の四朝に歴任し、攝政に任ずる事二度、太政大臣に任ずる事二度、從一位に陞り、宣旨によつて氏の長者となり、牛車を聽された。鳥羽天皇御即位の初め、白河院は忠實の女泰子を以て后とされようと思召されたが、忠實は辭退した。後年泰子は入内したが、保安二年、院は忠實の關白を免じて忠通に命じ給うた。忠通は父が罪を得て免ぜられた執政の職に就く事は不孝であるとし、父の罪を赦された上父子の間に執政授受の儀を行ふ事を乞うて許された。これより彼は、關白・攝政・太政大臣たる事三十年に及んだが、弟頼長は心平かたなく、父忠實も頼長を愛して忠通を疎んじ、久安六年強ひて内覽と氏の長者とを頼長に譲らせた。仁平三年近衛天皇は御眼を煩はせ給うたので、位を後白河院の御子守仁親王に譲らうと思召になり、忠通をして御旨を鳥羽法皇に傳へさせ給うた。法皇は忠通に他意あるものと思召して御採用にならなかつた。然るに頼長の驕慢は日に募り、遂に鳥羽法皇の近侍を辱しめる事があつたので、法皇も頼長を疎んじ忠通を御用ひになつた。久壽二年近衛天皇崩御になり、皇位繼承について法皇は忠通に御下問になつたので、彼は斷然として御年長の後白河天皇を御立て申す事の順當である旨をもつて御答へした。間もなく保元の亂となつて頼長は戦死したので、再び氏の長者となり、忠實が罪に坐して配流されんとするや、子として到底廟に立つ事ができない旨を奏して父の罪が赦された。保元三年關白を辭し、應保二年別業法性寺で出家

と元禄十五年頃父相傳の田地を譲り買つたところから、學問に興味をもつて家産を傾けたのであらう。又氣概のある世才に乏しい人物であつたやうである。同十六年には娘も失つた。その著「萬葉集五句類句」は或る人を介して靈元上皇の勅覽に供へ、次に上皇の仰せによつて「三代集類句」を撰んだと傳へられてゐる。これは竹内惟庸の盡力によつたものであらうか。晩年の感懷として「淵明が田園燕について官を辭して故郷に歸る。泉郎(忠肅)の魁は秋風に蓬を破られ、南江を去つて北京の乞食と成らんとは、天我を捨てめや」等あるのを見ると晩年は悲痛なる境遇であつたらしい。【著作】萬葉集類句十二冊(元禄十一年成。萬葉集の短歌を一句から五句までの類句にしたもの)。○萬葉集類句三冊(元禄十二年成。萬葉集の短歌の結末の字を分にしたもの)。○古今五句類句五冊(帝國圖書館藏)。○後撰類句五冊(同上)。○拾遺類句五冊(同上)。○新古今類句五冊(同上)。○新勅撰類句五冊(同上)。○續後撰類句五冊(同上)。これ等の類句の組織は各勅撰集の全歌を五通に書き、第一冊は第一句の語尾(二字)を伊呂波順に排列して第一句類句となし、第二冊は第二句の語尾(二字)を同じく伊呂波順に排列して二句類句を作り、かくして第五句までそれごとくに伊呂波順に排列して類句を作つてゐるのである。○萬葉集調林類聚七冊(竹園藏。全體の組織は萬葉集の短歌を春夏秋冬・天・時・節・木・草・獸・鳥・魚・蟲・食・衣・居所・雜物・地・天・時・天皇・若人等に分ち、更にそれごとくを小目に分つて歌を擧げてあるのである。且つ上欄に卷數をあげ下欄に作者を記してゐる。即ち萬葉集の分類である)。○柏傳一冊(八箇之秘傳と題簽がある。八箇の柏の秘名及びそれの證歌があげられてあり、その他柏傳餘考として種々の記が記されてある。傳授的傾向が

【忠見】歌人(三十六歌仙の二)【姓名】壬生。幼名、多多。後に忠實・忠見と改む(百人一首一夕話)【閏歴】忠見の子である。幼童の時、内裏に召されたが乗物がなくて參る事ができない旨を奏すると、然らば竹馬に乗つて參れと重ねて仰せ下されたので「竹馬は筋がちにしていと弱し今夕かげに乗りてまゐらん」の歌に依つて、夕方に參る事を鹿毛に託して奏した(袋草紙三)。天曆八年「延喜の御時躬恒がさぶらひける例にて御厨子所にさぶらはせん」の宣旨を賜つた(歌仙傳・歌集)。又同十年三月、麗景殿女御の歌合を左右一人で行う(袋草紙二)。天德二年攝津大目に任じ(歌仙傳)、同四年の歌合には特に召し上げられた。家集に、「京のたよりなれば津の國に住まんとて行く」津の國に年比身を沈めて籠りゐたるをそのさきの帝きこしめして召し上げさせ給ひ

【忠通】歌人・詩人【姓】藤原【法號】圓觀【別號】法性寺入道前關白太政大臣【生歿】永長二年(承徳元年)に生れ、長寛二年(一一八二)二月十九日歿す。享年六十八【家系】父は忠實、母は右大臣顯房の女從二位源師子。弟に頼長あり、子に忠實、忠實の孫に忠實。嘉承二年十一歳にて元服。正五位下に叙せられ昇殿を許された。爾來逐年榮進して、鳥羽・崇徳・近衛・後白河の四朝に歴任し、攝政に任ずる事二度、太政大臣に任ずる事二度、從一位に陞り、宣旨によつて氏の長者となり、牛車を聽された。鳥羽天皇御即位の初め、白河院は忠實の女泰子を以て后とされようと思召されたが、忠實は辭退した。後年泰子は入内したが、保安二年、院は忠實の關白を免じて忠通に命じ給うた。忠通は父が罪を得て免ぜられた執政の職に就く事は不孝であるとし、父の罪を赦された上父子の間に執政授受の儀を行ふ事を乞うて許された。これより彼は、關白・攝政・太政大臣たる事三十年に及んだが、弟頼長は心平かたなく、父忠實も頼長を愛して忠通を疎んじ、久安六年強ひて内覽と氏の長者とを頼長に譲らせた。仁平三年近衛天皇は御眼を煩はせ給うたので、位を後白河院の御子守仁親王に譲らうと思召になり、忠通をして御旨を鳥羽法皇に傳へさせ給うた。法皇は忠通に他意あるものと思召して御採用にならなかつた。然るに頼長の驕慢は日に募り、遂に鳥羽法皇の近侍を辱しめる事があつたので、法皇も頼長を疎んじ忠通を御用ひになつた。久壽二年近衛天皇崩御になり、皇位繼承について法皇は忠通に御下問になつたので、彼は斷然として御年長の後白河天皇を御立て申す事の順當である旨をもつて御答へした。間もなく保元の亂となつて頼長は戦死したので、再び氏の長者となり、忠實が罪に坐して配流されんとするや、子として到底廟に立つ事ができない旨を奏して父の罪が赦された。保元三年關白を辭し、應保二年別業法性寺で出家

【忠通】歌人・詩人【姓】藤原【法號】圓觀【別號】法性寺入道前關白太政大臣【生歿】永長二年(承徳元年)に生れ、長寛二年(一一八二)二月十九日歿す。享年六十八【家系】父は忠實、母は右大臣顯房の女從二位源師子。弟に頼長あり、子に忠實、忠實の孫に忠實。嘉承二年十一歳にて元服。正五位下に叙せられ昇殿を許された。爾來逐年榮進して、鳥羽・崇徳・近衛・後白河の四朝に歴任し、攝政に任ずる事二度、太政大臣に任ずる事二度、從一位に陞り、宣旨によつて氏の長者となり、牛車を聽された。鳥羽天皇御即位の初め、白河院は忠實の女泰子を以て后とされようと思召されたが、忠實は辭退した。後年泰子は入内したが、保安二年、院は忠實の關白を免じて忠通に命じ給うた。忠通は父が罪を得て免ぜられた執政の職に就く事は不孝であるとし、父の罪を赦された上父子の間に執政授受の儀を行ふ事を乞うて許された。これより彼は、關白・攝政・太政大臣たる事三十年に及んだが、弟頼長は心平かたなく、父忠實も頼長を愛して忠通を疎んじ、久安六年強ひて内覽と氏の長者とを頼長に譲らせた。仁平三年近衛天皇は御眼を煩はせ給うたので、位を後白河院の御子守仁親王に譲らうと思召になり、忠通をして御旨を鳥羽法皇に傳へさせ給うた。法皇は忠通に他意あるものと思召して御採用にならなかつた。然るに頼長の驕慢は日に募り、遂に鳥羽法皇の近侍を辱しめる事があつたので、法皇も頼長を疎んじ忠通を御用ひになつた。久壽二年近衛天皇崩御になり、皇位繼承について法皇は忠通に御下問になつたので、彼は斷然として御年長の後白河天皇を御立て申す事の順當である旨をもつて御答へした。間もなく保元の亂となつて頼長は戦死したので、再び氏の長者となり、忠實が罪に坐して配流されんとするや、子として到底廟に立つ事ができない旨を奏して父の罪が赦された。保元三年關白を辭し、應保二年別業法性寺で出家

ただみ ただみち



して詩歌に自適した。「著作」勅撰集に入る歌は金葉十五、詞花七、千載七、新古今集以下凡そ三十五首、合計凡そ六十四首。歌集「田多民治集」。宮内省本は一巻一冊、内題に「田多民治集、法性寺殿忠通公」とある。春夏秋冬雜の六部に分け短歌二百三十二首所載。本集に見えないで代々の勅撰集に見える歌が相當にあるから、忠通の全歌集とは思はれないが、部類の整頓してゐる事は類が少い。雑の中に法華經二十八品並に觀音經、無量義經をよみ、且つ經文の要旨を附記した歌が三十首あり、その終りに、「是は近衛院に法華の心をしへたてまつらんがため云々」とある。最後は月の歌三十五首。代表作「わたの原こぎいでて見れば」は保延元年四月内裏歌合に詠んだものであるが（詞花集）本集にも見える。集の題「田多民治集」はタダミチ集と讀むのであらうが、誰が記したものか不明である。○詩集「法性寺關白御集」一巻（群書類從一三三）。「法性寺入道集」、又は「法性寺集」とも稱せられてゐる。類從本の奥には、「久安元年十二月廿三日云々」と記して、散位親房が奉じて入道中納言に送つた由が見えてゐる。惟ふに自作の集が一巻あつて入道中納言に合點せしめられたものなる事も知られる。内容は類從本によれば詩百二十首を収録。その中百首は七律で二首は七絶である。五言は全くない。詩風も律體を得てゐるが氣魄が乏しい。○法性寺關白藤忠通公記一巻（歴代殘圖日記に收む）○法性寺關白額寫二軸（圖書寮所藏）○楚忽鈔二卷（本朝書籍目録に見えるが今傳はらない）。その外に、「今鏡」三笠の松に、「白河院にも三卷の詩選びて奉り給ひ云云」とあるがこの詩集は傳はらない。又「其後」の君にも唐大和のをかしき言の葉どもをぞ選

びつかはさせ給ひける」とある。「新撰朗詠」などはこれ等から直接刺戟せられて成つたのかも知れない。但しこれも傳はらない。又、元永元年・同二年・保安二年、その家に歌合を催し、女房又は殿下として作者となつてゐる。【人物業績】寛厚恭順、孝悌の道を盡し、事を行ふに仁義に因つた。ただ惜しむところは寛厚に過ぎて、積極的な點と政治家肌の術策のやゝ缺ける風の存する點であらう。保元の亂に於ける忠通の行爲は孝悌の道を盡し、又怨に報ゆるに恩を以てしたものであつた。彼は佛教に傾倒して天台眞言に通じ、詩歌を能くし、書法にも精巧自ら一家を成して法性寺流（別項）と稱せられてゐる。寺社の類も多く書いた。圖書寮にはその額の文字を寫したものが二軸存在する。要するに忠通は人物も學識才藝も共に秀拔であつたが、早く位を極めたので、盈虚を怖れて謙讓する點も多く、ためにその長所も一般に知られないものが少くなかつた。【歌風】彼の歌は平凡で、力強くはないが無理がなく能く整頓してゐる。大體の傾向は「詞花集」の傾向に似てゐる。恐らくは彼は地位からしても、性格からしても平和な歌を詠んだであらうが、彼の趣味が多方面に互つてゐた事も、彼をして圓滿な歌を詠ましめたであらう。彼は其後・俊賴・顯季を歌の師として家の歌合の判者ともし、殊に元永元年の歌合の如きは、其後・俊賴の兩人をして共に判を加へさせてゐるが、彼の歌風は最も顯季に近いであらう。

【参考】大日本史一四六〇百人一首一夕話〇尊卑分脈卷一〇公卿補任〇公卿傳卷一〇保元物語異本卷三〇愚管抄卷三〇今鏡卷五〇本朝無題詩〇本朝一人一首卷六〇日本詩史

卷一〇金葉以下新續古今集に至る迄各集〇陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

忠岑 陽明世傳

く見えし別れより曉ばかりうきものはなし」を以てお答へしたといふ（大日本史）。【参考】大和物語〇大日本史〇二九（西下）忠岑十體 忠岑集 一巻【作者】壬生忠岑【成立】「忠見集」に、「内の仰言にて父忠岑が歌奉れと召あるに書き集めて奉る」とある。【諸本】（イ）歌仙歌集本、（ロ）群書類從卷二百六十二所載本の外、系統の異なる（ハ）圖書寮所藏本（二冊寫）がある。【解説】（イ）は歌數四十八首（内長歌一首）と補遺十二首とから



（内の集人六十三本寺頭本）集 岑 忠

成り、（ロ）は歌數百二十二首（内長歌二首）にて（イ）の四十八首を全部含むが、順序は異なる。（ハ）は歌數百八十四首（内長歌三首）にて、（ロ）と共通なもの凡そ百十八首であるが順序も異なる。この本には延喜七年九月十日大井川行

又次の如き表現上新味のあるものもある。月あかしの花しるしほと、ぎす鳴きてさわたる



首を収録。その中百首は七律で二首は七絶である。五言は全くない。詩風も律體を得てあるが氣魄が乏しい。○法性寺關白藤忠通公記一卷(歴代殘關日記に收む)○法性寺關白頼朝二軸(圖書寮所藏)○楚忽鈔二卷(本朝書籍目録に見えるが今傳はらない)。その外に、「今鏡」三笠の松に、「白河院」にも三卷の詩選が奉り給ひ云云」とあるがこの詩集は傳はらない。又、其後の君にも唐大和のをかしき言の葉どもをぞ選

であらう。彼は其後、俊頼・顯季を歌の師とした家の歌合の判者ともし、殊に元永元年の歌合の如きは、其後、俊頼の兩人をして共に判を加へさせてゐるが、彼の歌風は最も顯季に近いであらう。

【参考】大日本史一四六〇百人一首一夕話〇尊卑分脈卷一〇公卿補任〇公卿傳卷一〇保元物語異本卷三〇愚管抄卷三〇今鏡卷五〇本朝無題詩〇本朝一人一首卷六〇日本詩史

成り、(ロ)は歌數百二十二首(内長歌二首)にて(イ)の四十八首を全部含むが、順序は異なる。(ハ)は歌數百八十四首(内長歌三首)にて、(ロ)と共通なもの凡そ百八首であるが順序も異なる。この本には延喜七年九月十日大井川行

幸和歌に附した序があつて、忠孝も實之同様に序を作つた事分る。又この本には「躬恒集」一本に見えるやうな忠孝・躬恒・伊衡の問答歌五十一首を一纏めとして掲げてゐる。終は「同じ忠孝の集の歌少きがあるに、又これに入らぬ歌のあるをえりいで何となく□□□□書き入れたるなり」として十一首の補遺を加へてゐる。(ハ)本は初めに短歌次に長歌、大井川行幸和歌序及び和歌、問答歌等を掲げ、再び短歌と他本の歌とを載せ、やゝ整頓してゐる。これに對し、類從本は集團的な歌がすべて分散してゐる。(忠孝參照) 【西下】

### 爛た小説

【作者】徳田秋聲 【發表】大正二年三月、國民新聞連載。【刊行】大正二年七月、新潮社。現代日本文學全集(徳田秋聲集)所收。

【梗概】お増は淺井に落籍されて家を持つた。淺井には書生の頃から何かと世話になつたお柳といふ女房があつた。お柳は淺井に二つ年上で持病の喘息の上にひどいヒステリーだつた。淺井がお増の方へ泊り勝ちになると持前の性分がだん／＼と募つて行つた。お増は本宅に近い麴町に移されたが、そこがお柳に知れて、又赤坂の方へ移らなければならなかつた。淺井はお柳との別れ話を愈の深い田舎の兄賞を相手に金で片をつけてしまつた。お柳は田舎へ引取られて行つた。お柳の手元で育てられてゐたお静といふ貴子がお増の方へ連れられて来た。お増にはその子の馴染まないのが何となく寂しかつた。その少し前からお増の遠縁に當るお今といふ娘が来てゐた。淺井はお柳と別れてから仕事の方を相當勵んでゐたが、花などに託つて遊びに行く女もあつたし、お今にも危険な好奇心を感じてゐる

ただれ たぢやく

する中、下の上げらるる階級の生活描寫は、こゝにその極致を見せられてゐる。【加筆】

### 太刀奪た

【別名】奪太刀【解説】或る小名が供を連れて、北野へ参詣に行く。太刀が無いので通りがかりの者の持つてゐるのを冠者に取らせようと、家重代の小刀を貸してやるが、逆に小刀の方を取られてしまふ。そこで歸路を窺つて刀を取り返さうとし、小名が後から抱きつき冠者に縛らせるが、冠者は誤つて主を縛るので、通りがかりの者はうまく逃げ失せるといふ筋。寛正五年の糺河原勸進能の時に演ぜられた。番組に「馬太刀」とあるのは、「奪太刀」の誤寫である。近年岡村柿紅が「太刀盗人」(大正六年七月、市村座初演)として歌舞伎所作事に利用してゐるが「茶壺」と同様、目代を配して作り替へてゐるの

で、原作の結末とは大分違つてゐる。【蒲田】

橋の伊豆足が家の集は【和田殿足集】を見よ。

【橋守部家集は】歌集三卷【成】立【橋守部遺稿詠草を、その七回忌にあたり、遺子冬照が編纂したもの。【刊行】松浦皓侯序、門人中村正富の跋を加へて嘉永七年六月上木。橋守部全集(首巻)及び近代諸家集(國歌大系)所收。【解説】上巻春夏秋冬部、中巻冬戀雜部、下巻長歌部。歌數、短歌七百餘首、長歌四十數首から成る。作者は有数の古學者であり、特に萬葉研究者である。萬葉研究者の歌は、多く萬葉調なのが普通であるが、守部の歌風は全然異なる。而も彼は堂上歌人乃至鈴の屋派の人に師事したわけでもなくて、三代調に即してゐる點は珍しい。その遺詠は古學者であつた爲めに、皇國讚仰の歌に見るべきものが多い。

### 橘守部家集は

【解説】すべての芝居の、闘争の動きを舞臺化した時、廣く立廻りと稱する。柔道の試合の如く、單に投げたり倒したりする事すら、芝居では立廻りと謂ひ、江戸時代中期からの言葉である。どの座にも立廻りを受持つ師匠番のたて師なる者があつて、それが一應立廻りの順を考へて役者に教へる。所謂「劍劇」も結局はこの立廻りの新工夫である。たて師は下廻り中の古老で、生來立廻りの巧みな器用者が抜擢せられて、それに當るのが例である。【花四天】常に木や刀の代りに、花の枝を持つて出るのでこの名がある。或る種の立廻りに捕り手として花の枝を持ち、染物の赤い派手な衣裳を着て、「やつ」といつて打つてかゝる連中をいふ。「忠臣藏」の「道行」のおかる勘平の捕り手などがそれである。陽氣な「捕り物」の場にしか出ない。【三宅】

【立役た】演劇【解説】古くは男方の語がある。時に男の役全體を立役といふ事もある。【三宅】



るが、普通は、主要な男の役で、一狂言の主  
人公、準主人公を總稱する。女方から見ると  
立役に違ひないが、老け役、敵役は、立役とは  
いはぬ。

辰岡万作

辰岡万作

辰岡万作

辰岡万作

未詳【歿年】文化六年(二四六九)九月三日歿。  
享年六十八。【法名】學海院瑛詮日深【閱歴】  
女役者辰岡久菊の伴で、京都に住んでゐた  
が、傳によると、立役三樹大五郎の勧めによ  
つて、作者に志したといふ。やがて大阪に下  
り、安永四年には、奈河龜輔(別項)の下に作名  
を現はした。以後龜輔の外に當代の新進作家  
たる並木五瓶(別項)にもついで、作道を修業  
した。立作者の地位については安永七年で  
あつたが、實際に独自の筆を揮ふやうになつ  
たのは寛政に入つてからである。主として大  
阪劇壇のために働き、寛政中、京を拂つて大阪  
島の内壘屋町に住居を定めたといふ。彼は幕  
末へかけて、上方作者界に一勢力を持つた辰  
岡系の祖となつた。有名な作のみを左に列挙  
する。【作品】「先行曲によるもの」忠孝譽二  
街(寛政四年九月)○けいせい楊柳樓(寛政五年正  
月)○東海道戀の關札(同年四月)○吉原細見圖  
(寛政六年四月)○姉妹達大礎(別項)○艶蕩石川  
染(寛政八年四月)○扇矢敷四十七本(寛政九年  
三月)○傾城忍逢淵(享和元年正月)。「實録」よ  
るもの」けいせい青陽鶴(別項)○當世寄族撰  
(寛政六年十二月)。「講釋説話によるもの」け  
いせい遊山櫻(寛政九年正月)○遠州中山染(同  
年九月)○雪國嫁成谷(寛政十一年八月等)。  
【作風】右の分類でも知れる通り、何等かの形  
式に於て劇的成立を経るものを利用し、  
その性質からいへば、傳記類が大部分を占め  
てゐる。「雪國嫁成谷」の如きは、彼にしては

極めて稀な作例である。且つ傳記的性質に限  
られた結果、所謂世界に於ては、時代を得意  
とすると思はれる。右の作中、現今まで傳  
存するものがある所以も、優れた時代歌舞伎  
の脚色にあると思はれる。純時代歌舞伎の生  
命は、先輩並木正三や奈河龜輔等によつて成  
就せられたのであつたが、時代の流動が漸く  
それ等の堅實味に一轉向を求めたので、万作  
は恰もこの機に乗じたのである。彼は、後輩  
近松徳斐(別項)を引立て、或は屢々合作した事  
もあつた。これは己を知るところであり、事  
實徳斐との合作の部分に、彼の獨作で見られ  
ぬ餘裕を示してゐる。早い頃の當り作、「姉妹  
達大礎」(別項)は、最も具體的にこの點を證明  
してゐる。脚色の取材選擇について講釋實録  
を選んだ態度は、龜輔の末流と見られるが、  
世話を合めた所に彼の開拓の功がある。而し  
て後世阿彌に大きな影響を與へた。(守隨)

瀨祭書屋俳話

瀨祭書屋俳話

瀨祭書屋俳話

【参考】辰岡万作が傳 西澤一鳳(傳奇作書)○狂  
言作者概略○近世日本演劇史 伊原敏郎  
【著者】正岡子規【刊行】明治二十六年五月、日  
本新聞社(日本叢書の一)。初版は、菊判六十九  
頁の小冊子に過ぎなかつたが、同二十八年八  
月「歳晚閑話」歳且閑話「雜祭」の園生「  
古人調」芭蕉雜談等十餘篇二百十三頁を増  
補して再版を刊行した。なほ「瀨祭書屋俳話正  
誤」が翌二十九年十月に發表せられ、それを附  
して第三版を刊行した。後、子規全集第四卷、  
現代日本文學全集(正岡子規集)・改造文庫(子  
規俳話)等所収。【内容】子規の著作中初期の  
もので、彼が日本新聞社入社以前、同紙上に連  
載したものを多少の補正を加へて一冊に纏め  
たものである。三十餘篇の俳話から成り、俳諧

史・俳諧論・俳人俳句俳書に關する批評等で、  
子規の俳諧に關する史的研究、俳句に對する  
見方及び子規の復興俳句の立場やその文學觀  
等の窺はれるものである。左に目次を示す。

瀨祭書屋俳話小序○俳諧といふ名稱○連歌と俳諧  
○延寶天和貞享の俳風○足利時代より元祿に至る  
發句○俳書○字餘りの俳句○俳句の前途○新題目  
○和歌と俳句○實井其角○嵐雪の古調○服部嵐雪  
○向井去來○内藤文章○東花坊支考○志多野坡○  
武士と俳句○女流と俳句○元祿の四俳女○加賀の  
千代○時鳥○扱はあつたか時鳥○時鳥の  
和歌と俳句○初嵐○菘○女郎花○芭蕉○俳諧體の  
榮の詳○發句作法指南の詳等。

【批評】本書は「俳諧大要」と共に、子規が囚  
はれざる見方を以て俳諧を見直したもので、  
子規の俳諧に對する新しい史的考察である  
共に、俗化し無自覺であつた當時の俳壇に對  
して覺醒を促したものである。新知識を以て  
なされた俳諧の史的研究の第一歩として價値  
が認められ、同時に子規の俳句革新の理論的  
根柢や、文學として認められなかつた俳句を  
他の文學と同じ水準にまで引上げた理論的根  
柢を知らしめる點に於て、文學史上地歩を占  
むべきものである。なほ再版に於て加へられ  
た「芭蕉雜談」は、從來偶像としてののみ信ぜら  
れてその眞正の價値の没却されてゐた芭蕉を  
見直して、その眞面目を明かにしたものであ  
る。要するに時代が時代であるだけに、研究  
及び理論として啓蒙的なるを免れぬものでは  
あるが、先覺的な點に於て、同書の價値と意  
義とがある。(水原志田)

龍田

龍田

龍田

龍田「神事物の謠曲」を見よ。  
【殊舞】「舞踊」【解説】たつまつまひは、  
立ちて舞ひ、居て舞ふ舞であるといふ解釋が  
ある。殊は舞であつて、或る時は立ち、しば

らくして坐るといふ解釋もある。「日本書紀」  
顯宗紀に見える上代の舞踊であつて、顯宗天  
皇が先づ長い室壽の詞を述べ、次に琴に合せ  
て謡はれてからこの舞を舞ひ、あとで、一種  
の託宣の形式で言葉が発してゐられるところ  
を見ると、この舞は神祕な神がかり式の舞か  
と思はれる。(小寺)

辰松八郎兵衛

辰松八郎兵衛

辰松八郎兵衛

【未詳】【歿年】享保十九年(二三九四)五月  
九日江戸に歿す。享年未詳【閱歴】貞享二年  
竹本座構揚の最初より、櫓看板の立者であつ  
た。元藤井伊十郎といひ、天和の頃から人形  
を遣つたとの説もあるが如何か。創始期の操  
芝居の盡くは、立役よりは、おやま(人形)を主  
とした事、おやま二郎三郎以來の事である。  
元祿十六年、「曾根崎心中」(別項)以來、彼は有  
名になつた。このおはつが操の劃時代であ  
つたことは、甚だ有名な事柄である(操芝居の  
舞臺參照)。その以前より「練子句欄」乃至他の  
方法で、人形を遣ふ八郎兵衛の姿態をも、見  
物は見ることが出来、而もおやま(人形)の動き  
になれて、八郎兵衛の體に女の媚態を示さな  
かつたことが評判となつた。更に寶永二年十  
一月「用明天皇職人鑑」(別項)の鐘入の段で、出  
遣を演じ、「近代世事談」(享保十九年刊)に記せ  
る如く、益々名聲が揚ると共に、操史上にお  
ける第二次の劃期的成功を収めた。かくて興  
行界の苦勞人河内屋加兵衛に見込まれて、寶  
永三年、豊竹若太夫の相本として豊竹座の  
再興に参加したが、これは全く河内屋の興行  
政策であつた。正徳五年十一月の「國姓爺合  
戦」(別項)には、又元の竹本座に返り咲いて、  
三年越しの興行といふ名譽の舞臺を築いてゐ  
る。寶永元年の竹本座で、錦文流の「高名大福



三月) ○傾城忍逢淵(享和元年正月)。(實録によるもの) けいせい、青陽鶴(別項) ○當世寄族撰(寛政六年十二月)。「講釋説話によるもの」 けいせい、遊山櫻、寛政九年正月 ○遠州中山染(同年九月) ○雪國嫁威谷(寛政十一年八月等)。

【作風】右の分類でも知れる通り、何等かの形式に於て劇的成立を経てゐるものを利用し、その性質からいへば、傳記類が大部分を占めてゐる。一雪國嫁威谷の如きは、彼にしては

「古人調」芭蕉雜談等十餘篇二百十三頁を補して再版を刊行した。なほ「癡祭書屋俳話正誤」が翌二十九年十月に發表せられ、それを附して第三版を刊行した。後、子規全集第四卷、現代日本文學全集(正岡子規集)改造文庫(子規俳話)等所収。【内容】子規の著作中初期のもので、彼が日本新聞社入社以前、同紙上に連載したものを多少の補正を加へて一冊に纏めたものである。三十餘篇の俳話から成り、俳諧

見直して、その眞面目を明かにしたものである。要するに時代が時代であるだけに、研究及び理論として啓蒙的なるを免れぬものではあるが、先覺的な點に於て、同書の價值と意義とがある。【水原志田】

龍田(「神事物の諸曲」を見よ) 殊舞(「舞踊」見よ) たつまひは、立ちて舞ひ、居て舞ふ舞であるといふ解釋がある。殊は斷であつて、或る時は立ち、しば

【参考】石塚龍磨に就いて 小山正(國語と國文學 昭和五ノ七) ○國語假名遣研究史上の一發見 橋本進吉(帝國文學二二ノ五)

【辰巳巷談】(たつみ) 小説 【作者】泉鏡花 【發表】明治三十一年二月、「新小説」 【刊行】鏡花全集第三卷所収。

【梗概】洲崎の遊女お君は、さる大家の若様鼎を慕つて、無理算段をして廓を出たが、却つて新造の悪計にかゝり、船頭宗平にさいなまれ

る身の上となる。鼎は一夜、お君の隠まはれてゐる深川の新造の家を訪れたが、宗平に氣取られて逃げ歸るところを捕はれ、あやといふ時、折よく通りかゝつた沖津に助けられ、その家に伴はれる。沖津は實は鼎の生みの親

で、鼎の父と別れて後は、小間物行商をして傭暮しをしてゐる。これが我が子とは心づかず、手引きをしてお君に合はせてゐたが、日を経るに従つてお君の子である事が分ると、行末を案じてお君との仲を裂いてしまつた。さうとは知らぬお君は、鼎に操を立てて宗平を愈々嫌ふので、或る夜空しく沖津の家から立ち戻る途中、橋の上で宗平に捉まつて無理心中を迫られ、出刃庖丁で胸を突かれる。其處へ馳せ附けた沖津は、始めて今迄の事情を打明け、同じ薄倖な運命を嘆いて、お君を抱いたまゝ、自ら及に伏し重なつて倒れる。

【解説】初期に見られた作者の現實主義的傾向と、持つて生れた浪漫趣味とが、この時代に至つて始めて渾然融合して作風を確立したものと云へよう。従つて作品も幅を増し、深淵を加へて來た。この作品は「通夜物語」(別項)と同じやうに複雑な人生の葛藤を描いてゐるが、悲惨な境遇に沈んでなほ心意氣を失はぬ美しき者の讚美は、作者の天質なる理想主義の一端と見る事が出来る。(通夜物語参照) 【附記】この作は、根本吐芳によつて三幕九場に脚色され、藤澤淺次郎等により明治三十三年六月、東京川上座に上演された。(水上平松)

【辰巳之園】(たつみ) 洒落本一冊 【作者】夢中山人寢言先生(名稱) 江戸城の東南深川を背景とした書なのでかく名づけた。【刊行】明和七年、安永二年改修再版。【諸本】洒落本代表作集(近代日本文學大系)・洒落本大系第一卷・徳川文藝類聚第五等に収む。【題材】深川の岡場所を題材としたもの。洒落本で深川物の嚆矢である。

【梗概】通人志厚、日本橋茅場町藥師境内の茶店に休んでゐるところへ通人ぶつた武士如雷が来る。如雷は同藩の田舎侍新五左衛門と逢ひ、共に船で深川へ出かける。船中で如雷は盛んに深川の通をならべ、やがて八幡前に着くと小花屋に行く。同じ家に五郎兵衛と云ふ馴染客、大名の勝手用人らしき侍客を招待して來り、男藝者を呼んで賑しく騒ぐ。その隣座敷に例の如雷、何も知らぬ新五左衛門を相手に江戸中の通をひけらかす。ところが彼の相方お長は、馴染の志厚が來たので、そはくとして落ちつかぬ。如雷はこゝに地金を現はし怒り出す。船頭の仲裁で漸く収まる。志厚はお長といふ、痴話があり、傍の座敷では同じく男藝者を呼んで騒ぐ。

【解説】吉原に劣らず全盛で、しかも吉原ほどの格式氣品のない深川の情調と、客と遊女と

【参考】石塚龍磨に就いて 小山正(國語と國文學 昭和五ノ七) ○國語假名遣研究史上の一發見 橋本進吉(帝國文學二二ノ五)

【辰巳巷談】(たつみ) 小説 【作者】泉鏡花 【發表】明治三十一年二月、「新小説」 【刊行】鏡花全集第三卷所収。

【梗概】洲崎の遊女お君は、さる大家の若様鼎を慕つて、無理算段をして廓を出たが、却つて新造の悪計にかゝり、船頭宗平にさいなまれ

る身の上となる。鼎は一夜、お君の隠まはれてゐる深川の新造の家を訪れたが、宗平に氣取られて逃げ歸るところを捕はれ、あやといふ時、折よく通りかゝつた沖津に助けられ、その家に伴はれる。沖津は實は鼎の生みの親

で、鼎の父と別れて後は、小間物行商をして傭暮しをしてゐる。これが我が子とは心づかず、手引きをしてお君に合はせてゐたが、日を経るに従つてお君の子である事が分ると、行末を案じてお君との仲を裂いてしまつた。さうとは知らぬお君は、鼎に操を立てて宗平を愈々嫌ふので、或る夜空しく沖津の家から立ち戻る途中、橋の上で宗平に捉まつて無理心中を迫られ、出刃庖丁で胸を突かれる。其處へ馳せ附けた沖津は、始めて今迄の事情を打明け、同じ薄倖な運命を嘆いて、お君を抱いたまゝ、自ら及に伏し重なつて倒れる。

【解説】初期に見られた作者の現實主義的傾向と、持つて生れた浪漫趣味とが、この時代に至つて始めて渾然融合して作風を確立したものと云へよう。従つて作品も幅を増し、深淵を加へて來た。この作品は「通夜物語」(別項)と同じやうに複雑な人生の葛藤を描いてゐるが、悲惨な境遇に沈んでなほ心意氣を失はぬ美しき者の讚美は、作者の天質なる理想主義の一端と見る事が出来る。(通夜物語参照) 【附記】この作は、根本吐芳によつて三幕九場に脚色され、藤澤淺次郎等により明治三十三年六月、東京川上座に上演された。(水上平松)

【辰巳之園】(たつみ) 洒落本一冊 【作者】夢中山人寢言先生(名稱) 江戸城の東南深川を背景とした書なのでかく名づけた。【刊行】明和七年、安永二年改修再版。【諸本】洒落本代表作集(近代日本文學大系)・洒落本大系第一卷・徳川文藝類聚第五等に収む。【題材】深川の岡場所を題材としたもの。洒落本で深川物の嚆矢である。

【梗概】通人志厚、日本橋茅場町藥師境内の茶店に休んでゐるところへ通人ぶつた武士如雷が来る。如雷は同藩の田舎侍新五左衛門と逢ひ、共に船で深川へ出かける。船中で如雷は盛んに深川の通をならべ、やがて八幡前に着くと小花屋に行く。同じ家に五郎兵衛と云ふ馴染客、大名の勝手用人らしき侍客を招待して來り、男藝者を呼んで賑しく騒ぐ。その隣座敷に例の如雷、何も知らぬ新五左衛門を相手に江戸中の通をひけらかす。ところが彼の相方お長は、馴染の志厚が來たので、そはくとして落ちつかぬ。如雷はこゝに地金を現はし怒り出す。船頭の仲裁で漸く収まる。志厚はお長といふ、痴話があり、傍の座敷では同じく男藝者を呼んで騒ぐ。

【解説】吉原に劣らず全盛で、しかも吉原ほどの格式氣品のない深川の情調と、客と遊女と

【参考】石塚龍磨に就いて 小山正(國語と國文學 昭和五ノ七) ○國語假名遣研究史上の一發見 橋本進吉(帝國文學二二ノ五)

【辰巳巷談】(たつみ) 小説 【作者】泉鏡花 【發表】明治三十一年二月、「新小説」 【刊行】鏡花全集第三卷所収。

【梗概】洲崎の遊女お君は、さる大家の若様鼎を慕つて、無理算段をして廓を出たが、却つて新造の悪計にかゝり、船頭宗平にさいなまれ

る身の上となる。鼎は一夜、お君の隠まはれてゐる深川の新造の家を訪れたが、宗平に氣取られて逃げ歸るところを捕はれ、あやといふ時、折よく通りかゝつた沖津に助けられ、その家に伴はれる。沖津は實は鼎の生みの親

で、鼎の父と別れて後は、小間物行商をして傭暮しをしてゐる。これが我が子とは心づかず、手引きをしてお君に合はせてゐたが、日を経るに従つてお君の子である事が分ると、行末を案じてお君との仲を裂いてしまつた。さうとは知らぬお君は、鼎に操を立てて宗平を愈々嫌ふので、或る夜空しく沖津の家から立ち戻る途中、橋の上で宗平に捉まつて無理心中を迫られ、出刃庖丁で胸を突かれる。其處へ馳せ附けた沖津は、始めて今迄の事情を打明け、同じ薄倖な運命を嘆いて、お君を抱いたまゝ、自ら及に伏し重なつて倒れる。

【解説】初期に見られた作者の現實主義的傾向と、持つて生れた浪漫趣味とが、この時代に至つて始めて渾然融合して作風を確立したものと云へよう。従つて作品も幅を増し、深淵を加へて來た。この作品は「通夜物語」(別項)と同じやうに複雑な人生の葛藤を描いてゐるが、悲惨な境遇に沈んでなほ心意氣を失はぬ美しき者の讚美は、作者の天質なる理想主義の一端と見る事が出来る。(通夜物語参照) 【附記】この作は、根本吐芳によつて三幕九場に脚色され、藤澤淺次郎等により明治三十三年六月、東京川上座に上演された。(水上平松)

【辰巳之園】(たつみ) 洒落本一冊 【作者】夢中山人寢言先生(名稱) 江戸城の東南深川を背景とした書なのでかく名づけた。【刊行】明和七年、安永二年改修再版。【諸本】洒落本代表作集(近代日本文學大系)・洒落本大系第一卷・徳川文藝類聚第五等に収む。【題材】深川の岡場所を題材としたもの。洒落本で深川物の嚆矢である。

【梗概】通人志厚、日本橋茅場町藥師境内の茶店に休んでゐるところへ通人ぶつた武士如雷が来る。如雷は同藩の田舎侍新五左衛門と逢ひ、共に船で深川へ出かける。船中で如雷は盛んに深川の通をならべ、やがて八幡前に着くと小花屋に行く。同じ家に五郎兵衛と云ふ馴染客、大名の勝手用人らしき侍客を招待して來り、男藝者を呼んで賑しく騒ぐ。その隣座敷に例の如雷、何も知らぬ新五左衛門を相手に江戸中の通をひけらかす。ところが彼の相方お長は、馴染の志厚が來たので、そはくとして落ちつかぬ。如雷はこゝに地金を現はし怒り出す。船頭の仲裁で漸く収まる。志厚はお長といふ、痴話があり、傍の座敷では同じく男藝者を呼んで騒ぐ。

【解説】吉原に劣らず全盛で、しかも吉原ほどの格式氣品のない深川の情調と、客と遊女と

【参考】石塚龍磨に就いて 小山正(國語と國文學 昭和五ノ七) ○國語假名遣研究史上の一發見 橋本進吉(帝國文學二二ノ五)

【辰巳巷談】(たつみ) 小説 【作者】泉鏡花 【發表】明治三十一年二月、「新小説」 【刊行】鏡花全集第三卷所収。

【梗概】洲崎の遊女お君は、さる大家の若様鼎を慕つて、無理算段をして廓を出たが、却つて新造の悪計にかゝり、船頭宗平にさいなまれ

る身の上となる。鼎は一夜、お君の隠まはれてゐる深川の新造の家を訪れたが、宗平に氣取られて逃げ歸るところを捕はれ、あやといふ時、折よく通りかゝつた沖津に助けられ、その家に伴はれる。沖津は實は鼎の生みの親

で、鼎の父と別れて後は、小間物行商をして傭暮しをしてゐる。これが我が子とは心づかず、手引きをしてお君に合はせてゐたが、日を経るに従つてお君の子である事が分ると、行末を案じてお君との仲を裂いてしまつた。さうとは知らぬお君は、鼎に操を立てて宗平を愈々嫌ふので、或る夜空しく沖津の家から立ち戻る途中、橋の上で宗平に捉まつて無理心中を迫られ、出刃庖丁で胸を突かれる。其處へ馳せ附けた沖津は、始めて今迄の事情を打明け、同じ薄倖な運命を嘆いて、お君を抱いたまゝ、自ら及に伏し重なつて倒れる。

【解説】初期に見られた作者の現實主義的傾向と、持つて生れた浪漫趣味とが、この時代に至つて始めて渾然融合して作風を確立したものと云へよう。従つて作品も幅を増し、深淵を加へて來た。この作品は「通夜物語」(別項)と同じやうに複雑な人生の葛藤を描いてゐるが、悲惨な境遇に沈んでなほ心意氣を失はぬ美しき者の讚美は、作者の天質なる理想主義の一端と見る事が出来る。(通夜物語参照) 【附記】この作は、根本吐芳によつて三幕九場に脚色され、藤澤淺次郎等により明治三十三年六月、東京川上座に上演された。(水上平松)

【辰巳之園】(たつみ) 洒落本一冊 【作者】夢中山人寢言先生(名稱) 江戸城の東南深川を背景とした書なのでかく名づけた。【刊行】明和七年、安永二年改修再版。【諸本】洒落本代表作集(近代日本文學大系)・洒落本大系第一卷・徳川文藝類聚第五等に収む。【題材】深川の岡場所を題材としたもの。洒落本で深川物の嚆矢である。

【梗概】通人志厚、日本橋茅場町藥師境内の茶店に休んでゐるところへ通人ぶつた武士如雷が来る。如雷は同藩の田舎侍新五左衛門と逢ひ、共に船で深川へ出かける。船中で如雷は盛んに深川の通をならべ、やがて八幡前に着くと小花屋に行く。同じ家に五郎兵衛と云ふ馴染客、大名の勝手用人らしき侍客を招待して來り、男藝者を呼んで賑しく騒ぐ。その隣座敷に例の如雷、何も知らぬ新五左衛門を相手に江戸中の通をひけらかす。ところが彼の相方お長は、馴染の志厚が來たので、そはくとして落ちつかぬ。如雷はこゝに地金を現はし怒り出す。船頭の仲裁で漸く収まる。志厚はお長といふ、痴話があり、傍の座敷では同じく男藝者を呼んで騒ぐ。

【解説】吉原に劣らず全盛で、しかも吉原ほどの格式氣品のない深川の情調と、客と遊女と

【参考】石塚龍磨に就いて 小山正(國語と國文學 昭和五ノ七) ○國語假名遣研究史上の一發見 橋本進吉(帝國文學二二ノ五)

【辰巳巷談】(たつみ) 小説 【作者】泉鏡花 【發表】明治三十一年二月、「新小説」 【刊行】鏡花全集第三卷所収。

【梗概】洲崎の遊女お君は、さる大家の若様鼎を慕つて、無理算段をして廓を出たが、却つて新造の悪計にかゝり、船頭宗平にさいなまれ

る身の上となる。鼎は一夜、お君の隠まはれてゐる深川の新造の家を訪れたが、宗平に氣取られて逃げ歸るところを捕はれ、あやといふ時、折よく通りかゝつた沖津に助けられ、その家に伴はれる。沖津は實は鼎の生みの親

で、鼎の父と別れて後は、小間物行商をして傭暮しをしてゐる。これが我が子とは心づかず、手引きをしてお君に合はせてゐたが、日を経るに従つてお君の子である事が分ると、行末を案じてお君との仲を裂いてしまつた。さうとは知らぬお君は、鼎に操を立てて宗平を愈々嫌ふので、或る夜空しく沖津の家から立ち戻る途中、橋の上で宗平に捉まつて無理心中を迫られ、出刃庖丁で胸を突かれる。其處へ馳せ附けた沖津は、始めて今迄の事情を打明け、同じ薄倖な運命を嘆いて、お君を抱いたまゝ、自ら及に伏し重なつて倒れる。

【解説】初期に見られた作者の現實主義的傾向と、持つて生れた浪漫趣味とが、この時代に至つて始めて渾然融合して作風を確立したものと云へよう。従つて作品も幅を増し、深淵を加へて來た。この作品は「通夜物語」(別項)と同じやうに複雑な人生の葛藤を描いてゐるが、悲惨な境遇に沈んでなほ心意氣を失はぬ美しき者の讚美は、作者の天質なる理想主義の一端と見る事が出来る。(通夜物語参照) 【附記】この作は、根本吐芳によつて三幕九場に脚色され、藤澤淺次郎等により明治三十三年六月、東京川上座に上演された。(水上平松)

【辰巳之園】(たつみ) 洒落本一冊 【作者】夢中山人寢言先生(名稱) 江戸城の東南深川を背景とした書なのでかく名づけた。【刊行】明和七年、安永二年改修再版。【諸本】洒落本代表作集(近代日本文學大系)・洒落本大系第一卷・徳川文藝類聚第五等に収む。【題材】深川の岡場所を題材としたもの。洒落本で深川物の嚆矢である。

【梗概】通人志厚、日本橋茅場町藥師境内の茶店に休んでゐるところへ通人ぶつた武士如雷が来る。如雷は同藩の田舎侍新五左衛門と逢ひ、共に船で深川へ出かける。船中で如雷は盛んに深川の通をならべ、やがて八幡前に着くと小花屋に行く。同じ家に五郎兵衛と云ふ馴染客、大名の勝手用人らしき侍客を招待して來り、男藝者を呼んで賑しく騒ぐ。その隣座敷に例の如雷、何も知らぬ新五左衛門を相手に江戸中の通をひけらかす。ところが彼の相方お長は、馴染の志厚が來たので、そはくとして落ちつかぬ。如雷はこゝに地金を現はし怒り出す。船頭の仲裁で漸く収まる。志厚はお長といふ、痴話があり、傍の座敷では同じく男藝者を呼んで騒ぐ。

【解説】吉原に劣らず全盛で、しかも吉原ほどの格式氣品のない深川の情調と、客と遊女と

【参考】石塚龍磨に就いて 小山正(國語と國文學 昭和五ノ七) ○國語假名遣研究史上の一發見 橋本進吉(帝國文學二二ノ五)



の對話に興味のある書で、半可通が冷遇されるなど酒落本初期の典型的な作品である。特に作者の努力は穿ちにあり、遊里の流行語を取り入れて當時の尖端を切つたものである。巻末に、通語とその説明・由来等を忠實に載せたのは、作者の創作態度を最も能く示してゐる。特に唐音と稱する狭み言葉の用例を文中に示し、巻末に説明してゐるのは、言語學上からも参考になる一文獻と見られてゐる。

【参考】酒落本評釋 山崎龍

辰巳婦言 酒落本 全一冊 【作者】式亭三馬 【畫工】喜多川歌麿 【名稱】石場と角書がある。深川岡場所である古石場及び新石場を背景としたからである。婦言は口繪に

今様普賢菩薩の像がある點から見て、普賢のもぢりであらう。【刊行】自序に戊午春とあるので、寛政十年と推定される。【諸本】三馬傑作集(帝國文庫)・酒落本代表作集(近代日本文學大系)・酒落本大系第八卷所収。【題材】本書は蓬萊山人歸橋作「富賀川拜見」(別項)の構想及び行文をも諸所襲用したのである。三人客の狂態中、蘭語唐音を喋々する醫學生を點出したのは、山東京傳作「繁々千話」(別項)中の客の脱化である。

【挿紙】鎌倉古市場二川屋の客、酒問屋の番頭 藤兵衛は、馴染の遊女おとまに喜之助と云ふ



(繪口) 言 婦 巳 辰

【構想】「富賀川拜見」では、十藏が遊女おたよに十兩やる代りに伊之の名の彫物を消させる。これを知つた伊之がおたよを責める。おたよは言譯に髪を切ると云ふ客と遊女との手管の魂膽を描いたのである。本書は十藏を藤兵衛、伊之を喜之助、おたよをおとまと替へただけで、作者の創意は更に眞實の情人長五郎を點出した事である。この人名は、「富賀川拜見」に現はれる船頭長五郎を用ひた。要するに爲めになる客、客いる、更に裏面に我

情人ある事を知つて女に對し不服を云ふ。が結局おとまの術中に陥り、腕にある喜之と云ふ彫物を焼き消すことを條件に十兩やる事になつた。鳥居町の若旦那喜之助はおとまの部屋で、自分を突き出せと云ふ文面の手紙を見付け、顔色を變へて怒つたが、おとまのしんみりした辯解、又腕の彫物を消したのも金故起つた義理との説明で、漸く喜之助の心も和いだ。併しおとまには、仕事師の頭で長五郎と云ふ眞實の地色があり、彼の母親が病んで居るのを心配し、藤兵衛から取つた金を皆長五郎にやる。元來おとまは本所の紙屑屋の娘で、十五の時父親が中風になり、こゝに賣られて來てゐるのであつた。

儘も云へる地色に金を貢ぐと云ふ三様の書き分けに、作者の得意さが見える。「富賀川拜見」は情調、肝膽の一場面だけで脚色が無い。三馬のはこれを補綴したのだとも見られる。【影響】本書の後編を「船頭深話」、また續編を「船頭部屋」(各別項)と云ふ。酒落本の續編は、梅暮里谷峨の「傾城買二筋道」(別項)の續編と相俟つて、人情本に展開する徑路を示してゐる。

立烏帽子 御伽草子 一卷 【名】女主人公の名に出づ。【成立】室町期か。

【諸本】もと繪巻の詞書か。新編御伽草子下巻に収めてある。古い「庭訓抄」の註に文詞少異の同記事がある由、新編御伽草子の開題に見える。【題材】勇者求婚神話の痕跡を残す怪物退治、特に素神の大蛇退治神話の系統並にそれと關聯した俵藤太傳説とも聯る武勇譚。「田村の草子」(別項)特にその上巻の終と下巻、及び同異本「鈴鹿の草子」の内容とは密接な關係を有し、阿黒王は「吾妻鏡」文治五年十月二十八日の條にも見える坂上田村麿に殺された奥州の賊主悪路王であらうし、又立烏帽子は萩野博士が、杉原本「保元物語」白河殿夜討の條、山田小三郎惟行の名告の詞に、先祖山田莊司行秀が鈴鹿山の立烏帽子を搦め取つたとある、それに出てゐるかとの推定が當つてゐると思はれる。鈴鹿山の盜賊の事は「今昔物語」(卷十九)に載せ、「古今著聞集」(卷十二)偷盜には鈴鹿山の女盜人」とも見えてゐる古くから有名であつたやうである。なほ「玉章」「引妻」等、「竹取物語」式の落語的洒落が目される。【挿紙】中頃、坂上朝臣田村五郎利成と云ふ者があつた。近江國鈴鹿山に棲んで行人を惱ます大化生の女盜立烏帽子追討の宣言を蒙り發

向したが、女賊は大池の中の蓬萊・方丈・瀛洲の三島に殿舎を構へ、船橋も絶えて無く、近づく術を知らず徒に歲月を經るうち、一計を案じて墓目の矢文を射込むと、彼方からも射返す事度重なつた。立烏帽子の夫は陸奥國まりはた山の阿黒王と云ふ鬼であつたが、急に厭はしくなつたか或る時小鳥に文を衝へさせて田村の前に落させ、夫阿黒王を殺せば勅命にも従ひ御身にも契らうと言ひ送つた。田村は阿黒を憚り、墓目で文通を續けてゐたが、鈴鹿の御前と呼ばれるこの立烏帽子には、仁對王と云ふ奇代の寶があり、思ふ事を言ひ合めれば飛んで行つて傳達する通力のある明珠で、或る時この玉が飛來して、明曉島の面に出て阿黒王が湖水を眺めるのを射殺せと利成に告げてよこした。その聲小蟲の鳴くやうで、これから忍びやかな事を玉章と言ひ慣はしたと云ふ。三度禮拜して玉を戴いた田村は、翌朝阿黒王が八つの頭に數眼を具へ、五色の體をした鬼の姿で、立烏帽子以下多くの采女を従へて池の汀に現れたのを望み見て、角の弓に神通の鎗矢をつがへて放つと、矢は阿黒の肝を射通した。立烏帽子は田村を迎へ入れて夫婦の契を結び、その後太神宮參詣者も内裏への貢物献上も安全になつた。鈴鹿を語らひ寄せるために田村が巧み出した矢だからとて、世に引妻と云ふさうである。

【参考】新編御伽草子開題○近古小説解題(田村の草子の項)○鈴鹿の山賊と田村將軍退治の傳説大西源一(藝文大正一五ノ七) (島津)

伊達髪五人男 浮世草子 五冊 【作者】西澤一風 【刊行】寶永四年京菊屋板 【諸本】浮世草子集(近代日本文學大系)所収 【解説】虎狼の如く、蛇蝎の如く世人に

【構想】本作の直接典拠となつた前年興行の歌舞伎「伊達鏡阿國戲場」の脚本が傳はつてゐないので、確實には言ひ難いが大差あるまいと思はれる。文化五年三月市村座での再演臺



本書は蓬萊山人歸橋作  
「富賀川拜見」(別項)の  
構想及び行文をも諸所  
襲用したのである。三

人客の狂態中、蘭語唐音を喋々する醫學生を  
點出したのは、山東京傳作「繁々千話」(別項)  
中の客の脱化である。  
【梗概】鎌倉古市場二川屋の客、酒問屋の番頭  
藤兵衛は、馴染の遊女おとまに喜之助と云ふ



を藤兵衛、伊之を喜之助、おたよとおとまと  
替へただけで、作者の創意は更に眞實の情人  
長五郎を點出した事である。この人名は、「富  
賀川拜見」に現はれる船頭長五郎を用ひた。  
要するに爲めになる客客いる、更に裏面に我

と云ふ客と遊女  
との手管の魂膽  
を描いたのであ  
る。本書は十歳  
を藤兵衛、伊之を喜之助、おたよとおとまと  
替へただけで、作者の創意は更に眞實の情人  
長五郎を點出した事である。この人名は、「富  
賀川拜見」に現はれる船頭長五郎を用ひた。  
要するに爲めになる客客いる、更に裏面に我

の貢物献上も安全になつた。鈴鹿を語りひ寄  
せるために田村が巧み出した矢だからとて、  
世に引妻と云ふさうである。  
【参考】新編御伽草子問題○近古小説解題(田  
村の草子の項)○鈴鹿の山賊と田村將軍退  
治の傳説大西源一(藝文大正一五ノ七) (鳥津)  
伊達競阿國戯場 浮世草子  
【作者】西澤一風【刊行】寶永四年京菊  
屋板【諸本】浮世草子集(近代日本文学大系)  
所収【解説】虎狼の如く、蛇蝎の如く世人に

忘れた末、元禄十五年八月二十六日死罪獄  
門の刑に處せられた所謂五人男の雁金文七、  
極印千右衛門、庵の平兵衛、神鳴庄九郎、ほて  
の市右衛門の事を材に取つたものである。こ  
の五人の事は「元禄寶永珍話」西澤文庫傳奇  
作書「脚色餘録」等に見えてゐる。なほこの事  
件は、淨瑠璃・歌舞伎にも取扱はれてゐる。淨  
瑠璃には、文彌座の「雁金文七秋の霜」が最も  
古く、次に宇治加賀屋の「難波五人男」、竹本  
座の「雁金文七」等がある。それから竹田出雲  
の作「男作五雁金」が最も有名である。歌舞  
伎では、名左衛門座で、染川十郎兵衛・荻野澤  
之丞等の所演が最も古いであらう。小説では  
本作は最も古いものである。文七と妓瀧川と  
の關係を中心にして、五人の狼藉、瀧川が文  
七の身を心配して誠める實意、文七の母の母  
性愛等が書かれてある。而してこれを瀧川が  
三十三所觀音巡りの途に於ける夢中の懺悔話  
としたのは、例の一風の外面的な意匠を凝ら  
したものであり、なほ巻頭にかりがね文七三  
かつぶしを、音譜を附して載せてゐるのも、  
「御前義經記」(別項)などに見えてゐる一風が  
一種の意匠であらう。作品としては平凡なも  
のである。(雁金文七秋の霜参照) 【藤村】

伊達競阿國戯場 浄瑠璃  
十段 御家物 【作者】達田辨二・吉田鬼眼・鳥  
亭馬馬【初演】安永八年三月二十一日より江  
戸肥前座。正本の刊行は同年正月一日【諸本】  
江戸作者浄瑠璃集(續帝國文庫)所収。【由来】  
題材】前年七月村座に興行された「伊達競  
阿國戯場」が好評であつたので、外題そのまゝ  
院本に改作したのである。(累参照)

全と板桐志妻が、將軍義満の弟頼兼の放埒を  
罵るのを、仁木彈正左衛門が反駁したが、管領  
細川勝元を制止される。(第二)鳥原三浦屋の  
高雄を相手に頼兼の遊興。逆心ある伯父大江  
圖幸鬼行が高雄を身請しようと思計を廻らす  
のを、頼兼に従ふ力士細川谷藏が妨げる。仁  
木彈正は嫁妻裏藤を派したが更に自ら來つ  
て頼兼のために高雄を身請する。これは仁木  
の策である。(第三)細川は國家主君のためを  
思つて高尾を殺しその怨恨を受ける。(第四)  
等持院に押込められた頼兼が、細川を供に鳥  
原通ひの途上を、鬼行の巨黒澤官藏等が襲つ  
たが、細川が引受け頼兼を先に落  
し官藏等を殺す。(第五)南禪寺門  
前の豆腐屋三ぶの許に細川は隠ま  
はれたが、高雄が三ぶの妹であつ  
たのを知つて驚く。高雄の妹果は  
かねて見染めた細川の來たのを悦  
ぶので、三ぶが粹をきかして二人  
を契らせる。頼兼が來た事から細  
川は遂に自ら名乗り、高雄を殺し  
た衷情を訴へるので、三ぶも聞き  
入れ果と配はす事にしたが、高雄の怨靈のた  
め美貌の果は忽ち悪女となる。細川はそれを  
知らぬ果を伴ひ、故郷下總へ落ちる。(第六)  
大江鬼行は板桐志妻等と共に兼若君呪詛を計  
り、祇園社頭で仁木の娘河内と井筒女之助の  
色模様を見附けて責めたが、仁木がこれを追  
拂ひ、志妻に大望を語る。兼若の乳人月岡(女  
之助の姉)に、志妻は濡れかゝつて失敗する。  
【第七】忠臣荒獅子男之助は、仁木の頼みで鼠  
に扮し、兼若を呪詛する修験者貴藏院を追ふ。  
月岡は男之助・女之助と共に兼若を守護し、膳  
部の毒を發見する。仁木は娘河内に妻裏藤を

添へて女之助方に嫁入させ、小柄を贈つて大  
望の味方に附けようとしたが、女之助は父外  
記左衛門の心を察して切腹し、河内も自害す  
る。仁木悪心の證據の箱が現はれたので、外  
記左衛門はこれを持って上館へ急ぐ。(第八)  
細川は累を伴ひ故郷の下總植生村に歸り、與  
右衛門と名乗つてゐたが、頼兼の許嫁歌方姫  
が尋ね下つて來たのを知り、これを迎へるた  
めの百兩の調達に苦勞する。累は自分の容貌  
の變つたの知らぬから、尋ねて來た吉原の  
女郎屋に身を賣らうとし、初めて鏡を見せら  
れて驚き、夫への申譯に投身しようと思つた  
が、



(附番本繪) 場戲國阿競達伊

【参考】近世邦楽年表(義太夫節之部)○日本戲  
曲全集第十六卷解説 【増田】  
立三味線 浄瑠璃や唄に  
伴ふ三味線を二人乃至三人四人で弾く場合、  
主なる三味線を「立三味線」その他を「ツレ」と  
稱するのが今日の一般稱呼で、「立三味線」と  
いふ言葉は、標準語の如くに通用するが、義  
太夫節では、「立三味線」とは言はない。「立三  
味線」とは、主として江戸系統關東の語で、義  
太夫節にあつては、主なる主席の責任の三味  
線を「芯の三味線」或は「三味線の芯」といふ。  
二人以上の場合には、「シン」の三味線以外「ツレ  
三味線」といひ、二枚目三枚目、それ以下を「豆  
喰ひ」といふ。普通は、太夫一人に三味線一人  
が原則。景事・節事に、三人以上の三味線を用  
ひ、又太夫が掛合の場合も、太夫だけの數の

【参考】近世邦楽年表(義太夫節之部)○日本戲  
曲全集第十六卷解説 【増田】  
立三味線 浄瑠璃や唄に  
伴ふ三味線を二人乃至三人四人で弾く場合、  
主なる三味線を「立三味線」その他を「ツレ」と  
稱するのが今日の一般稱呼で、「立三味線」と  
いふ言葉は、標準語の如くに通用するが、義  
太夫節では、「立三味線」とは言はない。「立三  
味線」とは、主として江戸系統關東の語で、義  
太夫節にあつては、主なる主席の責任の三味  
線を「芯の三味線」或は「三味線の芯」といふ。  
二人以上の場合には、「シン」の三味線以外「ツレ  
三味線」といひ、二枚目三枚目、それ以下を「豆  
喰ひ」といふ。普通は、太夫一人に三味線一人  
が原則。景事・節事に、三人以上の三味線を用  
ひ、又太夫が掛合の場合も、太夫だけの數の

【参考】近世邦楽年表(義太夫節之部)○日本戲  
曲全集第十六卷解説 【増田】  
立三味線 浄瑠璃や唄に  
伴ふ三味線を二人乃至三人四人で弾く場合、  
主なる三味線を「立三味線」その他を「ツレ」と  
稱するのが今日の一般稱呼で、「立三味線」と  
いふ言葉は、標準語の如くに通用するが、義  
太夫節では、「立三味線」とは言はない。「立三  
味線」とは、主として江戸系統關東の語で、義  
太夫節にあつては、主なる主席の責任の三味  
線を「芯の三味線」或は「三味線の芯」といふ。  
二人以上の場合には、「シン」の三味線以外「ツレ  
三味線」といひ、二枚目三枚目、それ以下を「豆  
喰ひ」といふ。普通は、太夫一人に三味線一人  
が原則。景事・節事に、三人以上の三味線を用  
ひ、又太夫が掛合の場合も、太夫だけの數の

だてきよ たてさみ



三味線を用ひるが、これは別形式。二人以上の三味線を用ひる場合に對して連の言葉が生ずる。これは床における一段の語り場の三味線の名稱で、一座の三味線舞臺に對しては、その一座の主席の三味線を「三味線紋下」といふ。「紋下」或は「櫓下」は同意義で、番付にある座本の紋の下に名を連ぬる一座のその業の責任者といふ意味から生れた言葉で、「櫓下」とは、同じく芝居の櫓の下に名を連ぬる義である。併し三味線に「紋下」といふ位置が確保されたのは、明治十六年四月松島文樂座興行が初めて、それまでは人形淨瑠璃三業、即ち太夫・三味線・人形の内、三味線は太夫の女房役として獨立の位置がなく、太夫の支配下にあつた。この初代の「三味線紋下」は豊澤團平(別項)であつた。元來三味線は淨瑠璃の伴奏に過ぎず、義太夫節創始の當時は、殆ど世間的にも認められず、芝居番付或は招木看板に三味線の名を連ぬるに至つたのは、後世の延享元年以來、竹本播磨少掾歿後の事で、淨瑠璃義太夫節の三味線の始祖竹澤權右衛門の如きも、番付面には位置がなかつた。尤も淨瑠璃一篇中の景事・節事の場合には、太夫の傍に小さく僅かに三味線の名を見るだけであつたが、この古番付は三味線の名の位置を明示してゐる。

【石割】

榎節舞のたてふし 舞踊 【解説】武裝した武人が榎を持つて舞ひ、榎を伏せる型が眼目であるため、この名がある。榎臥舞・榎伏舞とも書く。持統天皇二年十一月、先帝の大葬の時、殯宮に於てこの舞を奏した。王者を葬ふための葬禮舞踊の一つで、榎を伏せるのは、死を意味するのであらう。後に天平勝寶四年の大佛開眼供養の時、他の歌舞と共に行はれ

たが、それは佛事供養の意味を含めての事であらう。

伊達娘戀緋鹿子ひびきか「八百屋お七」を見よ。

他動詞たてふし「動詞」を見よ。

田中王堂わたなか 評論家 【本名】喜一

【生歿】慶應三年東京に生れ、昭和七年五月九日歿す。享年六十六 【閱歴】十七歳、米國に留學した。評論家哲學者として嶄然頭角を現はしたのは、明治四十四年に出した「書齋より街頭に」及びその翌年の「哲人主義」(別項)を以てであつた。彼は哲學者であり哲學的の教養を有つてゐるが、從來の哲學者が單に書齋裡にあつて瞑想的の思想を構成してゐるに反し、彼は動的に街頭に立つて直ちに現實社會の時事問題を論評しようとした。彼は經濟學的政治學的の教養を有つてゐる。そして彼の時事論の評論には、その經濟哲學的の立場が現はれて来る。我が國に於ける經濟哲學は、後に左右田喜一郎がこれを新しく建設したが、眞實にはその見地は既に早く王堂によつて樹てられてゐたので、彼の卓識は明治評論壇に特記せらるべきものであつた。所謂文明批評社會評論は、全く彼によつて建設せられた部分が多かつた。爾來明治・大正・昭和を通じて、彼は評論壇の元老として活動した。初め東京高等工業に、後早稲田大學・立教大學等に教鞭を執つた。併しとにかく彼の生活は、民間にあつて獨立の評論家として立つところに特殊の風貌を生ぜしめるものである。 【著作】書齋より街頭に ○哲人主義 ○我が非哲學 ○解放の信條 ○改造の試み等。

田中義廉たなか 國語學者 【生歿】未詳。 【閱歴】信濃國飯田の人で、有名な博

物學者男爵田中芳男(天保九年生れ、大正五年歿)の弟である。早く洋學を學び、殊に英語に通じてゐた。明治の初年、家塾を開いてゐたが、次いで文部省に入り、文部卿大木喬任の命により、大槻修二・久保吉人・小澤圭次郎等と共に、明治五年七月、「新撰字書」を編纂し、又小學讀本の編纂もした。「新撰字書」は漢字制限の目的を以て編纂したものである。後、東京師範學校に教鞭を執つてゐた。 【業績】義廉は明治七年に「小學日本文典」(別項)を著した。本書は、字學・詞學及び文章學の三篇から成立する豫定であつたが、公刊せられたのは字學及び詞學の部だけであつた。西洋文典、殊に英文典を摸して編んだものであつて、西洋文典風の日本文典としては、明治時代に於て最初のものである。不備や誤謬は少くないが、その時代としては頗る整つた組織を有するもので、一時廣く行はれ、爾後の文典に少なからぬ影響を與へたものである。この書に次いで「日本小文典」(二冊、明治十年十月刊)を著した。この書は前の「小學日本文典」を、更に簡單にしたものであるが、字學・詞學・文章學の三部が揃つてゐる。この外に「日本文典外編」「日本大文典」等を著す豫定であつたが、それ等は出版に至らなかつた。

棚さがしたなばた 「俳諧棚さがし」を見よ。

たなばた 御伽草子 二卷 【別名】七夕の本地。七夕さうし。 【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。 【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

こ物語参照)

たなばた 御伽草子 二卷 【解説】「天稚彦物語」(別項)の異本。前掲同名の書とは別。いづれも原名が類似し、且ついづれも七夕の由來に關するといふところから、兩者とも「たなばた」の題名を與へられるやうになつて、互に頗る紛らはしくなつてゐる。(天稚彦物語参照)

七夕さうしたなばた 「たなばた」を見よ。

七夕の本地たなばた 「たなばた」を見よ。

七夕の由來たなばた 「天稚彦物語」を見よ。

棚機姫神たなばた 「天棚機姫神」を見よ。

田邊花園たなばた 「三宅花園」を見よ。

谷行たなばた 「鬼神物の論曲」を見よ。

谷崎潤一郎たにさき 小説家、劇作家 【閱歴】明治十九年七月二十四日東京市日本橋區蠣殼町二丁目十四番地に生れた。家業は商業であつたが、少年時代から好んで文字に親しみ、父が事業に失敗したので、一時修學を絶つた。己むなきに至つたこともあつたが、周囲の人達の斡旋で辛うじて慶應の難を免れた。東京府立第一中學校を経て明治三十八年第一高等學校英法科に入學、後、文學で立とうと決意し、同四十年同校英文科に轉じた。翌年卒業、直に東京帝國大學國文科に入つたが、同四十二年九月退學し、同好の人達と「新思潮」(別項)を創刊した。その誌上に「刺青」(明治四十二年)、「麒麟」(四十二年)等を、「スバル」に「信西」(四十二年)、「少年」(四

十三年)を發表するや、忽ちにして文壇の寵姫を集め、異色ある新進作家として華々しい出世振りを示した。時恰も新浪漫主義擡頭の時機に會し、その潮に乗じて大正五・六年頃までに、「魔風」(四十三年)、「秘密」(四十三年)、「惡魔」(四十五年)、「金と銀」(四十七年)、「二人の稚兒」(四十七年)、「金と銀」(七

要な特徴で、「刺青」(別項)等その尤なるものであるが、浮世繪から脱け出したやうな若い女性の足の、匂やかな魅力を語つてゐる「富美子の足」や、横濱の外人街を背景に異國人の白肌の美しさを述べてゐる「アエ・マリア」の如

を有する二人の洋賣家の藝術上に於ける怖るべき心的葛藤を語る「金と銀」、殺人者として兄を疑ひ絶えず自ら職を失はせてゐる少年の慘らしい不安を敘した「或る少年の恐れ」、惡と善と全く相反した二つの性格の物凄までの

たなばた 御伽草子 二卷 【別名】七夕の本地。七夕さうし。 【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。 【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

こ物語参照)

たなばた 御伽草子 二卷 【別名】七夕の本地。七夕さうし。 【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。 【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

こ物語参照)

たなばた 御伽草子 二卷 【別名】七夕の本地。七夕さうし。 【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。 【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

こ物語参照)

たなばた 御伽草子 二卷 【別名】七夕の本地。七夕さうし。 【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。 【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

こ物語参照)

たなばた 御伽草子 二卷 【別名】七夕の本地。七夕さうし。 【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。 【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

こ物語参照)

たなばた 御伽草子 二卷 【別名】七夕の本地。七夕さうし。 【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。 【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ



谷崎潤一郎 立第一中學校を経て明治三十八年第一高等學校英法科に入學、後、文學で立とうと決意し、同四十年同校英文科に轉じた。翌年卒業、直に東京帝國大學國文科に入つたが、同四十二年九月退學し、同好の人達と「新思潮」(別項)を創刊した。その誌上に「刺青」(明治四十二年)、「麒麟」(四十二年)等を、「スバル」に「信西」(四十二年)、「少年」(四



榊節儼のたてふし 舞踊【解説】武裝した武人が榊を持つて舞ひ、榊を伏せる型が眼目であるため、この名がある。榊臥舞、榊伏舞とも書く。持統天皇二年十一月、先帝の大葬の時、殯宮に於てこの舞を奏した。王者を葬ふための葬禮舞踊の一つで、榊を伏せるのは、死を意味するのであらう。後に天正勝寶四年の大佛開眼供養の時、他の歌舞と共に行はれ

評議壇の元老として活動した。初め東京高等工業に、後早稲田大學・立教大學等に教鞭を執つた。併しとにかく彼の生活は、民間にあつて獨立の評論家として立つところに特殊の風貌を生ぜしめるものである。【著作】書齋より街頭に〇哲人主義〇我が非哲學〇解放の信條〇改造の試み等。【土田】田中義廉よしのぶ 國語學者【生歿】未詳。【閱歴】信濃國飯田の人で、有名な博

榊さがしたなばた 御伽草子 二卷【別名】七夕の本地。七夕さうし。【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

榊がしたなばた 御伽草子 二卷【別名】七夕の本地。七夕さうし。【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ



榊がしたなばた 御伽草子 二卷【別名】七夕の本地。七夕さうし。【諸本】古本は明曆元年板・元禄十六年板・林正五郎板・松會開板本等。【解説】「あめわかひこ物語」(別項)の異本。恐らくその改作であらう。彼の頭中將がこれに頭中納言、彼の一條萬里小路がこれに一條堀川とある外、多少異同があり、文章も俗化してゐる。内容は殆ど同じ。(あめわかひ

十三の年を發表するや、忽ちにして文壇の寵を蒙り、異色ある新進作家として華々しい出世振りを示した。時恰も新浪漫主義擡頭の時機に會し、その潮に乗じて大正五・六年頃までに、「魔術師」(四十二年)、「秘密」(四十三年)、「悪魔」(四十五年)、「捨てられるまで」(大正三年)、「鏡太郎」(三年)、「お艶殺し」(四年)、「お才と己之介」(四年)、「神童」(五年)、「病婦の幻想」(五年)、「人魚の嘆き」(六年)、「その他の小説及び「戀を知る頃」(大正二年)、「法成寺物語」(四年)、「恐怖時代」(五年)、「十五夜物語」(六年)等の戯曲をも作つて益々その特色を發揮し、中堅作家としての地歩を占めた。以來發表した作品の數頗る多く、逐年進展の跡を示し、やがて自然主義以後の逸才として大正期の文壇に最も異彩ある獨特の地位を確立するに至つた。その間、大正四年五月石川千代子と結婚し、同九年には大正活映株式會社脚本部顧問となつて「アマチュア俱樂部」(裝飾砂子)「雛祭りの夜」(蛇性の姪)等の映畫を作つたが、翌年末同社と關係を絶つて後二三年間は、特に戯曲界に活躍して、「愛すればこそ」(大正十年)、「お國と五平」(十一年)(以上別項)、「本牧夜話」(十一年)、「白狐の湯」(十二年)、「愛なき人々」(十二年)、「無明と愛染」(十三年)等の力作を發表し、國民文藝會から表彰された。又それより前、大正八年、幼時から住み慣れた東京の地を離れ、小田原・横濱等に一時轉住し、更に大正十二年關東大震災以後は、關西に居を移した。なほ大正七年と同十五年の兩度支那に遊んだ。その後も、「夢喰ふ虫」(昭和四年)、「盲目物語」(六年)等の力作を發表した。昭和五年八月、佐藤春夫との間に、所謂湖君讓渡事件を起して世間を驚かしたが、翌年四月、古川丁未子と結

婚した。【著作】上記の外、主な小説としては「魔術師」(大正六年)、「異端者の悲しみ」(同六年)、「ハッサン・カンの妖術」(六年)、「兄弟」(七年)、「人面疽」(七年)、「二人の稚兒」(七年)、「金と銀」(七年)、「秦淮の夜」(八年)、「呪はれた戯曲」(八年)、「富美子の足」(八年)、「或る少年の怏れ」(八年)、「AとBの話」(十年)、「アエ・マリア」(十二年)、「二月堂の夕」(十四年)、「羅洞先生」(十四年)、「赤い屋根」(十四年)等があり、長篇としては、「義」(明治四十五年)、「鬼の面」(大正五年)、「女人神聖」(七年)、「鮫人」(九年)、「神と人との間」(十二年)、「肉塊」(十二年)、「痴人の愛」(十四年)(別項)、「友田と松永の話」(十五年)、「黒白」(昭和三年)、「(まんど)」(昭和三年より)、「亂菊物語」(五年)その他がある。又短篇集としては、「刺青」(人魚の嘆き)「悪魔」(異端者の悲しみ)「金と銀」(AとBの話)「近代情痴集」。戯曲集「法成寺物語」等があり、その他の選集として「潤一郎傑作集」(谷崎潤一郎集)等があり、別に谷崎潤一郎全集十二卷(改造社版)がある。なほ右の外、「饒舌録」(倚松隨筆)、「その他の感想」評論がある。【作風】作者は、その本質に於てロマンチストであり、好みに於て徹底的なデカダンで、都會人としての洗練された趣味と、近代人としての類廢した気分とを併せもつてゐる。これ等はそのまま彼の文學に反映してゐるが、その根本的な特色は人生を藝術化さうとする態度にあつた。即ち彼は耽美派の作家として専ら官能の世界に沈溺してゐるが、しかもその官能たるや糜爛した病的なもので、その間に異常な現象を漁り、強烈な刺激を求め、以て特異の官能美を描き出してゐる。これは彼の主

要な特徴で、「刺青」(別項)等その尤なるものであるが、浮世繪から脱け出したやうな若い女性の足の、匂やかな魅力を語つてゐる「富美子の足」や、横濱の外人街を背景に異國人の白肌の美しさを述べてゐる「アエ・マリア」の如きは、より精細に、且つ肉感的な筆致が露はになつてゐる。同時に病的官能の飽くことなき追求は、作者を驅つて變態性慾の諸相をも好んで取扱はしめてゐる。女に愚弄されながらも却つてそれを悦び、女の鼻汁を舐めて祕かに快感を味つたりする變質者の官能生活を描いた「悪魔」、或る男が愛人を自分に對して暴君的に振舞はせようと仕向け、それが成功した爲めに、捨てられてゆく經緯を敘した「捨てられるまで」、女から虐使され度いために美しい娘を傭ひ、強ひて慘酷な鞭を當ててもらふ性慾倒錯者を主人公とした「鏡太郎」等は、變態性慾物の典型で、何れも極端なマソヒズムへの惑溺を寫してゐる。又類廢の中に強烈な刺激を求める傾向は、一方に於て所謂惡の華を讚美し、腐醜の中に新美を見出すと共に、毒婦型の女性や、不良性を帯びた青少年等を好んで取扱つてゐる。前者では江戸の爛熟した情調の中に美しき者、強き者の勝利を謳つた「お才と己之介」(「お艶殺し」(別項)等が著名であるし、後者にも淺草公園の裏面に取材して樂屋に出入する人々を中心とした「鮫人」等にその一例が認められる。更に異常な事件に強い興味を抱く作者は、一面に於て怪異な幻想を弄び、「人魚の嘆き」(「魔術師」(ハッサン・カンの妖術)「人面疽」の如き作を書き、摩訶不思議の世界を夢みると共に、他面に於ては人間心理の偏極を探り、對人關係の奇異を描出してゐる。それ／＼金と銀にも喩ふべき資質

を有する二人の洋畫家の藝術上に於ける怖るべき心的葛藤を語る「金と銀」、殺人者として兄を疑ひ絶えず自ら戦き怯えてゐる少年の慘らしい不安を敘した「或る少年の怏れ」、惡と善と全く相反した二つの性格の物凄までの相剋の姿を暴いて、人間性の深處に觸れた「AとBの話」、友の妻を奪つた男と、彼の女を友に與へた男と、彼等の間に潜む奇怪な三角關係を描く「神と人との間」、或る有閑夫人を圍る遊戯的な變態戀愛の複雑した事相を剔り、彼女自身をして詳細に關西辯で語らせてゐる「(まんど)」、いづれも常規を絶つた世界の諸相である。それからこの作家の作には、「秘密」(友田と松永の話)「日本に於けるクリップン事件」(「黒白」)等の如く探偵趣味の濃厚なもの、「少年」(「神童」(兄弟)「二人の稚兒」)の如く現實がそのまま夢幻と重なり合ふ少年の世界に取材したもの等が眼につくが、これ等も不可思議の領域を追ひ、夢幻境の詩美に憧れるところから來てゐるので、過去を描いても單なる追憶に終ることは殆どない。徳川期や王朝時代に屢々取材するのも一特色であるが、彼は寧ろそれ等を近代化した未知の國として取扱つてゐる。それであるから外國を舞臺とし、異國の情調を背景とした作は勿論であるが、その他の作でも、彼のものには一般に幻想美の豊かな異國的な香氣が漲つてゐる。以上の如くその文學は、妖艶と怪奇と類廢の夢幻的な交錯の中に、絢爛な姿態を發揮した耽美的・官能的色彩の濃厚熾烈なもので、この傾きは、耽美的なオスカア・ワイルド、怪奇的なエドガア・アラン・ポオ、惡の華を歌つたボオドレエル等の文學の影響を承けた前期に殊に顯著である。所謂惡魔主義(別項)と呼ばれた

たにざき



時代で、當時の作には誇張と作爲の跡が窺はれる。音や色の感覺にまで交響する齒痛感の幻覺を記した「病瘵の幻想」等、その適例である。と同時に、智巧に走り過ぎる傾きのあるもの認められる。現實と空想の薄氣味悪い交錯に着想し、或る劇作家が作品の世界に託して、その妻を暗殺する事件を仕組んだ「呪はれた戯曲」等に、その一例が求められる。それが後期になると、遙かに落着きと自然さを生じ、風格の大を加へて来た。盲人の口を通して戦國時代の表裏を語らせてゐる「盲目物語」は、その尤なるものである。これを通じて見るに豊かな想像力と多面的な才氣と鋭い官能の働きと優れた構想力とによつて、強い個性を通じて打ち出された精力的な文學で、その文章も亦その内容にふさはしく、瑰麗な辭句の間に放膽な筆勢が溢れ、而も獨特のねばり強さを持つてゐる。かくの如き種々の特色は、その戯曲作品に就いても同様であるが、唯美主義(別項)の立場に據つて近代の情痴を詩化した彼の小説の代表作としては、「痴人の愛」(別項)を擧げる事が出来る。戯曲家としての潤一郎は小説家大谷崎には遙かに及ばぬものではあるが、「愛すればこそ」(別項)を魁に、大正十一年から十三年にかけて、「お國と五平」(別項)「永遠の偶像」(本牧夜話)「白狐の湯」(愛なき人々)「無明と愛染」(腕角力)「マンドリンを弾く男」等を連続的に發表して、彼の戯曲時代を現出し、これ等は殆ど何れも上演せられ、文壇劇壇の好評を博したエポックの作であつた。由來、當時に於ける日本の戯曲は、常に小説よりも一歩遅れてをり、従つて彼の戯曲時代が我が戯曲界に投じた波紋も、決して小さいものではなかつた。當時問題劇・主題劇

自然主義劇、或は愚昧なる史劇の祭えた我が劇界に、心理劇の曙光を投じ、詩・象徴・超現實・新感覺・主觀・情緒・怪美の諸要素を齎したののは、彼の戯曲の大なる役割であつた。又大正末期の戯曲全盛時代を招來するに與つて力あつたことも認めなければならぬ。表立たぬとはいふものの、その影響は甚だ大なるものがあつた。「史的地位」明治末から大正へかけてその芳烈妖異な文學を展開し、下り坂に向つた自然主義の平板單調を打破した異数の作家として、又日本の文壇に比類のない耽美主義の旗幟を翻した最もユニークな作家として、近代文學に重きをなす特異の地位を占めてゐる。「影響」新浪漫主義の大立物ではあつたが、その作風が餘りにも獨自偏奇なものであつただけ、思潮の上にて於て隱約の間に脈絡あるものは少くないが、影響といふ程のもの、大正期の藝術派的傾向を含む作家達の一部に、部分的な僅かなものが認められる位のものである。〔湯地・舟橋〕

【参考】饒舌録 谷崎潤一郎〇倚松庵隨筆 同上

**谷崎精一** たにざき 小説家 〔閏歴〕明治二十三年十二月十九日東京日本橋に生れた。谷崎潤一郎の弟、早稻田大學文學部英文學科に入り、廣津和郎等の同期生として鳥村抱月・相馬御風等の指導を受けた。大正二年早大を卒業、間もなく同大學文學部講師となり、後更に教授となつたが、作家としての生涯は、大正元年廣津和郎・相馬泰三・葛西善藏等の同人雜誌「奇蹟」の刊行された時、少し遅れてその同人となつた時に始まる。〔著作〕單行本には、短篇集「生と死の愛」(蒼き夜と空)地に類つて「静かなる世界」(線路の上)或る姉妹「美しき人」(水のほとり)。長・中篇小説「離

合」(結婚期)「戀愛摸索者」(歡樂の門)「別宴」(誘惑)「明暗の街」(大空の下)「火を戀ふ」などがある。別に翻譯「先驅者」(メレジュコフスキイ)、「赤き死の假面」(ボオ)、「タイス」(アナトール・フランス)、「女の一生」(モウパッサン)その他がある。〔作風〕上品に落着いた、言はば極めて御行儀のいゝ作風である。破綻も少い代りに、何時も定石通りといふ感で面白味にも乏しい。〔片岡〕

**田螺金魚** たにし 洒落本作家 〔本名〕未詳 〔別號〕田水金魚、茶にし金魚 〔生歿〕未詳 〔閏歴〕神田三河町の町醫者の子と「戯作者小傳」(江戸作者部類)に見えてゐる外、閏歴等は全く不明。但しその號や、作品十八大通百手枕等に依つて、彼の號は十八大通の一人、藏前の富豪大口屋文魚に貫つたのか、或はそれに因んだのか、或は又、十八大通の一人として森羅萬象等と交通があつたであらうと推定される。彼の處女作は、洒落本「妓者呼子鳥」(別項)(安永六年)で、「多荷論」(別項)(安永九年)以後の作品は見えない。夭死したのか、或は別の匿名を用ひたのか、全く筆を絶つたのか不明である。〔著作〕前に擧げたものの外、契情買虎之巻(別項)安永七年〇一事千金(同年)〇嬌女皮肉論(別項)(同年)〇十八大通百手枕(別項)(同年) 〔作風・史的地位〕彼の洒落本の傾向は、劃然と二分する事が出来る。一は「妓者呼子鳥」契情買虎之巻の如く脚色あり、遊女或は藝者と客との戀愛を濃厚に描寫したもので、他は「一事千金」(嬌女皮肉論)十八大通百手枕の如き洒落を中心として、洒落本の在來の型をそのまま踏襲せるものである。而して彼の功績は前者に在るのであつて、この描寫、創作態度は、山東京傳・二世梅若里谷峨・鼻山

人等によつて繼承せられ、人情本の基礎をなすと共に、ひいては明治時代の戀愛小説の祖ともなつたものである。この點で彼の作品は江戸文學の一角に永久に一つの地歩を占むるものと云ふべきである。〔山崎〕

**谷千生** たにちな 國語學者 〔生歿〕生年未詳。明治二十一年九月八日、徳島縣徳島町に歿す。享年未詳。〔閏歴〕徳島藩の銃卒で、初め江戸に住んでゐたが、安政四年の頃郷里徳島へ歸つた。當時千生は狂歌・俳諧・川柳等を好み、その方面の書が本箱十個程あつた。時に近隣にゐた友人阿方豊武は藤屋春雄の門に入つて歌文を學んでゐた。この豊武が千生に歌文・語法の研究を勧め、先づ「紐鏡」(別項)を千生に貸したところ、一ヶ月程の後返却し、更に「詞の玉緒」(詞八箇)「詞通路」(各別項)等を借りて一年ばかり獨學した。次いで豊武の勧めに依つて藤屋春雄の門に入つて、歌文・語法の事を學んだ。千生は天性學を好み、記憶力に富んでゐた。元治元年朝廷と幕府との關係が危くなつたので、千生も豊武も藩主に從つて京都へ赴いた。時に或る日豊武が千生を訪ふと、書籍五百巻ばかりを荒縄で結んで置いてあつたので、豊武が、かゝる戦亂の際に書物など購入する必要はない。書物を購ふ金があつたら、それは肌身につけて一朝事ある時の用に供すべきであると言ふと、千生は有事の際に金を持つてゐても、それは自分のものにはならない、かゝる亂世の時には書物の値が頗る安いから、自分は出来る限り多く購入して郷里へ送つて置き、若し自分が命永らへたなら、生涯これを読まうと思ふ。又自分は戦死しても、これ等の書が我が郷里にあれば、誰かが讀むであらうと。千生はその後奥羽地

方まで轉戦したが、暇があれば書を求めて郷里へ送り、その數、數千巻に及んだ。後、千生は無事に郷里に歸り、益々書を求めたので、萬を以て數へる程の藏書家になつた。明治維新後、徳島の國幣中社大鹿比古神社の禰宜になり、七八年勤王の事、大、徳島國の事、勤王の事、

ルが低い身分の娘(天鹿子)と戀に陥ち、父母の戒めに背いて結婚し、伊太利に落ち延びる。初めは夫婦仲もよく縁(エリトス)・瑠璃(リ、アン)の二女を儲ける。ところが成人が妻の無教育に愛想を盡しかけてゐる矢先、以前成人の妻になりかけた女生が伊太利

奇的でなしに、家庭的・心理的の分子が目立つてゐる點で、更に政治家の手に成つた恐らく最後の翻譯小説であらうと思はれる點で、注目すべきものである。尤も翻譯とは言つても全譯ではなく、地名・人名などは日本風に翻譯

言ふ。狸が腹鼓を打つ内に將人は浮れ出す。隙を見て狸は弓矢を拵つて將人を追ひ込む。【解説】寛正の紩河原勸進能番組中にも「ハラツミ」と見えてゐる古い狂言である。「犬筑波集」にも、「下手猿樂に似たる化物、拍子にも合はぬ里の裏皮」がある。方は「内狐」(別項)に







人は、小牧近江・金子洋文・今野賢三・近江谷友治・畠山松治郎・山川亮等。(一) 大正十年十月、東京に於て創刊、同十二年九月の關東大震災直前まで續刊。同人として、村松正俊・佐々木孝丸・柳瀬正夢・松本弘二、次いで平林初之輔・青野季吉・前田河廣一郎・中西伊之助・佐野袈沙美・津田光造・武藤直治等新たに参加し、執筆家として内外著名の進歩的思想家が名を列ねた。普通「種時く人」と稱する場合、第二次を指すのである。【業績】「種時く人」以前にも、反ブルジョア文學の萌芽はあつたが、反ブルジョア文學者・思想家を最初に總動員し、組織を與へ、また「種時く人」の事實上の創始者たるクラルテ運動の日本代表者小牧近江の、第三インターナショナルの解説・宣傳に早くも示されてゐるやうに、日本のプロレタリア文化運動に、インターナショナル精神と、アンチ・ミリタリズム精神とを植ゑつけた最初の名譽ある功績を擔ふものである。「種時く人」の出現のこの兩精神の宣布の役割を終へ、共産主義的・無政府主義的・民主主義的・自由主義的な混成を止揚し、自然發生的なプロレタリアートの文化欲求から、マルクス主義への理論的方向をもつ契機を作つた。(文藝戦線参照)

年か経つて、久邇の廢都が荒れすさんだ頃の作でなければならぬ。よつて本書の成立も、天平二十年頃より前には、遡り得ないと思はれる。故に「萬葉集」に名の見える五つの和歌集(柿本朝臣人麻呂歌集・類聚歌林・高橋連麻呂之歌集・笠朝臣金村歌集及び本書の中、最も時代の新しいものである。【解説】本書は今日傳はらない。ただ「萬葉集」中の歌に、「田邊福麻呂之歌集」と註記してあるのによつて、この本の存在してゐたことが推定されるのである。「萬葉集」中に、その作品の出でゐる場所と歌數は、卷六の最後の所に二十一首(長歌一首、短歌十五)、卷九の相聞部に三首(長歌一首、短歌二首)、卷九の挽歌部に七首(長歌三首、短歌四首)。計、長歌十首、短歌二十一首。これが今日知り得るこの書の内容のすべてであつて、長歌の多い事は注目すべきである。この書の組織體裁は「萬葉集」の卷六と卷九の挽歌部に、本書から採つてある部分によつて推察出来る。それは、この二箇所は原本の體裁を崩さずに原本のままの形で「萬葉集」に取入れられてゐる(同様の例は集中に多い)。それによつて次の事實が知られる。(一)各歌毎に題と歌數とを掲げて次第してあつた事、(二)作者の名を記してなかつた事、(三)反歌の歌數を記すには、題詞中には「長歌何首并短歌」の形で記し、次に長歌と反歌との中間の所に「反歌幾首」と挿入して、こゝで反歌の歌數を明示する書法をとつた事、(四)反歌の事を短歌と記してゐる事等である。なほ今日見れる所では、卷六のものには雜歌部、卷九所出のものは相聞部・挽歌部に收めてあるが、本書がこの三部に分れてゐたか否かは不明である。而して作品は全部明るい歌で充ちてゐる。卷九挽歌部に出づる弟を

弟ふ歌ですら、己の感情を直寫せずに譬喩や序詞の類を多數に用ひてゐるため、強い悲歎は現されてゐない。他の部分は一層軽い調子のみで、悪く言へば重みがなく、上すべりの歌のみである。舊都の荒廢を痛惜しても、荒廢の情景が一通りはつきりと描寫されてゐるに拘はらず、廢れた都の様が目に浮かんで讀者を心から動かすこと人麿の近江荒都の歌の如くでないのは、全くこの輕すぎ明すぎる歌の性質によるのである。これは卷十八に見える田邊福麻呂の作も同様で、全く福麻呂の歌の根本的特性だつたと見られる。【森本】

【参考】萬葉集第九卷考 森本治吉(國語と國文學 昭和三ノ一二)

名家だつた。以後代々武將の家として兵馬の實權を握つて重んぜられ、金村(武烈・繼體天皇の朝)に至つて、天皇の御即位をすら自由にする程の權勢であつたが、對韓策を誤つてより物部氏に乗ぜられ吹負等の壬申の功があつたに拘はらず、旅人の時代には名家としての名のみ高く、實權は漸く他氏に移りかけてゐた。【閱歷】「續日本紀」和銅三年の條に、「左將軍正五位上、大伴宿禰旅人」とあるのが、彼の官位の初見で、養老二年(五十四歳)中納言、養老四年、征軍人持節大將軍となつて大宰府の隼人の亂を平けて還る。神龜年間に太宰帥となつて九州に下る(萬葉集卷三挽歌部)。神龜五年そこで妻を失つた。後、天平二年秋(六十六歳)大納言に任ぜられ、同年冬十二月京へ向つて太宰府を去つた(萬葉集卷三挽歌部、卷六雜歌部にその折の作品が見える)。この太宰府に於ける三年間は、歌人としての彼には以前の六十年に數倍する價值ある年月であつた。彼の作の大部分は、この九州に於ける生活(宴飲、小さな旅、諸人との贈答などの間から生れた。當時筑前守だつた山上憶良との交りも、この時期の彼に影響を與へたであらう。歸京した翌年正月、從二位に叙せられ、七月薨じた。【人物】學識廣く殊に支那文學に通じてゐたと察せられる。「萬葉集」卷五なる「遊松浦河序」と歌とは「遊仙窟」に基づき、卷三の「讚酒歌」の全體の思想は老莊に出で、「七の賢き人」と云ふ言葉は「晉書」に、「價無き寶は法華經に出づるが如き、その一例である。従つて思想に於ても外來思想の影響を受ける事が多かつた。併し政治的手腕にはたけて居らなかつたらしい。若し彼にその手腕があれば、大伴家昔日の權勢を挽回し得たであらう。性格は高

田神祭

【田神祭】元來飛騨下呂の氏神の祭をいふのだが、諸國の御田植祭と同じことである。(御田植祭参照) 【小寺】

田邊福麻呂之歌集

【作者】田邊福麻呂 【成立】福麻呂が己の歌を集めた私歌集と考へられる。成立年代は不明であるが、卷六の久邇の都の荒廢を傷む歌と難波の新都を讚美する歌は、少くとも天平十六年この年久邇より難波へ遷都すより幾

い家柄と多幸な官歴、ゆびくした歌補等から考へて、明るく朗らかであつたらうと察せられる。併し彼の「讚酒歌」を資料にして、直ちに彼の性格が享樂的だつたらうと結論するのは、甚だ危険である。【作品】彼の作品は、その子家持の編した巻、即ち卷三、短歌三

線で歌ふ所に、最も彼の本領が發揮される。萬葉一方の代表作たる讚酒歌の、あの大まかな流るゝやうな歌調も、根本は彼の抒情的心境に根ざしてゐるもので、こゝから湧けばこそ理窟になりがちな歌材を能く詩化し得たのである。而してその表現は、皆、技巧の亦を

者に益する事が多いので、大に世に行はれ、隨つて本書を批評し研究した書も亦現はれた。小澤蘆庵の「玉露難詞」(寫本一卷)は冒頭の「さめぬ枕」とある「枕」と云ふ語の不穩當であると云ふのを初め、數十條を擧げて論駁した

つまつみてこゝろを野べのすさびに」とある歌の心である。【刊行】一卷から三巻までは寛政六年に、四巻から六巻までは同九年に、以下三巻づつ出版され、「玉かつま目録」二巻を加へ、併せて十五巻が文化九年までに刊行。

性高は高



下呂の氏神の祭をいふのだが、諸國の御田植祭と同じことである。(御田植祭参照) 「小寺」  
**田邊福麻呂之歌集** (たのべのふかしのうた) 成立 福麻呂が己の歌を集めた私歌集と考へられる。成立年代は不明であるが、卷六の久邇の都の荒廢を傷む歌と難波の新都を讚美する歌は、少くとも天平十六年(この年久邇より遷都(遷都)より幾

詞中には「長歌何首并短歌」の形で記し、次に長歌と反歌との中間の所に「反歌幾首」と挿入して、こゝで反歌の歌数を明示する書法をとつた事、(四)反歌の事を短歌と記してゐる事等である。なほ今日見る所では、卷六のものは雜歌部、卷九所出のものは相關部・挽歌部に收めてあるが、本書がこの三部に分れてゐたか否かは不明である。而して作品は全部明るい歌で充ちてゐる。卷九挽歌部に出づる弟を

る。「生歿」天智天皇の四年(歿年より逆算)に生れ、天平三年(一三九)七月薨す。但し、その薨じた日は傳へによつて小異がある。「公卿補任」には、七月廿五日とあり、「萬葉集」卷三の奥書には七月一日とある。享年六十七。「家系」大伴氏は「古事記」「日本書紀」に天忍日命に出づるとし、この天忍日命は「姓氏錄」「古語拾遺」等に、高産靈神に出づるとする。このまゝを信ずる事が出来ないとしても、神代以來の

者に益する事が多いので、大に世に行はれ、隨つて本書を批評し研究した書も亦現はれた。小澤廣庵の「玉霞論評」(寫本一巻)は冒頭の「さめぬ枕を」とある「枕」と云ふ語の不穩當であると云ふのを初め、數十條を擧げて論駁したものである。又優婆塞盛徳(加藤千藤の匿名の「玉霞附論」は「玉霞附論」の書き漏らした點について批評したもの。三井高隆(宣長の門人の「辨玉霞二論」は、右の二書を反駁したものである。以上の三部を併せて、「玉霞論評」と題して天保元年に刊行せられてゐる。萩原廣道の「小夜時雨(別項)は、「玉霞」にならつて詞の意味、用ひ方等を記したものであるが、附録の「辨玉霞論評」「辨玉霞附論脱漏」は玉霞の批評である。井上文雄の「伊勢のいへづ」と「二卷。第一卷は安政六年刊、第二卷は文久二年刊」は、「玉霞」及び「小夜時雨」に就いて論じたもの。中島廣足の「玉霞密の小篋」(前編三卷、後編二卷。前編は文久七年刊、明治二十一年に前後編共刊行)は、「玉霞」の補遺で、その説の證明とすべき歌文を多く集めたものである。〔龜田〕

い家柄と多幸な官職、ゆびくした職等から考へて、明るく朗らかであつたらうと察せられる。併し彼の「讚」酒歌を資料にして、直ちに彼の性格が享樂的だつたらうと結論するのは、甚だ危険である。【作風】彼の作品は、その子家持の編した巻、即ち卷三に、短歌三十一首、卷四に短歌四首、卷五に短歌二十八首(これは最近の研究により以前認められてゐた數よりも増加した歌數である)、卷六に短歌九首、卷八に短歌四首、總計長歌一首、短歌七十六首。この外に、卷五に載する手紙及び散文がある(なほ澤瀉久孝氏は、卷五鎮懷石の長歌反歌をも憶良に非ず、旅人の作としてゐる)。而してこの家持の聚集に洩れたものが必ずあつたと思はれる。それは旅人の作品で年代の明かなものは、神龜五年(六十二)以後の作に限つてゐるから、その青年・壯年時代の作品は恐らくは殆ど全部佚したものであらう。

【作風】彼の作には、純客觀的な歌が全然ない。つまり彼は、天成の抒情詩人であつたと言へる。彼には所謂叙景歌なるものが一首もない。當然叙景的になるべき題材ですら、「我が苑に梅の花散る久方の天より雪の流れくるらし」(卷五)の如く、空想化し抒情化して現はさずに居れないのが、彼の特色である。天平の初年には、既に高市黒人・山部赤人(各別項)が出て、客觀的な作風を確立してゐるのに、彼に一首もさうした新歌風の浸潤が見えず、古來の記紀の歌謡以來の抒情歌の本脈から出てゐなかつた事は注目すべき現象である。かく純粹に抒情の歌境に沈潜した爲めか、彼の抒情歌には一讀人に迫るものが多い。世の中は空しきものと知る時しいよよます悲しかりけり」(卷五)の如く、突きつめた悲歎を太い

【参考】萬葉集講座(作者研究篇) 旅寝論(たのべ)「湖東問答」を見よ。 玉あられ (たのべ) 語學書 一巻一册 【著者】本居宣長(なほ) 自序の冒頭に「玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめぬ枕を」とある歌による。【刊行】寛政四年。天保十四年再刊【諸本】本居宣長全集第五卷、増補本居全集第九卷所收。【内容】雅文を作るための、正しい言語の用法を説いたものである。即ち當時の人の歌や文章は、近世の人の作つたものをならふために、「よからぬ詞、えもいはぬひがごともの、世にひろごりて、さだまれることのごとなれる」を訂正しようとして、「常にみよなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て」、論じたものである。著者は正しい言語とは、勅撰集の言語であるとしてゐる。本文は「歌の部」と「文の部」に分け、歌の部六十六條、文の部四十五條を擧げて、語意上、又は文法上誤られやすい語について例證を擧げ、考案を附して詳しく論じてゐる。【影響】この書は、初學

つまつみてこゝろを野へのすさびに」とある歌の心である。【刊行】一巻から三巻までは寛政六年に、四巻から六巻までは同九年に、以下三巻づつ出版され、「玉かつま目録」二巻を加へ、併せて十五巻が文化九年までに刊行。【諸本】本居宣長全集、日本古典全集所收【内容】宣長の隨筆集であるが、特殊な部門に限らず、彼の學問・思想の全般に互つてゐて極めて範圍が廣く、且つ深い學殖を示してゐる。門人知友から聞いた珍しい地方の土俗に關する事もある。古書に載つてゐる記事の拔萃もあつてゐる。而して單なる知識の集成ではなくて、彼の古道の精神、人生觀、又その研究態度等、根本的な思想の窺はれる點に尊重すべきものがある。第一卷は初若菜、第二卷は櫻の落葉、第三卷はたちばな、第四卷はわすれ草、第五卷は枯野のすすき、第六卷はからあむ、第七卷はふちなみ、第八卷は萩の下葉、第九卷は花の雪、第十卷は山菅、第十一卷はさねかづら、第十二卷は山ふき、第十三卷はおもひ草、第十四卷はつら／＼椿と題し、十三巻までは彼の清書して置いたもの、つら／＼椿は中途でかきさして下書のまゝであつたのを、うつして十四巻としたものである。卷名は内容とは關係がなく思ひのまゝにつけたものである。【價值】「古事記傳」の著者として近世國學者中、最大な學殖をもつてゐた宣長の隨筆として、知識的に尊重すべきはもとより、彼の學究としての眞摯な態度が深くあらはれてゐる。そして古道のすたれたのを歎き、物のあはれを説いた彼の思想は隨所にうかがはれる。彼の歌論・藝術論を知るためには見逃されぬもの一つである。文章も平

【参考】萬葉集講座(作者研究篇) 旅寝論(たのべ)「湖東問答」を見よ。 玉あられ (たのべ) 語學書 一巻一册 【著者】本居宣長(なほ) 自序の冒頭に「玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめぬ枕を」とある歌による。【刊行】寛政四年。天保十四年再刊【諸本】本居宣長全集第五卷、増補本居全集第九卷所收。【内容】雅文を作るための、正しい言語の用法を説いたものである。即ち當時の人の歌や文章は、近世の人の作つたものをならふために、「よからぬ詞、えもいはぬひがごともの、世にひろごりて、さだまれることのごとなれる」を訂正しようとして、「常にみよなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て」、論じたものである。著者は正しい言語とは、勅撰集の言語であるとしてゐる。本文は「歌の部」と「文の部」に分け、歌の部六十六條、文の部四十五條を擧げて、語意上、又は文法上誤られやすい語について例證を擧げ、考案を附して詳しく論じてゐる。【影響】この書は、初學

【参考】萬葉集講座(作者研究篇) 旅寝論(たのべ)「湖東問答」を見よ。 玉あられ (たのべ) 語學書 一巻一册 【著者】本居宣長(なほ) 自序の冒頭に「玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめぬ枕を」とある歌による。【刊行】寛政四年。天保十四年再刊【諸本】本居宣長全集第五卷、増補本居全集第九卷所收。【内容】雅文を作るための、正しい言語の用法を説いたものである。即ち當時の人の歌や文章は、近世の人の作つたものをならふために、「よからぬ詞、えもいはぬひがごともの、世にひろごりて、さだまれることのごとなれる」を訂正しようとして、「常にみよなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て」、論じたものである。著者は正しい言語とは、勅撰集の言語であるとしてゐる。本文は「歌の部」と「文の部」に分け、歌の部六十六條、文の部四十五條を擧げて、語意上、又は文法上誤られやすい語について例證を擧げ、考案を附して詳しく論じてゐる。【影響】この書は、初學

【参考】萬葉集講座(作者研究篇) 旅寝論(たのべ)「湖東問答」を見よ。 玉あられ (たのべ) 語學書 一巻一册 【著者】本居宣長(なほ) 自序の冒頭に「玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめぬ枕を」とある歌による。【刊行】寛政四年。天保十四年再刊【諸本】本居宣長全集第五卷、増補本居全集第九卷所收。【内容】雅文を作るための、正しい言語の用法を説いたものである。即ち當時の人の歌や文章は、近世の人の作つたものをならふために、「よからぬ詞、えもいはぬひがごともの、世にひろごりて、さだまれることのごとなれる」を訂正しようとして、「常にみよなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て」、論じたものである。著者は正しい言語とは、勅撰集の言語であるとしてゐる。本文は「歌の部」と「文の部」に分け、歌の部六十六條、文の部四十五條を擧げて、語意上、又は文法上誤られやすい語について例證を擧げ、考案を附して詳しく論じてゐる。【影響】この書は、初學

【参考】萬葉集講座(作者研究篇) 旅寝論(たのべ)「湖東問答」を見よ。 玉あられ (たのべ) 語學書 一巻一册 【著者】本居宣長(なほ) 自序の冒頭に「玉あられまなびのまどに音たてておどろかさばやさめぬ枕を」とある歌による。【刊行】寛政四年。天保十四年再刊【諸本】本居宣長全集第五卷、増補本居全集第九卷所收。【内容】雅文を作るための、正しい言語の用法を説いたものである。即ち當時の人の歌や文章は、近世の人の作つたものをならふために、「よからぬ詞、えもいはぬひがごともの、世にひろごりて、さだまれることのごとなれる」を訂正しようとして、「常にみよなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て」、論じたものである。著者は正しい言語とは、勅撰集の言語であるとしてゐる。本文は「歌の部」と「文の部」に分け、歌の部六十六條、文の部四十五條を擧げて、語意上、又は文法上誤られやすい語について例證を擧げ、考案を附して詳しく論じてゐる。【影響】この書は、初學

たびねろ たまかつ



易でおもしろい部分に富み、單なる學究たるばかりでなく、秀れた文章家としての彼に接することが出来る。

玉菫 源氏物語の謡曲を見よ。

玉川日記 人情本 七編 二十一

【作者】二代南仙笑慈滿人(爲永春水)【畫工】溪齋英泉・春川英笑・歌川國丸・歌川國直【名稱】内題には「松月と角書、第六編から内題には「拾遺の玉川」とある。書名は武藏玉川を中心とした土地を背景としてゐるから、角書は松露寺の事を用ひたからである。【刊行】初・二・三編は文政十年(推定)、四・五編は文政十二年、六・七編は天保元年(推定)【題材】「萬葉集」中の菟名負處女説話、下總眞間手古那説話、「天和物語」の生田川説話等に依つて作られた事が巻頭に斷つてある。又化政度以後、江戸で流行した和合神が採つてある。

【梗概】武藏玉川の畔に、調布屋右衛門と云ふ分限者がゐた。妻を失ひお絹と云ふ美しい一人娘と暮してゐたが、附近の水吞百姓窮作に金を貸し、期日になつても拂へぬのを強く催促しその娘お糸を後妻に貰ひ受けた。この調布屋に子飼の手代染助と云ふ美男がゐた。お絹と後には夫婦にするが右衛門の考へであつたが、お絹も年頃とて頻りに染助を挑む。後妻お糸も染助に戀ひし、お絹と戀争ひを始めた。染助はお糸の情も嬉しくお絹も憎みならず、進退に谷まり小心な彼は書置を残し、玉川に投身して死んだ。染助の死を悲しんでお絹も間もなく死に、窮作も病死した。程なく右衛門も續いて死んだ。お糸は後家の身一つで家業を替み無事にその日を送つてゐた。故に同業堀兼屋井兵衛と云ふ富豪があり、お糸は絶えず出入して家業の事をいろいろ相談

してゐた。井兵衛は三十を越して子がなかつたが、中野の陰陽山和合寺の和合神に祈つて妻お波は懐妊し、染次郎が生まれた。同じ頃千代田村片邊屋田鶴六にお貫と云ふ女子が生れた。この二人は生れながら不思議があつた。染次郎は掌に大黒天の像を握つて生れた。これはお糸が染助に與へたものである。又お貫は或る墓から鏡を掘り出し愛玩した。これはお絹の遺物である。別の人には解らぬがお貫はお絹の生れ代り、染次郎は染助の生れ代りである事をお糸だけは薄々悟つてゐた。かくて染次郎は十六の美少年になつた。四十にならうとするお糸の美しい年増姿に戀ひして言ひ寄つた。そして旅に出た二人は沼津の片ほとりで偶然出會ひ、其處で深く契りを結んだ。

妓に調布屋・堀兼屋兩家の得意屋敷、月本家の権臣高井戸右衛門はお糸に心を寄せて口説いたが聴かれないのを恨み、染次郎と譯あるを知り、堀兼屋に月本家を失敗せよと企てる。お糸はこれを心配し高井戸を巧にあやなし、染次郎を洞房にお六の許に隠れさせる。その隣家の藝者島吉は彼を戀し遂に夫婦となつた。島吉の本名はお貫で、お絹の再生なのであつた。かくてこの二人は貧と病とに責められたが、遂に目出度く添ひ遂げる。お糸は色情の迷ひの恐しさを悟り、尼となつて松露寺に弟子となり、妙松尼と號し、九十餘歳の長壽を保つた。

【構想】本書に對する作者の興味は、生田川説話を逆にした二女に挑まれて一男が自殺する趣向と、十六の美少年と四十の年増女の爛れた戀の描寫とにあつたらしい。特に後者は可なり強い肉感を出してゐるので、作者も憚つたのであらう、前世の因縁で説明し、最後

は女の悔悟に終らしてゐる。春水の他の作品には見出せぬ興味ある構想であつたに拘はらず、時代道徳に束縛され、結局は當時の人情本以上に飛躍出来なかつた。【備考】本書第四・五編は松亭金水の序があり、卷末に「爲永春水元稿、春水が舎友松亭金水補綴」とあるから、春水の作品によくある代作即ち金水の代作であらう。この兩編が目立つて拙くただ筋をたどるといふ筆致である。多少讀者からそんな批評が出たものか、第六編序に「今年は自筆を染たり」と斷り、門人友人の綴つたのは「初念にたがふ類のみ」と辯解してゐる。

玉菊燈籠辨 酒落本 一册

【作者】南陀伽紫蘭(窪田俊滿)【畫工】自畫【名稱】玉菊燈籠に關する説明の意。【刊行】安永九年【諸本】酒落本大系第四卷所收【題材】玉菊燈籠は吉原年中行事の一つで、毎年七月一日から三十日まで、仲之町引手茶屋の軒に點する盞蘭盆の燈籠である。これを角町中萬字屋勘兵衛抱へ遊女玉菊が、享保十一年三月二十九日に、大酒のために二十五歳で病歿したのと結び付け、玉菊追善のためと稱して、玉菊燈籠と呼ぶに至つた。本書はこれを題材としたもので、書中、「江戸太夫何丈が水でうしと云ふ淨瑠璃を作り」とあるのは、吉原の俳人若本乾什をさし、「先生のお出しなされた古今青樓咄之書有多にも書ておきなさつた」とあるのは、この作者の黄表紙の宣傳で、安永九年の刊本である。

【梗概】先づ最初に玉菊燈籠の由來を説き、やがて主人がひとり机に向つてゐると、玉菊の亡靈が現れ、昔の名妓の名を數へたて、「ししかしこの頃のおいらんは」と眞芝屋の尻川が金に轉んで盲人に身請けされた事を罵倒し、吉

原の遊びの實利的になつた事を歎き、最後に玉子の稻荷に自分の句を巻頭にした額の奉納されたお禮を述べると思へば夢は覺める。

【構想】本書は、玉菊の靈が現れて吉原の近狀を語ると云ふ異類物に近い變格的酒落本の一つであるが、作者の興味の中心は、この年の玉菊燈籠の趣向が例年と異なつてゐる事と、眞芝屋尻川の盲人に身請された事とにあるらしい。これは松葉屋瀬川が鳥山檢校に身請された事實を指すもので、既に田螺金魚作「契情買虎之巻(別項)」の題材となつたものである。本書が尻川と替名して罵倒してゐるのは、當時の通人間に大きな衝動を與へた事を示すものであらう。全體に過去の吉原を讚美し、現在の吉原に不満をもつ態度は、保守的な通人の常套と言ふべきである。

玉櫛笥 俳論一册 【著者】池田

是誰。是誰は又是水ともいふ。播磨國姫路の人。落葉堂・秋風子と號した。一年上京して安原貞室の門に入り、「聖堂獨吟百韻」を遺し、後松永貞徳の直弟となる。「玉櫛笥」の外に、「初元結」破書「播磨姫路」呂玖呂等がある。【刊行】寛文二年二月、「初元結(別項)」の附録として出版された。【諸本】俳諧文庫・俳諧論集に所收。【由來】著者が巻頭に記した所によると、本書は落葉堂を訪れた垂柳・夕柳の二子を相手として俳諧に關する不審の條々に答へた、その問答を集めたものといふ事になつてゐる。【内容】問答體を用ひて、俳諧初心者の注意すべき條々及び著者の俳諧に關する信念を十五條に分つて述べたものである。その條々は、一風に偏つてはならぬこと、心と身とを俳諧にすべきこと、學殖を必要とする事の如き本質的な問題もあるが、附合の

【この間五ヶ年経過】「序幕」(安養寺門前供侍)父筑前守法事の日。右衛門佐忠之は性格殺伐



後妻お糸は染助に戀ひし、お絹と戀争ひを始めた。染助はお糸の情も嬉しくお絹も憎からず、進退に谷まり小心な彼は書置を残し、玉川に投身して死んだ。染助の死を悲しんでお絹も間もなく死に、窮作も病死した。程なくお右衛門も續いて死んだ。お糸は後家の身一つで家業を替み無事にその日を送つてゐた。技に同業堀屋井兵衛と云ふ富豪があり、お糸は絶えず出入して家業の事をいへり、相談

色情の迷ひの恐しさを悟り、尼となつて松露寺に弟子となり、妙松尼と號し、九十餘歳の長壽を保つた。  
【構想】本書に對する作者の興味は、生田川説話を逆にした二女に挑まれて一男が自殺する趣向と、十六の美少年と四十の年増女の爛れた戀の描寫にあつたらしい。特に後者は可なり強い肉感を出してゐるので、作者も憚つたのであらう、前世の因縁で説明し、最後

俳人岩本乾什をさし、二先生のお出しなされた古今青樓咄之書有多にも書ておきなさつた」とあるのは、この作者の黄表紙の宣傳で、安永九年の刊本である。  
【梗概】先づ最初に玉菊燈籠の由來を説き、やがて主人がひとり机に向つてゐると、玉菊の亡靈が現れ、昔の名妓の名を數へたて、「しんかこの頃のおいらんは」と眞芝屋の尻川が金に轉んで盲人に身請けされた事を罵倒し、吉

所によると、本書は落葉堂を訪れた垂柳、夕柳の二子を相手として俳諧に關する不審の條々に答へた、その問答を集めたものといふ事になつてゐる。【内容】問答體を用ひて、俳諧初心者の注意すべき條々及び著者の俳諧に關する信念を十五條に分つて述べたものである。その條々は、一風偏つてはならぬこと、心と身とを併諧にすべきこと、學殖を必要とする事の如き本質的な問題もあるが、附合の

最後に發句の例として著者の發句五十句を載めてある。以上の内容に、本書成立の由來を記した著者の言葉が巻頭にある。【批評】本書が世に出たのは、貞門・談林の論争が漸く起らうとする頃で、坊間には徒に異を擡てる者が多かつた。その間に在つて、本書は一流に偏なるは宜しからずといふ態度で書かれた。ただ著者は貞門の秀才で、ために貞門の俳諧は一偏なる點がないなどと、貞門の流儀を顯揚した點があつて、その點から言へば、本書も一風に偏したものと見られる。併し大體に於てその所説は、先づ中庸を得たものといつてよい。

【参考】古事記傳○祕本玉匣○玉くしげ別本  
○直見靈○玉矛百首○玉勝間  
○西尾  
玉櫛箱崎文庫  
十幕 二十四場 お家騒動物 栗山大膳等【諸本】勝造作演劇脚本集第四冊目所收。【興行】明治十年九月、大阪戎座。

【梗概】【大序】(箱崎八幡宮境内)黒田家の太守病氣平癒祈願のための護摩修行の當日である。(同大護院座敷)嫡子忠之は一徹短慮で癪癖が強く、家來を手討にしようとする。(袖ヶ浦磯邊)獵師彌平次は元岐井谷安藝守の家

【参考】古事記傳○祕本玉匣○玉くしげ別本  
○直見靈○玉矛百首○玉勝間  
○西尾  
玉櫛箱崎文庫  
十幕 二十四場 お家騒動物 栗山大膳等【諸本】勝造作演劇脚本集第四冊目所收。【興行】明治十年九月、大阪戎座。

玉くしげ 國學書 一卷 【著者】本居宣長【名稱】「身におはぬしげがしわざも玉くしげあけてだに見よ中の心を」といふ巻首の歌詞による。【成立】天明七年十二月脱稿の「祕本玉匣」(別項)に添へて紀州公(徳川治貞)に上つたもので、「道の大むね今の世の心得を書て奉れるなり云々」といふ端書がある。天明六年若しくはそれ以前に成立したものである。【刊行】板本には「寛政元年十一月刻成」とあるが、その板本が宣長の手許に届いたのは、寛政二年三月であつた(宣長手記著述書上木覺「本居家所蔵による」)。【諸本】本居宣長全集第六卷所載【内容】古道精神を基礎とした國政論で、まづ「まことの道」は、唯一普通であるが、事實に於てはわが國にのみ正しく傳はり、外國にはその傳來を失つて「末々の枝道」しか存しないとし、「道の大むね」としての宇宙生成論及び人生論を試み、皇國の優越性を主張し、「今の世の心得」としての國政論に及んでゐる。【價值】本書は古道説を基

【参考】古事記傳○祕本玉匣○玉くしげ別本  
○直見靈○玉矛百首○玉勝間  
○西尾  
玉櫛箱崎文庫  
十幕 二十四場 お家騒動物 栗山大膳等【諸本】勝造作演劇脚本集第四冊目所收。【興行】明治十年九月、大阪戎座。

【参考】古事記傳○祕本玉匣○玉くしげ別本  
○直見靈○玉矛百首○玉勝間  
○西尾  
玉櫛箱崎文庫  
十幕 二十四場 お家騒動物 栗山大膳等【諸本】勝造作演劇脚本集第四冊目所收。【興行】明治十年九月、大阪戎座。

【参考】古事記傳○祕本玉匣○玉くしげ別本  
○直見靈○玉矛百首○玉勝間  
○西尾  
玉櫛箱崎文庫  
十幕 二十四場 お家騒動物 栗山大膳等【諸本】勝造作演劇脚本集第四冊目所收。【興行】明治十年九月、大阪戎座。



國へ歸着後大膳を追放すると言ふ。孝陽の亡靈のために大暴風雨となる。「七幕」(黒田家本城奥庭) 忠之は軍船を大膳が焼失せしめたと聞き、蟄居の使者を命ずる。(奥殿肩間割) 敢然出仕して諫争する大膳を、忠之は知行を召上げ追放し、主水を跡役へ命ずる。主水は大膳の額を扇子で破つて、紅葉の間の復讐をする。(栗山大膳退城) 退城の大膳は、三萬石の家老となつた主水の小城に出會ひ、悲憤する妻子・若徒鐵平を慰め、幕府へ出訴して五十萬石を救はんと覺悟する。「八幕」(江戸鎌倉河岸) 居酒屋で泥酔してゐる中間は、主水よりお秀の方への密書を、大久保彦左衛門に取上げられてしまふ。彦左は大膳の忠節を賞し後援者となる。「大詰」(阿部豊後守役宅) 大膳の出訴に由る對決。主水初め奸臣等、巧妙に申開きをするが、事態が明白となり、悪人滅亡して騒動は落着する。

【解説】黒田騒動を記録したものに、「盤井物語」栗山大膳記、その他の古文書がある。これ等を實録小説化したものが「寛永箱崎文庫」であつて、本脚本はそれを脚色したものである。脚色物の弊害として餘りに原作の全般に忠實ならんとした所に、印象を薄弱にする缺點がある。近來上演される「栗山大膳」(中村鴈治郎主演)は、この脚本の五幕目以後を改修したものである。黙阿彌作の「筑紫巷談浪白縫」(明治八年十月新富座)及び「黒白論續分博多」(明治十五年十一月新富座)も、大略同巧異曲の脚色ではあるが、「黒白論」が最も要領よく他作を壓してゐる。

【参考】列侯深祕録(國書刊行會) 益軒全集 第五卷(寛永箱崎文庫) 近世實録全書 帝國文庫 〇黒白論續分博多(歌舞伎新報) (尾形)

玉篋兩浦嶼

たまくしげふ 戯曲【作者】森鷗外【發表】明治三十五年十二月、雜誌「歌舞伎」【刊行】大正元年刊「我一幕物」に採録。鷗外全集第四卷所収【初演】明治三十六年一月、市村座。伊井蓉峰・兒島文衛・市川久米八等。【由來】「ファウスト」の筋を伊井に聞かせたところが、座附作者をして中幕にそれを仕組ませようとしたので、その無謀をわらつて鷗外自身が代つて書き與へたものといふ。

【梗概】上下二部より成る韻文劇。「上の巻」(龍宮城の場) 享樂の夢覺めたる浦島太郎が、美しい乙姫と別離の悲しみを述べてゐる。浦島は安逸の生活に堪へかねて事業の事を念ひ元の郷土へ歸らうとする。鯨人の涙は化して珠玉となる。「下の巻」(住、江海岸の場) 後の浦島太郎(浦島の子孫)が漁師大勢を引きつれて海外征服に出陣しようとしてゐる。そこへ立ち戻つて來た浦島太郎が、子孫の勇ましい事業を見て「思ふは祖先、行ふは子孫にこそあれ」といふ。そしてこれも一つの不老不死であると悟る。

【批評】この戯曲は、幽玄莊重の措辭を以て哲學的思索を表現したもので、作者の永生哲學がその基調となつてゐる。また獨逸文學の影響を逸することは出来ない。當時の文學に於てこれ程思想的な作品は他に類を見ない。本作と殆ど同時に坪内博士の舞踊劇「新曲浦島」(前項)が世に出た。當時の文壇の二巨匠が同時に浦島の傳説を借りて、韻文的な戯曲を創作したのは面白い事實だと思はれる。

玉子の角文字 【長田】 黄表紙 三册 十五丁二十二圖【作者】芝全交【畫工】北尾

次一二三四五六七八九十と稱へ、十度これを讀んで、中臣が玉を結ぶわざをするのであ

重政畫風

【名稱】女郎と角書。内題「大客」。女郎の誠と卵の四角は世にないといふ諺を、本書の「大學」を摸擬した漢文の角張つたのに言ひ掛けてある。【刊行】寛政二年鶴屋版【諸本】江戸文學考異・尾崎久彌 本文のみ所収。

【梗概】「大學」を大客とし、朱熹章句を意氣上戸に、前の「子程」曰。大學孔子之遺書云々を「御亭子曰。大客格于先之虛言而云々」と、後の「右傳之十章。釋三治國平天下云々」を「凡傳十章前四章髓論手習指南云々」とし、その中間に二十四章を挿入して、髮、よく寝る女郎、遊女の部屋、以て身賣爲す本手一の商



玉子の角文字

賣 客と遊女とのいざこざ、若い者の給金、遊女の食事、地まはり、千住の遊里、料理番、身分分散、二日酔の小間物店、二朱店のかすり、指切り、夜鷹が富にあたる、せかれた客、

山師客、馬鹿心中、手のある遊女、女房の嫉妬、夫は遊里妻は實家へ、落魄の様な大文學摸擬の文に附會し、且つその註解と補遺を兼ねて後に假名の書入をなし、挿繪の人物の詞書をも加へてゐる。

【構想】寛政の改革による漢學の獎勵は、黄表紙の世界に影響して、既に「孔子綺時于藍染」(別項)は儒教倫理を根柢として、理想の世界を實現せんとしてゐるに反して、本書は聖典「大學」を遊里生活中に投じて、俗の俗にかへしてゐる。この手法を、古狀揃の世界に移した「日永話御伽古狀」(寛政四年版、森羅亭實作)もある。【史的地位】本書は大學を摸擬して茶かした戯作の先行をなしたものの一つである。即ち類似的趣向を持つものには、同年版の「京傳子誌」(山東京傳作洒落本)中の大樂があり、後年の作には「傾城情史」(天保三年版、圓亭貞鶴作洒落本)があり、「大學笑句」(天保年間版、教訓亭主人作滑稽本)等が見える。本書は重心が漢文の方面にかたよつて、繪組みの趣向などが多く顧られなかつたと見える。三馬選黄表紙名作二十三部の内。

【備考】「日永話御伽古狀」今川了俊對愚息仲秋一制詞條々を真似て、實踐辨而人家冥利住恩澤事の如く、二十項近くならべて不精者・篠家伊賀守・夜鷹・いがみの權太・お半長右衛門・助六・難波五人男・勘平・道真・高師直・楠正成等の説話を附會してある。(小池) 鎮魂の歌 鎮魂祭の一種で、鎮魂祭の時に歌ふ歌である。鎮魂祭は天子の御魂の遊離するのを身體の中府に安んじ奉り、御壽命の長久なるを齋ふ祭祀である(合義解)【儀式】毎年十一月中の寅の日に宮内省で行はれる。先づ

るものは、年所を鎮へ、著者が能く述べたものであるだけに、未修正の第十卷以外には、講本の性質は殆ど認められない。著者が學問的研究に於て古道闡明を期すると共に、實行に於ても亦、國民生活の指導者たらんとする自覺を以て成されたもので、所説は大體上古史



治郎主連は、この脚本の五幕目以後を改修したものである。黙阿彌作の「筑紫巻談浪白縫」(明治八年十月新富座)及び「黒白論織分博多」(明治十五年十一月新富座)も、大略同巧異曲の脚色ではあるが、「黒白論」が最も要領よく他作を壓してゐる。

【参考】列侯深祕録(國書刊行會本)○益軒全集第五卷○寛永箱時文庫(近世實録全書、帝國文學)○黒白論織分博多(歌舞伎新報)【尾尾】

逸文學の影響を逸することは出来ない。當時の文學に於てこれ程思想的な作品は他に類を見ない。本作と殆ど同時に坪内博士の舞踊劇「新曲浦島」(別項)が世に出た。當時の文壇の二巨匠が同時に浦島の傳説を借りて、韻文的な戯曲を創作したのは面白い事實だと思はれる。

玉子の角文字(たごのかくじ) 黄表紙 三册 十五丁二十二圖【作者】芝全交【畫工】北尾



住恩澤事の如く、二十頃近くならべて不精者・篠塚伊賀守・夜鷹・いがみの權太・お半長右衛門・助六・難波五人男・勘平・道真・高師直・楠正成等の説話を附會してある。【小池】

和琴に合せて歌者が鎮魂の歌を歌ふ。その間、御巫が、宇氣槽の上に立ち、杵(説に稱)で槽を十度衝き、その度毎に神祇伯が木綿登(二説に録)を結んで葛宮の中に入れれること十回、且つ女藏人が御衣篋を開いて振り動かす所作が行はれた。この神樂が終つて、御巫の舞、猿女の舞がある。これは、倭舞であつたと見える。次に神祇官、宮内承以下令人達の一入舞や、相舞があつて式を終る(官儀儀式、延喜式、江家次第、北山抄、政事要略)。

次に一三三四五六七八九十と稱へ、十度これを讀んで、中臣が玉を結ぶわざをするのである。その曲は田樂(別項)のやうだと「長秋記」に記してゐる。近世宮中で再興の鎮魂祭歌は、

あちめをを、天地に、きゆらかすは、さゆらかす、上ります、豊日かか神、わかも神こそは、彌宜に聞かう、きゆらならは、。

【西尾】

【参考】鎮魂傳信友○古事類苑神祇部○古語集栗田寛

と云ふ歌で、譜本も存してゐる。この外、鎮魂祭の日には、大直日歌と倭舞歌とが奏せられた。大直日歌は「新年」の歌であり、倭舞歌は「宮人」の歌である。

【参考】鎮魂傳信友○古事類苑神祇部○古語集栗田寛

【西尾】

鎮魂祭(たづね)「鎮魂の歌」を見よ。玉櫛(たまご) 國學書 十卷【著者】平田篤胤【成立】文化十年頃初稿成る(三册)。文政七年一卷より九卷まで増補。【刊行】諸國の門人の板行を請ふ者が多かつたけれども許さず、文政十二年に至り、北川眞顔の勧めによつて初めてこれを諸した。天保三年、初帙の刻成る。後、嘉永三年神祇伯資敬王、天保二年本居大平の序及び文政十二年平田篤胤の「玉櫛のふみを板に彫れる由」等を巻初に附して刊行。【諸本】平田篤胤全集第四所収(未定稿なりし十巻をふくむ)。

【内容】大體「每朝神祠拜記」(再生のために、日々拜すべき神々及び祖先の靈屋に自す詞を記したものを本文とし、更にその所以方法を詳説したもので、一卷・二巻が發題で、三巻から十巻までにそれぞれ、龍田風神・天日御國・月夜見國・伊勢兩宮・吾妻

賣 客と遊女とのいざこざ、若い者の給金、遊女の食事、地まはり、千住の遊里、料理番、身分分散、二日酔の小間物店、二朱店のかすり、指切り、夜鷹が富にあたる、せかれた客、

【西尾】

あちめ一度お、三度天地に、きゆらかすは、さゆらかす、神我も、神こそは、神官聞かう、きゆらならは(三字、一本かすは)。

あちめ一度お、三度石の上、布留の社の、太刀もがも、願ふその兒に、その奉る。

あちめ一度お、三度魂堂に、木綿取り垂てて、たまち取らせよ、御魂上り、魂上りまし、神は今

【西尾】

たましず たまつく



源信以後のものたる事は明かである。なほ又序及び詩の字句の用法上に、物品やその他の名稱を羅列した形式は、既に「文選」の賦に於てその例を見るが、我が國には明衡の「雲州往來」(別項)の如きもの以來その例は少くない。本書にこの風の存する事及び「白氏文集」の影響を多く認める點で、或は明衡の作品ではなからうか。要するに、後一條・後朱雀・後冷泉帝前後、佛家の手に成つたものかと思はれる。【諸本】異本と稱すべきものはない。群書類従一三六・寛永二十年本(林甚左衛門刊)・寛文三年本(前川猪兵衛)・弘法大師全集等。【内容】玉造小町の壯衰を記し、極樂往生を説きすゝめたもので、序と詩の二部から成つてゐる。詩は五言二百六十句、秦中吟と噂上詠とに學んで創作してゐる。序は路傍に一老女に逢つた。その状態は容貌頓頓身體疲瘦し、破衣壞裳、裸足で片足不自由な乞食老女である。その出身を問へば少女時代は倡家の子、良室の娘で榮耀榮華、化粧三昧、衣裳好みで立派な家に住み食へ物も資澤の仕放題、山海の珍味を口にまかせて味つた。技藝も人並勝れてゐて結婚の申込は多かつたが、父兄は王宮の妃に獻る事を考へて凡家の妻たるを承諾してくれなかつた。然るに十七歳で母に別れ、十九歳で父に死なれ、二十一には兄、二十三には弟に遅れ、天涯孤客の悲しむべき境遇となつた。これから運命は急轉直下、落魄孤獨の境涯に下つた。その後、生きて恥を見んよりは、佛道に歸するに若かずと、六塵の住家を厭つて三寶の境に歸し、僧に從つて法を聞く事にした。これを聞いてこの作者は世の中の無常を思へば、榮枯盛衰も亦嘆息するに足らずと感し、秦中吟の詩と噂上詠の賦とに學んで、この詩を

作つたと序に述べてゐる。詩の中には「嫁得一獵師、獵師有二婦、孤妾無一婢、二妻互呪詛、一身自憂悲、憂悲過日程、産得一男兒」等の語も存する。その他は概ね序文の如き意味と淨土欣求的思想を歌つてゐる。【價值】詩序共に推諷の苦心は甚だ多いと思はれる。例へば、樂地秦中吟之詩に對して幸地噂上詠之賦の如き、白居易の樂天に對して幸地噂上詠の如きを用ひたのはそれである。但しこの詩は佛敎の經典中に見る偈と類した形態のもので、恐らく偈に摸倣する所があつたことは否み難い。詩としては長篇で勞作と言はねばならぬ。殊に平安時代の中期以後のものとするれば、一層主要な詩と考へられる。【山岸】

**玉津婆喜** つばま 人情本 四編 十二册

【作者】狂訓亭主人(爲永春水) 【書工】歌川國直【名稱】孝女と角書がある。初編序には「玉都羽喜、内題には「娜真都喜」、二編題簽には「多滿椿」、三編題簽には「玉都場伎」とある。婦女の文章手本にある「玉椿の八千代」とある成句から採つたと初編序には斷つてあり、【刊行】明記してないが、初編に蓮池菴とあり、第四編に神田居とあるのから推測して初・二編天保十一年、三・四編同十二年であらう。【題材】死靈の祟りで、戀せぬ女と戀に陥ちる説話は、戀愛を避ける讀本の作風を襲用したものである。【梗概】徳町邊に土藏二つも持つて豊かに暮した富田屋滿兵衛、賭博に耽つて零落し、磯川の裏長屋に妻お清、娘お増と住み暮してゐる。それでも賭博をするか酒を飲むかで、お増はお増を質屋に通はせてゐた。或る日お増は質屋から歸つて母に向ひ、「お役人が縛り

に來たら私のした事と言つておくれ」と頼んだ。それは贓品の質入から悪者が捕縛されたのを見て、質入すれば咎めを受けると誤解して父を庇はうとしたのである。これを聞いて滿兵衛は涙を流して後悔し、全く改心してしまつた。茲に根岸の若隱居三曉と遊女上りの妻お園は、まだ靡言葉のぬけぬを興じてゐる折柄、婦多川の男藝者和十が訪れる。酒宴など催す中、裏の井戸端で小娘が泣いて桶の米を零して泣く様子である。これは母に病死され、父にも病みつかれたお増である。お園は隣れんで下女に命じて米二升を與へた。いつか大雪となつたので和十も泊る事となつた。裏の家には悪者が借金に來て病父滿兵衛を連れ行く、嫌ならお増を抵當に取ると言ふ。泣いて詫言るお増の聲に、三曉夫婦は堪らず、和十をやつて金を與へて悪者を返し、お増にも衣類を恵み、病父の療養費をも與へた。又こゝにお増のもとに住んだ磯川の表通に萬屋といふ大商人があつて、お増と云ふ娘があつた。女房お巻の威勢強く、好人物の主人はまかれてゐる。お巻は繼子お萬に本店の二男を無理に婿にしようとするが、お萬には友次郎と云ふ情人があるので承知しない。父は心配して密かにお萬に勸めて家出をさせる。お萬は兩國に水茶屋を出して友次郎と同棲してゐる。間もなく友次郎は悪い友人に欺かれて役所に連れ行かれる。父はお萬の様子を見に來て、友次郎を救ふために金二十兩を恵んだ。お萬はそれで友次郎が助かると喜んでゐると、盗人に盗まれてしまつた。そこで衣類を賣つて四兩の金をつくり一時刑を延ばして貰ひ、殘金の工面を考へ、歸る夜道で、悪漢に捉へられようとした。危い所を三人の男

に助けられた。それは萬屋の店の者で、繼母お巻が急死したので、お萬の行方を探してゐたのである。そのまゝお萬は歸宅し、友次郎も救され、父の計ひで二人は結婚する事となつた。ところが元の番頭由兵衛の女房お八重にお巻の死靈がのり移り、決して二人を無事には暮らせぬと罵つた。根岸ではお増が三曉夫婦に可愛がられ、お園を姉のやうにして事へてゐる。或る日彼等と和十とが雷音寺前の注春亭に行つた。番場の別荘に住む若旦那に見染め合ふ。三曉は或る日定之助の家で急病にかゝり、それが縁になつて、お増は三曉の妹分となつて定之助に嫁し、病父もその別荘に引取られて、樂隱居となつた。友次郎・お萬は自分達が苦勞した折世話してくれた友人達をお禮のため料理屋に招いた。隣室で金の催促をされて困つてゐる青柳橋の唄女お玉を、お萬が救つてやつた。由兵衛の妻お八重に又繼母の亡靈が乗りうつり、お玉は自分の先夫の實子であるから、あれを世話してくれねば祟ると言つた。かくとも知らぬ友次郎は道でお玉に會つた。お玉はお禮のため青柳橋の船宿に連れ行き、戀を打明けて二人は深い仲になつた。お萬もこれを悟つたけれど何とも言はぬ。三曉が中に入りお玉の年季證文を取つてやり、萬屋の隣にお玉の家が建ち、友次郎を間にお萬・お玉は睦しく暮した。【構想】角書に孝女貞婦とあるのは、孝女はお増、貞婦はお萬をさしたものである。春水の人情本中最も教訓の調子高い書であり、隨つて興味には乏しいもので、友次郎・お玉の戀も死靈のためとせる如き、まるで馬琴の行き方に似てゐる。晩年の作だけに人情本に對する詩

怪の誇りを願ふたものではあるまいか。ただ當時の寄席・演劇に關する批評は、春水のこの方面の意見が知られて興味がある。【山崎】

玉井 森「神話物の謡曲」を見よ。  
玉の緒 一詞の玉緒を見よ。

前生成論としての古傳の價值を、現在經驗の事實に合致する點に認めようとするのである。この傾向は、むしろ國學の立場を危地に導くものでさへあつた。第三に、彼は泰西の思想學說に關しては、その現實の觀察に精密である點に於ては漢學などの比でないとした

文會堂(林業) 【刊行】元祿九年【諸本】徳川文藝類聚第四怪談小説所收【解説】作者の自序に依れば、巖に淺井了意の「狗張子」(別項)の續集に擬して作つた「玉簪」の拾遺として作つたものとのある。第一卷四話、第二・三・五卷各三話、第四・六卷各二話、計十七話から成る。不具名、作者、或は、自序、八、を、見、よ。

靈能員注 たままの 國學書 二册 【著



父に死なれ二十一には兄、二十三には弟に遅れ、天涯孤客の悲しむべき境遇となつた。これから運命は急轉直下、落魄孤獨の境涯に下つた。その後、生きて恥を見んよりは、佛道に歸するに若かずと、六塵の住家を厭うて三寶の境に歸し、僧に從つて法を聞く事にした。これを聞いてこの作者は世の中の無常を思へば、榮枯盛衰も亦嘆息するに足らずと感し、秦中吟の詩と暗上詠の賦とに學んで、この詩を

【題材】死靈の祟りで、戀せぬ女と戀に陥ちる説話は、戀愛を避ける讀本の作風を襲用したものである。

【種概】徳町邊に土藏二つも持つて豊かに暮した富田屋滿兵衛、賭博に耽つて零落し、磯川の裏長屋に妻お清、娘お増と住み暮らしてゐる。それでも賭博をするか酒を飲むかで、娘お増を質屋に通はせてゐた。或る日お増は質屋から歸つて母に向ひ、「お役人が轉り

心算して密かにお萬に勸めて家出をさせる。お萬は兩國に水茶屋を出して友次郎と同棲してゐる。間もなく友次郎は悪い友人に欺かれて役所に連れ行かれる。父はお萬の様子を見に來て、友次郎を救ふために金二十兩を恵んだ。お萬はそれで友次郎が助かると喜んでゐると、盗人に盗まれてしまつた。そこで衣類を賣つて四兩の金をつくり一時刑を延ばして貰ひ、殘金の工面を考へ、歸る夜道で、悪漢に捉へられようとした。危い所を三人の男

なつた。お萬もこれを悟つたけれど何とも言はぬ。三曉が中に入りお玉の年季證文を取つてやり、萬屋の隣にお玉の家が建ち、友次郎を間にお萬・お玉は陸じく暮した。

【構想】角書に孝女貞婦とあるのは、孝女はお増、貞婦はお萬をさしたのである。春水の人情本中最も教訓の調子高い書であり、隨つて興味には乏しいもので、友次郎・お玉の戀も死靈のためとせる如き、まるで馬琴の行き方に似てゐる。晩年の作だけに人情本に對する諷

刺の諷りを懸念したのであるまいか。ただ當時の寄席・演劇に關する批評は、春水のこの方面の意見が知られて興味がある。【山崎】

玉井の「神話物の謠曲」を見よ。

王の緒「詞の玉緒」を見よ。

靈能眞柱「名義」卷頭自ら「この築立る柱はも、古學する徒の大和心の鎮なり」と云つてゐる。【成立】文化九年十二月五日の奥書がある。【諸本】平田篤胤全集第二卷・有朋堂文庫所收。【内容】本書の根本精神は、眞の古道を明かにするために、國學者が先づ大倭心を確立しなくてはならぬといふにある。而して大倭心を確立するには「靈の行方の安定」を得る事が必要であり、それには先づ天・地・泉の生成及び形態を明かにし、更にこの天・地・泉を天・地・泉たらしめてゐる「神の功德」及びわが國が「萬國の本つ御柱たる御國」であり、わが天皇命が「萬國の大君」に坐すことを熟知しなければならぬといふ立場から、主として宇宙開闢説及び靈魂論を説き、兼ねて國家的神道觀を述べたものである。【批評】本書が國學上注意せらるべき點は、第一には、その所説が國學の對象を考へ、方法を究める前に、まづその基礎として學者の立場を確立しなければならぬといふ主張に立脚してゐることである。勿論かくの如き思想傾向は、既に彼以前の國學にも存したところであるけれども、彼に至つてこの事が一層明確な意識を以て主張せられてゐる。しかし實績について見れば、その立場の確立は嚴密な意味に於ては學問的でなく、むしろ宗教的であつた爲めに、眞に學的發展の基礎とはなり得なかつた。第二には、動もすれば、彼が宇

宙生成論としての古傳の價值を、現在國學の事實に合致する點に認めようとするものである。この傾向は、むしろ國學の立場を危地に導くものでさへあつた。第三に、彼は泰西の思想學説に關しては、その現實の觀察に精密である點に於ては漢學などの比でないとしたが、しかしそれは畢竟人爲の知的考察を出づるものでないから、これによつて人智の及び難い宇宙萬般の事象を知悉することは不可能であつて、到底産靈神から傳へられたわが古傳の如く有力なものではあり得ないとし、又これ等のうち、問々わが古傳と一致するものがあるのは、わが古傳が彼の地に訛り傳へられた結果であるとして、本地垂迹説を逆用してゐる。かくて彼が本書に於て成したところは、一見國學の大發展であるかの觀があるけれども、又社會的影響の方面から見れば、それも事實であるが、併しながらそれは眞に學としての國學の發展ではあり得なかつた。のみならず古道の佛儒附會を絶えず排撃し來つた國學が、こゝに至つて動もすれば泰西の宗教學説によつて（而もそれ等に對する眞の批判なくして）直ちにわが古道を説明しようとする傾向を生じた。これは畢竟彼に現實的社會的關心が深かつた爲めに、飽くまで古道を古代人の信仰として認識し、そこに國民文化の原理を自覺しようとする國學的制約の下にその發達を試みる事が出来ないうで、古道を以て直ちにあらゆる思想學説に君臨せしめ、これによつて自然及び社會のすべてを説明し盡さうとするに急であつた結果であるといふことはならぬ。

【參考】平田篤胤の哲學 田中義能（西尾）

玉簪木 浮世草子 六册 【作者】

大文會堂（林業館）【刊行】元祿九年（諸本）徳川文藝類聚第四怪談小説所收【解説】作者の自序に依れば、巖に淺井了意の「狗張子」（別項）の續集に擬して作つた「玉簪木」の拾遺として作つたものとある。第一卷四話、第二・三・五卷各三話、第四・六卷各二話、計十七話から成つてゐる。怪談を主としてゐるが、中には眞の怪談の性質を有しないものもある。而してその多くは、細川勝元・大内義隆・石川丈山・戸田一刀齋などの如き史的人物の名を假りてある。恐らく、作者が序中に「ただあやしく新なる雜話小説を見およびては、心よこび筆にふるして倦ことをしらず、ひとり書編に求るのみにはあらず、凡當時博識好事の人々、この堂に過れるには、先その郷里を問、その所に聞へし奇事をたづねてしるしとどめぬ」とあるのは眞實で、かくして蒐集した所の傳説口碑の一部から本書は出來たものである。怪談を主とした説話集で、ただ忠實に傳説を傳へようとしたのでなく、作者の藝術意識の相當働いてゐることは争へない。そこに本書が文學として取扱はれる所以がある。【藤村】

玉磨青砥錢「宇津保物語玉松」を見よ。

玉磨青砥錢「作者」山東京傳【畫工】喜多川歌麿【角書】吾妻鏡【刊行】寛政二年、萬屋版。【諸本】黄表紙百種（續帝國文庫）所收。

【題材】「太平記」「吾妻鏡」に題材を得たやうに序文に書いてあり、角書にもそれを見せてゐるが、恐らくは假託であらう。よし「太平記」に據つたとしても、第三十五卷「北野通夜物語

たまのい たまみが

事即青砥五箇門事」のみであらう。多分藤村の恭説に基いてゐるだけかと思はれる。

【種概】北條時頼の時代に、諸人生眞面目となり、稼ぐを大通ともて難す。役者は百姓となり、女形は忠五郎・庄次郎の田植唄で苗を植ゑる。不具者が役者、座頭が角力、狐が遊女、狸が替間となる。又大磯の遊女は由井ヶ濱の汐波は蕎麥屋の箸、無駄な物は躰の穴と六道錢ばかりとなる。ところが藤網は鎌倉の人々の、これ等の行爲を愚なりとし、諸事從前通りと命じ、唯これを忘るなと一文の錢を取出して

人々に示す。錢の文は吾唯知足と讀まれる。【構想】「富士人穴見物」（京傳作、天明八年刊）（別項）の辛辣な諷刺も、黄表紙の間抜けさと甘味とにより巧妙に暈され、一見他意なき作品となり澄し、爲政者の監視の眼を危くも遁れた。京傳はこれに味をしめて、又今少しく現實に接近せしめて、この「玉磨青砥錢」を書いた。着々と進行して來た寛政の改革を、嘗て度を越してゐた通人を見た目で凝視した。「江戸生艶氣種焼」（別項）の艶次郎、「三筋緯容氣植田」（別項）の梅枝、八重次郎が遊里の行き過



錢砥青磨玉



者として黄表紙種となる以上に、文武儉約の獎勵者定信の施設は滑稽な眞面目である。若し白河侯が爲政者でなかつたらば、一繁千話(別項)の馬骨のやうに、辛辣な破綻を與へ得たであらう。京傳は白河侯をモデルにした藤綱から用心深く離れて想を構へ、一見民衆に力點を置くが如くに装つた。民衆の背後に在つて諷刺の矢の痛かるべき白河侯を、「富士人穴見物」の場合とは逆にし、更に輩しの甘味を強め、捻つた趣向の裏に作者は莞爾としてゐる。最後の落は「照子淨願梨」(京傳作、寛政元年刊)と手法法。【史的地位】寛政の改革を諷した作品の中「文武二道萬石通」(別項)は、天明八年に、「鸚鵡返文武二道」天下一面鏡梅鉢(各別項)は、寛政二年に出版され、それと問題を惹起し、更に政演(京傳)が、「黒白水鏡」(別項)の畫工として過料に處せられた直後故、白河侯をモデルにした「仁田四郎」に、江戸ッ子の大きな尻の穴まで覗かせた「富士人穴見物」のやうな態度は減じ、諷刺の針は深く潜み、寧ろ「心學早染草」(別項)を動因として展開すべき教訓物に接續する兆候を匂はせてゐる。【價值】遊里と梨園とを中心として、誇張された無駄のない世界が、機智や洒落を鑿めてよく描かれ、全體に纏まつて一文錢の落に一氣に進み、軽く落ちるなど、凡手の及び難い所である。時事問題、就中特殊の一人物を取扱ふ黄表紙的方法として亦妙である。【小池】

する一本がある。【題材】異類戀愛物。怪婚説話の變種。葛の葉傳説や「木幡狐」(別項)の男女の位置を異にしたやうなものであるが、操を汚すに及ばぬ點が異とするに足る。【梗概】中頃、鳥羽の邊に高柳の宰相といふ人があつた。申子に得た美しい姫を、ゆく／＼は宮仕にと望を掛けてゐた。或る夕暮、姫が乳母子の月さえといふ女房を御供に花園へ出ると、木蔭にゐた狐が姫の美しさに魅せられ、美男に化けて逢ひ度くは思ひながら、惜しい御身を徒にしてはと思ひ返したが、餌食も擲らず悶えた末、せめては朝夕御側近く仕へて慰めようと、十四五の美しい女に變じて、男の子許り持つ或る在家に頼つて養はれ、傳手を得て本意の如く高柳殿へ上り、名を玉水の前と頂いた。御手水參らせ、供御參らせ、月さえと共に御きぬの下に臥し、特に怖がる犬を御所中に置かれぬ事になつたり迄して他の妬みさへ受けてゐたが、玉水の心は暗かつた。三年を過ぎた或る日、姫君の親しい方々が集つて紅葉合が催された。玉水は夜に紛れて元の宿所に行き、兄弟の狐によい紅葉を探して呉れるやうに頼むと、五寸程の枝に色は五色、葉毎に法華經の文字を摺つた磨いたやうに鮮やかなのが届けられたので、姫君に奉ると、五度合せて五度姫の勝となり、この事、内にも聞召されて、その紅葉を、又姫君をも參らせるやうに宣旨が下つた。玉水の前は感慨無量であつた。その頃、養ひ里の母が物怪に苦しむため、暇申して下り夜更けて一人起きてゐると、禿けた古狐が来て居り、よく／＼見れば自分の伯父で、その子狐の苦もないのを病者の父が殺した報に、我もこの娘の命を取らうとしたのであつたが、玉水が心を盡して様々に諫

めたので、さしもの老狐も漸く退き、病者は本復した。霜月になり、入内の儀式は着々と進んだ。玉水も中將の君として召され、女房童三十人の一の位に定められたが、鬱々として樂しまず、心を碎いた果に、總てを細々と書き記して小箱に藏め、我亡せて後開け給へ、人に見せ給ふなと泪ながらに姫に參らせ、當日車に乗るふりをして姿を隠した。殿では内へ御供したものと思ひ、内では常に氣分が勝れないと云つてゐたから居残つたものと思ひ、二三日経つて何處にもゐないといふので、方々探させたが皆目知れなかつた。とある隙にかの箱を開けて姫が甦ると、文の詞の奥に長歌があり、なほこの箱は、人に厭かれぬ箱なる由細々と記してあつた。姫君は畜類ながらも有難き志と泪に咽ばれた。

【参考】近古小説題(紅葉合の項) 【鳥津】  
【玉蟲の草紙】女主人公たる蟲名を取つて名づけたもの。【成立】古寫本に「天正十年水のへ午四月吉日」の奥書があるから、それ以前の作たる事が知られる(新加本玉蟲の草子開題)。【諸本】新編御伽草子下巻・日本文學大系第十九卷所收。平出順益の「天保四年涉獵書目」に、鳥澤氏藏の古寫本一冊とあるは、玉蟲が最後に出家する條を載せてある本書の異本らしい(近古小説題)。【題材】異類物。歌物語。擬人の戀愛物語で、艶書のいろ／＼な様式を示さうとしてゐるのが注目せられ、後の「薄雪物語」(別項)から「新薄雪物語」(錦木「小夜衣」以上別項)、「好色錦木」(雲の梯)等の一系統を作つた艶書文學の先蹤をなしてゐる。異類戀愛物語としては、「のせ猿草紙」(かばよ鳥の草子)各別項)等と同種のもの。な

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

【参考】河東碧梧桐解説玉藻集(複製本)○俳諧玉藻集(寶船四ノ四) (類原)



一氣に進み、落ちるなど、凡手の及び難い所である。時事問題、就中特殊の一人物を取扱ふ黄表紙的方法として亦妙である。「小池」

**玉水物語** たみづものがたり 御伽草子 一卷

【作者】不詳 【名稱】主人公たる狐の化した姫の名に因る。異本の題名は、紅葉合の催あるに基づく。【成立】室町期 【諸本】古板本なし。御伽草紙(有朋堂文庫)、日本文学大系第十九巻所収。一紅葉合と題する文詞を異に

五度合せて五度姫の勝となり、この事内にも開召されて、その紅葉を、又姫君をも参らせるやう宣言が下つた。玉水の前は感慨無量であつた。その頃、養ひ里の母が物怪に苦しむため、暇申して下り夜更けて一人起きてみると、禿げた古狐が来て居り、よく見れば自分の伯父で、その子狐の咎もないのを病者の父が殺した報に、我もこの娘の命を取らうとしたのであつたが、玉水が心を盡して様々に諫

玉蟲が最後に出家する條を載せてある本書の異本らしい(近古小説解題)。「題材」異類物。歌物語。擬人の戀愛物語で、艶書のいろ／＼な様式を示さうとしてゐるのが注目せられ、後の「薄雪物語」(別項)から「新薄雪物語」「錦木」「小夜衣」以上別項、「好色錦木」「雲の梯」等の一系統を作つた艶書文學の先蹤をなしてゐる。異類戀愛物語としては、「のせ猿草紙」「かほよ鳥の草子」(各別項)等と同種のもの。な

女の跋があるのも、関秀句集としてふさはしい。但しその編輯態度は寧ろ杜撰といふべく信憑し難い點が多い。勿論藤村は自らかうした面倒な仕事など企てさうにも思はれないから、恐らく書肆が彼の名を借りたか、若しくは無理に頼んでやつて貰つたものであらう。併しとにかく女流の作だけを集めたものとして、太田白雪の「三河小町」(別項)と、この書ぐらゐるものだから、その點に於ては珍重すべ

【参考】河東碧梧桐撰説玉藻集(複製本) (併註) 玉藻集(寶船四ノ四) (類原)

**玉藻前** たまもへ 浄瑠璃 五

段 時代物 【角書】梅枝軒・佐藤太。【初演】文化三年三月二十六日より大阪御霊境内鶴澤伊之助座。【題材】謡曲「殺生石」に採られた玉藻前傳説を中心

殺したか、その見から一狐の怨氣が立ち上り、金毛九尾の狐となつて東方に飛んで行く。【三段】京都清水の場で安倍宗女之介と藤原道春の娘桂姫は互に見染める。賀家金藤次は薄雲王子の使として道春館に來り、懇望の獅子王の劍を獻するか、桂姫の首を渡すかと迫る。劍は奪はれてゐるので、後室秋の方の請に任

殺してその姿を借り、薄雲王子と通じて謀逆を計る。女御達は玉藻前の狐なるを知つて斬りつけるが失敗する。一方、那須野原の百姓十作方では娘おやなの姿が二つとなり、入野大六が腹の獅子王の劍を出す一方が狂ひ出すので、狐の業と斬り殺すと、それが本當のおやなで、一人は顔のよく似た傾城龜菊であつた。入り込んだ十作が眞の劍を有つとにらんだ大六は、故意におやなを斬つたのである。三浦之助・上總之助と共に、十作に劍を渡せと迫る。十作は龜菊がおやなと双子のわが子であると覺つたので、切腹して劍を龜菊に渡し

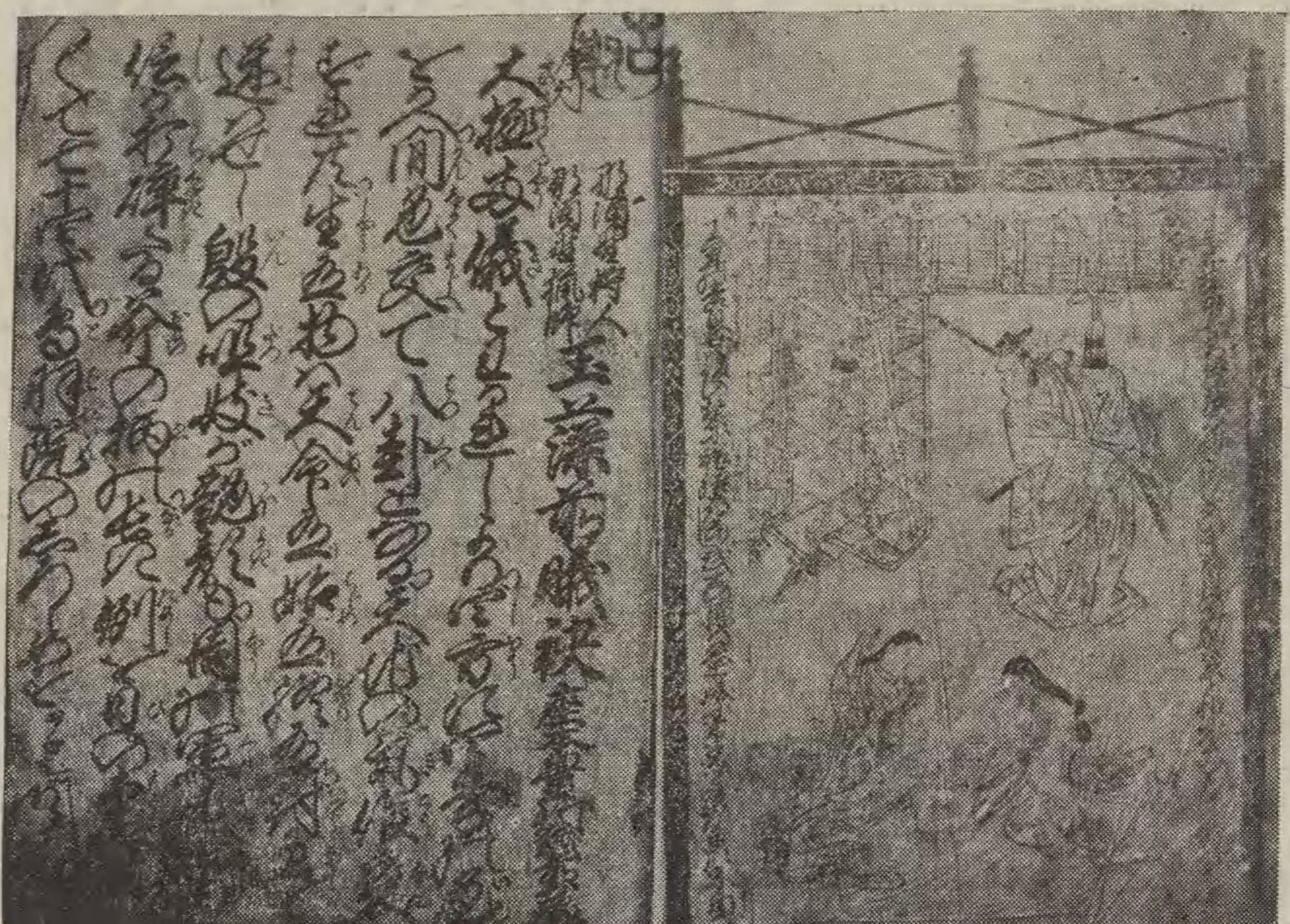
【著書】歌集「杉のしづえ」(別項)古今和歌集(校正筆寫本、板行されてゐる)「業續」蒼生子は業續としては「古今集」の校正本を残したに過ぎず、歌人としても格別にすぐれてゐると思はれないが、女性には珍しい聰明と博識と女丈夫的意氣とを以て、荷田派の學問の勃興のために氣を吐いた。さうして諸侯の子女の教育といふ方面に、より多くの功績を認めるべきである。

【梗概】【初段】天竺沙牟呂山麓の馬忠子といふ農夫、矢の立つてゐる鶴を助けたが或る時美しい女性が訪ね來りその請に任せて夫婦となつてゐる中、禁止された機織場を覗いた事から、鶴の姿となつてゐた妻は飛び去る。馬忠子は普明長者と共に、その衣を奪つた狐の大望の獨言を聞く。一方、南天竺の班足王は新に入興した花陽夫人に溺れるが、普明の刀「獅子王」の威力で獅子が暴れこんだ爲め、花陽夫人が狐の本性を現はして逃げ

せ、二人の娘の中、双六に負けた方を討つと約束する。桂姫が勝つたが、金藤次はその首を斬り、宗女之介に刺されながら、桂姫はわが實の娘の捨て子であつたと語り、獅子王の劍の所を教へて絶命する。【四段】道春の妹娘初花姫は玉藻前と改めて入内したが悪狐はこれを

【構想】原作では日本國內を舞臺とし、玉藻前の悪事とその退治とに那須野原などをとり入れてゐる。改作では序段及び二段目を唐天竺の世界とし、玉藻前の三國傳來を明示して構想を大にし、又觀衆の好奇心に訴へてゐる所も深くしてある。三段目「道春館」は原作二段目の切「通忠館」を改作したのであるが、舞臺面の技巧を加へ、又「東鑑御符巻」の大藤内、【假名手本忠臣藏(別項)の加古川本藏、「源平布引瀧」(別項)の瀬尾十郎などから系統を引いた金藤次の最期を加へたりして今日も歌舞伎に折々演ぜられる。四段目の切には「双面」を取入れた。概して技巧本位の改作ではあるが興行成績はこの方が擧がった。

【参考】荷田東磨翁大貫直浦「田村松魚」(久松) 田村松魚「勝修羅物の謡曲」を見よ。



(本正演上座竹豊) 袂 嚙 前 藻 玉

た。これを見た王は、自ら發心出家する。【二段】唐土殷の紂王の許に入興する姫の行列に狐が乗込み姫を殺してその姿を借りる。紂王女に魅せられ悪政を行ふ。臣の女王は我が子の肉を食はされたりしたが太公望の智謀を借りて紂王を弑し、姫を名鏡の力で斬り

た。これを見た王は、自ら發心出家する。【二段】唐土殷の紂王の許に入興する姫の行列に狐が乗込み姫を殺してその姿を借りる。紂王女に魅せられ悪政を行ふ。臣の女王は我が子の肉を食はされたりしたが太公望の智謀を借りて紂王を弑し、姫を名鏡の力で斬り

【刊行】天明七年【解説】初代川柳の點にか

【別號】入江新八【閱歴】明治七年、土佐國宿毛に生れた。初め上京して増島六一郎の世話を受け、後、幸田露伴の門に入った。明治

たまもの たむらし



三十年、單行本「若旦那」を公にし、次いで三十一年二月の「新小説」に「磯馴松」、八月に「五月閣」等を發表するや、世評甚甚、「帝國文學」記者の如きは、天才として激稱した。これはもとより過褒であつたが、前途有望の作家である事は、一般の認むるところであつた。三十五年渡米、インデアナ大學に學ぶこと一ヶ年、四十二年歸朝、「北米の花」を公にした。

この年、同門の閨秀作家佐藤俊子(露英)と結婚した。同年萬朝報社に入り、記者たること五年、次第に文壇に遠ざかるに至つたが、三十年よりその頃迄に公にせるもの長短六十篇を超えてゐる。十年前、俊子が彼の許を離れて單身渡米した後、骨董店を開いて今日に至つた。その間、通俗雜誌に二三の長篇小説を書いた外、多く言ふべきものがない。〔高須〕

**田村俊子** たむらこ 小説家「**本名**」敏子〔別號〕露英〔閨歴〕明治十八年、東京淺草藏前の米穀商の佐藤家に生れた。第二高等女學校卒業後、女優市川久米八の門に入り、毎日新聞の文士劇に出演したことがあつたが、後、文學に志し、幸田露伴の門下となり、佐藤露英の名で小説を書いた。最初の作は、明治三十六年の「文藝俱樂部」に出た「露分衣」で、翌年同じ雜誌に「夢の名残」春の別を出した。四十二年に田村松魚と結婚。その後、中村吉藏の社會劇「波」上演の時、女主人公となつて東京座の文士劇に出演したことがあつた。四十四年、大阪朝日新聞の懸賞小説に應募當選した「あきらめ」によつて漸く頭角を現はし、爾後、その作風に一轉化を生じ、その繊細なる官能描寫に最も新しき技巧を稱せられ、「炮烙の刑」木乃伊の口紅「寒椿」戀むすめ」等續々得意の作品を發表し、大正三十四年の頃は

その全盛時代であつた。その後、情人を趁うて渡米してからは、杳としてその消息に接しない。〔批評〕彼の特色を示すものは、「あきらめ」の外、短篇集「誓言」「女作者」等がある。一葉とくらべると、幾らか解放せられた女性といふ感じが作品の上に現はれ、近代的香氣が漂うてゐるが、未だ在來の道徳から離れ切らぬ日本的な味もある。〔高須〕

**田村成義** たむらなりよし 劇場關係者〔戲號〕室田武里〔生歿〕嘉永四年二月一日、江戸日本橋區本木町一丁目にて病歿。享年七十。〔法名〕釋祐良信士〔閨歴〕幼名を猪之助といひ、實父は眼醫者福井壽仙。十六歳にして父を失ひ、囚獄石出帶刀組の同心鍵役田村金十郎の養子となり、囚獄見習・鎮臺府附・囚人前科取調係となつたが、明治三年辭職し、猿若町の芝居に刀劍を入れる事を思ひ附いて鳥佐太郎と變名したが、借金のため静岡へ出奔、翌四年歸京、友人の勧めで代言人を志し、翌五年より神田小川町の法律學校に通ふ傍ら日々裁判所へ出頭し、十年司法省の試験に及第、免許代言人となつた。十二年久松座々主の依頼で守田勘彌と中村翫雀の間を調停してから勘彌と懇意になり、新富座演劇會社の法律顧問となり、又五代尾上菊五郎とも親しくなつた。十八年勘彌と菊五郎の衝突に際し菊五郎に味方し、その出勤した千歳座に始めて太夫元となり、自家の記録を提供して黙阿彌に「四千兩小判梅葉」を脚色させ、大入を取つた。演劇改良會にも關係し、又二十年の天覽演劇にも盡力した。二十二年冬歌舞伎座落成に際し千葉勝五郎・福地櫻痴と共に入座、その後、歌舞伎座の組織變更等に伴ひ、相談役・場内取締

等々歴任したが、四十一年十一月から市村座を譲り受け、若手俳優に六代菊五郎・吉右衛門を加へての興行を始めた。歌舞伎座の松竹移讓後は、市村座の經營と菊・吉以下若手俳優の養成に専念し、大正九年九月頃より腎臟炎再發に悩み、遂に逝去した。編著に「續々歌舞伎年代記」(別項)、「劇壇無線電話」がある。〔参考〕演藝書報(大正九ノ二)○新演藝(同上)○明治劇壇五十年史(關根默庵)

**田村の草子** たむらのくさこ 御伽草子 二卷〔作者〕不詳〔別名〕「鈴鹿の草子」と題する

等々歴任したが、四十一年十一月から市村座を譲り受け、若手俳優に六代菊五郎・吉右衛門を加へての興行を始めた。歌舞伎座の松竹移讓後は、市村座の經營と菊・吉以下若手俳優の養成に専念し、大正九年九月頃より腎臟炎再發に悩み、遂に逝去した。編著に「續々歌舞伎年代記」(別項)、「劇壇無線電話」がある。〔参考〕演藝書報(大正九ノ二)○新演藝(同上)○明治劇壇五十年史(關根默庵)

音靈驗談。本地物。俊仁・俊宗父子二代の武功を叙してゐるが、物語の中心は下巻の俊宗及び鈴鹿御前に關する神婚傳説的武勇傳説で、俊宗の亡妻を尋ねての地獄行も附加せられてゐる。俊仁は藤原利仁、俊宗は坂上田村麿に當り、共に史上の英雄で、特に蝦夷征伐で有名であるが、父子ではない。俊宗の名も史實の根據はない。利仁の新羅征伐の意圖の事は「今昔物語」(卷十四)、「古事談」(第三)等に見え、下野高座山の賊藏宗・藏安を討つたことは「鞍馬寺縁起」に載せ、又阿部高丸が田村麿に誅せられたことは「諏訪大明神繪詞」に記され、田村・利仁の將軍等が陸奥の惡路王を征した時の賊藏田谷窟の遺跡に就いては、「吾妻鏡」(文治五年十月二十八日)にも出てゐる。田村の鬼賊退治、特に大だけ丸の條は、「立烏帽子」(別項)の内容と共通する所があり、鈴鹿御前との關係は「あきみち」(別項)型をなし、又、清水の靈驗談である事と共に、謠曲「田村」の素材とも同じである。説話としては、直接には大江山傳説と關聯し、遠く大蛇退治神話からの流をも引いてゐる。俊仁の大蛇退治亦然りで、これは倭藤太傳説に交渉があらう。又地獄行は諸尊の黃泉行神話から、卷初

の俊すけに關する怪婚説話は豊玉姫神話から來てゐる。本書史實に基づいた點もあるが、大體には空想的分子が濃い。「鈴鹿の草子」とは大體同じであるが、内容、詞章に異同があり、俊重を俊ゆうといふ源氏の將



(藏氏郎太久田小) 子の草の村田

異本がある。〔成立〕室町期〔諸本〕古板本は正保三年板(杉田勘兵衛開板)。室町時代小説集に収む。異本「鈴鹿の草子」は一卷の寫本にて傳存。〔題材〕英雄譚。怪物退治説話。觀

くれば俊宗が、自ら冥府に赴いて取り戻して來た。これを田村將軍鈴鹿御前二世の契といふ。大將軍は觀音の化身、鈴鹿御前は竹生島

の辨財天女である。清水寺建立の大願の尊さ、由緒深い田村堂の名と共に、今に傳へてこの將軍の記念として仰がれる。

この草子「別項」を合せたものである。【梗概】天智天皇の御代の逆賊藤原千方、高圓山に隠れ、妖術を學んで百八十餘歳の長壽を保ち、桓武帝の御代に及び隱者周翁と稱し、火鬼・水鬼を驅使して三種の神器を奪ひ、皇弟水



四十二年田村松魚と結婚。その後、中村吉藏の社會劇「波」上演の時、女主人公となつて東京座の文士劇に出演したことがあつた。十四年、大阪朝日新聞の懸賞小説に應募當選した「あきらめ」によつて漸く頭角を現はし、爾後、その作風に一轉化を生じ、その緻細なる官能描寫に最も新しき技巧を稱せられ、「炮烙の刑」木乃伊の口紅「寒椿」「戀むすめ」等續々得意の作品を発表し、大正三、四年の頃は

問となり、又五代尾上菊五郎とも親しくなつた。十八年勘彌と菊五郎の衝突に際し菊五郎に味方し、その出動した千歳座に始めて太夫元となり、自家の記録を提供して黙阿彌に「千兩小判梅葉」を脚色させ、大入を取つた。演劇改良會にも關係し、又二十年の天覽演劇にも盡力した。二十二年冬歌舞伎座落成に際し千葉勝五郎・福地櫻痴と共に入座、その後、歌舞伎座の組織變更等に伴ひ、相談役・場内取締



關聯し、遠く大蛇退治神話からの流をも引いてゐる。俊仁の大蛇退治亦然りで、これは俵藤太傳説に交渉があらう。又地獄行は諸尊の黄泉行神話から、卷初の俊すけに關する怪婚説話は豊玉姫神話から來てゐる。本書史實に基づいた點もあるが、大體には空想的分子が濃い。「鈴鹿の草子」とは大體同じであるが、内容、詞章に異同があり、俊重を俊ゆうといふ源氏の將

朝日殿、又改めて俊仁の幼名を繼がせて日りうとしたとし、りやうせん坊をこんさう法師とし、鈴鹿の賊は大だけ丸でなくて、天女の鈴鹿御前で、これを立烏帽子を着けた怪物とし、且つ田村と鈴鹿の劍台の事があり、たか丸を近江國蒲生山あくしの高丸とするなどの違ひがある。

と名付けられ、更に元寇後、いなせの五郎殿上の俊宗と名告つた。俊仁は五十五歳の時唐土征伐を企て勅許あつて船出したが、明州の津で惠華和尚の率ゐる不動明王等百千萬の大軍に阻まれ、奮戦の末遂に不動の利劍に斬り伏せられ屍となつて博多に歸つた。俊宗は十七歳で大和國奈良坂山の金飛磔を打つ怪盜りやうせん坊を討つべき宣言を蒙り、發向して神通の矢で射伏せて捕へた功により、將軍を嗣いで陸奥のはつせの郡と越前とを賜つた。更に伊勢國鈴鹿山の鬼神大だけ丸討伐の命を受け、靈夢の告によつて天女鈴鹿御前と縁を結び、女が鬼の力を殺ぐために鬼の藏する怪劍三口のうち大とうれん・小とうれんを奪ひ取つた上に、千手觀音・鞍馬の多聞天の加護があつて大だけ丸を滅し、恩賞に伊賀の國を賜はつた。俊宗と鈴鹿御前との間にはしやうりん女といふ一女があつた。重ねての宣言で俊宗が近江國のたか丸といふ鬼を攻め、信濃國ふせやが嶽・駿河國富士の山・率土ヶ濱と遁れるを次々に追ひ詰め、更に日本と唐土との境の海中の巖窟を固守したのを攻め兼ねた時、鈴鹿御前の助力によつて誅戮したが、鈴鹿御前は前に三口の一つで天竺にあつた爲め奪ひ損ねたけんみやうれんといふ劍に、大だけ丸の魂が移つて再び陸奥のきり山嶽に籠る相があると言ひ、果してそれが事實となつて宣言が下り、俊宗は用意して置いた駿馬に乗り、鈴鹿御前も飛行の車で馳せ附けて遂に討伐の本懐を遂げた。斬られて舞ひ上つた大だけ丸の首は、俊宗の甲に喰ひ附いたといひ、この首を末代の傳へにと内の寶藏に納め、千本の大頭といつて御輿の前に渡すのがこれであるといふ。やがて鈴鹿御前は病歿したが、悲歎に

【梗概】昔、藤原俊重將軍の子俊すけは嵯峨野の遊覽に出逢つた一美女を妻としたが、やがて出産に際し、禁を犯してその本體の大蛇である事を發見したので、妻は一子を日本の主としよとの本意は破れたが、天下の將軍となすべき事を語り、その子を日りう丸と名付け、且つ未來の出來事を豫言し、自身は益田ヶ池の大蛇だと告げて去つた。果して日りう丸三歳の時歿し、七歳の時近江國みなれ川のくらみつ・くらへのすけといふ大蛇退治の宣言を蒙り、相傳の角の槻弓・神通の鎗矢を帶して下り、七年の後遂に功を遂げ、將軍に任ぜられ、俊仁將軍と呼ばれた。その後、堀川中納言たかとをの姫君照日の御前に契を籠めたが、帝は歌合に託して、姫を召し留められ、俊仁には伊豆配流を命ぜられたので、下向の途次曩の二大蛇の魂魄に命じて都を荒させ、ために間もなく赦免となつたが、返された姫は又も辻風に攫はれ、俊仁は靈夢によつて愛宕山に登り、それが陸奥國たか山の鬼惡路王に連れられた事を知り、鞍馬の毘沙門天に祈願を籠め、劍を授かつて發足し、同國はつせの郡田村郷に到つて賤女の許に一宿した後、目指す鬼の城を襲つて惡路王を平げ、姫を伴つて歸洛した。田村郷の賤女の擧げた男子はふせり殿といひ、十歳で都に出て父に對面し、田村丸

【参考】近古小説解題 ○室町時代小説集解題 ○廣益俗説辨卷九〇鈴鹿の山賊と田村將軍 鬼退治の傳説大西源一藝文大正一五ノ七

【田村鷹鈴鹿合戦】浄瑠璃五段 時代物 【作者】淺田一鳥 豊田正藏 【別稱】勢州阿漕浦 【興行】初演は寛休元年九月十日より豊竹座。翌寛保二年正月江戸の肥前座で興行され、降つて安永六年十二月北堀江座で三の切まで、寛政八年三月道頓堀東の芝居で四段目を竹本綱太夫、文化五年正月御靈境内芝居で「勢州阿漕浦」の外題で濱邊の段、平次内の段を出し、これも綱太夫が語つてゐる。以後は度々の繰返しに常に「勢州阿漕浦」の外題を用ひて、今日ではこの外題で通つてゐる。因みに上記の竹本綱太夫は、當代の名人といはれた三代綱太夫で、人形芝居の興行年表を閲するに、「阿漕の平次」の淨瑠璃は、この人によつて復活されたもののやうである。

【田村鷹鈴鹿合戦】浄瑠璃五段 時代物 【作者】淺田一鳥 豊田正藏 【別稱】勢州阿漕浦 【興行】初演は寛休元年九月十日より豊竹座。翌寛保二年正月江戸の肥前座で興行され、降つて安永六年十二月北堀江座で三の切まで、寛政八年三月道頓堀東の芝居で四段目を竹本綱太夫、文化五年正月御靈境内芝居で「勢州阿漕浦」の外題で濱邊の段、平次内の段を出し、これも綱太夫が語つてゐる。以後は度々の繰返しに常に「勢州阿漕浦」の外題を用ひて、今日ではこの外題で通つてゐる。因みに上記の竹本綱太夫は、當代の名人といはれた三代綱太夫で、人形芝居の興行年表を閲するに、「阿漕の平次」の淨瑠璃は、この人によつて復活されたもののやうである。

【題材】謡曲「田村」の系統を引く紀海音の作「坂上田村鷹（別項）」と、山本土佐掾の正本「あ

【梗概】天智天皇の御代の逆賊藤原千方、高圓山に隠れ、妖術を學んで百八十餘歳の長壽を保ち、桓武帝の御代に及び隠者周翁と稱し、火鬼・水鬼を驅使して三種の神器を奪ひ、皇弟水上王子及び藤原小黒丸を與黨として、柱石の臣坂上田村鷹を滅ぼして天下を覆し、我が孫を帝位に即けようと企てた。尤も三種の神器は、これを奪取する際、十握の寶劍だけは伊勢海へ落した。一方に於て田村鷹は兇徒の企を探知し、謀計を以て神器二種を奪還し、神鏡の威力によつて周翁の正體を照破して逆賊の心膽を寒からしめたが、更に寶劍の搜索に心を砕いた。これより先、田村鷹の近侍桂平次清房は、田村鷹の女春姫との戀に落ちた爲めに主君の不興を蒙り、且つ父平内兵衛照房の勘當を受けたが、父の横死後母と春姫とを伴ひ、阿漕浦に隠棲して阿漕の平次と稱へ、漁師となつて世を渡つた。母の難病平癒の料として戴帽魚を得ようと禁漁區へ網を入れて一振の名劍を得た。これは先年妖賊が落した十握の寶劍であつた。併し巡檢者のために襲と笠とを押收され、その笠の文字が證據となつて所刑される事となつた。そこへ平瓦次郎藏が出で問答の末、自分が身代りに立つ事となる。次郎藏は實は三種神器の守護を命ぜられたが、それを妖賊に奪はれた笠籠の神職下部友久の養子中川宇内といふ者で、平次の家來筋に當るが、父を救ふために寶劍を探してゐたものであつた。かくて平次夫婦は上京して寶劍を田村鷹に差上げた。三種神器が揃つたので田村鷹は、愈々逆賊を鈴鹿山に攻め滅ぼし、平次は小黒丸を討つて父の仇を報じるといふ

たむらま







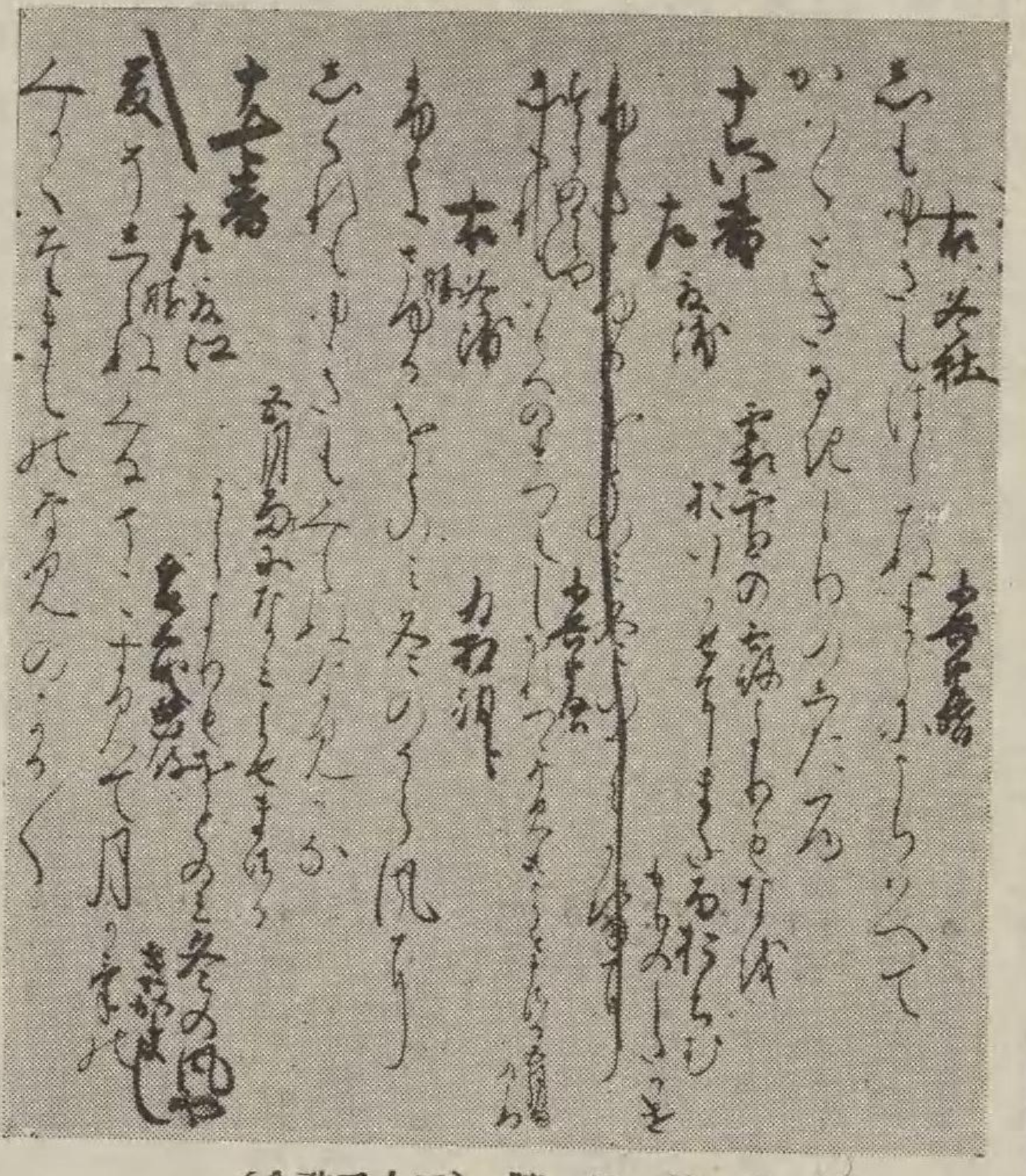




の時、御子左(二條爲氏)、毘沙門堂(京極爲教)、冷泉(爲相)の三兄弟が相鼎立する形となり、各子孫は、各流の傳統を固守する状態に立ち至つた。但し京極派は、二條派に比して振はず、その門下にも

特に掲げるほどの英才を見出ださぬ。

【閑歴】爲教二十九歳の時の出生、母は修理大夫三善雅衡の女、三歳の時叙爵、五歳侍從、從五位上となり、十七歳すでに從四位上に進んだ。その年(文永七年)より祖父爲家に歌を學んだ。建治元年(二十二歳)の年、祖父を失ひ、更に弘安元年(二十五歳)父を喪つた。この事は彼の一生に大きい痛手となつた。その年右中將兼土佐介の官にあり、百首を奉つた事も「新後撰集」の詞書によつて知られてゐるが、なほ従兄弟の二條爲世の、大覺寺統の殊寵を享けてゐる事實が、何より彼の不遇を語るものである。彼は歌人であると共に、政治的才幹をも有してゐたらしい。弘安年中、八月十五夜などに内裏に行はれた歌合に名を列ねてはゐるが、その天賦の才を發揮し得ぬ不満はなほ長く續いた。然るに弘安十年持明院統の伏見帝が御即位あり、爲兼の官職も三四年の間に、饒登りに進み、主上の信任を得て正應四年(三十八歳)七月には、正三位權中納言に拔擢され、宸記などによつても知られる如く、主上の秘書として才幹を發揮した。歌道の方も、永仁元年撰集の仰せを爲世と共に



(合歌番十三) 蹟筆兼爲

に蒙り(但し實現されなかつた)、歌合の判者(永仁五年當座三十番の如き)ともなり、世の尊敬を一身に聚めたのであつたが、その策謀的行爲は、遂に辭官の上に佐渡配流の厄に遭遇するに至つた。これ實に正安元年のことで、越後寺泊の一遊女初君が、爲兼の運命を傷んだ歌が「玉葉集」に出てゐる。正安三年後二條帝の御即位と共に、伏見上皇の御運は逆轉した。爲兼は、孤島で遠所詠歌三十三首を詠んだ(この歌により罪を輕んぜられたともいふ。嘉元元年

勅を受けるにつき反對者があつたに拘らず、勅撰集撰進の命をも受け、正和二年「玉葉集」(別項)を編した。これ、持明院側の諸帝、爲兼及びその一派の斬新な歌風に共鳴され、等しく萬葉振を謳歌されたのにも依るので、二條派の如何ともなし難い點であつた。正和二年伏見上皇の御出家あり、爲兼は御跡を追うて出離を遂げた。その翌々年の事、春日神社に一門願立と稱し南都に向つた。これ再び陰に謀る所があつた爲めで、結果は遂に同年の冬捕縛され、翌年二月土佐に送られた。時に六十三歳。その後の消息は殆ど知る由もない。かくて大覺寺統の天下となり、爲世の重用されただけ、彼は都に歸ることを屑しとなかつたものかも知れぬ。

(五十歳)に召し返され、その四月の五十番歌合、五月の三十番歌合に出席してゐるのを見れば、歌道に於て特に重んぜられてゐたことは推察するに足る。而も再び花園帝御即位につれ、伏見上皇院政を執り給ふや、爲兼の信任は更に厚くなり、權大納言に昇進、本座を聽さるゝに至つた。正和元年、こゝに爲世との軋轢は愈々激しく、延慶三年に兩卿訴陳狀といふ事件を惹起した(延慶兩卿訴陳狀参照。彼の勢力よく爲世を壓し、前科者にして撰集の

あり、奥書によれば、爲兼春日參禪の際、夢想により一時に詠出の上奉納したもの由。春二十首、夏十四首、秋二十首、冬十四首、懸十首、雜二十首、百首に二首缺けてゐる。類從九四七に收む。○延慶兩卿訴陳狀(別項)○爲兼卿和歌抄(別項)○「玉葉和歌集」(別項)。

【作風・人物】彼の存在は、當に二條派の主將爲世にとり大きい痛であつたのみならず、二條派歌風の存續問題に關しても、一大障礙であつた。即ち彼は二條派の守舊的事大主義に對し、全然進歩的革命的態度を採つた。その萬葉調讚美といひ、歌病無視の態度といひ、何れも當時にあつては非常の英斷と見ざるを得ないものである。「野守鏡」の筆者は、一萩の葉をよ〜見れば今ぞしるただおほきなる薄なりけり」の歌を爲兼の作として、指彈の好材料に宛ててゐる。彼を敵視する二條派歌人の例證は屢々捏造誇大されてゐるが、「仙人の菊賣る市か花の枝に露暖むる朝日さすなり」(狹心など、可なり大膽な取材を他に見せてゐることは事實である。その他斬新な用語に至つては頗る多い。落花の静けさに對し、「さそふ風も情を知るや」と詠み、尾花の風情に豫兆された秋を、「尾花が末に秋ぞ浮べる」と表し、落陽踟躕に映せるを、「赤き夕日をしばしばひて」と歌ひ、風の動きを、「麓にくだる聲二垣ほの竹に吹すて」など種々に詠出せる如き、その修辭上に苦心の跡を窺ふことが出来る。その句法に至つては、初句止のもの多く、尾を名詞で切つたものが殊更目立つ。助詞少く、簡勁で、印象的の味豊かなだけ、窮屈の如くもあるものも亦尠しとしない。「もりうつる谷の一筋日影見えて峯も麓も松の夕風」澄みのぼる月のあたりは雲はれて山の端遠く残るうき

勅撰集撰進の命をも受け、正和二年「玉葉集」(別項)を編した。これ、持明院側の諸帝、爲兼及びその一派の斬新な歌風に共鳴され、等しく萬葉振を謳歌されたのにも依るので、二條派の如何ともなし難い點であつた。正和二年伏見上皇の御出家あり、爲兼は御跡を追うて出離を遂げた。その翌々年の事、春日神社に一門願立と稱し南都に向つた。これ再び陰に謀る所があつた爲めで、結果は遂に同年の冬捕縛され、翌年二月土佐に送られた。時に六十三歳。その後の消息は殆ど知る由もない。かくて大覺寺統の天下となり、爲世の重用されただけ、彼は都に歸ることを屑しとなかつたものかも知れぬ。

【作風・人物】彼の存在は、當に二條派の主將爲世にとり大きい痛であつたのみならず、二條派歌風の存續問題に關しても、一大障礙であつた。即ち彼は二條派の守舊的事大主義に對し、全然進歩的革命的態度を採つた。その萬葉調讚美といひ、歌病無視の態度といひ、何れも當時にあつては非常の英斷と見ざるを得ないものである。「野守鏡」の筆者は、一萩の葉をよ〜見れば今ぞしるただおほきなる薄なりけり」の歌を爲兼の作として、指彈の好材料に宛ててゐる。彼を敵視する二條派歌人の例證は屢々捏造誇大されてゐるが、「仙人の菊賣る市か花の枝に露暖むる朝日さすなり」(狹心など、可なり大膽な取材を他に見せてゐることは事實である。その他斬新な用語に至つては頗る多い。落花の静けさに對し、「さそふ風も情を知るや」と詠み、尾花の風情に豫兆された秋を、「尾花が末に秋ぞ浮べる」と表し、落陽踟躕に映せるを、「赤き夕日をしばしばひて」と歌ひ、風の動きを、「麓にくだる聲二垣ほの竹に吹すて」など種々に詠出せる如き、その修辭上に苦心の跡を窺ふことが出来る。その句法に至つては、初句止のもの多く、尾を名詞で切つたものが殊更目立つ。助詞少く、簡勁で、印象的の味豊かなだけ、窮屈の如くもあるものも亦尠しとしない。「もりうつる谷の一筋日影見えて峯も麓も松の夕風」澄みのぼる月のあたりは雲はれて山の端遠く残るうき

【玉葉集】風雅集等の各勅撰集入選の歌の外に、柳風和歌集のもの八首、仙洞五十番歌合(乾元二年四月二十九日)のもの四首、乾元二年五月四日歌合のもの三首、爲兼卿家歌合のもの十首、「十六夜日記」よりのもの一首及び佐渡島詠三十一首のすべてを網羅してゐる。なほ終

浪のうへにうつる夕日の影はあれど遠つ小島は色くれにけり  
小車の音聞くゆふべたれこむるすきかけ白き夕貌

【玉葉集】風雅集等の各勅撰集入選の歌の外に、柳風和歌集のもの八首、仙洞五十番歌合(乾元二年四月二十九日)のもの四首、乾元二年五月四日歌合のもの三首、爲兼卿家歌合のもの十首、「十六夜日記」よりのもの一首及び佐渡島詠三十一首のすべてを網羅してゐる。なほ終

【玉葉集】風雅集等の各勅撰集入選の歌の外に、柳風和歌集のもの八首、仙洞五十番歌合(乾元二年四月二十九日)のもの四首、乾元二年五月四日歌合のもの三首、爲兼卿家歌合のもの十首、「十六夜日記」よりのもの一首及び佐渡島詠三十一首のすべてを網羅してゐる。なほ終

【玉葉集】風雅集等の各勅撰集入選の歌の外に、柳風和歌集のもの八首、仙洞五十番歌合(乾元二年四月二十九日)のもの四首、乾元二年五月四日歌合のもの三首、爲兼卿家歌合のもの十首、「十六夜日記」よりのもの一首及び佐渡島詠三十一首のすべてを網羅してゐる。なほ終

【玉葉集】風雅集等の各勅撰集入選の歌の外に、柳風和歌集のもの八首、仙洞五十番歌合(乾元二年四月二十九日)のもの四首、乾元二年五月四日歌合のもの三首、爲兼卿家歌合のもの十首、「十六夜日記」よりのもの一首及び佐渡島詠三十一首のすべてを網羅してゐる。なほ終



八月十五夜などに内裏に行はれた歌合に名を列ねてはゐるが、その天賦の才を發揮し得ぬ不満はなほ長く續いた。然るに弘安十年持明院統の伏見帝が御即位あり、爲兼の官職も三四年の間に、饒登りに進み、主上の信任を得て正應四年(三十八歳)七月には、正三位權中納言に拔擢され、宸記などによつても知られる如く、主上の祕官として才幹を發揮した。歌道の方も、永仁元年撰集の仰せを爲世と共に

合、五月の三十番歌合に出席してゐるのを見れば、歌道に於て特に重んぜられてゐたことは推察するに足る。而も再び花園帝御即位につれ、伏見上皇院政を執り給ふや、爲兼の信任は更に厚くなり、權大納言に昇進、本座を聽さるゝに至つた(正和元年)。こゝに爲世との軋轢は愈々激しく、延慶三年に兩卿訴陳狀といふ事件を惹起した(延慶兩卿訴陳狀参照)。彼の勢力よく爲世を壓し、前科者にして撰集の

り、下の七文字は文字ぐさりともなるやう排列されて、全く精細な技巧によつて成立されてゐる。なほ、類從本には名號歌も加へられてその圖載せらる。○金玉歌合(伏見院御製歌との歌合で六十番、續類從卷四二二に所収)○爲兼卿家歌合(爲兼爲相親、藤大納言與侍四人の作、一番目に「さかには其色となき景色にもたな春めける今尉にぞありける」と云ふ爲兼の歌が出てゐる。類從八九六に含められてゐるが、二十八番以下のものは缺となつてゐる)○爲兼卿百首(春日社法樂の角書

爲長(漢學者)「姓」菅原(生後)保元三年生れ、寛元四年(一九〇六)薨す。享年八十九【閑歴】大學頭菅原長守の子である。元暦から正治までの間に、試験を受けて秀才となり、次いで檢非違使に任ぜられ、式部少輔、大内記を経て文章博士となり、次いで侍讀になり、大藏卿に任ぜられた。嘉禎年間に參議に任ぜられ、勘解由長官を兼ね、位は正二位に至つた。【業績・著述】和歌に長じ、又宮廷の有職故實に通じてゐた。建保年間後鳥羽上皇のために「貞觀政要」を進講した。又平政子のために同書を假名書に書いた。又「字鏡集」(別項)は、その著作であると傳へられてゐる。この外、「文鳳鈔」(十卷)と云ふ漢文を作る資料として成句・故事を類聚した書がある。【龜田】

浪のうへにうつる夕日の影はあれど遠つ小島は色くれにけり  
小車の音聞くゆふたれこむるすまかけ白き夕貌の花  
枝にもる朝日の影の少きにすまし深き竹の奥かな

【註】の如きこれである。但し餘情もあり清らかなるも味ははれるものにして、全く時流を脱してゐる秀逸少しとしない。

【註】の如きこれである。但し餘情もあり清らかなるも味ははれるものにして、全く時流を脱してゐる秀逸少しとしない。

【註】の如きこれである。但し餘情もあり清らかなるも味ははれるものにして、全く時流を脱してゐる秀逸少しとしない。

要するに彼は、努めて因襲を脱し、赤裸のまま自然に對せんとした。「山里の垣ほの外の深がやに犬呼びこして入る、狩人」などの取材は、全く近世の作と區別がつかぬ新鮮味を持つ。これには、やはり彼の個性に根ざした反逆性を參考すべきだと思ふ。「徒然草」に、爲兼が六波羅武士に捕縛されて引き行かれる態度の雄々しきを見て、香朝が羨望を嘆息する一條が出てゐる。又彼の父は、危篤に際しわが子の性格に兆す災禍を憂ひ、「限ある命を人に急がれて見ぬ世の後をかねて知りぬる」とも詠んでゐる。かくて性格の生んだ歌壇の革新運動は、學統を組成し、影響を遠く後に及ぼし得なかつた嫌ひは多い。さりながら、持明院系統の人々を根強く打ち得た彼の新精神が、有形無形に後世に傳へられた力の絶大さは見逃されぬと思ふ。

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

ためかぬ ためなが

九九九

爲兼卿家集

【作者】藤原爲兼【別稱】入道大納言爲兼集

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

爲永春江

【作者】未詳【別號】狂言亭【藝名】土橋亭

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)

【参考】藤原爲兼傳 北川眞顔(爲兼卿家集附録) ○大日本史 ○類聚名物考 ○花園院宸記(元弘二年條) ○井蛙抄 ○老のくりごと ○徒然草 ○十六夜日記 ○歌苑運署事書 ○野守鏡 ○京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と 江見清風(國學院雜誌一〇ノ四)



詳、或は知久況堂と傳ふ。【別號】狂文亭【生  
歿】明治二十年(又二十二年)十二月二十六日  
(又二十日)歿。享年七十七(又七十九)【閱歴】  
初代春水の高弟で、年功より云へば、春江が  
二代春水を繼ぐべきであつたと傳へられてお  
る。飯田町坂下に住し、又下總佐倉に住して  
ゐたこともある。晩年は小石川水道町に住  
してゐた。明治になつてからは、「芳譚雜誌」  
「吾妻新聞」に筆を執り、後には都々逸の選者  
などにもなつてゐた。家に三女一男あつて、  
みな文才があつたといふ。「魯文珍報」所載の  
「春窓娘學校」には、二女喜蝶女原稿春江補綴  
とある。【著作】大部分「芳譚雜誌」所載のも  
ので、單行となつたものは殆ど見受けない。  
著作數約二十餘種。

【参考】早稲田文學(大正一五ノ四)○續明治全  
小説戲曲大觀○狂歌人名辭書(石川(巖))

### 爲永春水

【姓名】染崎久兵衛。後、延房と改む。【別號】  
狂仙亭春水、柳北釣夫、戲墨堂【生歿】文政六  
年に生れ、明治十九年九月二十七日歿す。享  
年六十四【墓所】下谷坂本一丁目養玉院【閱  
歴】對馬駿原の藩士で、江戸下谷三味線堀の  
藩邸に住んだ。少年時代より文學を好み、初  
代爲永春水の門に入つて、狂仙亭春水と號し  
た。彼の名が書に見えるのは、春雅作「春色雪  
の梅」第四編に、春笑の名を以て序を書いてゐ  
ると春江作「春色初若那」の第三編(天保十二  
年)を彼が綴つてゐる事である。前書初編は  
天保九年刊であるが、第四編は刊行未詳、恐ら  
く天保十二年頃と思はれる。即ち彼が文壇に  
出たのは、この頃で彼が十九歳の時である。  
同じ年爲永春水作「春宵月の梅」第二編を彼が  
續稿してゐる。彼の名を高からしめたのは、

「いろは文庫(別項)である。本書は、彼が生前  
に初代春水に代つて綴つた由を語つたといふ  
が、實は第五編以下と見るべきである。三編  
迄は補助或は校正の名目で門人達の名を連ね  
てゐるに拘はらず彼の名が見えない。第四編  
(天保十一年)にも彼の名がなく、前述の如く十  
二年に至つて初めて彼は活動してゐると見え  
る。弘化三年初代春水作「婦女八賢誌」の第三  
編以下を續稿して居り、その時既に春水を襲  
名してゐる。彼は性質素朴謹直で(名人忌辰錄)  
且つ春水門が多く町人であつた中に武家であ  
り、他が凋落した中になほ若かつたので、自ら  
二代を繼ぎ得たのであらう。合巻に於ける處  
女作は、嘉永元年の「重井菱葉別小紋」(至安政  
六年刊、八編)と馬琴作「南總里見八犬傳」(別項)  
を通じて「假名讀八犬傳」(至嘉永五年刊、十  
六編)などで、後者は彼の思ひ附きと原作品の  
世評とが、かゝるものをも大に世に行はしめ  
た。十編内外のもの、「椿説鬼談語」(自安政  
四年刊、九編)、「雜談雨夜質庫」(自安政三年刊、七  
編)などが彼の得意であつたらしい。長篇の  
「時代加賀見」(安政二年刊の初編より四十四編まで  
春水作。四十五編より明治十六年刊の四十八編まで  
柳水亭種清作)、「黄金水大盡盃」(安政元年初編を  
刊行し、明治十三年に十八編を刊行した)等は、人口  
に膾炙してゐる。馬琴、種員、應賀等の作風を摸  
し、明瞭に奪胎の痕跡をとゞめるが、末期の  
合巻としては見るべき作である。五柳亭徳升  
の「月乃夜神樂」(文政十二年刊、天保二年二編  
刊)を増補續稿して、「西國奇談」(自安政三年至  
明治八年刊、二十編)とし、玉藻前の傳説に「八犬  
傳」を取合せて「新編九尾傳」(自慶應二年至明治  
九年刊、十四編)を増補、執柄太郎(寛政八年、初  
代豊浦人作、黄表紙)に「八犬傳」を綴つて「昔話室

壁太郎」(自安政三年至文久三年刊、八編)を創作す  
るなど、多くは綯ひ交ぜの手法である。併し  
初代春水より合巻に於ては優れ、畫面の美し  
さ、妙齡の美女、年少の美男の端倪すべからざ  
る活動が、當時の讀者の好奇心を満足せしめ  
てゐた。明治になつては、「厚化粧萬年島田」  
(自明治元年至同十年刊、二十編)、「東京開化藤栗  
毛」(明治八年刊、初編)等の如きもの、明治以前  
からの作の續稿、過去の自作品の復刻補綴等  
をなし、「近世紀聞」(條野傳平と合著、十二編)に  
は特に努力の跡が見える。明治十一年頃、東  
京繪入新聞の記者となり、事實めかすが半ば  
以上空想によつた艶話を三面に書いて人氣を  
よび、後年の「續き物」の開祖となつたと言は  
れてゐるが、文名は高くはなかつた。江戸末  
期から明治への過渡期の一作者として、歴史  
的の見地からは認められるが、彼自身には獨  
自の創作は見られない。

【参考】人情本略史村上靜人(人情本刊行會第一  
輯)○明治年代合巻の外観早稲田文學、大正一  
四ノ三、明治文學號(山崎・小池)

### 爲永春水

【姓名】佐々木貞高。後、鶴鶴正輔と改  
む。通稱、越前屋長次郎【別號】金龍山人、狂  
訓亭・爲永正輔、爲永金龍、三驚、人情翁、二世  
振鷺亭、二世南仙笑楚滿人等【生歿】寛政元  
年生れ、天保十四年(一八四三)十二月二十三  
日神田多町一丁目の自宅で歿す(説、同年十二  
月二十二日、又天保十三年七月十三日)。享年五十  
四【墓所】東京築地西本願寺地内、妙傳院(慶  
災後郊外に移轉)【閱歴】初め青林堂と稱する  
貸本屋を営み、後、雜書商となつた。中頃講  
談師伊東燕普の門人となり、寄席に出て、爲永  
正輔、或は爲永金龍と稱した。世にこの職は

子も可なり多かつた點から見ても、親み易い  
人物であつたらしい。併し作品から見ても高  
潔なところは見えない。やゝ教養ある下層の  
江戸町人と云ふところであらう。

直ちに廢業したといつてゐるが、瀧亭鯉丈の  
「八笑人」(文政三年刊)に、正輔の名と池の端吹  
ぬき亭を詠み込んだ狂歌があるから、この頃  
(三十一歳)既に寄席に出てゐた事がわかる。又  
門人狂言亭春雅作「春色雪の梅」(天保九年)に春  
水が深川仲町の席亭に出演することが出てゐ  
るから、少くとも十八年餘も勤めてゐたので  
ある。彼は生活と名譽慾のために種々な事  
をした。即ち馬琴の讀本の古版本を買つて新板  
の如く見せて賣つたり、鼻山人の洒落本を補  
綴して自分の名を入れて刊行したり、又式亭  
三馬の門人となつては三驚と稱し、或は二世  
振鷺亭を繼ぎ、更に二世楚滿人の名で作品を發表  
してゐる。但し二世振鷺亭の名で作品を發表  
したか疑はしい。ただ「風雙紙」(寛政四年)を  
天保四年に「曠世奇談」と改題し、振鷺亭と署  
名し、春亭三曉作の合巻本「十種香秋廻白露」  
(文政四年)に、その名で序文を書き、同じく「光  
明眞言誓仇討」(同年)に、題詠をしてゐる位し  
か見當らぬ。振鷺亭作の「寒紅丑の日侍」(文化  
十三年)の續編を文政九年に發表してゐるが、  
これにすら二世楚滿人の名を用ひてゐるので  
ある。彼の處女作は二世楚滿人の名で發表し  
た人情本「明鳥後の正夢」(文政四年)【別項】であ  
らう。爾來二世楚滿人の名で人情本と合巻本  
との中間を行くやうな作品を續々發表した。  
文政十二年に至り爲永春水と名乗つて人情本  
を發表したが、天保三年刊の「春色梅曆」(別項)  
が非常に讀書界の人氣を博した。今迄不安定  
であつた文壇の地位が漸く確立され、流石の  
彼にも自覺が生じたのである。されば天保八  
年、「英對暖語」(春告鳥)【各別項】を出すに及ん  
で、東都人情本の元祖、或は江戸人情本一流元  
祖と名乗るに至つた。爾來十數種の人情本を

【参考】人情本と云ふ一種の小説形態を創め、  
業績】人情本と云ふ一種の小説形態を創め、

衛録官模倣(文政十一年刊、春聲英英書)の如き、  
後者には、「園乃雪花魁」(文政七年刊、深聲英泉  
書)、「敵討湊の曙」(天保二年刊、重信・國丸書)等が  
ある。先行の合巻、自家の講釋・演劇・傳説等  
を初め、時には黄表紙の燒直し物、「西遊記」な

雲や文研堂・松治等の下に執筆したが、やがて  
作者無人の豊竹座に招かれたらしく、恰も竹  
本座の竹田出雲の奮闘時代に當り、これに抗  
して、殆ど豊竹座唯一の作者たる觀のあつた  
並木宗輔(別項)に次いで、豊竹座擁護の地位に

發表し、江戸の若い男女に愛讀されたが、天  
保十三年、老中水野忠邦起つて風紀肅正をな  
すに至り、風俗に害ある書の作者として罪を  
得、六月十一日手鎖を命ぜられ、本は絶版せ  
しめられ、晩年は不平憂鬱の裡に病歿した。











和漢朗詠集・新撰朗詠集・類聚句題抄・善秀才宅詩合に多く見え、「法華經賦」といふものもあつた(在生要集)。「爲世集」と云ふ詩文集も編述されたやうだが(江談抄)、今、傳はつてゐない。「和歌」拾遺集・源順集・玄々集・續詞花集等にある。なほ「扶桑拾遺集」卷三に「天祿歌合序並跋」(天祿三年源高明の葛野別荘に於て行はれたるを載せてゐるが、これは「源順集」から抜

形式的には大納言にも昇り得たけれど、それも直ちに辭してゐる。永仁元年には、伏見院より爲兼と共に勅撰集撰定の仰せを蒙つたが、遂に實現を見ず、同三年内裏御會、同五年三十番歌合等、殆ど公會より除外されてゐる。ただ彼の業績として永仁三年伊勢新名所繪歌合判が傳へられてゐるのみである。然るに爲兼の流罪となり、後二條院受禪に及び、爲世の歌壇的活動は急に著しいものに復活してきた。御讓位の正安三年は爲世五十二歳の圓熟時代であり、内裏七夕歌や正安百首を成した外、「新後撰集」撰進の院宣をも蒙つた。常に院や内裏に出入して、「仙洞歌合」「禁中歌合」(乾元元年その他)の名を傳へてゐるが、それ等のうち、嘉元元年の「嘉元百首」と同二年の「竹園千首御會」をまづその筆頭とする。官職も民部卿に昇り、當時佐渡から漸くその罪を許されて上洛した爲兼を遙に壓する地位につき得た。その後、延慶元年(五十九歳)より十ヶ年ばかり、再び持明院帝の時代となり、その間、彼は民部卿の職も辭してをり(正和元年)、歌道の方でも、延慶三年爲兼の横暴を訴へた

「延慶兩卿訴陳狀」(別項)と、正和四年「龜岡花下會」の十首寄歌を遺してゐるに過ぎない。爲兼が「玉葉集」(別項)を撰進し、京極家のために大に氣焰を吐いたのも實にこの間である。而も次に大覺寺統から即位さるべき後醍醐帝の宮人に、爲世の女爲子があつた。且つその腹には、尊良親王・宗良親王の如き英邁な諸皇子が御生誕あつたので、既に古稀に近い爲世には新帝即位の目が千秋の想で待たれた。かくて翌文保三年には院より「續千載集」撰進の宣旨を受けた。所謂二度の撰者たり得た得意さのうち、「龜山殿千首」(元亨二年)、「龜山殿七

百首」(同三年)と云ふ類の大歌會が行はれ、或は「月五十首」(同三年)、「七夕百首」(正和元年)と云ふ類の詠進歌集が編まれた。なほ當時京極爲兼は姿を隠して中央歌壇から逃避してしまひ、冷泉家の爲相・爲守も相次いで歿し(嘉應三年)、二條家の勢力は隆々たるもので、爲世はその華やかな晩年を元徳元年(八十歳)の出家を以て一先づ閉ぢた。「高野春秋」の説によれば、出家後は多く高野の蓮花谷に隱栖し、そこで暮したと云ふ事になつてゐるが、元弘建武の時代に都にゐた事も事實で、「九月十三夜内裏歌」(元弘三年)、「立后屏風歌」(同年)、「内裏千首歌」(建武二年)等にその歌が見えてゐる。但し都の亂れを避けて、高野に逃れざるを得なかつた世相は、折角、榮ある一生の大團圓を齎されたものと云はざるを得ない。彼は血族以外の頼阿や淨辨等に對しても、温厚な師匠であつたらしく、龜岡とか難波とか、吟行を共にした事實の斷簡なども遺されてゐる。

【作中編著】「和歌」家集は傳はつてゐない。勅撰集に載つた歌は、續拾遺六首、新後撰一首、玉葉八首、續千載三三首、續後拾遺二〇首、風雅七首、新千載四二首、新拾遺二四首、新後拾遺一四首、新續古今六首、計一七一一首に及んでゐる。その他嘉元百首、龜岡花下會寄歌、龜山殿千首等にその詠が尠くない。「歌論書」延慶兩卿訴陳狀(別項)○和歌庭訓一卷(爲世七十歳以後の著述、嘉應元年かと云ふ。内容は「心は新しきを求むべき事。一、詞は古きを慕ふべき事。一、歌の道は遠く求めひろく聞道にあらずとの事。一、餘情事。一、題をよく心得よと申事。一、本歌の事の六項に互つて説いてゐる。所説として別に斬新の點はないが、二條・京極兩家の論争の生んだ一歌論として意味がある。珍書同好會刊。

【生歿】建長三年に生れ、延元三年(一九九)八月五日歿す。享年八十九【家系】定家の子爲家の代にその子等の間に確執を生じ、二條・京極・冷泉三家(各別項)の鼎立となつたが、その際、二條家を嗣いだ爲氏の子である。母は俊成門下の飛鳥井雅經の子教定の女である。

【閱歴】爲世の生れたのは、曾祖父定家の薨後僅か九年目。即ち祖父爲家は、時に五十三歳、はじめて「續後撰集」撰述の院宣を受けたと云ふ。歌の道にあつて最も油の乗つた時代、父爲氏も三十歳にならうとする正に意氣旺盛の絶頂であつた。従つてその少年期は、甚だ幸福であつたらしい。二歳にて叙爵、十二歳の時には、從四位左中將にまで陞進してゐた。十五歳より歌道の研鑽を始めたと自記してゐる。併し文永二年の白河殿七百首等の公會には未だ加はつてゐない。歌集には、右兵衛督になつた文永六年(二十歳)頃よりの作が傳へられてゐるが、この前後漸く公席に臨んだらしく、翌年八月十五夜の内裏三首歌の一つとして詠んだ「最ど猶憂きにつけてぞ思ふかな云ふにも餘る人のつらさは」と云ふ詠なども出てゐる。祖父爲家は爲世の二十六歳の年に世を去り、それから次第にその子息等の確執が生じて來た。爲世は後宇多院に仕へて、弘安元年(二十九歳)には藏人頭として百首などものし、同六年には參議として内政に與るに至つた。弘安九年、父爲氏薨じ、その翌年は兩統迭立の遺詔より持明院側の伏見帝の受禪を見た年である。そして京極爲兼が爲世に代つて新帝に近侍し、大覺寺統壓迫のために種々祕策を弄した。かくて持明院側は、伏見後伏見と相繼いで受禪され、その間十四五年は爲世にとり、全然暗黒敗類の時代であつた。

【作風】歌人としては、爲家は定家に劣り、爲氏・爲世は、更に爲家に劣るものやうに思はれる。頼阿が「水蛙眼目」に爲世の詞として引いた中に「俊成は幽玄にて難及、定家は義理ふかくて難學、ただ民部卿入道(爲家)體を可學之由深相存也」ともある。以て氣概の乏しき程を知るべきで、保守的傳統的態度を持つた眞面目なる家法遵守者以上何者でもない。これは、他家との論争の内容(例へば延慶兩卿訴陳狀)が、最も明確に説明してゐる點で、論點は家傳歌書の優劣、古今傳授の眞偽、撰者の資格論、撰集命名の適否等の皮相問題のみ。爲世に於てその穩健な態度により一般から或る程度の支持を受けた手腕は認むべきであるが、花園院が「和歌之道自是頗廢云々」(宸記)と評された中にも争ひ難い眞理が籠つてゐる。かくて爲世の歌は平板無味の傾向を持つ。初心の者に戀歌を勧めてゐる點(水蛙眼目)、ありの儘な主觀的表現を得意とするのもこの特色に合致する。叙景歌に於ても、幽玄的象徴的表出のものより微妙なモメントを捉へた寫生的ものが多い。「行く先の雲は櫻にあらはれて越えつる峰の花ぞかすめる」「暮るゝより露と亂れて夏草の茂みにしげくとぶ螢哉」の如き、それである。彼は晴れの歌を詠む時は法輪の凄味ある境内を徘徊しつつか案じたとも云はれてゐるが、かゝる用意を必要とした程の崇高な想像歌はその作中殆ど遺つてゐない。(爲兼參照)

【参考】和歌作者部類○續三代集作者部類○大日本史料(六ノ五)○公卿補任○尊卑分脈○冷泉家系圖○花園院宸記○水蛙眼目○高

を四字句にして排列し記憶に便せしめたもの。群書類從一三七所收)○掌中曆二卷(源爲憲の「口遊」を更に擴張したもの。上巻は乾象曆に始まり、官名以下都合八門に分れてゐる。下巻は散佚。續群書類從九三一所收)○世俗往生決疑(現存せず)○金剛般若驗記(同占)○三元九紫法(同上)。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲康】漢學者【姓名】本姓は射水、後に、三善爲長の養嗣となつて三善を冒す。【號】槐市老翁、朝野群載。【生歿】永承四年に生れ、保延五年(一七九)八月四日歿す。享年

【爲守】「曉月房」を見よ。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。

【爲世】本朝新修往生傳○元亨釋書(山岸)爲世(たけの)歌人【姓氏】藤原氏・二條家・御子左家とも。【法號】明釋明尺ともかく。



野春秋○増鏡○東野州開書  
田山花袋

【生歿】明治四年十二月十三日、群馬縣邑樂郡館林町外、伴木城沼のほとりに生れ、昭和五年五月十三日、府下代々木の自宅で病歿した。享年六十。【閏歴】明治九年三月、母と共に東京に移つたが、警視廳に勤めてゐた父が十年二月、西南役で戦死したので、八月母や祖父に伴はれて故郷に歸つた。少年期から青年期へかけての艱難流離の生活はこの頃から始まつた。十四年二月更に上京、某書肆の丁稚となつたが、翌年兄に連れられて又歸郷した。十九年、全家上京の際、彼も三度目に東京の人となつた。初



田山花袋  
め牛込富久町會津侯邸内に住み、後、牛込納戸町に移つた。二十三

年、牛込甲良町に轉じた。二十四年、二十歳の時、尾崎紅葉・江見水蔭を訪ねた。又「千葉萬紅」に短篇「瓜畑」を掲げた。二十五年、ピクトル・ユーゴーの作を翻譯して「山家水」を作つた。この頃、松岡(柳田)國男・太田玉茗と相識つた。二十六年、トルストイの「ゴザック」を翻譯した。二十八年六月、中央新聞社に入社し、九月退社した。二十九年、牛込喜久井町に轉じた。八月「わすれ水」を「國民之友」夏期附録に掲載した。この年、初めて島崎藤村・國木田獨歩と交はつた。三十二年一月、太田玉茗の妹利佐子と結婚した。この年、新聲社より長篇小説「ふる郷」を出版して好評を博した。八月、母死去。九月、博文館編輯部

に入つた。三十四年四月、「野の花」を發表した。この頃までは、多感な、浪漫的な、戀愛小説の作家に過ぎないと世間から見られてゐたが、三十五年二月、重右衛門の最後(別項)を「アカツキ」叢書の一巻として發表するに及んで、西洋自然派の影響を受けた新しい作風は、時人の眼を驚かした。三十七年三月、

戦役 第二軍の私設 官軍 班の一員として従軍し、滿洲の諸戦場を経て、九月歸國し、「第二軍從征日記」を公にした。三十八年、山崎・佐藤兩氏の「大日本地誌」の編纂助手となつた。生來、旅行好きである上に、この地誌編纂のために、屢々日本各地を遍歴した。三十九年、「文章世界」(別項)が博文館より創刊されるや、その主筆となり、その十二月、東京郊外代々木に家を新築して住んだ。四十年、三十六歳の八月に「滿洲」(別項)を發表した。蓋し、作者個人に取つても、日本の文壇全體に取つても、劃時代的の作品であつて、これが導火線となつて自然主義運動が起つた。この以後、精力絶倫の彼は、一方「文章世界」その他の雑誌などに自然主義鼓吹の論陣を張りつつ、長短無数の小説を續々創作して、新興文學の先驅者の面目を遺憾なく發揮した。大正元年十二月、博文館を退いた。十年十月、徳田秋聲と共に、彼の誕辰五十年を祝す會は、殆ど文壇全體(自派を除く)によつて築地精養軒に催された。十二年に、花袋全集(十二巻)發行に着手し、震災のために一

時中止したが、十三年三月に至つて完成した。この間、滿洲旅行を試みたり、「東京震災記」を著したりした。昭和三年十月、再び滿洲に遊び、歸後十二月、腦出血を病み、一時癒えたが、翌々五年終に歿した。彼は正規の學校教育は受けなかつた。明治十六年、藩儒吉田陋軒に漢學を學び、二十二年桂園派の直系、

彼の人物に當てはまる。彼の初期の作風は、感情的・浪漫的であつた。自然主義運動の先驅者となるに及んでは、明かに理智的・客觀的の態度を取り、作風の上にも、それがはつきり現はれたが、それでも生來の熱情は屢々理智を裏切つた。後、宗教的傾向の強い作品を發表するやうになつては、幾分象徴的の作風を示した。即ち理智と情意との融合を狙つたらしく思はれる。更に轉じて「源義朝」以下の歴史小説に筆を染むるやうになつてからは、心境に一段の清澄を加へ、自然主義の極致、或は象徴主義の開眼、換言すれば主觀と客觀との渾一を思はせるものがある。我が國自然主義運動の先驅者の一人といふよりは、その第一人者の位置にある事は疑ふべからざる事實である。詩人としての花袋は「抒情詩」(別項)以後、遂に進展を示さなかつた。自然主義に到る迄の感傷小説は、即ち詩心の散文化であつて、「君をこひしは」の如き若き日の殉情調は、花袋詩中での整つた詩品であつたが、その詩魂がそつくりそのまゝ小説によつて散文詩風に表現せられたのが花袋の感傷小説である。彼はそれ以外に韻文的表白をば試みる事しなかつた。【史的地位】ヨーロッパ近代文學、殊にフランス自然派の文學からの影響は著しいが、彼はロシアやドイツの自然派の文學からも、深い影響を受けてゐる。そして彼自身は前時代の硯友社風の不徹底な寫實主義を壓倒して、ヨーロッパの科學的自然主義に近い實驗と觀察とを基礎とした新文學を導いたといふ意味に於て、逍遙・二葉亭以後の明治文學に一つの革命を成し遂げたのである。勿論、これは彼一人の力でなく、彼と力を合せて働いた作家や評論家も多かつたし、時代の傾向

【著作】(前記以外の主なる作を擧げる)○一兵卒(四十二年一月)(別項)○土手の家(同年同月)中央公論)○生(四十二年四月より讀賣新聞)(別項)○妻(四十一年二月)(生參照)○インキ壺(感想集)(四十二年)○田舎教師(四十二年)○縁(四十三年十月)(生參照)○髮(四十四年八月より國民新聞)○春雨(大正三年一月より讀賣新聞)○時は過ぎ行く(五年四月單行)○一兵卒の銃殺(六年一月より國民新聞)○ある僧の奇蹟(六年九月、太陽)○殘雪(六年十月より朝日新聞)(別項)○再び草の野(七年十月單行)○河ぞひの春(八年四月)○源義朝(十三年)○流失(十四年)○通盛の妻(十五年)○道綱の母(昭和二年)等。

【人物・作風】彼は何よりもまづ熱情の人である。誠實、勤勉、率直、多感等の形容詞は、

を得意とする西鶴と、早口をよい事としない惟中との微妙な關係を知るに參考とならう。而も後の兩吟の方で、一時軒の出した「金の御幣は握てはなさぬ」といふ句に、西鶴が「大矢數その目閑に花の風」と附けてゐるのは、西鶴

云つてゐる。同じ播州玉作の遠舟がこの開帳を少し前に知つて、俳句勸進を正月下旬に始めて三月下旬に成就し、四月に出版してゐるので、開帳の終り頃に既に本集が出てゐる譯である。勸進の趣旨が観音・教盛・名所の三項であつたことが、序によつて知られるが、裏の

て、その中に「太郎冠者なんぞあるかやい。御前に五百韻」とある如く、狂言の太郎冠者・次郎冠者からの着想と思はれる。併しこの着想の本をなすものは、恐らく和歌の方の堀河太郎百首・同次郎百首であつたらう。【成立】延

は自らの影響が、なかく、に大きかつた事は争はれない。 [中村(星)自夏]

太夫櫻 伊集集一册【編者】和



ス」を翻譯した。二十八年六月、中央新聞社に入社し、九月退社した。二十九年、牛込喜久井町に轉じた。八月「わすれ水」を「國民之友」夏期附録に掲載した。この年、初めて鳥崎藤村・國木田獨歩と交はつた。三十二年一月、太田玉若の妹利佐子と結婚した。この年、新聲社より長篇小説「ふる郷」を出版して好評を博した。八月、母死去。九月、博文館編輯部

「文章世界」その他の雑誌などに自然主義鼓吹の論陣を張りつ、長短無数の小説を續々創作して、新興文學の先驅者の面目を遺憾なく發揮した。大正元年十二月、博文館を退いた。十年十月、徳田秋聲と共に、彼の誕辰五十年を祝す會は、殆ど文壇全體(白樺派を除く)によつて築地精養軒に催された。十二年に、花袋全集(十二巻)發行に着手し、震災のために一

春南(大正三年一月より讀賣新聞)○時は過ぎ行く(五年四月單行)○一兵卒の銃殺(六年一月より國民新聞)○ある僧の奇蹟(六年九月、太陽)○殘雪(六年十月より朝日新聞(別項))○再び草の野(七年十月單行)○河ぞひの春(八年四月)○源義朝(十三年)○流失(十四年)○通盛の妻(十五年)○道綱の母(昭和二年)等。

いが、彼はロシヤやドイツの自然派の文學からも、深い影響を受けてゐる。そして彼自身は前時代の硯友社風の不徹底な寫實主義を壓倒して、ヨーロッパの科學的自然主義に近い實驗と觀察とを基礎とした新文學を導いたといふ意味に於て、逍遙・二葉亭以後の明治文學に一つの革命を成し遂げたのである。勿論、これは彼一人の力でなく、彼と力を合せて働いた作家や評論家も多かつたし、時代の傾向

もまたさういふ革命を招来すべく準備されてはゐたのだが、それにしても、彼自らの力、彼自らの影響が、なか／＼に大きかつた事は争はれない。

云つてゐる。同じ攝州玉作の遠舟がこの開帳を少し前に知つて、俳句勸進を正月下旬に始めて三月下旬に成就し、四月に出版してゐるので、開帳の終り頃に既に本集が出てゐる譯である。勸進の趣旨が觀音・敦盛・名所の三項にあつたことが序によつて知られるが、集つた俳句を見ると敦盛追懷のものが最も多い。以上によつて土地人の土地最良と判官最良の感情が窺はれるやうである。庶業者に著名な俳人の少い點が物足りないが、敦盛諷詠を中心とする談林風の櫻花句集として、異色ある一集と云つてよい。なほ遠舟撰集の「藤萬句」の一端を、本集によつて窺ひ得ることも注意してよい。

て、その中に「太郎冠者なんぞあるかやい。御前に五百韻」とある如く、狂言の太郎冠者・次郎冠者からの着想と思はれる。併しこの着想の本をなすものは、恐らく和歌の方の堀河太郎百首・同次郎百首であつたらう。「成立」延寶六年冬「刊行」延寶七年一月序であるから同年であらう。「内容」一時軒惟中の一座した百韻各五巻を収めてゐる。即ち「太郎五百韻」は、最初の巻は延寶六年五月十二日、一時軒大飯住宅初會興行で、連衆は梅翁・一時軒・益翁・由平・西鶴・如見・幾音・貞因の九吟百韻、次は伏見西岸寺任口の序があつて、延寶六年三月、一時軒と任口との兩吟百韻、次は淀の木村三ヶ叟を西岸寺の宿りに待ち受けて、一時軒・三ヶ・任口の三吟百韻、次は一時軒自身の序があつて、一時軒と西鶴との兩吟百韻、次は同じく西鶴と一時軒との兩吟百韻、以上の五百韻である。「次郎五百韻」は、卷頭に春翁の戦記文を真似た序があり、最初の巻は任口の序があつて、一時軒と任口との兩吟百韻(任口四十九、惟中五十)、次は前書のある朋之の發句で始まつて、梅翁・一時軒・益翁・由平・幾音・如見・貞因・西鬼・保友との十吟百韻、次は延寶六年九月一時軒と貞因との兩吟百韻、次は一時軒と西海との兩吟百韻、次は延寶六年十二月十六日興行、江雲・一時軒・梅翁・益翁・由平・貞因・貞恕・如見の八吟百韻、以上の五百韻である。「價值」惟中の早期の俳風を知るべき代表的な集であり、同時に又惟中の交友關係その他を知り得る點に於て價值が多い。惟中が岡山から大阪へ移つた當初頃に親しく任口の所に宿つてゐることや、西鶴に千句の兩吟を望まれて、それは障る事があつて止んだけれども、兩吟で二百韻を試みてゐるなども、早口

を得意とする西鶴と、早口をよい事としない惟中との微妙な關係を知るに參考とならう。而も後の兩吟の方で、一時軒の出した「金の御幣は握てはなさぬ」といふ句に、西鶴が「大矢數その日閑に花の風」と附けてゐるのは、西鶴が「天句數」を試みて間もない時のこととして意味深長なものがある。又惟中・貞因兩吟百韻の前書に「自辰終至酉刻」と附合の所要時間の明記されてゐるなども參考とならう。「萩原」

太夫櫻 俳諧集 一册【編者】和氣遠舟【名義】攝津上野山須磨寺の觀音遠忌に當り、同寺に若木の櫻と呼ばれる名木の櫻のあるに因んで櫻の句を勸進した集で、且つ須磨は無官大夫敦盛討死の遺跡である關係から、太夫櫻と名づけたのである。遠舟の序の劈頭「此花は江南所無なり」とあるのは、若木の櫻に添へた制札の冒頭の語であり、序末に「所がら敦盛の遺迹に寄て太夫櫻と名のる物也」とある。「成立」延寶八年三月【刊行】延寶八年四月【諸本】芭蕉以前俳諧集(俳諧文庫)所收【内容】前述の如く五百年忌開帳に際し、廣く櫻の句を勸進して成つたもの。櫻の句が七百十二句、これを八分してその一部一部は最初と最後に有名な俳人を据ゑ、その間々にさまざまの名のない俳人及び殆ど無名と思はれる俳人を並列させてある。今これ等八部の各最初、最後の人を拾つて見ると、梅翁・宗圓・重安・如見・益翁・宗貞・西鶴・來山・由平・宗岑・惟中・不琢・湖春・友雪・保友・遠舟の如くなる。この次に追加一句がある。この八部の後に東柳軒遠舟が延寶四年に草庵で藤萬句を興行した趣の序引があつて、その萬句の中から抜いた連句表三句四種、發句百一句、追加として表三句一種があつて終つてゐる。作者は大部分談林であるが、少數の貞門も加はつてゐる。「價值」本集の勸進に加はつてもゐる惟中が、本集と同年の八月に刊行した「續無名抄」の中に、「攝州須磨寺の開帳、ことし二月より四月の中旬に及び、老若男女群をなせり」と

他律性(美的自律性)を見よ。【志田】  
樽 能狂言【別名】無縁、吟三郎【解説】或る男が、贈物の樽を擔いで舞入に掛ける。途中知人のところへ挨拶に廻ると、花智様が樽を擔ぐのは宜しくあるまい、と言はれ、辭退も出来かね吟三郎といふ者を併に連れて行く。所がいよ／＼舅の家に行くと冠者が吟三郎を舞だと取違へて、舞には構はずに上へ請じて大に歡待するので、吟三郎も遂にはいゝ氣になつて引出物の刀まで貰つて立ち出る。舞は立腹するが、せめて刀なりとも呉れと下手に出る。吟三郎は相手にもしないので、舞も悄然として、「さて／＼無縁の舞のちを入れ」と言つて歸路につく、といふ筋。大藏流では今は行はれてゐない。【龍田】

太郎五百韻 俳諧集 合一册【編者】岡本惟中【名稱】題簽には「一時軒太郎五百韻」合次郎五百韻とある。「名義」合五百韻をつを太郎・次郎と分けたのは「太郎五百韻」の春翁の序が、狂言の言葉を真似てあつ

俵藤太物語 御伽草子 二卷【作者】未詳【別名】俵藤太草子【成立】室町期【諸本】古板本は寛永整版本。御伽草紙(有朋堂文庫本)・日本文學大系第十九卷・御伽草子(名著文庫)に所收。【題材】武勇傳説。弓術傳説。前半は怪物退治(三上山蟻蛇退治)の傳説、後半は將門征伐の史實に基づいて作られてゐる。謡曲にも「百足」引鐘がある。蟻蛇退治は、「太平記」(卷十五)と同材で、素尊大蛇退治神話の流れを受け、また粟津冠者大蛇退治の園城寺鐘の由來傳説(古事談第五)の變形でもあるが、この傳説の形成には(乃至は既に粟津冠者傳説に於て)、或は支那傳説の程靈鏡の蟹退治傳説(淵鑑類函)の影響もあらう。朝鮮の高麗太祖に關しても類話が傳へられてゐる。且つ龍宮行は、彦火々出見尊神話及び浦島傳説の轉化、土産の米俵は如意寶で、「今昔物語」(卷十七)の生江世經(宇治拾遺卷十五)には伊良野世恒や「宇治拾遺」(卷六)の叡山の貧僧に關して傳へられる奇瑞が附着して來たものであらう。又將門征伐には、七人將門の傳説と不死身モーターフとを含んでゐる。

たゆうざ たわらと

【梗概】朱雀院の御時、俵藤太秀郷は瀬多の橋で大蛇を踏んで通つた日の夜、旅宿に大蛇の化した美女が現れ、湖水の主の龍女なる由を

一〇五



告げ、三上山の蜈蚣退治を懇願したので、受諾して汀に立ち、二矢を空しくした残り一矢の鐵には唾を吐き掛け、八幡を念じて射放つと手應へあり、射止めた怪物をすたくに斬り捨てた。翌夜龍女再び来り、使つても盡きぬ俵と巻絹と鍋とを贈り、更に龍宮に請じ迎へて鎧と太刀と祇園精舎の供養に鑄た釣鐘とを



たわらの たんかい  
たわらの たんかい  
たわらの たんかい

彌勒を祈念して出で立つた。討手の大將軍藤原忠文が駿河で休む間に、副將軍を承つた國香の嫡男上平太貞盛は、先陣の藤太一人に高名させては弓矢の瑕瑾と、急行して秀郷の軍と合した。最初の手合は官軍方の負であつた。將門は身長七尺餘、重瞳、而も五體は鐵で、且つ見分け難い六人の薩武者あるを知つた秀郷は、貞盛と言ひ合せ、諷ひ降つて敵の館内に起居し、見染めて契つた小宰相の局に將門も通つて來るので、影の有るのが本體である事、願願だけは肉身である事を聞き得、終に一矢で射斃した。凱旋の後、貞盛は正五位上將軍に任じ、秀郷は從四位下、後に將軍となつて榮えた。皆龍神の加護である。

太 田原船積 たはらの ふねづみ 狂歌師  
【姓名】大竹氏。通稱高濱屋三左衛門【別號】大湊舎【生歿】生年未詳、文政三年(二四七九)十月十八日歿す。【法名】觀靈量壽信士

戸小網町の船積問屋の主人で、天明年間狂歌を詠み始めたけれど、師に就いて學んだでもなく、又いづれの社中にも加はるでもなかつた。その狂歌、狂文を集めた家集に、「夷曲」とし俵(文政四年)二冊がある。【野崎】

多波禮草 たはれ せうそう 隨筆 三卷 【著者】雨森俊良(秀洲) 【刊行】寛政元年【解説】著者自身初頭に「たはれたるもの、言葉も、かしこきはえらぶといへるをたよとし、見し、ききし、おもひし事どもを、そぞろにかきつづ

けて、世のそしりいかがおそろしけれど、わがのちなる人の、にはのをしへともおもへかした、たく火にやきもやらず、のこし侍るなり」と述べてゐる。和漢古今の事實を引いて衆人教誡の言をなし、交ふるに詩歌文雅の談等を以てしたもの。文體は平明なる雅俗折衷文で、多く假字を用ひ、婦幼にも解し易い事を旨としてゐる。但し條項の標題はなく、又目次もない。著者の親友室鳩巢の跋中に、朝鮮趙泰億が留別の贈詩を擧げて、「著者の身世ほぼ知るべし」と云つてゐる。【和田】

單音節語 たんおんせつご 「孤立語を見よ。」  
單音文字 たんおんじ 「文字」を見よ。  
單音論 たんおんろん 「音聲學」を見よ。

短歌 たんか 和歌の一體【名稱】「みじかうた」とも。和歌(別項)の中心をなす一歌體。【成立】短歌は、五・七・五・七・七の五句體の歌體であるが、この形式の成立には長形式より短形式へ、偶數形式より奇數形式への二原則が基礎となつて居り、これが三の過程をとつてゐる。第一は四句形式の終りに一句が結びついて成立してゐる。これは古代の短歌の第五句が繰返しである場合が多い點からも推定される。第二は六句形式(旋頭歌)の第三句が脱落して五句形式となつたのである。旋頭歌は初め三句と後の三句とが結合したもので、第三句と第六句とは同じ性質の句が多く、第三句は脱落しやすいためである。第三は長形式の終りが獨立して反歌となり、更に反歌のみが歌體として短歌形式となる。この現象は記紀の歌謠や「萬葉集」の中にも見出される。この三の過程は短歌形式の成立の原因となつてゐると認められる。【性質】短歌形式が日本詩歌の主なる形態として存続したのは、日本

人の有する感動を表現するのに最も適した形態であるためであらう。最も緊縮した中に純粹感情を効果的に表現し得るのである。短歌形式の表現としては、「萬葉集」から「古今集」「新古今集」に至るに従つて變化がある。句切の上で、二句切・四句切から初句切・三句切となる所から五七調から七五調への推移が見られ、また第五句の形式が終止形止から連體形もしくは已然形止となり、更に體言止に推移してゐる。又表現内容に於ても優美・壯美・靜寂美等があるが、何れも純粹感情の最も効果的に表現されてゐる所に、短歌の形式としての特質がある。【句の名稱】短歌の構造としては六人部是香の「長歌玉琴」(別項)に詩の起承轉結の立場から五句を分解して、序辭・發辭・述辭・判辭・結辭といふ説明を與へてゐる。句の名稱としては初めの三句を上句、後の二句を下句ともいひ、また第一句を起句又は頭句、第二句を胸句、第三句を腰句、第五句を尾句又は落句といふ。(和歌參照)

【參考】短歌撰格稿守部○古風三體考 近藤芳樹  
○國歌の胎生及び發達五十風力○短歌概説 阪口保 【久松】

譚海 たんかい 隨筆 十五卷 【著者】津村正恭【諸本】大正六年國書刊行會で刊行したものがあつた。【解説】江戸の歌人津村藍川が、安永中四十歳の頃から約二十年間に、百般見聞の時事を筆まめに書き集めたもので、江戸時代後半に出た隨筆中の大部物の一である。公家武家の逸話、政事談、文藝談、名所舊跡談、地理物産談、社寺縁起談、天災地妖談、醫藥厭勝談、珍玩名物談、衣服調度談、土俗談、怪異談その他、凡そ人事・世事に關するあらゆる説話を網羅してゐる。見方によつては近代の著聞集

短歌滅亡私論 たんかめつじつりん 歌論 【著者】尾上柴舟【發表】明治四十三年十月短歌雜誌「創作」【解説】この論文はその當時かなり

と稱すべきものである。内容が類別されてないのが缺點である。無年紀柳塘主人の序、寛政七年著者の跋がある。その跋文に曰く「予壯歳有志于四方、而塵鞅不果、每爾稠人談、及四方之事、亦不爲妙焉、遂記矢口之言、名譚海、其始也偶然筆之、中則荒於業終

嘉永元年、己酉秋は嘉永二年、庚戌秋は嘉永三年、辛亥秋は嘉永四年、壬子秋は嘉永五年、癸丑秋は嘉永六年に刊行された。丁未・戊申・己酉・庚戌・辛亥・壬子・癸丑の秋名は、その刊行の年の干支である。【諸本】國書刊行會本に收められ刊行されたが、日本書紀・春記・今昔

英丑秋は、和歌一宇抄二冊、古事談六冊、基盛朝臣鷹狩記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七帙百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の弊に當つた爲めに、世に流行す



引出物としたので、秀郷は鐘を三井寺に寄進して盛大な供養を行ひ、下野國で大に威を振つた。下總國相馬の平將門が、伯父國香を討つて自ら新皇と號し、都へ攻め上る用意ありと聞き、同心して日本の半分を管領し度く訪ねて行つたが、人物の輕率なるを看、上洛して奏聞し、一方の大將に任せられ、三井寺に

師に就いて學んだでもなく、又いづれの社にも加はるでもなかつた。その狂歌・狂文を集めた家集に、「夷曲とし俵」(文政四年)二冊がある。【野崎】**多波禮草** (たはれ) 隨筆 三卷 【著者】雨森俊良(芳洲) 【刊行】寛政元年 【解説】著者自身初頭に、「たはれたるもの言葉も、かしこきはえらぶといへるをたよりとし、見しききし、おもひし事どもを、そぞろにかきつづ

は初め三句と後の三句とが結合したもので、第三句と第六句とは同じ性質の句が多く、第三句は脱落しやういのである。第三は長形式の終りが獨立して反歌となり、更に反歌のみが歌體として短歌形式となる。この現象は記紀の歌謠や「萬葉集」の中にも見出される。この三の過程は短歌形式の成立の原因となつてゐると認められる。【性質】短歌形式が日本詩歌の主なる形態として存続したのは、日本

のがある。【解説】江戸の歌人津村藍川が、安永中四十歳の頃から約二十年間に、百般見聞の時事を筆まめに書き集めたもので、江戸時代後半に出た隨筆中の大部物の一である。公家武家の逸話、政事談、文藝談、名所舊跡談、地理物産談、社寺縁起談、天災地妖談、醫藥談、珍玩名物談、衣服調度談、土俗談、怪異談その他、凡そ人事・世事に關するあらゆる説話を網羅してゐる。見方によつては近代の著聞集

と稱すべきものである。内容が類別されてないのが缺點である。無年紀柳塘主人の序、寛政七年著者の跋がある。その跋文に曰く「予壯歳有志于四方、而塵鞅不果、每廁同人談、及四方之事、亦不爲渺焉、遂記矢口之言、名譚海、其始也偶然筆之、中則荒於業、終則勇於其成、既而二十年成十五卷、亦復足償初志耳、今也老矣、時々展玩、如別開一宇宙也、呵々」と。

【著者小傳】津村正恭、通稱三郎兵衛、藍川又深水と號した。鳴島錦江に學んで和漢の學に通じ、殊に和歌・和文を善くす。曾て國初以來の和文を輯めて「片玉集」百餘卷を作り、文化三年三月、その居宅附近よりの出火には罹災を免れたが、その後全本の所在が分らなくなつたのは惜しい事である。終身清貧に安んじ、讀書著述に耽つたと云ふ。文化三年五月十六日歿、享年七十餘。 (和巴)

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

とし、科學的に優れたものが多い。歌論史上もとより重視すべきものである。【相原】**短歌滅亡私論** (たんかめつしりろん) 歌論 【著者】尾上柴舟【發表】明治四十三年十月短歌雜誌「創作」【解説】この論文はその當時かなりの反響を起したものであつた。柴舟の謂ふ所は、(一)近代の和歌は一首として獨立性に乏しく、五首なり十首なり一つのものとして一括して鑑賞せられるべきものである。従つてそれは分解した形で表はす必要はなく、初めから唯一つとして纏まつた形式のもので表はせば足る。(二)短歌の形式が今日の吾人を表現するには不完全であり力が足りない。特に日本語が五音七音と云ふ傾向を多く有つてゐた當時は知らず、自由な散文的な語を用ひる今日では、その形式は感じを述べるにふさはしくない。(三)用語が文語であつて口語でない所に、十分に自己を表はし得ない所がある。上記の理由で短歌の存続を否認する。國民的自覺の起つた時、短歌は廢滅すると云ふのである。この議論は、一つは連作的傾向が盛んになつて來た所より起り、一つは既に詩壇に於て自由詩・散文詩の唱道があつて、新體詩の定型の破壊せられつつあるところより起り、一つは口語詩運動が起つたところより起つてゐるが、歌壇に於ても口語歌問題、破調短歌の問題があり、又連作的傾向が、益々増加して行つてをり、それ等の風潮を透察し概括しての所論であつた。【石井(直)】

【著者小傳】津村正恭、通稱三郎兵衛、藍川又深水と號した。鳴島錦江に學んで和漢の學に通じ、殊に和歌・和文を善くす。曾て國初以來の和文を輯めて「片玉集」百餘卷を作り、文化三年三月、その居宅附近よりの出火には罹災を免れたが、その後全本の所在が分らなくなつたのは惜しい事である。終身清貧に安んじ、讀書著述に耽つたと云ふ。文化三年五月十六日歿、享年七十餘。 (和巴)

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

【著者】和歌一字抄二冊、古事談六冊、甚盛朝臣傳記一冊、丹鶴圖譜三冊、以上十二冊、總計七冊百五十二冊である。【價值】その校訂の嚴密と彫刻の精美とは他に比類のないものとして世に珍重される所であるが、刊行當時國家多事の際に當つた爲めに、世に流布することが少かつたので、現存するものは少い。殊に丹鶴圖譜(類聚雜要抄參照)の如きは着色鮮麗のものであるが、一般には國書刊行會本の縮刷によつて窺ひ得るに過ぎない。【石村】

たんかい たんきま



思亮(海棠庵)・中村景蓮(佛庵)・尾代弘賢(輪池)・山崎美成(好問堂)・瀧澤解(曲亭馬琴)・同宗伯(琴嶺)等、好事癖の人数名、各々所蔵の古書畫・古器財等を携へて一堂に會合し、耽奇會と名づけ、各々その圖本を作り、説明・考證を提供して談話交遊した。馬琴はやゝ後れて文政七年八月の會から出席し、同八年十一月に至つた。松蘿館・海棠庵等は、文政七年三月の初會から出會し、八年十一月迄に二十卷を作つた。馬琴は十回分を五卷に輯めた。世に多く傳はる本はこの五卷本であるが、松蘿館等の二十卷本もあるわけである。馬琴系の五卷本に天保三年の同人序が添つてゐる。【諸本】馬琴系の五卷本は久しく寫本で行はれてゐたが、日本隨筆大成卷十二に收められた。別に好問堂山崎美成の家傳はつた二十卷本がある。これは前の五卷本に比べて内容の大きいのは耽奇會第一回からの集録であるからである。察するに松蘿館や海棠庵の家々の物も、ほぼこれと同じであつたらう。好問堂本は續隨筆文學選集(卷一四)に收められた。元來會員各自の所好で編輯したものであるから、内容の排列方等に異同がある。【解説】名家の筆蹟、古文書、古圖像、彫刻物、文房具、珍奇なる動植物、その見取圖、地方の舞踊の圖、古時流行の器具、その他發掘品等も當時珍奇と目せられた物の限りを圖録してある。【和田】

あり、これより小さなものに、語根や接頭辭・接尾辭・語尾などがある。これ等と明瞭に區別して單語を定義する事は甚だ困難であつて、西洋語に於ては、文字に書く時、一つづきに書かれる習慣になつてゐるものを單語と認め外なしとするものさへある。日本語に於ては、單語毎に離して書く習慣がない故、書き方の上から單語を定める事は不可能である。【日本の單語の通有性】日本語の多くの單語に通ずる性質としては、(一)一定の意味をもつてゐる。(二)一定の音が一定の順序にならんでゐる。(三)各音節の音の高低の關係(アクセント)がきまつてゐる。(四)實際の言語に於て、中途で切つて發音することがない。(五)實際の言語に於て、その前と後とに切れ目をおいて發音することが出来る。以上の如きものを擧げることが出来る。これ等の條件に照せば、單語より大なる單位と、これより小なる單位とを單語と區別し得る場合が多い。例へば「花咲く」は「花」と「咲く」との間をはなして發音してもよい故單語でない。「月夜」は二つの單語のやうに見えるが、實際「つき」と「よ」とをはなして發音する事がない故單語ではない。【私】といふ單語に「ご」といふ接尾辭がついて出來た一の由生語(語構成参照)である。「ほのか」「ほのく」「ほのぐらし」の「ほの」は、「ほの」の後で切つて發音することがない故、單語ではなく、單語より小さい單位である(語根である)。前後に切れ目をつけて發音するといふことは、音としてそれだけで獨立する考へることが出来る。即ちそれだけで獨立し

得るか如何によつて、單語と然らざるものとを區別するのである。【助詞・助動詞の特性】かやうに考へれば、單語と他のものとの區別は明確なやうであるが實際はさうでない。單語といはれてゐるものが、完全に以上の五つの條件にかなふのは、體言・用言及び副詞・接續詞・感動詞であつて、助詞と助動詞とは、その條件に缺けるところがあるからである。即ち「花が咲く」の場合に「花が」は、實際の言語に於て、いつも一つづきに發音せられ、「花」と「が」との間を切ることはない。「行かない」「行つた」などの「ない」「た」も同様である。これ等の單語は、(五)の條件を具へないのであつて即ち獨立しないのである。さうしてこれ等は、いつも上の語と一つづきに發音するといふ點で、「私ども」「君たち」の「ども」「たち」と全然一致してゐるが、「ども」「たち」は接尾辭として、單語よりも小さい單位と認められてゐる。もし、いつも一つづきに發音するものを單語とするならば、「花が」「行かない」「行つた」などは、實際の言語では決してその間を切ることがないから、これ等を「單語」とし、「が」「ない」「た」は、單語の構成要素として接尾辭と同じものとしなければならぬ。かやうな取扱法は、最も明瞭であつて合理的であるが、その結果は普通の單語とはかなり趣のちがつたものとなる。しかし品詞分類に於て、單語を、詞と辭又は獨立詞と附屬辭のやうに從來の文法家が大別したのは、明瞭な自覺があつたか無かつたかは問題であるが、結局助動詞・助詞の類とその他のものとの間に、右の如き大なる相違があるのによつてであつて、吾々は、上述の五つの條件を具へたものを詞、(五)の條件を缺く

ものを辭と解すればよいのである。【助詞と接尾辭の相違】助詞・助動詞の類をも單語と認めようとするには、これと性質の近い接尾辭の類との相違を求めなければならぬ。接尾辭の類を附けて出來た單語は、品詞の一つとして用ひられ、その點で、もとよりの單語と少しもかはる所がない。「私ども」は名詞、「花やぐ」は動詞である。然るに助詞の類の附いたものは、その性質は、どの品詞とも同じくない。「私が」「私より」「行けども」など、皆さうである。即ち接尾辭は一の品詞を作るものと見る事が出来る。隨つて單語構成の要素として、單語より小さい單位と見る。これに反して、助詞は單語を作らず、單語に或るものを加へるものであるから、一の單語と見る事が出来る。しかし助動詞になると、助動詞を加へたものは、一の動詞と同等になり動詞の資格を有つ。それ故、右の標準では單語と見る事は出来ない。かやうにして吾々は、山田孝雄氏の如く助詞を一の品詞とし、助動詞を複語尾として單語の一部分と認めることに對して一つの根據を見出し得るのである。(日本文法論参照)

【助動詞と接尾辭の相違】助動詞をも單語と認めようとするならば、なほ他の標準を見出さなければならぬ。接尾辭の類は、いくつかの語に着くけれども、その着く語は、多くは限られてゐて、何にでも附くのではなく、これまで例のある語に限る。然るに助動詞はあらゆる動詞につく。助詞も同様で、或る品詞、又はその或る形には一般につく。その着き方が自由であり規則的である。接尾辭の類は不自由であり規則的でない。この點から區別する事が出来る。しかし接尾辭の内にも、

【單語の概念】要するに、普通いふ所の單語は單一なものでなく、實際の言語に於て前後

一定の外形一定の意義とは言へない。かゝる(複數)といふ部分は、前掲の數語が有する單語形式である。その他(所有格)(過)等が單語形式の例である。この意味で日本語の「見た」「取つた」「泣いた」等は「た」といふ單語形式を有するといへる。(連語形式参照)

發見(一冊)文政三年。○秋津しよ一冊(同上)○特牛一冊(同上)○任吉郎(元祿五年刊)○塗壁一冊(彌之助一冊)獨鈔錄論(戲作)晝夜用心記(別項)六冊(寶永四年刊、名著文庫・有明堂文庫所收)○一夜船(別項)(正徳二年刊、別名日本同國之

元年、江戸山村屋で中村景蓮が所演したと傳へ、佐渡島日記には、名古屋山三郎が出雲のお國と京北野の舞臺で、江戸山谷通ひの風俗を摸したの起るとも、また「舞曲扇林」には、山三郎が僕鹿藏を佐渡島歌舞伎へ出して演ぜしめたの起り、六方は即ち鹿方の化して

由で、どんな人名にもつく故、右の標準によつて、十分明確に區別する事は或は不可能であらうが、大概は區別する事が出来る。



具、その他飾品等も當時珍奇と目せられた物の限りを圖録してある。〔和田〕

断橋「放浪」を見よ。

單語 たんご 文法 【名稱】 語とも語詞ともいふ。〔英〕 Word 【獨】 das Wort 【佛】 Mot 【解説】 言語を、その意味に従つて分析して得た一の單位で、一定の音に一定の意味の聯合したもの。同じく、言語構成上の單位としては、これより大きなものに連語や文が

【参考】 言語學概論 神保格 ○ 日本文法論 山田孝雄 ○ 新式日本文典原理 岡澤鑑治郎 ○ 國語法概説 安田喜代門

單語形式 たんごけいしき 文法 【名稱】 〔英〕 word-form 【解説】 多くの單語(別項)に通じ、一定の外形が一定の意義を伴ふ部分ある時、この部分を單語形式といふ。例へば、英語「少年」といふ語の音聲 [boi:] 文字 boy は「少年」といふ意義に對する外形である。即ち Do-cu-boy といふ三種の音聲又は文字が、この順序に列んだもの全體が外形である。この外形はこの一語だけに限る形で、他の語にこれと同様の外形と意義とを有する例がない。然るに boys, trees, tables, names 等多くの語を集めると、その凡てに通じ、s (複数) といふ部分のあることを見る。s といふ一定の外形に、複数といふ意義を伴つてゐる (Doi [複]) に於て、boy の部分は boy と音聲(外形)が同様であるけれども、意義が全くちがふ故に、

一定の外形一定の意義とは言へない。かゝる(複数)といふ部分は、前掲の數語が有する單語形式である。その他 (所有格) (過去) 等は單語形式の例である。この意味で日本語の見た「取つた」「泣いた」等は「た」といふ單語形式を有するといへる。(連語形式参照) 【参考】 Jespersen: Philosophy of Grammar, 1924. 【神保】

断字 たんじ 「切字」を見よ。

丹州千年狐 たんしゅうせんねんこ 「天鼓」を見よ。

團水 だんすい 俳人・浮世草子作者 【姓】 北條氏 【號】 平元子と號し、薙髮して白眼居士と云ふ。 【生歿】 寛文三年に生れ、寶永八年(三七二)正月四日歿。享年四十九 【辭世】 おぼろ〜引く胸の月清し 【俳系】 井原西鶴門 【閱歴】 京兩替町通二條上ル町に住し、俳諧の點者を業とした。後大阪に下り、西鶴が遺跡に七年間とどまり、西鶴庵と號した。常に西鶴を慕ひ、一生清貧に暮

したといふ。浮世草子作者としては、西鶴を模倣し、西鶴と其蹟との中間の時期を繋いでゐる一作家である。なほ西鶴遺稿の出版は大抵團水の手を経てゐる。 【著作】 「俳書」未習有格(貞享元年刊) ○ 俳諧團

はなして發音する事がない故、一の單語で「私」といふ單語に「ご」といふ接尾辭がついて出來た一の由生語(語構成参照)である。「ほのか」「ほのゝ」「ほのぐらし」の「ほの」は、「ほの」の後で切つて發音することがない故、單語ではなく、單語より小さい單位である(語根である)。前後に切れ目をつけて發音するといふことは、音としてそれだけで獨立することを考へることが出来る。即ちそれだけで獨立し

一定の外形一定の意義とは言へない。かゝる(複数)といふ部分は、前掲の數語が有する單語形式である。その他 (所有格) (過去) 等は單語形式の例である。この意味で日本語の見た「取つた」「泣いた」等は「た」といふ單語形式を有するといへる。(連語形式参照) 【参考】 Jespersen: Philosophy of Grammar, 1924. 【神保】

断字 たんじ 「切字」を見よ。

丹州千年狐 たんしゅうせんねんこ 「天鼓」を見よ。

團水 だんすい 俳人・浮世草子作者 【姓】 北條氏 【號】 平元子と號し、薙髮して白眼居士と云ふ。 【生歿】 寛文三年に生れ、寶永八年(三七二)正月四日歿。享年四十九 【辭世】 おぼろ〜引く胸の月清し 【俳系】 井原西鶴門 【閱歴】 京兩替町通二條上ル町に住し、俳諧の點者を業とした。後大阪に下り、西鶴が遺跡に七年間とどまり、西鶴庵と號した。常に西鶴を慕ひ、一生清貧に暮

したといふ。浮世草子作者としては、西鶴を模倣し、西鶴と其蹟との中間の時期を繋いでゐる一作家である。なほ西鶴遺稿の出版は大抵團水の手を経てゐる。 【著作】 「俳書」未習有格(貞享元年刊) ○ 俳諧團

であつて合理的であるが、その結果は普通の單語とはかなり趣のちがつたものとなる。しかし品詞分類に於て、單語を、詞と辭又は獨立詞と附屬辭のやうに從來の文法家が大別したのは、明瞭な自覺があつたか無かつたかは問題であるが、結局助動詞・助詞の類とその他ものとの間に、右の如き大なる相違があるのによつてであつて、吾々は、上述の五つの條件を具へたものを詞 (五) の條件を缺く

【参考】 諸京羽二重堀江林鴻 ○ 花見車輦士 ○ 俳諧家譜早川丈石 ○ 俳家大系 國生川春明(以上俳書大系系譜逸話集) ○ 列傳體小説史 【萩原】

丹前 たんぜん 所作事 【解説】 丹前の語は、「好色一代男」「洞房語園」(後者名物袖日記二聲曲類纂等の諸説を綜合すると、承應・明曆の頃、江戸神田四軒町松平堀田とも) 丹後守の屋敷前に町風呂があり、勝山等の如き容色優れた湯女を置いて客に媚びたので、嫖客はその風呂屋へ足繁く通つたが、遂に評判となり、この風呂屋を指して丹前風呂と呼び、「丹前」とは即ち丹後守前の略稱である。而してその丹前風呂へ通つた遊客の間に流行した派手な、而も遊蕩的氣分に満ちた風俗を「丹前風」と稱へたのである。併し、歌舞伎に於ける「丹前」の語は、初め丹前風の扮装、それ等が廓通ひをする動作等を意味してゐたが、後には動作が一つの型になり、その型を「丹前」と稱するに至つたのである。又「丹前」は江戸歌舞伎特有の語であるが、京阪ではこれを六法六方とも、振出し、だんじり、出端等と稱へた。

【沿革】 この扮装・動作は古くから所作事に取入れられて重要な一系統をなしたが、「丹前」又は「六法」の創始者及びその年代に就いては未だ明かでない。即ち「戲場年表」には、正保

元年、江戸山村座で中村歌馬が所演したと傳へ、「佐渡島日記」には、名古屋山三郎が出雲のお國と京北野の舞臺で、江戸山谷通ひの風俗を摸したのに起るとも、また「舞曲扇林」には、山三郎が僕鹿藏を佐渡島歌舞伎へ出して演ぜしめたのに起り、六方は即ち鹿方の訛化であるともいふ。これ等によれば承應以前既に行はれたものの如く思はれるが、まづ明曆以後、立役多門庄左衛門によつて一風を創案されたと見るべきである。併し當初の扮装は、素頭で顔に鎌鼬を附け、袴の股立を高く取つた粗野なものだつたので、後に影響を及ぼしたのは、恐らくその動作のみと想像される。その後幾つかの丹前が生れたが、今日に傳存する「丹前」の源泉ともいふべきものは、初代中村七三郎の創出したやつし風の丹前、即ち「立髪丹前」である。次いで七三郎は、「紙衣丹前」をも創め、また初代中村傳九郎は、扮装を奴にした「奴丹前」を起し、更に芝垣節を用ひた芝垣丹前をも創めた。京阪では、その後には作彌九兵衛・荒木與次兵衛等が演じてゐたが、初代風三右衛門が羽織着流しの華美な形式に改めて新機軸を見せて流行させ、大和屋甚兵衛・二代及び三代風三右衛門・佐渡島長五郎等、これを能くしたが、寶曆期に至つて殆ど廢滅した。江戸ではその後生島新五郎・同大吉・水木竹十郎・中村吉兵衛・八代市村羽左衛門等が、漸次改良工夫を加へ、種々の姿勢を案出して益々流行を極め、「丹前物狂」「猩々丹前」「蹇丹前」「手くない丹前」などのやうな變態丹前をも生じた。これ等はいづれも獨立した丹前中心の舞踊であるが、寶曆期に至つては、主に舞踊の固定した分子として取扱はれ、他の所作事に取合せられるやうになり、後世に及んでは全

言ふべきならぬ。たゞ他の標準を見出さなければならぬ。接尾辭の類は、いくつかの語に着くけれども、その着く語は、多くは限られてゐて、何にでも附くのではなく、これまで例のある語に限る。然るに助動詞はあらゆる動詞につく。助詞も同様で、或る品詞、又はその或る形には一般につく。その着き方が自由であり規則的である。接尾辭の類は不自由であり規則的でない。この點から區別する事が出来る。しかし接尾辭の内にも、

元年、江戸山村座で中村歌馬が所演したと傳へ、「佐渡島日記」には、名古屋山三郎が出雲のお國と京北野の舞臺で、江戸山谷通ひの風俗を摸したのに起るとも、また「舞曲扇林」には、山三郎が僕鹿藏を佐渡島歌舞伎へ出して演ぜしめたのに起り、六方は即ち鹿方の訛化であるともいふ。これ等によれば承應以前既に行はれたものの如く思はれるが、まづ明曆以後、立役多門庄左衛門によつて一風を創案されたと見るべきである。併し當初の扮装は、素頭で顔に鎌鼬を附け、袴の股立を高く取つた粗野なものだつたので、後に影響を及ぼしたのは、恐らくその動作のみと想像される。その後幾つかの丹前が生れたが、今日に傳存する「丹前」の源泉ともいふべきものは、初代中村七三郎の創出したやつし風の丹前、即ち「立髪丹前」である。次いで七三郎は、「紙衣丹前」をも創め、また初代中村傳九郎は、扮装を奴にした「奴丹前」を起し、更に芝垣節を用ひた芝垣丹前をも創めた。京阪では、その後には作彌九兵衛・荒木與次兵衛等が演じてゐたが、初代風三右衛門が羽織着流しの華美な形式に改めて新機軸を見せて流行させ、大和屋甚兵衛・二代及び三代風三右衛門・佐渡島長五郎等、これを能くしたが、寶曆期に至つて殆ど廢滅した。江戸ではその後生島新五郎・同大吉・水木竹十郎・中村吉兵衛・八代市村羽左衛門等が、漸次改良工夫を加へ、種々の姿勢を案出して益々流行を極め、「丹前物狂」「猩々丹前」「蹇丹前」「手くない丹前」などのやうな變態丹前をも生じた。これ等はいづれも獨立した丹前中心の舞踊であるが、寶曆期に至つては、主に舞踊の固定した分子として取扱はれ、他の所作事に取合せられるやうになり、後世に及んでは全

元年、江戸山村座で中村歌馬が所演したと傳へ、「佐渡島日記」には、名古屋山三郎が出雲のお國と京北野の舞臺で、江戸山谷通ひの風俗を摸したのに起るとも、また「舞曲扇林」には、山三郎が僕鹿藏を佐渡島歌舞伎へ出して演ぜしめたのに起り、六方は即ち鹿方の訛化であるともいふ。これ等によれば承應以前既に行はれたものの如く思はれるが、まづ明曆以後、立役多門庄左衛門によつて一風を創案されたと見るべきである。併し當初の扮装は、素頭で顔に鎌鼬を附け、袴の股立を高く取つた粗野なものだつたので、後に影響を及ぼしたのは、恐らくその動作のみと想像される。その後幾つかの丹前が生れたが、今日に傳存する「丹前」の源泉ともいふべきものは、初代中村七三郎の創出したやつし風の丹前、即ち「立髪丹前」である。次いで七三郎は、「紙衣丹前」をも創め、また初代中村傳九郎は、扮装を奴にした「奴丹前」を起し、更に芝垣節を用ひた芝垣丹前をも創めた。京阪では、その後には作彌九兵衛・荒木與次兵衛等が演じてゐたが、初代風三右衛門が羽織着流しの華美な形式に改めて新機軸を見せて流行させ、大和屋甚兵衛・二代及び三代風三右衛門・佐渡島長五郎等、これを能くしたが、寶曆期に至つて殆ど廢滅した。江戸ではその後生島新五郎・同大吉・水木竹十郎・中村吉兵衛・八代市村羽左衛門等が、漸次改良工夫を加へ、種々の姿勢を案出して益々流行を極め、「丹前物狂」「猩々丹前」「蹇丹前」「手くない丹前」などのやうな變態丹前をも生じた。これ等はいづれも獨立した丹前中心の舞踊であるが、寶曆期に至つては、主に舞踊の固定した分子として取扱はれ、他の所作事に取合せられるやうになり、後世に及んでは全

元年、江戸山村座で中村歌馬が所演したと傳へ、「佐渡島日記」には、名古屋山三郎が出雲のお國と京北野の舞臺で、江戸山谷通ひの風俗を摸したのに起るとも、また「舞曲扇林」には、山三郎が僕鹿藏を佐渡島歌舞伎へ出して演ぜしめたのに起り、六方は即ち鹿方の訛化であるともいふ。これ等によれば承應以前既に行はれたものの如く思はれるが、まづ明曆以後、立役多門庄左衛門によつて一風を創案されたと見るべきである。併し當初の扮装は、素頭で顔に鎌鼬を附け、袴の股立を高く取つた粗野なものだつたので、後に影響を及ぼしたのは、恐らくその動作のみと想像される。その後幾つかの丹前が生れたが、今日に傳存する「丹前」の源泉ともいふべきものは、初代中村七三郎の創出したやつし風の丹前、即ち「立髪丹前」である。次いで七三郎は、「紙衣丹前」をも創め、また初代中村傳九郎は、扮装を奴にした「奴丹前」を起し、更に芝垣節を用ひた芝垣丹前をも創めた。京阪では、その後には作彌九兵衛・荒木與次兵衛等が演じてゐたが、初代風三右衛門が羽織着流しの華美な形式に改めて新機軸を見せて流行させ、大和屋甚兵衛・二代及び三代風三右衛門・佐渡島長五郎等、これを能くしたが、寶曆期に至つて殆ど廢滅した。江戸ではその後生島新五郎・同大吉・水木竹十郎・中村吉兵衛・八代市村羽左衛門等が、漸次改良工夫を加へ、種々の姿勢を案出して益々流行を極め、「丹前物狂」「猩々丹前」「蹇丹前」「手くない丹前」などのやうな變態丹前をも生じた。これ等はいづれも獨立した丹前中心の舞踊であるが、寶曆期に至つては、主に舞踊の固定した分子として取扱はれ、他の所作事に取合せられるやうになり、後世に及んでは全

元年、江戸山村座で中村歌馬が所演したと傳へ、「佐渡島日記」には、名古屋山三郎が出雲のお國と京北野の舞臺で、江戸山谷通ひの風俗を摸したのに起るとも、また「舞曲扇林」には、山三郎が僕鹿藏を佐渡島歌舞伎へ出して演ぜしめたのに起り、六方は即ち鹿方の訛化であるともいふ。これ等によれば承應以前既に行はれたものの如く思はれるが、まづ明曆以後、立役多門庄左衛門によつて一風を創案されたと見るべきである。併し當初の扮装は、素頭で顔に鎌鼬を附け、袴の股立を高く取つた粗野なものだつたので、後に影響を及ぼしたのは、恐らくその動作のみと想像される。その後幾つかの丹前が生れたが、今日に傳存する「丹前」の源泉ともいふべきものは、初代中村七三郎の創出したやつし風の丹前、即ち「立髪丹前」である。次いで七三郎は、「紙衣丹前」をも創め、また初代中村傳九郎は、扮装を奴にした「奴丹前」を起し、更に芝垣節を用ひた芝垣丹前をも創めた。京阪では、その後には作彌九兵衛・荒木與次兵衛等が演じてゐたが、初代風三右衛門が羽織着流しの華美な形式に改めて新機軸を見せて流行させ、大和屋甚兵衛・二代及び三代風三右衛門・佐渡島長五郎等、これを能くしたが、寶曆期に至つて殆ど廢滅した。江戸ではその後生島新五郎・同大吉・水木竹十郎・中村吉兵衛・八代市村羽左衛門等が、漸次改良工夫を加へ、種々の姿勢を案出して益々流行を極め、「丹前物狂」「猩々丹前」「蹇丹前」「手くない丹前」などのやうな變態丹前をも生じた。これ等はいづれも獨立した丹前中心の舞踊であるが、寶曆期に至つては、主に舞踊の固定した分子として取扱はれ、他の所作事に取合せられるやうになり、後世に及んでは全

たんごけ たんぜん



く或る所作事の中に加へらるゝに過ぎなく  
つて、今日ではその傍を傳へるのみといつて  
よい。かく「丹前」が、他の所作事に取合せら  
れたものでは「槍踊」(別項)が、その大部分を占  
め、その後半か、又はその適宜の箇所に挿入さ  
れてゐて、「丹前」と「槍踊」とは不離の如き關  
係に置かれた。その因は享保年代と覺しいが、  
元文五年十一月、市村座所演の「丹前槍踊」な  
どが古い。その後、「丹前」なる名稱を帯びた  
所作事は、内容が華美なる武士や、奴の廓通  
ひの振を挿入したものに過ぎないのである。

併し元祿以降、「丹前」の流行は舞踊大成期ま  
で、毎年顔見世狂言に所演される慣例の如く  
なつてをり、且つその他の狂言にも屢々演じ  
られたので、謂はゆる「丹前物」として、所作  
事中、「道成寺」「石橋物」(各別項)等と共に一大  
系統をなし、その數實に百數十を算へられ、  
長唄が大部分を占めてゐるが、各流派に互つ  
てゐる。

【傳存曲】今日に傳存するものは、極めて少數  
で、所作事としては「高砂丹前」(後出)があり、  
詞曲のみ存するものに「金谷丹前」(長唄。寶曆  
三年の作といふ)、「水仙丹前」(長唄。同五年九月市  
村座中村金太郎所演)、「住吉丹前」(本名題。紅葉笠  
住吉丹前。長唄。同十三年十一月同座)、「嫩丹前」  
(本名題。花錦嫩丹前。長唄。明和元年十一月同座)。  
【廓丹前】(本名題。廓花柳立髪。長唄。安政四年五  
月花柳舞踊會開曲)、「壽丹前」(本名題。千代萬  
壽丹前。長唄。作曲年代未詳、但し天保四年から同  
十年までの作)等がある。また「丹前」の型は、  
【體當】(不破參照)の不破名古屋が花道の振、  
【辰賀】(別項)の次郎作と禿とが花道より舞臺  
にかゝる振、その他「景清」(別項)、「元祿花見  
踊」(見舞參照)、「三つ人形」等の一部に、「奴

丹前」の型は「供奴」(別項)、「三つ人形」等の一  
部に動作として残つてゐる。

【女夫松高砂丹前】(通稱)高砂丹前。又は高  
砂【初演】天明五年十一月一日初日江戸桐座  
【男山娘源氏】第一番目三立目【作詞】瀬川  
如阜【曲節】長唄【作曲】梓屋正次郎【振  
附】二代西川扇藏【題材】最初の出は、謡曲の  
「高砂」に姿を借りてゐるが、直ぐに純舞踊に  
碎ける。【内容】初音姫の侍女此花(瀬川菊三  
郎)は姥の面、下部筆助實は源の采女丸(市川喜  
之助)は、尉の面を付けて「高砂」の振にて押出  
し、面を取つてクドキ模様から兩人の槍踊に  
なり、次いで艶な手踊、最後にまた兩人で槍  
を振る。曲は古風な傍を残り、殊にクドキや  
手踊の件は、巧みな手が附いてをり、振も「丹  
前」槍踊」等初期江戸舞踊を偲はせる手があ  
つて、唯一の傳存する貴重なものである。

【參考】役者全書(金港堂歌舞伎叢書)○劇代集  
二代櫻田左交○近世邦樂年表(長唄、豐後節)○  
江戸近世舞踊史 九重左近 ○日本歌謡集成卷  
九〇歌舞伎圖説 (秋葉)

丹前出端

劇に於て、丹前(別項)とて派手な姿をしたも  
のが、出端とて、揚幕から花道を通つて舞臺  
へ来るまでの間の地に用ひたので、この名が  
ある。【解説】江戸にも上方にも用ひられた  
が、寶永七年刊の「繪補入松の落葉」に、上方用  
のもの左の諸篇が載せてある。  
福神出端(嵐三右衛門)藤内だんじり出端(同  
上東妻道之記出端(中村七三郎)遠目金同上)  
八幡詣出端(同上)椀久出端(大和屋甚兵衛)狐  
會出端(生島新五郎)  
何れも二上りで通すものが多く、陽氣と派手

とを生命とした。敘述は必ず振を見せる利便  
を圖つてある。すなはち、

椀久出端

二上りたどり行く。今は心もちかれそ。誰か  
く野を引抜きしより、いつの頃よりあひなれそめ  
て、通ふ心の舞瀬の思。忍び妻戸を、ほとくと  
叩くは椀久か、さりととは、受けうかの、忍ぼう  
かの。そつこで請出せ思はくぞ。これ、これ、請  
けたもの。あのや椀久はこれさ、鼓の皮か、な  
うはんえ、しんぞ心は、これさ、うちぬいた  
ほんほえ、しんぞなうはんえ、とかく戀には身を  
やつす。

の如きものである。江戸長唄の丹前物、例へ  
ば枕丹前・吉原丹前・紅葉等住吉丹前・寒紅梅  
行列丹前・御所風俗舞丹前・花錦嫩丹前・金谷  
丹前・娘丹前等、丹前と題するものにはこの出  
端から、舞臺の所作にかけての地に用ひたも  
のが多い。

淡窓

漢詩人【姓名】廣瀨建 字は  
子基 一字は廉卿。通稱求馬。私諡して文玄  
先生といふ。【別號】荅陽【生歿】天明二年  
四月十一日豊後の日田に生れ、安政三年(二四  
八)十一月歿す。享年七十五。【閨歴】諸侯  
の用達を勤める商家に生れた。父貞恒は長春  
庵桃秋と號して俳諧をよくし、「幕木」の著も  
ある。淡窓はその長子で弟に旭莊がある。伯  
父の貞高も春秋庵月化と號し、俳諧に長じて  
ゐた。初め松下竹陰に師事し、神童の名が高  
かつた。寛政九年(十六)筑前に赴き、龜井南  
溟(別項)に學び、文化二年、日田に歸り、家を弟  
久兵衛に譲り、豆田町長生園に學舎を建てて  
瓊林莊と稱した。又文化十四年更に堀田に移  
し、咸宜園と號して専心子弟の薫育に従つた。  
その教育は詩に由つて人の性情を正し、進ん  
で道義に入らしめる所謂情操教育で、詩學を

教育に利用した卓見のある方法であつた。か  
くて次第に名聲擧り、教を受ける者、毎年數百  
名に達し、私塾として盛んなること近古に稀  
れであると言はれた。幕府はその功を賞して  
苗字帯刀を許し、日田郡代の直轄とした。薫  
育の事に従ふこと實に五十年、門下は四千に

我所欲也及喜  
未去而進之未  
所惡也及去未  
有就之我進  
則彼逐桶影逐  
人也我就出彼  
逐影人逐影也

(藏氏之辰野高) 蹟筆窓淡瀬廣

及び、名を成した者も甚だ多い。大村・府内の  
二侯も賓師の禮を以て彼を遇した。天保二年  
以後は弟旭莊が代つて咸宜園を督した。大正  
四年正五位を追贈された。その詩風は平淡の  
中に自ら精彩があつた。【著作】折玄○老子摘  
解二卷○淡窓小品二卷○遠思樓詩鈔四卷○夜  
雨寮筆記○淡窓詩話○懷舊樓筆記。(佐久)

大小心録(諸本)新藤石十種(國書刊  
行會)第五・上田秋成全集・秋成遺文等所収。  
【解説】觀察の皮肉、文章の勁拔を以て聞えた  
著者が、些の遠慮もなく當時京阪地方の文學  
藝術、さてはこれ等に携はる人々を批評し、そ  
の地占りの史、文學、藝術、等々を批評し、そ

其角に入門して消北と云つた。正徳の頃、  
仙鶴が京に名を成すと聞き、これに對峙しよ  
うとして京に上り、庵を祇園の南下河原菊水  
の傍に結んで、森三揚と假稱し、享保元年鷲峰  
山の半腹に半時庵を結んで移り、半時庵淡々

者と呼ぶことを恥ぢるといふ風であつた。  
享保・元文の間俳名天下に喧傳し、門人松木半  
秋・山口羅人は、恰も芭蕉に於ける其角・風雪  
の如く半時庵の兩翼であつた。殊にその門下  
には、林夕(町奉行長田越中守)・五橋(代官角倉與  
三)・李風(代官石原清左衛門)・春龍(尾州家臣志水

めと庭に八つ手花咲く」と聯したとも傳へら  
れる(合歌舍雜話)。又門外不出の句とて、「梅の  
花答へて曰く梅の花」といふ句を門下に示し  
て工夫せしめたとの傳説があるが、これなど  
は、彼の作風、教授振、人氣牽引策を想像せし  
めるものである。蓼太は「棚さがし」に、「評







白露〇一時集(五十回忌追善集)石井屋鳥〇俳家  
奇人談竹内玄々〇合歡舍物語合歡舎〇俳人  
百家撰水谷川柳〇俳林小傳中村光久〇俳諧人  
物便覽三浦若海

段々 雑俳 【別名】五文字段々 【解  
説】もと五文字(別項)より變成したもので、課  
題もほぼ同様である。ただ甲より乙、乙より  
丙、丙より丁と数人で段々に句を附けて長く  
してゆく所の、字数の不定な雑俳の一種であ  
る。早く廢絶して、その附合等に關して詳細  
に説明することは困難である。左に「豆鐵砲」  
中に収録してある段々の一部を抄録する。

引つる一文風あるかひなしし神々さん一役  
者一おかし申しや一引はりだこ一覆せた旦那一  
目あて一金拵一つ一はるか一べらほふへ一調子一  
乳のある客一飛附く一ひろつたよ一やたらむしや  
う一風味唱桶(以下略)

かういふ風に一句々々に心を用ひて、即かず  
離れぬやうに附けてゆくのである。例へば「關  
を越ゆ」といふ題に、直に箱根などを結ぶは悪  
しく、「土手で息若しくは「梯子を下り」、若し  
くは「四十三」、若しくは「笹湯のどん」、若し  
くは「この世の風」などと附けるを可とする。  
第一は大門の番所を越えた廓の駈落、第二は  
戀路の忍び、第三は四十二の厄年を越した喜  
び、第四は痘瘡が濟んだ安心、第五は出産を  
いつたものである。

探偵小説 【解説】その名稱の  
示す如く探偵を主要興味とするから、題材に  
は必然に罪惡、血、怪事件などが取扱はれ、  
構成には情緒よりも推理に重きがおかれる。  
そして心理や性格よりも事件本位になり、他  
の文藝に於ては終末に近いクライマックスに  
なる場面、たとへば殺人や、大金の紛失が、概

して冒頭に來て、前者の展開的なるに反し、  
漸及的に物語の進行するのが際立つた特色で  
ある。探偵小説は初めてアメリカの作家エド  
ガ・アラン・ポーに依つて創始され、フラン  
スのガポリオやボアゴベによりて著しき普及  
を見、探偵小説なる特殊名稱はガポリオの付  
くる所に係る。コナン・ドイルの出現はこれを  
完成し、モーリス・ルブランは新生氣を吹き込  
んだ。日本では文久年間神田孝平がオランダ  
語から譯した「楊牙兒奇談」(別項)、「青騎兵右  
家族共吟味一件」の二篇が、文獻に現はれた最  
初である。明治になつてからは黒岩涙香がそ  
の移植に最も多くの力を盡し、大正以降は久  
しく雑誌「新青年」を主宰した森下雨村の功を  
特筆せねばならぬ。作家としては江戸川亂歩  
が最も輝いてゐる。

【参考】明治の探偵小説及大衆文學 小酒井不木  
(日本文學講座) 【木村】

耽溺 小説 【作者】岩野泡鳴 【發表】  
明治四十二年二月、「新小説」【刊行】翌年篠  
原先生「外、二三編と共に刊行。後、代表的名  
作選集(新潮社)中に改訂所収。泡鳴全集第一  
巻所収。

【梗概】脚本執筆の目的で妻子を残し、單身國  
府津の海岸に避暑に來る。そして借りた家の  
隣りの料理屋の抱へ藝者吉彌といふ女と關係  
した。二人の關係はする／＼に深くなり、彼  
は脚本の仕事も放棄し、その藝者を請け出し  
て女優に仕立てようとの金の無理算段をして大  
に甘さを發揮するが、吉彌には目をつけてゐ  
る客があつて、主人公の思ふやうにならぬ愛  
慾の苦澁を突込んで書いた。後半はどうにも  
ならず行詰つて歸京した。後、吉彌の上京を  
待つて千束町の家を訪れた時、女の眼病のひ

どいのかを知り、矢張り梅毒患者だつたかと慄  
然とする。而して絶望苦惱するが、この戀の  
惱みを味ふところに強靱な人生を感じ、「さよ  
なら」を凱歌の如く言ひ捨てて引上げる。

【批評】やゝ痴呆的にさへ見える田舎藝者に  
惚れこむ主人公の慾情に脆い性質を中心とし  
る初步的の一元描寫が見られる。前半のずるず  
る愛慾にひかれる男の心、愚と知りながら吉  
彌と關係する邊の描寫の成功に較べて、後半  
は所々に一元描寫の破綻もあり、放漫で筆觸  
もだれた。しかし作者には既に明るいニヒリ  
ズムから來る樂天觀が出來てゐたので、他の  
自然主義作家のものやうに暗さに耐へ兼ね  
るやうなところは無い。又情事の描寫に鋭い  
感覺を見せる泡鳴独自の妙味は、既にこの初  
期の作品の中にも十分に見ることが出来る。

【参考】岩野泡鳴論 正宗白鳥(中央公論昭和三ノ  
八) 【舟橋】

談唐詩選 詩話 一卷 【著者】  
市河寬齋 【刊行】文政二年。日本詩話叢書に  
收められてゐる。【解説】當時萩生徂徠一派  
の詩人が金科玉條として珍重した唐詩選は  
李于麟の選にあらず、名もなき書賣の偽選な  
ることを辯じ、服部南郭が校刻した唐詩選本  
の誤を指摘などしたもので、「唐詩選」を讀む  
者の必ず参考すべきものである。

の屋上立廻りは、讀本の「里見八犬傳」の芳流  
閣屋上の闘争の藍本であるといはれてゐる。  
歌舞伎に入つたのは、翌享保十八年三月大阪  
角の芝居上演を初め、江戸には「團月仁景傳」  
の名題で、元文二年河原崎座顔見世興行に現  
れた。後になると、泉屋、次郎屋、三枝

譚囊 一冊 【作者】馬場雲壺  
(白鯉館別書) 【名稱】鹿子餅と角書がある。本  
書の訓みは不明であるが、序にタンノウと洒  
落れてゐるからこれに従つた。たんのろは當  
時流行した民謡の口拍子で、例へば折助たん  
のうと云ふが如きである。【刊行】安永六年。  
明和九年即ち安永元年刊本のあるのは、前篇  
「鹿の子餅」と合卷としたからで、安永六年刊  
なることは、「力婦傳(安永五年)」を引用してあ  
るので明白である。【諸本】近世文藝叢書第  
六所収【解説】五十三篇の小咄から成る。「猿」  
は當時流行した「一つ長屋の佐次兵衛殿、四國  
をめぐつて猿となるん」の民謡から採つた。  
【見せ物】は、當時兩國で評判であつた「飛んだ  
靈寶」の見世物から採つた。「ともよ」は安永五  
年五月堺町の見世物に、越後女柳川ともよの  
力持が出たのを取材、既に前年風來山人の「力  
婦傳」が、同じ材料を用ひてゐる。「孟宗」及び  
「其二」は、言ふ迄もなく廿四孝から取材。「切  
腹」は當時人氣のあつた俳優大谷廣治、市川門  
之助から取材。「魔法」は人を馬に化する話で、  
既に「正直咄大鑑」(元禄七年)の「夢想の馬ぐす  
り」に出てゐるのを奪胎したものである。「紋  
傳」は、「太平記」に現れてゐる「眉間尺」の説話  
を採用したものである。前篇の「鹿の子餅」に  
は軽い滑稽に満ちた佳作が多かつたが、本篇  
には重い滑稽、言語の洒落が多くなつてゐる。  
それは材料の缺乏と時代の推移から來てゐる  
もので、當時の狂歌の傾向が著しく滲出して  
ゐるからだと思はれる。併し以後の漸本に  
比較すれば、遙に軽い可笑味なのである。【影  
響】本篇も後世の滑稽本及び漸本によく引用  
されてゐる。「吊ひ」は女房の死體をさかさま  
に早補に入れ、和尚が首の無い胸毛のある死



び、第四は抱擁が済んだ安心、第五は出産を  
いつたものである。【西原】  
**探偵小説** 【解説】その名稱の  
示す如く探偵を主要興味とするから、題材に  
は必然に罪悪、血、怪事件などが取扱はれ、  
構成には情緒よりも推理に重きがおかれる。  
そして心理や性格よりも事件本位になり、他  
の文藝に於ては終末に近いクライマックスに  
なる場面、たとへば殺人や、大金の紛失が、概

に類せしめ、その音色によつて傳りならぬを  
覺つた。十蔵は母と共に岡崎に住んでゐたが  
景清に變装して自害しようとする。箕尾谷が  
壇浦の鬱憤を晴らすべく景清を探しに来るの  
で、十蔵は景清と名乗つたが、母は自害して  
兄妹をして景清を探しに立たせる。【四段】  
阿古屋は景清の遺児を抱き、十蔵と共に旅立  
して近江の長濱についた(道行旅の添乳歌)。  
根井大彌太宅の普請場で、頼朝を視ふため大  
工にやつした景清に逢つて委細を告げた。大  
彌太は景清と知つて大工に扮した武士達に捕  
へさせようとしたが、左官姿の箕尾谷が出て  
景清を捕へる。景清は箕尾谷の實の兄なる事  
をあかし、その躊躇するのを制して引かれる。  
【五段】景清は鎌倉府の牢を破つて出たが、  
十蔵が景清と名乗つて出たと聞かや、自ら兩  
眼を抉つて戻す。十蔵は岩永を殺し、切腹し  
ようとするのを、頼朝は制して奉公を命じ、  
景清には日向尙當の官を與へる。  
【構想】原作「出世景清」に比して極めて技巧  
化されたが、それだけ劇的效果を収めたのは  
事實である。端的であつた伊庭十蔵をその母  
と共に人情篤い人物とし、又景清と十蔵の容  
貌を酷似させ、兩人の情義を厚く見せた果に、  
實の兄弟たる關係を明かす趣向にしたのは、  
一見劇的にのみ走つたとも見えるが、景清の  
人物を一層偉大ならしめる事には十分成功し  
たといへる。又十蔵兄妹、大宮司父子の義理  
立ても原作の小野姫の件を進展せしめたもの  
である。三段目の阿古屋の責め場は最も華美  
な點で成功したものと言ひ得る。四段目根井  
宅の普請場は、原作の初段の書替へである。  
【影響】十蔵を景清と瓜二つとした案は「二人  
景清(景清参照)の根源となり、又四段目普請場

八) 【舟橋】  
**談唐詩選** 【著者】  
市河寬齋(刊行)文政二年。日本詩話叢書に  
收められてゐる。【解説】當時萩生祖徠一派  
の詩人が金科玉條として珍重した唐詩選は  
李于麟の選にあらず、名もなき書賣の偽選な  
ることを辯じ、服部南郭が校刻した唐詩選本  
の誤を指摘などしたもので、「唐詩選」を讀む  
者の必ず参考すべきものである。【佐久】

を採用したものである。前篇の鹿の子餅に  
は軽い滑稽に満ちた佳作が多かつたが、本篇  
には重い滑稽、言語の洒落が多くなつてゐる。  
それは材料の缺乏と時代の推移から來てゐる  
もので、當時の狂歌の傾向が著しく滲出して  
ゐるからだと思はれる。併し以後の断本に  
比較すれば、遙に軽い可笑味なのである。【影  
響】本篇も後世の滑稽本及び断本によく引用  
されてゐる。「弔ひ」は女房の死體をさかさま  
に早桶に入れ、和向が首の無い胸毛のある死

【初段】南都東大寺大佛殿再興成就に  
際し、頼朝の御臺政子が上洛し、岩永左衛門・  
本多次郎がこれに隨ふ。箕尾谷四郎の妻白梅  
は父根井の大夫と共に行方の知れぬ夫を尋ね  
て熱田に到り、大宮司父子に逢つた。姿をや  
つした景清は、東大寺門前で、源氏に返忠した  
叔父大目坊を殺し、大佛供養の日頼朝を討た  
うと忍び入つたが、本多次郎の温情を受け、岩  
永一味を追拂つて行方を晦ます。【二段】景  
清と契つた傾城阿古屋の兄なる浪人井場十蔵  
は母を養ふために、清水寺の邊で辻講釋をし  
てゐると、景清に容貌が似てゐるため、秩父重  
忠の巨半澤六郎に捕へられたが、誤と知れて  
許される。大宮司は娘の衣笠(景清の妻)を伴  
ひ、五條坂の花扇屋に赴き阿古屋に會つた。  
十蔵は景清から屢々金を惠まれた恩を感じて  
身代りに立たうとして變装して來た。花扇屋  
主人戸平次の悪心を聞き、十蔵兄妹は大宮司  
父子を助けんとしたが、衣笠は義理を立てて  
自害する。【三段】秩父重忠は禁裡守護の代官  
として堀川御所に在る。阿古屋が景清の行方  
を知らぬといふので、助役の岩永が拷問しよ  
うとするのを制し、琴・三味線、胡弓を阿古屋

の屋上立廻りは、讀本の「里見八犬傳」の考証  
閣屋上の闘争の藍本であるといはれてゐる。  
歌舞伎に入つたのは、享保十八年三月大阪  
角の芝居上演を初め、江戸には「閨月仁景清」  
の名題で、元文二年河原崎屋見世興行に現  
はれた。後になると、操でも歌舞伎でも、三段  
目琴責の段のみが屢々上演されて今日に及ん  
でゐる。音曲の聞かせ場といふためもあり、  
配役の都合なためでもあらう。【守隨・増田】  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

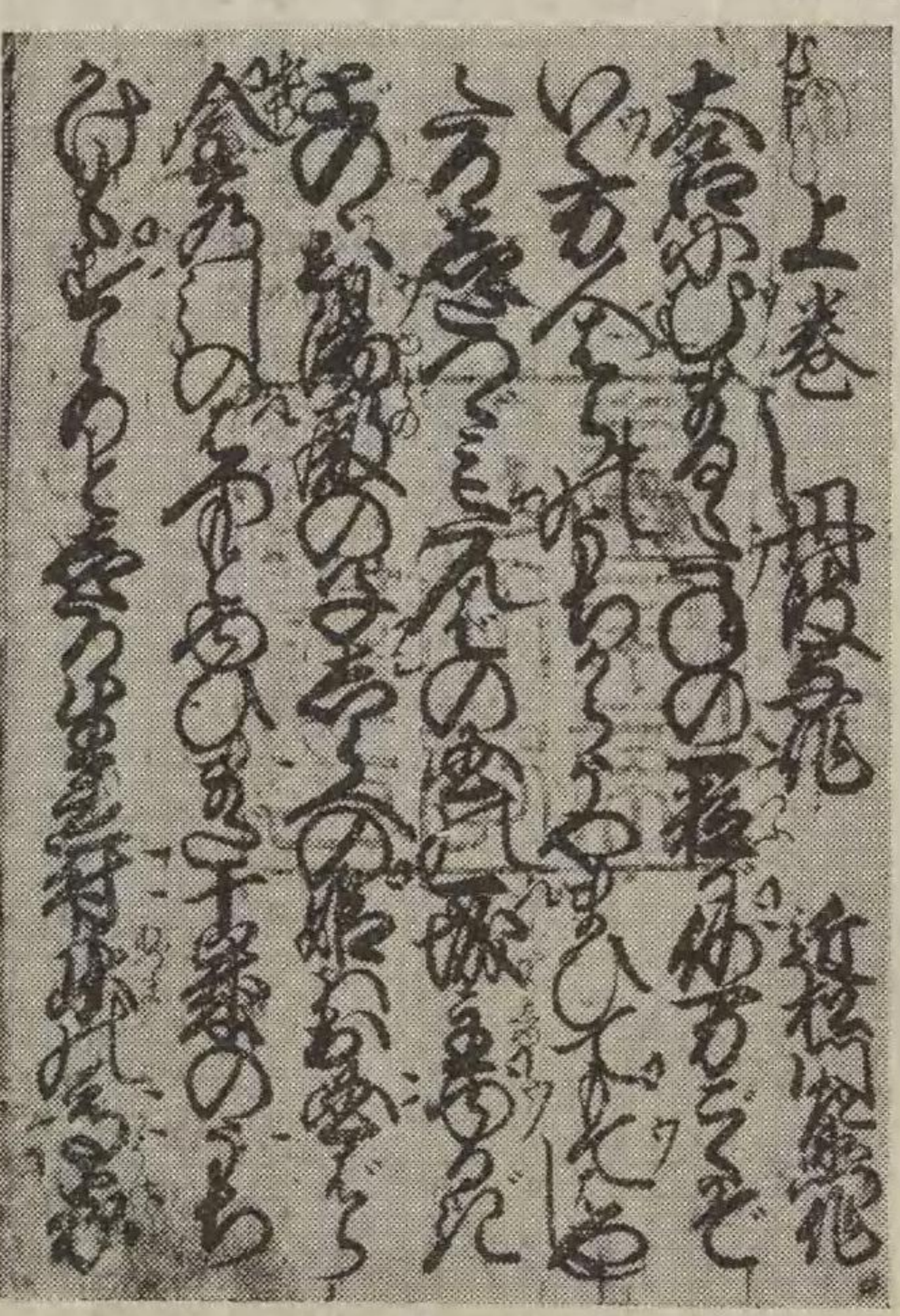
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏



(本 正) 作 與 波 丹

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【澹泊】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏  
【参考】浄瑠璃名作集上巻解題黒木勘藏

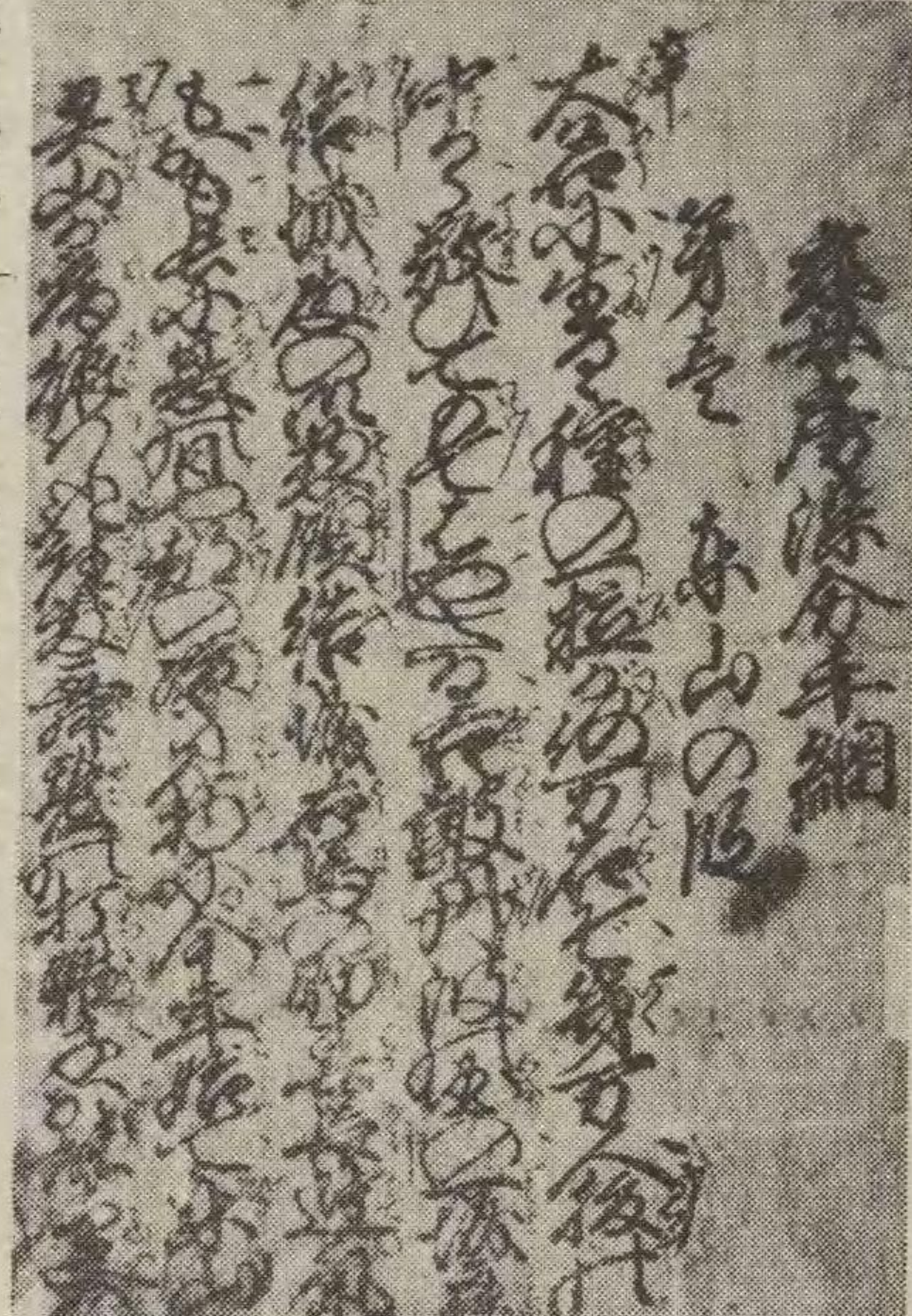
だんのう たんばよ



の關係はないやうである。次は元祿七年京都村山平右衛門座興行の富永平兵衛作「たんば與作手綱帯」であるが、これも本作との共通點は認め難い。又「善光寺興作」といふ古浄瑠璃の正本もあるといふが未見。

【梗概】「上之巻」丹波國の城主由留木家の息女しらべの姫は、未だ十歳そこ／＼で、關東の高家入間家へ養子分として興入する事となつたが、いよく出立の間際になり、お伽小姓達の誘ふ「山も見へざるかりそめに、江戸三界へ行かんして、いつ戻らんす事じややら」といふ唄を聞いて、急に東へは行かぬとむづかる。お乳の人滋野井を初め、皆當惑してゐる所へ、通して行列の供をする今年十一の三吉といふ馬士が、姫と一緒に道中双六をしてお目に懸けると、姫の氣分がかはる。

滋野井は、喜んで三吉に褒美を遣り、話の中に三吉は、放蕩の結果改易となり、自分と離別した夫伊達興作との間に儲けた一子與之介なる事を知るが、姫が馬士を乳兄弟に有つたとあつては、養家へ行つても肩身が狭からうと、因果を含めれば、三吉は母を恨みながら去る。「中之巻」伊達興作は、落魄して馬士となり、關の宿の白子屋の出女小萬に馴染んでゐる。小萬の父は年貢米の未進から水牢の責にあひ、小萬の苦惱の種となつてゐる。興作はこれを救はうと、一か八かの博奕を打つたが失敗して、石部の八藏からの借錢で首が廻らない。そこで姫の一行が關の宿に泊つた夜、平常興作といふ名にほれて自分に忠實にしてくれてゐる三吉を喚び、姫の用金を盗ませる。三吉は盗んだが忽ち捕へら



房女 染分 手綱

れ、その上、役人の隙を見て、自分を辱めた八藏を斬殺してしまふ。興作はこれを聞き良心の苛責に堪へず、小萬と共に死場所を求めの途中、三吉が小萬に預けた守袋から我が實子と知つて失神せんばかりに仰天するが、小萬はこれを勵まし、馬に抱き乗せて死地へ急ぐ。「下之巻」道行「興作小まん夢路の駒」宿外れの千貫松に着いた二人は、いざ死なうとしてゐる所を、滋野井の命乞によつて出された捜索隊に發見せられ、興作の舊朋翫鴛坂左内の諫言で死を思ひ止まる。かくて興作は姫の慈悲で世に出で、小萬もお家に引取られ、目

出度く興作踊で結ぶ。【構想】本作には殆ど題材といふべきものがないため、近松はその獨創の才を自由に揮つて、彼が理想的の構造を成したと見られる。滋野井子別れは特に有名で、人の涙を誘ふ詞句に富む。又興作が三吉に罪を犯さしめて、後に我が子と知つて驚くといふやうな運命悲劇は、後世黙阿彌等が好んで用ひる所。下之巻の「お乳の人の御立願あす四つ迄に命乞の太々神樂」といふ文句は、當時盛んであつた伊勢參宮の見物を當て込んだものであらう。本作は近松の作中でも特に歌謡や踊の要素の多

い作である。【影響】宇治加賀塚の正本に、本作の下巻以下に改修を施したと見るべき同外題のものがある。寛延四年二月竹本座上場の吉田冠子・三好松洛作「戀女房染分手綱」は本作の改作で、この作は同年秋江戸中村座で上演されて以来、今日まで三都の芝居に幾度か繰返されてゐる。一中節の「興作小まん夢路の駒」は、本作の外題も詞章もその儘であり、豊後節の「丹波興作夢路駒」、宮園節の「染分手綱」十段目「三吉愁ひの段、長唄の「興作」、歌祭文の「興作丹波栗毛上、小萬戀の諸手綱下」兵庫口説熊野節の「丹波興作」等は、皆本作から出たものである。歌舞伎書替へ物には前述の「まびす講結御神」の外に、同じ寶永五年十一月、芳澤あやめが大阪でやつた「丹波興作」、寶永六年京都神山座興行(推定)の「兩州連理の松」、正徳元年夷屋座興行(推定)の「丹波興作待夜の小むろぶし」(まびす講結御神と全く同一)、寛政五年四月、大阪中座興行の辰岡萬作「東海道戀關札」、同七年十一月京都四條南側芝居興行の奈河篤助作「新改版道中双六」、文化二年八月、江戸市村座興行の並木五瓶作「小室節錦江戸入」、明治元年三月守田座興行の河竹黙阿彌作「染分千鳥江戸棲」等がある。外に小説では、浮世草子に元文四年刊の八文字自笑作「丹波興作無間鐘」、合巻に文化十一年刊の曲亭馬琴作「驛路鈴興作春駒」がある。

【参考】近松傑作全集巻之壹解題水谷不倒○近松名作集上解題(日本名著全集)黒木勲藏○近松全集第八卷解題藤井乙男○歌舞伎狂言細見飯塚友一郎○日本歌謡集成巻七・八○近代歌謡集○日本小説年表(高野正三)檀風流「仇討物の諸曲」を見よ。團袋(みくら) 俳諧集 一冊【編者】北條

團水【本稱】俳諧團袋【名義】自序に「そもそも今の袋は、へちまの皮の團ぶくろ」とある如く、この諺から取つて、意に介せられる程の價値のないものかも知れぬとの表面は謙遜で實は、俳壇に問ふ意味から名づけたものであらうが、編者團水の團に因んでの命名であらう。【成立】元祿三年冬【刊行】元祿四年一月下旬【諸本】芭蕉以前俳諧集(俳諧文庫)下巻所收【内容】巻頭に短文の自序があり、次に凡例と標記して目次を擧げ、その次に大阪西鶴の序(元祿三むまの冬)があり、次に梓行年月を記して本文に入つてゐる。この體裁は一般の集とは異つてゐる。且つ第二の序の署名の西鶴の序から右傍へ線を引いて、「鶴ノ字ヲ改」と記してある。西鶴の序によると、元祿三年冬に西鶴が京住の門人團水を訪ね、一夜話まじりに兩吟し、歌仙の中途で止んだとある。この半歌仙が二折あつて本文の巻頭になつてゐるので、團水がこの二折を土臺とし、これに他のものを加へて本集を成したものであることが知られる。本文は、この西鶴・團水兩吟の半歌仙二折、次に團水・淵瀬兩吟百韻一折、團水が知人を訪ねて手向草とした天龍李梅との三吟表六句、その次に「俳諧一言芳談」と標題して、蘆月庵・西鶴・如泉・我黒・信徳・言水・芝蘭・淵瀬・鬼貫その他誰やらとある人々の俳諧上の警句が集められて居り、次に言水・淵瀬・我黒・信徳・團水五吟の春・夏・秋・冬・春の五歌仙、最後に元祿四年の初會開の芝蘭・淵瀬・團水・我黒・信徳・執筆の表合、次に元日の發句二十三句あつて終つてゐる。その後「居士號説」と標目してその参考書と思はれるもの九種擧げてある。【價値・批評】本集は西鶴研究の方面に於て重要な地位を取る。西鶴

著名なだんまりは「鞍馬山のだんまり」(千若丸の題向のもの)、七代目團十郎が残した黙阿彌作の「景清のだんまり」、同じく「鼠洞のだんまり」「關羽のだんまり」などがある。生世話のだんまりには種類はなく、大同小異の形式で

が西鶴といふ號をも用ひ出したのは元祿三年頃からで、本集はその基本的な資料の一となる。又西鶴は、浮世草子に轉向した後、貞享元年に二萬三千五百句の獨吟をしてから元祿二年に至るまでの六年間は、俳諧を殆ど捨てたのであるが、元祿三年に至つて、可致の「俳

テ國字ニ和辭シ、世俗ニ解シ易カラシム。又小説ノ奇事・奇談等ヲ載スレバ、大ニ學者博識ノ資トシ、看ル人ヲ悦ハシメ談鋒ヲ鋭クセシムルノ奇冊ナリ」とあり、支那歴代の史上人物、殊に文藝藝術家等の逸事を掲げて著者の意見を加へ、以て談論の資料としようとした

新話一五卷「山椒太夫關結」五卷の書名が、その著の奥書に記してあるが、刊行されたか否か詳かでない。【参考】伊藤里村三田村彦魚(初版日本文學講座第十卷附録)【水谷】

だんまり 演劇【名義】黙る芝居、即ち「水谷」



して、周子とて、陽の宿の白子屋の住女小萬に馴染んでゐる。小萬の父は年貢米の未進から水牢の責にあひ、小萬の苦惱の種となつてゐる。與作はこれを救はうと、一か八かの博奕を打つたが失敗して、石部の八藏からの借銭で首が廻らない。そこで姫の一行が關の宿に泊つた夜、平常與作といふ名にほれて自分に忠實にしてくれてゐる三吉を嫉して、姫の用金を盗ませる。三吉は盗んだが忽ち捕へら

て、彼が理想的の構造を成したと見られる。滋野井子別れは特に有名で、人の涙を誘ふ詞句に富む。又與作が三吉に罪を犯さしめて、後に我が子と知つて驚くといふやうな運命悲劇は、後世黙阿彌等が好んで用ひる所。下之卷の「お乳の人の御立願あす四つ迄に命乞の太々神樂」といふ文句は、當時盛んであつた伊勢参宮の見物を當て込んだものであらう。本作は近松の作中でも特に歌謡や踊の要素の多

波與作無間鐘、合巻に文化十一年刊の曲亭馬琴作「騷路鈴與作春駒」がある。  
【参考】近松傑作全集卷之壹「水谷不例」近松名作集上解題（日本名著全集）黒木勲蔵○近松全集第八卷解題 藤井乙男○歌舞伎狂言細見板塚友一郎○日本歌謡集卷七・八○近代歌謡集○日本小説年表（高野正）  
檀風流「仇討物の謡曲を見よ。」  
團袋 坊間集 一冊【編者】北條

水・芝蘭・淵瀨・鬼貫その他誰やらとある人々の俳諧上の警句が集められて居り、次に言水・淵瀨・我黒・信徳・團水五吟の春夏秋冬・春の五歌仙、最後に元祿四年の初會開の芝蘭・淵瀨・團水・我黒・信徳・執筆の表合、次に元日の發句二十三句あつて終つてゐる。その後「居士號説」と標目してその参考書と思はれるもの九種擧げてある。【價值・批評】本集は西鶴研究の方面に於て重要な地位を取る。西鶴

が西鶴といふ號をも用ひ出したのは元祿三年頃からで、本集はその基本的な資料の一となる。又西鶴は、浮世草子に轉向した後、貞享元年に二萬三千五百句の獨吟をしてから元祿二年に至るまでの六年間は、俳諧を殆ど捨てたのであるが、元祿三年に至つて、可致の「俳諧物見車（別項）の中で非難されたのが動機をなしたと見えて、浮世草子の傍ら俳諧にも復活したのであるが、その復活の試みが本集であつたと認めらるべく、それは本集が可致の「物見車」に對して反駁書「特牛」を發表した團水の撰になつてゐることから考へられる。然るに彼の序中に「あとよりおよぎつけども、とかく足のおもたく」と云つてゐる如く、中斷後の老來の彼にはもはや昔日の氣勢がなく、これが歿時までも挽回されなかつたのである。併し本集及び本集以後の彼の作は、俳壇の時代にも因らうが、蕉風に近いものになつてゐるので、この點からも注意するべきものである。本集は作者から見ると、貞門系の人が寧ろ多く、中に言水・信徳の如き蕉風式の人もある。故に西鶴門たる團水の俳壇との關係及び傾向と時代とが知られ、復活以後の西鶴を考へるにも重要な意義を持つ。また、「俳諧一言芳談」の諸家の語の終りに、團水が「いづれも申さるゝ段みな尤」と云つてゐるので、「一言芳談」は畢竟團水が他を借りて自己の俳諧主義を述べたものと云へる。【志田】

テ國字二和辭シ、世俗ニ解シ易カラシム。又小説ノ奇事・奇談等ヲ載スレバ、大ニ學者博識ノ資トシ、看ル人ヲ悦ハシメ談鋒ヲ鋭クセシムルノ奇冊ナリ」とあり、支那歴代の史上人物、殊に文藝學術家等の逸事を掲げて著者の意見を加へ、以て談論の資料としようとしたものである。文政十二年大田敦（晴軒）の序、同年武田信成の跋がある。  
【著者小傳】堯民、字は絳行、通稱治郎右衛門、號は晴湖、旗下白須賀氏の士である。周易に通じて名があり、後大田錦城に師事した。歿年未詳。「梧坡教諭」「龍背發秘師傳説」「春雪解話」等の著がある。【和田】

新話一五卷「山根太夫關卷」五卷の書名が、その著の奥書に記してあるが、刊行されたか否か詳かでない。  
【参考】伊藤單村三田村彦魚（初版日本文學講座第十卷附録）  
【水谷】

著名なだんまりは「鞍馬山のだんまり」（全七巻の題向のもの）、七代目團十郎が殘した黙阿彌作の「景清のだんまり」、同じく「鼠洞のだんまり」「關羽のだんまり」などがある。生世話のだんまりには種類はなく、大同小異の形式でゆく。【三宅】

【著者小傳】堯民、字は絳行、通稱治郎右衛門、號は晴湖、旗下白須賀氏の士である。周易に通じて名があり、後大田錦城に師事した。歿年未詳。「梧坡教諭」「龍背發秘師傳説」「春雪解話」等の著がある。【和田】

【單朴】滑稽本作者【本名】伊藤半右衛門【生歿】延寶八年江戸に生れ、寶曆八年（一八一八）八月四日、武州多摩郡青柳村に歿した。享年七十九【墓所】同村玉川縁にあつたが、最近谷保村養福寺に改葬した。【閑歴】詳しいことは判然せぬ。彼は獨身で、晩年、青柳村に移つたやうに傳へられてゐるが、「難長持」の序に、「玉河の邊に住て波帖の若盛より、今濫帖の老の秋迄、耕耘勤の閑には、平假名の草紙を友とし」とあるから、元來青柳の人で、この地に久しく住んでゐたらしい。普通の百姓ではなかつたらしく、その著述の動機が、靜觀房好阿の「當世下手談義（別項）」を見てその主義に共鳴し、直ちに「教訓雜長持」を著し、他の著作も皆教訓的である所を見ると、やはり好阿と同じく、村童の教育に任じてゐた先生か、又は醫者であつたかと思はれる。【著作】教訓雜長持五卷（別項）（寶曆二年冬刊）○里俗錢湯新話五卷（別項）（同四年春刊）○教訓差出口五卷（同十二年刊）○楚古良探五卷（明和五年刊）。その他、雜長持後篇五卷、「後篇錢湯

【だんまり】演劇【名義】黙る芝居、即ち默劇の意。【解説】江戸時代中期から、歌舞伎劇に行はれた一種の演出法で、全く臺詞のないパントマイムである。普通は顔見世興行の際、役者の顔ぶれと人柄とを紹介するものとして使はれ、まづ時代物の形式でゆく。即ち幕があくと仕出しが出で、淺葱幕をとると、一座の花形が色上下でセリ出しで出る。背景は山神の祠などをかりる。そしてその辻堂から大百をかぶつた山賊の頭のやうな者が出て来て、その柱を持つて柱まきの見得をする。下手の木の穴から修行者とか、女方が時參りのやうな風體で出る。さうした人物が大勢出て、結局旗や何かを持ち合ふ。そして活人畫のやうに、いろ／＼美しく動く。遂に山賊の頭などが一人花道へゆく幕。幕外で、その役が六法をふんで花道に入る。これが普通である。別に「世話だんまり」といつて、世話狂言の一幕中の一節をいふものがある。四谷怪談の「隠し堀の直助權兵衛、民谷伊右衛門・佐藤與茂七など」とだんまりになる。但し、この方は或る筋の變化進展を一先づそこで保留して、後の幕の解決に殘すための案から出たらしい。又は作者が筋の進行に困り、そこに未解決の逃避所として作られた場合もある。初めのは「三立て目」の返しに屢々このだんまりが使はれて、一座の立て者が全部出て、一の顔見世の意義をなした様式は千篇一律と見られる。普通の今日の顔見世風のもの外、

【談林十百韻】だんまりとつ俳諧集 二冊【編者】田代松意【刊行】延寶三年【諸本】延寶四年京版の再版本がある。芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）・談林俳諧集（俳書大系）所收。【内容】江戸談林の俳諧百韻を十卷集めたものである。延寶三年春西山宗因が江戸へ下つたのを幸として、江戸に於ける宗因派の連衆九人が百韻興行を催したのが本書成立の基である。巻頭の百韻は、宗因に發句を乞ひ、宗因の「されば爰に談林の木あり梅の花」の句を發句として、雪葉・在色・一鐵・正友・志斗・一朝・松白・ト尺・松意の九人が附合つた九吟で、宗因はこの百韻に發句を與へてゐる外、附合には加はつてゐず、第二以下の百韻にも加はつてゐない。第二以下第十に至る九卷の百韻は、以上の九人がそれ／＼一度づつ發句を出して他の八人と附合つた九吟である。各卷の發句の季は、十百韻に普通に見る季の配當の通りで、第一から第三までの三卷の發句が春、第四・五の夏、第六から第八までのが秋、第九・十の冬である。宗因はこの年の夏、京へ向つて出立したから、この十百韻の或る卷までは捌いて指導したのだらうが、或る卷以下は、宗因の捌きに預らないものであらう。本集成立の事情や主義本領を述べた序と跋とが附いてゐて、その何れにも署名がないけれども、松意の文と推定される。【價值】宗因風の俳諧を談林風（別項）といふやうになつたの

【單文】「文」を見よ。【談鋒資銳】隨筆 二卷【著者】荒井堯民【名稱】談鋒を鋭くするに資せんとする意を以て書名としたもの。【刊行】文政十二年の序跋がある。【解説】本書見返しに題して、「此書ハ後世隨筆中ニ論ズル所ヲ劄記シ

【單朴】滑稽本作者【本名】伊藤半右衛門【生歿】延寶八年江戸に生れ、寶曆八年（一八一八）八月四日、武州多摩郡青柳村に歿した。享年七十九【墓所】同村玉川縁にあつたが、最近谷保村養福寺に改葬した。【閑歴】詳しいことは判然せぬ。彼は獨身で、晩年、青柳村に移つたやうに傳へられてゐるが、「難長持」の序に、「玉河の邊に住て波帖の若盛より、今濫帖の老の秋迄、耕耘勤の閑には、平假名の草紙を友とし」とあるから、元來青柳の人で、この地に久しく住んでゐたらしい。普通の百姓ではなかつたらしく、その著述の動機が、靜觀房好阿の「當世下手談義（別項）」を見てその主義に共鳴し、直ちに「教訓雜長持」を著し、他の著作も皆教訓的である所を見ると、やはり好阿と同じく、村童の教育に任じてゐた先生か、又は醫者であつたかと思はれる。【著作】教訓雜長持五卷（別項）（寶曆二年冬刊）○里俗錢湯新話五卷（別項）（同四年春刊）○教訓差出口五卷（同十二年刊）○楚古良探五卷（明和五年刊）。その他、雜長持後篇五卷、「後篇錢湯

【だんまり】演劇【名義】黙る芝居、即ち默劇の意。【解説】江戸時代中期から、歌舞伎劇に行はれた一種の演出法で、全く臺詞のないパントマイムである。普通は顔見世興行の際、役者の顔ぶれと人柄とを紹介するものとして使はれ、まづ時代物の形式でゆく。即ち幕があくと仕出しが出で、淺葱幕をとると、一座の花形が色上下でセリ出しで出る。背景は山神の祠などをかりる。そしてその辻堂から大百をかぶつた山賊の頭のやうな者が出て来て、その柱を持つて柱まきの見得をする。下手の木の穴から修行者とか、女方が時參りのやうな風體で出る。さうした人物が大勢出て、結局旗や何かを持ち合ふ。そして活人畫のやうに、いろ／＼美しく動く。遂に山賊の頭などが一人花道へゆく幕。幕外で、その役が六法をふんで花道に入る。これが普通である。別に「世話だんまり」といつて、世話狂言の一幕中の一節をいふものがある。四谷怪談の「隠し堀の直助權兵衛、民谷伊右衛門・佐藤與茂七など」とだんまりになる。但し、この方は或る筋の變化進展を一先づそこで保留して、後の幕の解決に殘すための案から出たらしい。又は作者が筋の進行に困り、そこに未解決の逃避所として作られた場合もある。初めのは「三立て目」の返しに屢々このだんまりが使はれて、一座の立て者が全部出て、一の顔見世の意義をなした様式は千篇一律と見られる。普通の今日の顔見世風のもの外、

【談林十百韻】だんまりとつ俳諧集 二冊【編者】田代松意【刊行】延寶三年【諸本】延寶四年京版の再版本がある。芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）・談林俳諧集（俳書大系）所收。【内容】江戸談林の俳諧百韻を十卷集めたものである。延寶三年春西山宗因が江戸へ下つたのを幸として、江戸に於ける宗因派の連衆九人が百韻興行を催したのが本書成立の基である。巻頭の百韻は、宗因に發句を乞ひ、宗因の「されば爰に談林の木あり梅の花」の句を發句として、雪葉・在色・一鐵・正友・志斗・一朝・松白・ト尺・松意の九人が附合つた九吟で、宗因はこの百韻に發句を與へてゐる外、附合には加はつてゐず、第二以下の百韻にも加はつてゐない。第二以下第十に至る九卷の百韻は、以上の九人がそれ／＼一度づつ發句を出して他の八人と附合つた九吟である。各卷の發句の季は、十百韻に普通に見る季の配當の通りで、第一から第三までの三卷の發句が春、第四・五の夏、第六から第八までのが秋、第九・十の冬である。宗因はこの年の夏、京へ向つて出立したから、この十百韻の或る卷までは捌いて指導したのだらうが、或る卷以下は、宗因の捌きに預らないものであらう。本集成立の事情や主義本領を述べた序と跋とが附いてゐて、その何れにも署名がないけれども、松意の文と推定される。【價值】宗因風の俳諧を談林風（別項）といふやうになつたの







かゝる内容を持つ本集が現はれてから、宗因一派が一般に談林と呼ばれるに至つたものらしい。宗因の江戸下りは松意等の招きによつたのであらうが、松意等のこの俳諧運動は、江戸談林の樹立とその主義宣言のためとであつたと云へる。その意気は、宗因の發句に對

【性質】貞徳流の俳諧の單調と、その法式の煩瑣とに飽き、その反動として専ら斬新奇抜な俳風を樹立しようといふ動機からこの派の運動が起つたのである。即ち想に於て古典趣味から現實趣味への傾向を取ると共に、取材の範圍を擴張し、用語に於て漢語・俗語をも自由

【批評】古風が優美な和歌趣味の想を、縁語・懸詞によつて滑稽化して行く事は、終には千篇一律の弊に陥らざるを得ない。談林がその古い型を破つて、用語も自由に、取材の範圍も擴張して、滑稽趣味を豊かにしようとしたのは、一段の進歩であつたと云へるが、それが輕口・道化の惡洒落に墮

【閑歴】元木綱(別項)の妻。狂歌を能くし、當時菅江の妻節松嫁々(別項)と共に、女流作家の雙璧と呼ばれた。一説には木綱に嫁がぬ前から狂歌を嗜み、結婚の席上木綱と狂歌を贈答して祝言に代へたと傳へられてゐる。(野崎)

隆盛で、高野山は「江戸八百韻」を著し、言水・一鐵・素堂等と共に新風鼓吹に努めた。寛文十二年江戸へ下つた芭蕉も、漸く古風を捨てて談林に没頭し、素堂・信徳と共に「江戸三吟」(別項)を試みたりしたが、貞享以後は全く談林を蟬脱して蕉風を開いたので、俳風ここに三變し、俳壇の大勢は蕉風(別項)に歸するに至つた。江戸談林は才膺門の笠家逸志、逸志門の笠家舊室、舊室門の小菅蒼狐、蒼狐門の谷素外・五津・寶馬等と傳統し、江戸座(別項)中の宗因座の宗匠としてその勢力を維持したが、俗化した蕉風で、昔日の斬新・豪放を失つた。【研究史】許六の「歴代滑稽傳」(別項)に談林の主なる人物を擧げて評傳的に風調を叙してゐるのが古く、白露の「講論」(別項)や樓川の「俳諧獨稽古」(別項)にも、一わたりの歴史的考察がある。系統の研究には、治原の「綾錦」(別項)以來の系譜に、その系譜立てが見られ、その中、素外の「西山家連講系譜」は、江戸談林の系譜立てである。併し明治以前に於ては、江戸談林七世で編著の多かつた素外が、編著と共に談林派の顯揚に力めたのが目ばしい位で、特に纏まつた見るべきものはなく、明治以來俳諧の史的研究が進んで以來、談林の研究も漸次精細となり、本格的なものとなつたのである。

○七百五十韻 伊藤信徳 ○次韻 松尾芭蕉(系譜) 綾錦獨稽古 治原 講論家譜早川丈石 ○かい見種 ○西山家連講系譜 谷素外 ○講家大系圖 牛川春明 (萩原・志田)

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【梗概】 歳十四の春の初め、新次は母の命日に墓參に行き、ふとした事から、優しい年上の娘秀を知る。秀は母なき少年をいつくしみ、新次はわが姉の如く秀を慕ふ。新次は土地のミッション・スクールに通ふ最年少の生徒であるが、師ミリアドも亦彼を弟のやうに愛し、遠く東京に去つた後も北陸の市に住む彼を忘れず、頻りに遊學をすすめ、新次も遂に青雲の志を抱いて上京する。さりながら、これより先、土地の豪家に嫁した秀を懐しむ念は去らず、勉學のためにはかゝしく進まない。ミリアドはこれを愁ひ、幾度となくいましめの言葉を盡したが、病に斃れる臨終にも母の心を以て秀を想ひ切る事を命じる。新次は「母上」と呼んで師の胸に縋り附いて泣いた。戸外は風の吹き荒ぶ深夜である。

# あ

千秋 ちあ 國學者【姓名】横井宏時。通稱金吾・吉平・十郎左衛門・田守(致仕後)【別號】木綿苑(生歿) 元文三年三月朔日、名古屋に生れ、享和元年(一八一七)七月二十四日歿す。享年六十四【墓所】尾張中島郡下祖父江村一弓山永張寺【閑歴】千秋は横井時諱の二男、家は世々名古屋藩に仕へて、千石を領した大身だつた。兄圖書の嗣子となり、寶曆八年(一七八八)の後を嗣ぎ、側小姓より徒士頭・新番頭・書院の番・部屋用人等を歴任して、寛政四年に致仕した。これより先、本居宣長の門に入つて國學を修めたが、公務の多端なるを以て、専心學事に没頭するを得ず、しばしば植松有信を伊勢へ遣つて疑義を質さしめた。千秋また巨資を抛つて、宣長の「古事記傳」古今集遠鏡等を名古屋に於て板刻せしめた。【著作】詩歌論○天真中詞○玉銜百首解○八尺勾瓊考(本居宣長全集所収) (以上森)

【業績】本居宣長に就いて國學を研究し、師の宣長にも大に推重されてゐたやうである。宣長の「古事記傳」の刊行は、植松有信の努力と、彼の出資に依つて始めて成つたものである。「詩歌論」に見える歌論は、大體宣長の「石上私淑言」(別項)中の詩歌比較論と同様で、特に彼の創見と見るべきものもない。家の集は

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴

【参考】「評論・歴史」 俳諧破邪顯正中島隨流 ○俳諧破邪顯正返答 岡西惟中 ○俳諧さるとりもち中島隨流 ○歴代滑稽傳 森川許六 ○俳論白霧 ○俳諧獨稽古 谷口樓川(「主要作集」) 大坂獨吟集 西山宗因批判 ○談林十百韻 田代松意 ○大句數 井原西鶴 ○江戸三吟 伊藤信徳 ○當流籠拔 松井宗旦 ○中庸委菅野谷高政 ○江戸八百韻 高野山 ○江戸新道池西言水 ○大矢數 井原西鶴



作品は、その意味で作者の浪漫派の詩人としての一面を最もよく代表してゐる。年下の少年に慕はれる美しき人は、この世にありとも思はれぬまでに理想化せられ、作者が憧憬の情をほし、まゝに受けてゐる。一篇を貫く至純の愛情は、西歐の文脈を取り入れた謂はゆる翻譯調を以て描きつくされてゐる。題材も文章とともに新しく、當時の文壇を驚かしたものである。

**千蔭** 歌人・國學者【姓名】加藤氏。本姓は橋。通稱は常太郎。要人、後に又左衛門。字は徳與麿(常世麿)【號】芳宜園・朧園・逸樂高・耳梨山人・江翁。狂名は橋八衢(生歿)享保二十年生、文化五年(一四六八)九月二日歿。享年七十四。【墓所】東京本所回向院【閱歴】

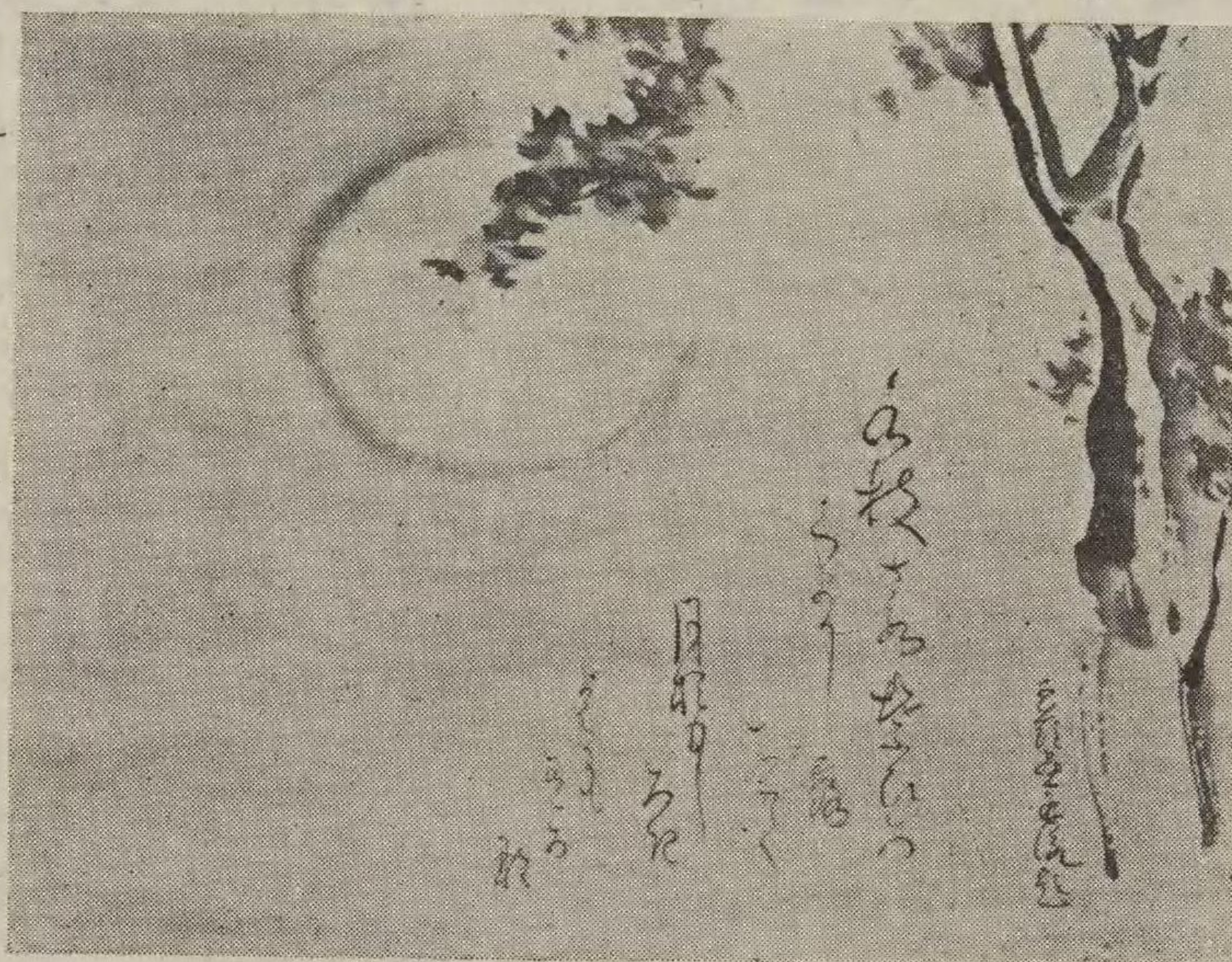


(藏國柏竹) 蔭 千 蔭 加

國學者枝直(別項)の子。幼少、父に學び、十歳眞淵の門に入る。天性と勤勉と相俟つて縣門の高足となり、宣長及びその一派の學者に對して、歌人として村田春海と並んで盛名があつた。寛延三年正月、十五歳で町奉行組與力勤方見習となり、翌年帳面改方、寶曆八年四

月選要集書繼御用を命ぜられ、寶曆十三年七月には二十九歳で父枝直の跡をついで吟味方助役となり、更に翌明和元年十月吟味役となつたが、天明八年六月五十四歳で致仕の後は、益々古學詠歌に専念し、晩年には富小路貞直卿の知遇を得、妙法院宮から歌を召され、宮が江戸に下られた際は春海と共に御前に召される等の光榮に浴し、權門貴族から花街の婦女に至るまで争つて門に入る有様であつた。幼少から書道を好み瀧本松花堂に學んだが、後更に佐理・行成の上代を慕ひ、終に一家を成すに至つた。次いで又大師流入木道正統の筆傳を受け、一層妙味を加へた。草書は晋唐名家の筆意を學び、又假名書に長じ、千蔭流の名を以てその書體は廣く行はれた。畫は建部綾足に學び、これ亦大に見るべきものがあつた。「千蔭やき」「千蔭殺子」の名が存するのは好事の人々が千蔭の畫を陶器に焼きつけ、又は織物として愛玩した爲めである。又橋八衢の狂名で手柄岡持や蜀山人と親しく交り、黄表紙に興味を持つなど、當代の洒落な思潮にも觸れてゐた。その歌文集「うけらが花(別項)」に見られる彼の特質は寧ろ輕妙で、師眞淵の如く高古を求めず、「古今集」以後の調が著しい。後世に残した學的業績は「萬葉集略解(別項)三十卷の撰述である。元來千蔭は枝直以來、田沼意次執權時代に永く與力を勤めた關係上、松平定信が將軍補佐役となり、改革を斷行し、前代の役人を多く罷免するに至るや、千蔭は自ら病と稱して職を辭した。然るになほ在職中の勤めよろしからずとて、他と同じく減祿の上、

百日の閉門を命ぜられた。彼はこれを機會に「略解」の撰述を思ひ立つたのである。本書の成るや富小路貞直卿の所望によつて一本を獻じ、謝狀その他を贈られ、又文化元年十月十六日には將軍に獻上し、白銀十枚を賜はつた(北町奉行所撰要集)。彼はこの書を成すに當り、宣長に負ふ所少からざるを思つて恩賜金の一部を割き、これを宣長の靈に供へた(藤垣内文集、



(藏氏之辰野高) 蹟 筆 蔭 千 蔭 加

加藤千蔭におくりつる。門弟には、一柳千古・清原雄風・木村定良・廣岡田鶴子等がある。(萬葉集略解参照)  
【著作】萬葉集略解三十卷(別項)(寛政十二年成。文化九年刊)○萬葉新探百首一卷○うけらが花八卷(別項)○香取日記一卷○月並消息一卷○玉あられ論一卷○ゆきかひぶり二卷○大歌所御歌枕一卷○新撰月百首一卷○玉川紀行

一卷○古今和歌集序(墨帖)○新百人一首。【歌風】眞淵の一面である近體風を受けついで、一體に纖細流麗なものが多い。江戸派の歌人は、大體新古今風に今様を加味した歌風で、極端に技巧を弄したあとは見えぬが、趣致を重んじ、調子に軟弱の所あるを免れなかつた。千蔭の歌も、さういふ弊をかなりに持つたもので、その表出の安易さが、多くの歌を等しく單一に陥らしてゐる。殊に題詠のものは、古典から一步も出てゐない。餘りに姿體に重きをおいて、外形的に流れたがために、充實した味ひの感じられぬのは遺憾としなければならぬ。(うけらが花参照)

底すめる石井の水をかがみにてたちよそひたる山吹の花(石井のもとに山吹咲けり) 今日の日ものどけさしるくしのめの體に匂ふあか星のかげ(春の星)  
【参考】近世三十六家集略傳○朧園橋翁墓碣銘林述齋(事實文編三六)○和歌史の研究 佐佐木信綱○國學全史下巻野村八良○加藤千蔭とその時勢關根正直(からすか) 【西尾・窪田】  
**近頃河原達引** ちかごろかは 淨瑠璃 三段 世話物【角書】傳兵衛【作者・初演】現行正本に二種ある。一は天明五年五月五日初日、江戸肥前座興行のもので、作者は爲川宗輔・筒川半二・奈河七五三助とある。他は中村重助再撰とある同年九月九日刊本で、卷末に、天明二年道頓堀中の芝居で豊竹八重太夫が語つたものを刊行する旨が記されてゐる。兩者の内容は同一である。又近松半二を作者とする説もあつて、成立に就いては未だ確證がない。【諸本】淨瑠璃名作集下巻(日本名著全集)・淨瑠璃名作集下巻(有朋堂文庫)等に所収。別に、「義經腰越狀」と合刻刊本もある。



國學者枚直(別項)の子。幼少、父に學び、十歳眞淵の門に入る。天性と勤勉と相俟つて縣門の高足となり、宣長及びその一派の學者に對して、歌人として村田春海と並んで盛名があつた。寛延三年正月、十五歳で町奉行組與力勤方見習となり、翌年帳面改方、寶曆八年四

ず、「古今集」以後の調が著しい。後世に残した學的業績は「萬葉集略解(別項)三十卷の撰述である。元來千蔭は枚直以來、田沼意次執權時代に永く與力を勤めた關係上、松平定信が將軍補佐役となり、改革を斷行し、前代の役人を多く罷免するに至るや、千蔭は自ら病と稱して職を辭した。然るになほ在職中の勤めよろしからずとて、他と同じく減祿の上、

加藤千蔭におくりつる。門弟には、一柳千古・清原雄風・木村定良・廣岡田鶴子等がある。(萬葉集略解參照)

【著作】萬葉集略解三十卷(別項)(寛政十二年成。文化九年刊)○萬葉新探百首一卷○うけらが花八卷(別項)○香取日記一卷○月並消息一卷○玉あられ論一卷○ゆきかひぶり二卷○大歌所御歌枕一卷○新撰月百首一卷○玉川紀行

【題材】異説が多く、松村操の「實事譚」には、元文三年十一月におしゆん傳兵衛兩人が聖護院の杜で心中したこと、同年同月の四條河原の喧嘩と、同年九月に東堀川の孝子丹波屋佐吉が表彰されたことの三者を併せ脚色したものであるとしてゐるが、元文三年の事件を天明五年に仕組んで「近頃」と冠するのは如何かと思はれ、しかもおしゆん傳兵衛の心中を扱つた享保三年、京夷屋座興行の「おしゆん傳兵衛十七年忌(稀書製會本がある)があり、これを正當に十七年忌を當込んだものとするは、心中は元祿十五年の事となる、寶永元年刊の「心中大鑑」には、おしゆんと庄兵衛の話があり、歌祭文にも、「二條河原心中」京おしゆん傳兵衛心中」があり、「外題年鑑」には、都一中の正本に「おしゆん傳兵衛河原心中」があるとして居り

また宮古路豊後後援の語り物に、「傳兵衛おしゆん十七年忌道行」(前掲の歌舞伎興行の際のものではある)がある。又一方、天明二年二月江戸市村座に、「隅田川柳伊達染」(常盤津近頃懸夜話)同三年春中村座の「江戸花三升會我」(富本「花川戸身替の段」)が演ぜられて居り、「俗耳鼓吹」には、天明二年正月江戸薩摩座で、竹本八重太夫がお俊傳兵衛の猿廻しの段を語つて好評を得たともあり、本作の成立年代はなほ後考を俟つべき點が多い。なほ堀川の段の稽古唄としてうたはれる「鳥邊山」は、寶永三年正月京都都萬太夫座の「鳥邊山心中」の道行を改作した上方唄「鳥邊山」(歌系圖には近松の作としてゐる)である。又、與次郎といふ名は、「人倫訓蒙圖彙」に見える、口早な事をいふ物貫「たゞきの與次郎」を同類の猿廻しと混用したものであらうといはれる。

【梗概】「上之巻」(祇園の段)井筒屋傳兵衛は戀仲のおしゆんと逢つたのを、嘗て父が世話した事のある龜山の勘定役入瀬口左内に見られ、意見される。左内の相役横淵官左衛門はおしゆんに惚れてゐて、手代の萬八、仲買の勘藏と共に傳兵衛から三百兩を騙り取つた上、價金使ひの悪名を付けて打擲するのを左内が救ふ。(揚屋の段)横淵がおしゆんを身請しようとするので傳兵衛とおしゆんは嘆く。傳兵衛の父喜左衛門が来ておしゆんを身請しようと言ふのを聞いた横淵は、おしゆんを盗み出さうとしたが封間久八に邪魔されて逃去る。

【中之巻】(河原の段)横淵は萬八、勘藏と共におしゆんと思つて駕籠を襲つたが、中のは傳兵衛だつたので怒つて打擲する。傳兵衛は堪へ切れず横淵を斬り殺し、その場で自害しようとするのを、おしゆんと久八が来て止め、勘藏の訴へによつて来た代官捕手には久八が科を引受けて縛に就く。(堀川の段)おしゆんは生家に預けられてゐる。傳兵衛が忍んで來るので盲目の母と朴訥な兄與次郎は怒るが、二人の熱情、おしゆんの誠意を知つてこれを許し、二人を落す事にする。與次郎は商賣物の猿を廻して門出を祝ふ。「下之巻」道行涙の猿を廻して門出を祝ふ。「下之巻」道行涙の猿を廻して門出を祝ふ。「下之巻」道行涙の猿を廻して門出を祝ふ。

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【近松秋江】小説家【本名】徳田浩司【閱歴】明治九年五月四日、岡山縣和氣郡藤野村の農家に生る。同二十七年、末廣鐵道の「雪中梅」(別項)「明治四十年の日本」、矢野龍溪の「經國美談」(別項)等を耽讀して、非常に感激したといふ。又村井秋齋・尾崎紅葉・泉鏡花等の小説に興味を感じ出したのもその頃で、同二十九年には「文藝俱樂部」に載つた樋口一葉の諸作を讀み、女史について小説家

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)

【参考】近世邦樂年表○日本名著全集淨瑠璃名作集下巻解題○日本戲曲全集第三十六卷解題○世話狂言傑作集第四卷解題○堀川」に就いて濱村米藏(歌舞伎、新五ノ四)○近頃河原の達引三田村春魚(芝居の裏表)○歌舞伎の型鈴木春浦○歌舞伎細見飯塚友一郎(増田)



如何なる痴情、如何なる愚行も、彼の觀察と彼の筆致とに依つて表現されると、其處には眞面目さが漂つて来る。深刻さが浮んで来る。文章は決して、名文とはいへない。ねちねちしてゐて、印象も不鮮明である。それにも拘はらず、讀者に訴へる力を持つてゐるのは、飾らない正直な生一本な表現の力のためであらう。

近松徳叟

ちかまつ 脚本作者 【姓名】通稱徳右衛門、幼名勝助【別號】初名、徳三

【併號】雅亮 【歿年】文化八年八月二十六日(二十三日とも)歿す。享年五十九【法名】一如院亮體日相【閨歴】大阪坂町の娼家大樹屋の主人で、一炊庵小野紹連の孫といふ。幼時から演劇を好んだが、歌舞伎芝居の銀主が知己なる所から、その勧誘もあつて、近松半二(別項)に入門して作者道に入った。初め、名は徳三と記したが、半二の弟子を利かせ、徳右衛門の徳を残したかと思はれる。最初は淨瑠璃作者たらんとして半二についたかと思はれるが、當時の歌舞伎芝居が勃興して来た形勢を見て、彼も歌舞伎の世界へ轉向したのであるまいか。殊に天明三年半二が歿して、彼の決心はいよいよ固まつたであらう。初め並木五瓶、竹本三郎兵衛、辰岡萬作等の先輩の下にゐて、執筆してゐたが、歌舞伎の作道について、特に誰に就いたかの傳へはない。かくて十年間ほど修業して、寛政七年立作者となり、以後文化六年まで、上方作者として主に大阪に活躍した。門弟に近松門喬、近松加造、近松萬兵衛等がある。【作品】好評を得た作を次に列挙する。【一夜漬狂言】伊勢音頭戀疑双(別項)○もろちどり鳴門白浪(寛政九年正月、角の芝居。夕霧に裁歌鳴門之助)○けいせい、會稽

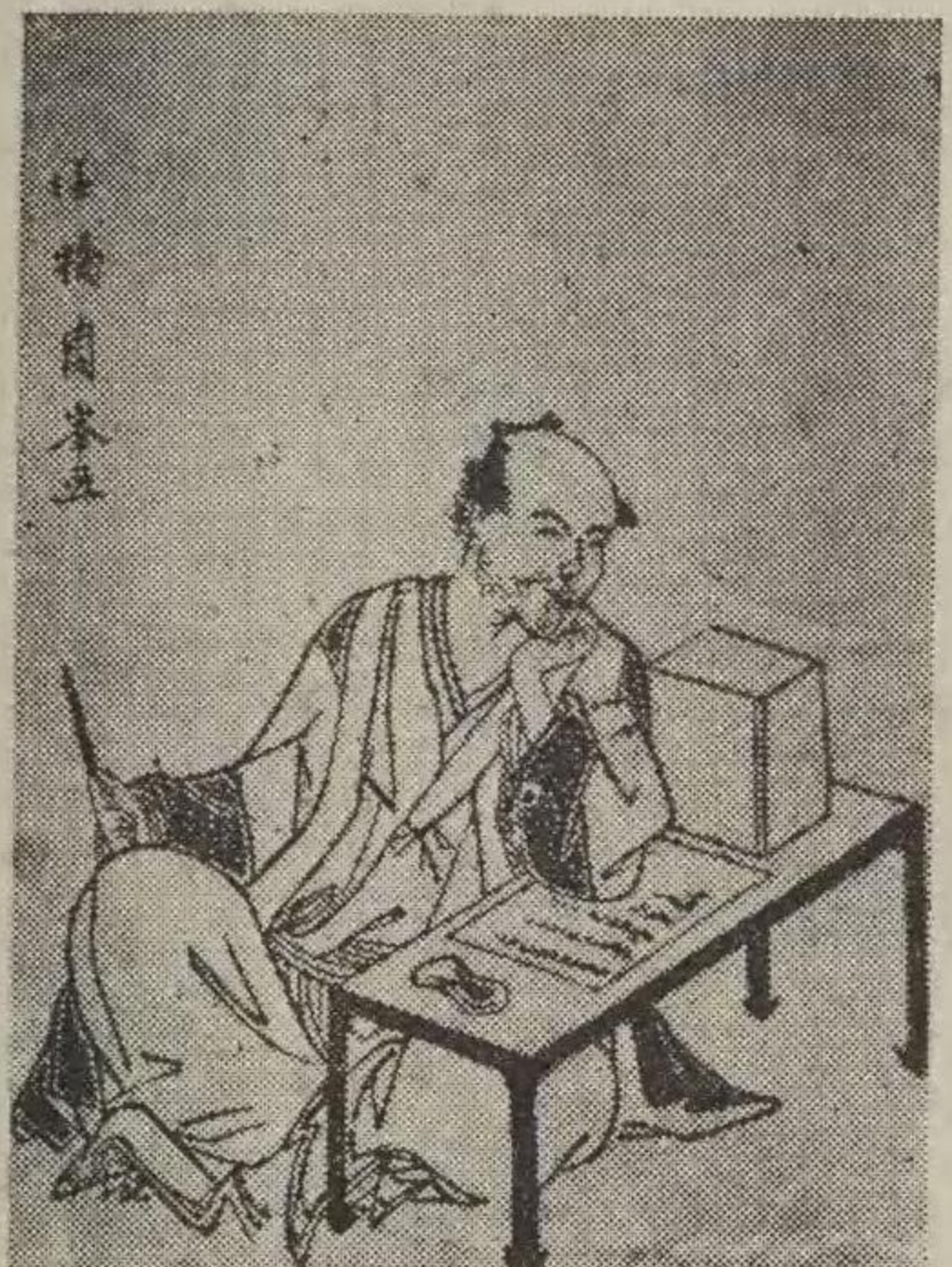
山(寛政十一年正月、角の芝居。江戸新大橋仇討)○名作切籠(享和元年八月、中の芝居。高槻騷動)○鼓かしくの紅燧(文化五年五月、角の芝居。北新地の事件)【小説の雛案】淺草靈驗記(別項)○紅楓秋葉話(寛政十一年九月、角の芝居。運府觀天歩作「淺道物語」による)○俠義廓日記(寛政十二年九月、角の芝居。芝叟の「油」による。文化十三年「寶油郎」出版)○けいせい、箱傳授(文化元年正月、角の芝居。上田秋成「秋雨物語」による)○いろは歌譽櫻花(文化三年正月、角の芝居。忠臣藏。但し馬琴の「四天王割盜異縁」による)○けいせい、英草紙(文化四年正月、中の芝居。近路行者の「英草紙」による)○柵自來也談(文化四年九月、角の芝居。鬼武の「自來也談話」による)○けいせい、輝草紙(文化五年正月、角の芝居。京傳の「昔語稻妻表紙」による)○舞扇南柯話(文化五年九月、中の芝居。馬琴の「三七全傳南柯夢」による)○鳥廻月弓張(文化五年十一月、中の芝居。馬琴の「權説弓張月」による)。(この外、芝叟の長話「舞」を脚色したまゝで、歿後、奈河晴助によつて潤色されたのが、「けいせい、筑紫紫猷(別項)である。【その他】けいせい、挾妻籬(寛政十年正月、角の芝居)○けいせい、花山崎(寛政十二年正月、角の芝居)○けいせい、廓源氏(享和二年正月、中の芝居)。

【作風】以上の如く三分すると、彼の當り作の多くは、一夜漬のもの、小説の雛案物にあつた。兩者は廣く意味での際物である。彼の名聲は、一面、かゝる際物の活用にもあつたといへよう。且つ社會が漸く讀本の如き、複雑な構想その物に興味を覺えて来たのに乗じ、小説雛案に努力したのであつたが、恰も彼の得意な方面もそこにあつたがゆゑに、「鳴門白浪」以來、彼の名聲は忽ち擴まつたのである。盛時には、先輩辰岡萬作(別項)と肩を並べて評せ

られ、徳叟はお家を中心に置いた時代物作者といはれた。半二以來の傳統とも見られようが、世話にも交渉があり、相當廣い題材の範圍を、自在にこなした得たのである。尤も雛案作の如きは、劇作の態度から見れば、墮落とも解釋されるが、彼が他の部分の傑作に於て、十分お家物作家たるの範を示すことは出来たと思ふ。なほ彼の小説雛案の態度が、逆に小説界へ影響したものが種彦の「正本製(別項)である。又及び萬作の作品には、謂はゆる繪入根本として出版されたものが甚だ多い。

【參考】近松徳叟考傳西澤一鳳(傳奇作書初篇)○京攝戲作者考烏有山人○狂言作者概略○近世日本演劇史伊原敏郎

近松半二 ちかまつ 淨瑠璃作者 【姓名】種積氏【歿年】天明三年(一四四三)二月四日歿す。享年五十九【閨歴】「難波土産(別項)の著者たる大阪の儒者種積以貫の子として生れたが、性放逸、遊蕩の餘り家の業から離れ、竹田出雲(別項)の門に入つて、淨瑠璃作者となつた。父以貫は近松門左衛門と親交があつた



近松半二(南木水蔵氏藏)

らしいが、その故に門左衛門を敬慕してか、近松を名乗つた。門左衛門の養子となつたとの説もあるが、直に信ぜられぬ。彼はやがて竹本座の立作者に擧げられ、座の衰退期に面し

て大に奮闘した。寶曆元年十月、竹田外記の下に「役行者大峯櫻」に執筆したのが最初で、以後約三十年間の作者生活であつた。寶曆十二年までは先輩の下にあつて修行時代と見られるが、その前半期は出雲、後半期は三好松洛や吉田冠子等の指導を仰いでゐた。この時代に於て彼の作の傾向がほぼ定まつたかに覺える。晩年は山科に幽居したと傳へる。歌舞伎狂言作者の近松徳叟(別項)は彼の門から出た。【著作】近松半二傑作集(續帝國文庫)・半二戲曲集(國民文庫等)に收められてゐる。一生の淨瑠璃作五十餘曲の中、三十五曲程が彼の獨作乃至立作者としての作であつて、寶曆十三年四月「山城の國畜生塚」以後である。尤もその他「奥州安達原(別項)の如きこれに準ずべきものもある。この時代の合作者として、前半期に竹本三郎兵衛があるが、彼と提携した作には見るべきものがある。京羽二重娘氣質「蘭奢待新田系圖」本朝二十四孝「太平記忠臣講釋」關取千兩幟「近江源氏先陣館」各別項等の傑作がそれ等である。なほ三好松洛(別項)が陰に大に助力したことも認められねばならぬ。半二一代の傑作といはれる「妹香山婦女庭訓(別項)にも松洛の輔導が相當働いたかと察せられる。三十餘曲を題材の上から見ると、殆ど先行作品によつたものと見られるが、淨瑠璃種と見られる中に、「傾城阿波の鳴門」「よみ賣三巴」「心中紙屋治兵衛」「往古曾根崎村噂」の近松ものの如きは、特に目立つ一群をなす。その外にも「新版歌祭文」や「伊賀越道中雙六(各別項)等があつて、これ等の書き替へ作は原作以上に今日に生命がある。なほ遺稿として「獨判」がある。一流の平易な人生觀を記したものであるが、彼の人物の躍如たるものがある。

【作風・價值】見方によれば全作品が書替へ作であると言はれる程に、或る素材の直接的戲曲化は試みられてない。併しこの點は淨瑠璃曲の發展が、事實の展開そのもの持つ興味



て、特に誰に就いたかの傳へはない。かくて十年間ほど修業して、寛政七年立作者となり、以後文化六年まで、上方作者として主に大阪に活躍した。門弟に近松門喬・近松加造・近松萬兵衛等がある。【作品】好評を得た作を次に列挙する。「一夜漬狂言」伊勢音頭懸燈籠(別項)○もろどり鳴門白浪(寛政九年正月、角の芝居、夕暮に寂寂鳴門之助)○けいせい會稽

た。兩者は廣い意味での際物である。彼の名聲は、一面、かゝる際物の活用にもあつたといへよう。且つ社會が漸く讀本の如き、複雑な構想その物に興味を覺えて來たのに乗じ、小説構案に努力したのであつたが、恰も彼の得意な方面もそこにあつたがゆゑに、「鳴門白浪」以來、彼の名聲は忽ち擴まつたのである。盛時には、先輩辰岡萬作(別項)と肩を並べて評せ

らしいが、その故に門左衛門を敬慕してか、近松を名乗つた。門左衛門の養子となつたとの説もあるが、直に信ぜられぬ。彼はやがて竹本座の立作者に擧げられ、座の衰退期に面し

と、死と先行作品によつたものと見られるが、浄瑠璃種と見られる中に、「傾城阿波の鳴門」「よみ賣三巴」「心中紙屋治兵衛」「往古會根崎村噂」の近松ものの如きは、特に目立つ一群をなす。その外にも「新版歌祭文」や「伊賀越道中雙六」(各別項)等があつて、これ等の書き替へ作は原作以上に今日に生命がある。なほ遺稿として「獨判齋」がある。一流の平易な人生觀を記したものであるが、彼の人物の躍如た

るものがある。

【作風・價值】見方によれば全作品が書替へ作であると言はれる程に、或る素材の直接的戯曲化は試みられてない。併しこの點は浄瑠璃曲の發展が、事實の展開そのもの持つ興味から進歩して、展開の様式表現等に注意を求めた結果の現象であると思はれる。近松門左衛門から竹田出雲への展開が見られたが、更に半二は出雲時代から飛躍を遂げてゐる。出雲が機巧を應用する事に特異の手腕を示したが、半二は舞臺技巧の全的成功を遂げた。彼の作者生活の早い時代に、三郎兵衛との提携期の發見される事は、三郎兵衛が吉田冠子の伴であるが故に、大に意義があつたと思ふ。近松作の雛案の如き、誠に愚作ではあるが、それ等が歌舞伎化されて、今日なほ歡迎される所以のものも、一面そこにあらう。併し浄瑠璃がその儘に歌舞伎化される事は、本質の破壊と見ねばならぬ。一般の浄瑠璃の墮落とも解釋されるが、彼の作にも、この趨勢を助けたと見られる態度がないでもない。それは浄瑠璃曲の脚本化と言ひ得る。即ち臺詞の部分が增加した上に、臺詞と地の文とを截然と區別して綴るのであつた。この案は臺詞の音曲的表現を退嬰せしめ、語る要素を排除せしめる結果を生んだ。纏つて思ふに、浄瑠璃は既に發育の最後の段階に到達してゐたので、かゝる方向以外には轉換の求めやうがなかつたのであらう。併し、竹・豊兩座の退轉がこの期に見られた如く、彼は浄瑠璃作者としても、事實上最期を飾つた人物といへよう。

【別號】平安堂(平安)・巢林子・不移山人(故人不移子)等がある。【生歿】承應二年に生れ、享保九年(三八四)十一月二十二日(廿一日)歿す。享年七十二。【法名】阿禪院穆矣日一具足居士(墓所)攝津河邊郡久智村廣濟寺と大阪谷町法妙寺とにある。【家系】古來種々の説があるが、中で淀藩士杉森家出身とする同家系譜による説が信ぜられるやうである。同家は三條三位中将實次を遠祖とするが、五代目には秀吉・秀頼に仕へ、後、淀藩主稻葉美濃守について千石を食んだ杉森市兵衛信重が出た。その次子信義が近松の父に當る。信義は越前宰相に仕へて、後、浪人したが、智義・信盛・伊恒三人の男子を持つた。智義は織田長頼に仕へ、伊恒は岡本百竹(一抱)とて、長頼の侍醫平井自安の養子となつた。仲の信盛が近松門左衛門であつたといふ。近松には一子多門があつた。出生地に關しては古來十數箇の説が擧げられてゐるが、何れも確定的でなく、僅に京都説が有力かと推測される。【閱歴】第一期、修學時代——天和三年三十一歳に至るまで、但し寛文十二年二十歳の頃で當然二分されるので、それまでは青雲の志を抱いた純然たる修行期と見られる。武家に生れたが、家庭的に文學に親む機會は多くあつたらしく、やがて一條禪閣惠觀に仕へた。この頃、古典文學や有職の知識等を大に蓄へられたかと思はれる。然るに惠觀は寛文十二年に薨じた。それ等が原因となつてか、やがて近江の近松寺、唐津近松寺説もあるがに遊學した。當時、佛教方面の知識を吸

取したと思はれる。この頃から、天和三年に至る間は、作劇修行期とも見られる。浄瑠璃方面では、古浄瑠璃時代ともいへる。即ち青年時代の志望をかへ、野に下つて作劇の筆を執り始め、一方流行の太夫井上播磨掾を初め、宇治嘉太夫・山本角太夫等のために浄瑠璃を綴り、又一方京の坂田藤十郎に通じて歌舞伎の狂言作りをもなした。彼の儔輩を超えた技倆は、忽ちにしてその名を世に擴めた。【第二期、都座作者時代——貞享元年から元祿十五年(五十歳)に至る二十年間】藤十郎(別項)と提携して、彼のために新時代的な寫實的な劇を

都座の座本を引退したが、その頃から近松と竹本座との交渉は密接になつたらしい。十六年「曾根崎心中」の際は、名作者として委囑されたのであつたが、寶永二年、「用明天皇職人鑑」に至つて、彼は竹本座座附作者として生を終へた。浄瑠璃の傑作は殆どこの期に於て發表され、特に世話浄瑠璃の人情美の描寫は漸次その極致に達した。が、時代浄瑠璃も亦舞臺技巧に著々成功した。歌舞伎脚本は、これに反して拙作に傾いて行つた。浄瑠璃に於ける彼の進歩の背後に、座本竹田出雲(外記)の努力のあつたことを認められねばならぬ。



(歌所録小餘睡)門衛左門松近

【参考】海音・出雲・半二守隨意治(岩波講座日本文學)

【参考】海音・出雲・半二守隨意治(岩波講座日本文學)

【参考】海音・出雲・半二守隨意治(岩波講座日本文學)

【参考】海音・出雲・半二守隨意治(岩波講座日本文學)

ちかまつ

近松門左衛門



は考へられぬ。この時代の作の通性は、古浄瑠璃の性質に共通するが、概して古典の體案と見られる。殊に謡曲は非常に活用されてゐる。従つて、一曲としての創作的價値は少いが、後の五段形式の整理への考慮が、漸次に具體化されて行く傾向の窺へる事は、作者の態度の上に、史的意義の注意さるべきものがある。(一)世話浄瑠璃。元禄十六年「曾根崎心中」(別項)から享保七年「心中宵庚申」(別項)に至る二十四曲。前二者の外に、「心中二枚繪双紙」「卯月の紅葉」「卯月の潤色」「心中重井筒」「心中萬年草」「丹波與作待夜の小屋節」「今宮の心中」「心中双は氷の朔日」「冥途の飛脚」「長町女腹切」「博多小女郎浪枕」「生玉心中」「心中天網島」等十五曲の心中物、「堀川波鼓」「鐘の權三重帷子」等二曲の妻敵討物、「薩摩歌」「淀鯉出世瀧徳」「五十年忌歌念佛」「夕霧阿波鳴渡」「大經師昔曆」「山崎與次兵衛壽の門松」「女殺油地獄」等七曲の姦通物(以上各別項)等に分類する事もできる。近松としては、都座作者時代の經驗に據つたのであらうが、「曾根崎心中」の豫想外な成功は、劃期的な世話浄瑠璃發生といふ効果を収めたのである。際物として最新の報道を劇化することが、強く觀衆の興味を捕へたが、而も醜惡な事實なるべきそれ等の實相が、彼の筆端に上ると、忽ち淨化されて相思の男女は楽しく死に就くので、これは作者の人生觀・社會觀の反映、即ち彼の愛の精神の發露であると思はれるので、實際、世の青年男女への影響は強かつたらしい。近松晩年の圓熟期に及ぶと、愈々心理描寫は複雑を加へ、場面

照應の巧妙さが認められてゆく。(三)時代浄瑠璃。「出世景荷」以後、享保九年「關八州繫馬」(各別項)に至るまで、普通八十曲程を算へる。世話浄瑠璃に比して、舞臺の興味に富む時代浄瑠璃の方が、遙に觀衆の興を惹いた。この時代物は、脚色の背景が武家社會にある所を以てすれば、古浄瑠璃と變化はないが、近松が武士道即ち義の精神を主張した所に、第一義的差別が認められるので、こゝに時代浄瑠璃の基調を確立したのは、正に近松の功である。但しかゝる明確な態度は、第三期に入つてから漸次に現はれたと見られる。題材の



(職所産土波難)門衛左門松近

範圍は神代から當代に及んでをり、曾我物・義經物が最も多い。構想の進化や舞臺技巧の發達は、第三期後半に入つて著しい。「國姓爺合戦」(別項)の如きは尤なるものである。筋の葛藤による興味に成功したのもその頃である。「傾城酒吞童子」「平家女護馬」「雙生隅田川」「信州川中島合戦」「關八州繫馬」(各別項)等皆これである。時代浄瑠璃の圓熟は、世話浄瑠璃の特質をも加味して、柔軟性に富んだ時代世話の型を生んだ。「傾城反魂香」「傾城吉岡染」(各別項)等が好例である。かくして後、完成

の域に達した時代浄瑠璃も、その大體は近松によつて示唆されたのである。(四)歌舞伎脚本。貞享の初め、藤壺の怨靈の趣向(花山院后評参照)で名を擧げてから寶永年中に至る四十篇程が知られてゐる。様式は當時の通性で殆どお家騒動であるが、内容は藤十郎との提携によつた爲めか、世話狂言と見られるものが多く、又その中に傑作が多い。但し世話狂言としての構想は極めて簡單で、古い傾城買狂言の系統をひくに過ぎぬ。それ等の傑作は、元禄十年以後十五年頃までに盡き、「傾城佛の原」「傾城壬生大念佛」(各別項)の類は、悉くその間に書かれた。多少構想到複雑性のあるものは先行浄瑠璃等の體案作に多く、早い頃は寧ろ機巧の運用等に觀衆を驚歎させたものであつた。しかし改作物の中にも、「一心二河白道」(別項)の如き名作もある。元禄十六年以後は、浄瑠璃の脚本化すら現はれて、脚本独自の興味が失はれ、拙作が續いた。(五)その他浄瑠璃に、筑後掾追善として、その語り物の外題盡しを綴り込んだ「音曲百枚笹」の如きがあり、近松作安齋素讀と記された浮世草子で、國姓爺を小説式に書き直した「國姓爺御前軍談」(別項)等がある外には、上方唄に近松作と傳へられるもののある位で、纏まつた作品はないらしい。

【構想法】戯曲の構想法に於て、その組織に對して、彼が研究した様式は最も意義深いものであるが、それ等は第二期、主として都座作者時代に起きたらしい。彼の歌舞伎劇の組織は、三幕を基本としてゐるが、各幕の排列は序幕を騒動場、第二幕を世話場として事件を解決させ、第三幕を大踊りで終へる。浄瑠璃に比して内容の簡單なために、却つてかゝる

案が生れたかとも思はれるが、この一時代、二世話、三所作とする様式は、近世演劇の根本組織に觸れたもので、爾後の演劇界へ大きな指針を與へたものと思はれる。但し内容から見れば、脚色は極めて未熟であつた。これは世話浄瑠璃についてもいへる。ただ世話浄瑠璃は多く最近の事件を扱つてゐて、事實の戯曲性が脚色を大に助けてゐるに過ぎない。世話浄瑠璃の基本様式を三段組織にし、道行を最後に置いて、こゝに振の美を見せたのには、脚本の影響が察せられる。時代物とは別に、脚本の節よりも人形の振に重きを置いたところに、切り場面の配置が考案されてゐる。而もかゝる世話物は時代物の後に切狂言として据ゑられるのが定型であつた。これ等一日の興行組織が、歌舞伎脚本に試みられた組織と共通してゐる事はいふ迄もない。内容の複雑な時代物の五段組織についても、三段目に秋敷、四段目に道行を配する形式を定めて、一曲の照應の効果を求めたが、こゝに今後發達すべき浄瑠璃の方向が示されたとも言ひ得る。かくて戯曲發達期に際して、作劇家として彼の開拓した方面は、多岐に亘つてゐる。【文章】彼は浄瑠璃作家中卓越した文章家である。その巧緻と絢爛とは人を魅するものがあり、道行文の如きは切瑳琢磨の結晶ともいふべきである。併し浄瑠璃作者としての苦心は、第一に人形との調和である。人形の活動が伴ふが故に、一般戯曲の必要以上に、文章の立體化が常に計られねばならなかつた。第二には太夫との關係である。聲のあらゆる長所を持つた筑後掾のために書いたものには、一曲の中に、古來の音曲、殊に當代の流行唄の類まで、廣く採用してゐるが、そのためには、浄瑠璃



道を劇化するところが、強く観衆の興味を捕へたが、而も醜悪な事實なるべきそれ等の實相が、彼の筆端に上ると、忽ち淨化されて相思の男女は楽しく死に就くので、これは作者の人生觀・社會觀の反映、即ち彼の愛の精神の發露であると思われるので、實際、世の青年男女への影響は強かつたらしい。近松晩年の圓熟期に及ぶと、愈々心理描寫は複雑を加へ、場面

戰(別項)の如きは尤なるものである。筋の葛藤による興味に成功したのもその頃である。「傾城酒吞童子」「平家女護馬」「雙生隅田川」「信州川中島合戦」「關八州鬘馬」各別項等皆これである。時代淨瑠璃の圓熟は、世話淨瑠璃の特質をも加味して、柔軟性に富んだ時代世話の型を生んだ。傾城反魂香「傾城吉岡染」(各別項)等が好例である。かくして後、完成

【構想法】戯曲の構想法に於て、その組織に對して、彼が研究した様式は最も意義深いものであるが、それ等は第二期、主として都座作者時代に起きたらしい。彼の歌舞伎劇の組織は、三幕を基本としてゐるが、各幕の排列は序幕を騒動場、第二幕を世話場として事件を解決させ、第三幕を大踊りで終へる。淨瑠璃に比して内容の簡単なために、却つてかゝる

行文の如きは切羽瑠璃の結晶ともいふべきである。併し淨瑠璃作者としての苦心は、第一に人形との調和である。人形の活動が伴ふが故に、一般戯曲の必要以上に、文章の立體化が常に計られねばならなかつた。第二には太夫との關係である。聲のあらゆる長所を持つた筑後掾のために書いたものには、一曲の中に、古來の音曲、殊に當代の流行唄の類まで、廣く採用してゐるが、そのためには、淨瑠璃

近松門左衛門姓は杉森字は信盛平安堂菓林子之像

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへ咫尺し奉りて寸簡なく市井に漂て商賣しらず隱に似て隱にあらず賢に似て賢ならずものしりに似て何もしらず世のまかひものから大和の教ある道々故能雅藝滑稽の類までしらぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ一生を嘔りちらし今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半句もなき倒惑ころに心の恥をおほひて七十あまりの光陰おもへはおほつかなき我世經畢もし辭世はと問人あらばそれ辭世去ほとに扱もその後に残る櫻の花しにほは

享保九年中冬上旬

入寂名阿禪院穆矣日一具足居士

不俟終焉期豫自記春秋七十二歲

堂平安 信盛 之前

のこれとは思ふもおろかうつみ火のけぬまあたなるくち未かきして

尙々海苔我等好物と申又和歌之浦の名人の

もてなし彼是認藏仕候事に御座候重而御出坂

之節必御立寄所希御座候 以上

當月十八日御連簡相届忝拜見仕候如仰先頃者思召

寄珍瓊預御芳尋始而得貴慮本懷此事御座候愈以御

兩所様御勇健御勤仕之旨珍重日出度奉存候野生等

家内相養義無御座皆々堅固に罷有候間乍慮外御心

安思召可被下候先以御約束之妹春海苔澤山に被懸

御意被入御念候程之印見え候て色合各別之義句な

ども懸隔成事に御座候一昨日相届申候故いまだ風

味不仕先傍友にも見せて見はやし申候是以無御失

念掛御心候段不淺辱奉存候

山川をへだてよかよふ御音信いもせの道のり

をしれとて

と存候如被仰下今に國姓憲繁昌仕候五月菖蒲之中

のぼり國之繪野も山もこくせんやくにて御座候

如何様盆之比は新淨ルリ替可申候間其節被得御隙

御見物御上り奉待候其御地幸田傳次左衛門殿國姓

爺に御由緒有之由貴面之比御唱にて御座候未得貴

意候へ共差不可苦候はよ可然御意得被成可被下候猶

期後蒙之時候

恐惶謹言

卯月晦日

近松門左衛門花神

(讀氏郎太米山松) 近松門左衛門花神











本来の格を破らぬやうに苦心せねばならなかつた。これ等は年と共に研鑽を重ねたので、晩年の作には、内容形式共に圓熟の極致を示してゐる。【藝術觀】「難波土産」に傳へた所によると、文字通りの眞實を寫したものでなく、虚を認めて、虚と實との僅かな皮膜の間で、藝術は存在すると説くのであつた。この

上野版) ○近松の藝術 近松忠義(岩波講座日本文學) ○早稲田文學(明治三九ノ四、大正一五ノ一) ○國語と國文學(大正一三ノ一〇、同一四ノ八) ○國文學踏査(郊北文學會編) ○演劇學(昭和七ノ五)

**茅上娘子** ちがみのをどめ 歌人 【本名】狭野 さの

茅上娘子。茅上は細井貞雄手澤本及び無訓

【作品】「萬葉集」の第十五卷を二分したその後の半分は、二人の贈答歌で埋まつてゐる。二人の作品が交互に、五六首づつをひと固めにして贈歌・答歌、贈歌・答歌とほぼ一つおきに並べてある。最初に斷罪即時の娘子の作をおき、次に宅守の越前迄の道中の作、後は次々に流罪地と都との贈答になつてゐる故、かな

うとしたものである。卷一に天照大神を民家に祭る論以下、卷二に鑑きせながの事以下、卷三に言語のなまる訛らざる論以下、卷四に半頰の論以下、卷五に年始に佛事を忌む談以下、卷六に短歌・長歌の義以下各二十條を収めてゐる。傳寫に文字の誤脱が多い。〔和田〕

**親行** ちか 歌學者 【姓】源 【法號】覺因

うとしたものである。卷一に天照大神を民家に祭る論以下、卷二に鑑きせながの事以下、卷三に言語のなまる訛らざる論以下、卷四に半頰の論以下、卷五に年始に佛事を忌む談以下、卷六に短歌・長歌の義以下各二十條を収めてゐる。傳寫に文字の誤脱が多い。〔和田〕



本来の格を破らぬやうに苦心せねばならなかつた。これ等は年と共に研鑽を重ねたので、晩年の作には、内容形式共に圓熟の極致を示してゐる。【藝術観】「難波土産」に傳へた所によると、文字通りの眞實を寫したものでなく、虚を認めて、虚と實との僅かな皮膜の間に、藝術は存在すると説くのであつた。この主張は彼の發見ではない。恐らく歌舞伎芝居生活時代の體驗から得た所であらうが、演出上の問題として研究されてゐたものを、戯曲作の上に轉用し得た所に、彼の發明があり、彼の淨瑠璃の成功も考へられる。彼が時代物に於て、荒唐無稽な解釋の中に一縷の眞實性を潜めて、觀衆を讚嘆せしめたのも、世話物に於て、人生や社會の暗黒面を美化し得たのも、一にこの藝術觀によるものと思はれる。後世の作者がかゝる態度を誤解した憾みもあつたが、全體として淨瑠璃の發達には少からず貢獻したと思はれる。

【参考】難波土産 穂積以貴 ○竹豊故事 ○淨瑠璃譜 ○延葛集 坪内雄藏・水谷不倒等 ○近松門左衛門 塚越芳太郎(十二文豪の内) ○近松著作一斑 同上 ○近松之研究 坪内雄藏・細島繁一郎 編 ○近松門左衛門傳 水谷不倒(近松傑作全集) ○江戸文學研究 藤井乙男 ○江戸文學叢說 同上 ○近松戯曲新研究 加藤順三 ○上方文學と江戸文學 藤村作 ○近世文學序說 同上 ○近松門左衛門傳 木谷蓬吟(大近松全集) ○近松研究之序篇 前島春三 ○近松門左衛門傳 黒木勘藏(近松名作集) ○近世演劇考說 同上 ○近松門左衛門 同上(日本文學講義) ○近松語彙 上田萬年・樋口慶千代 ○近世戯曲研究 守屋憲治 ○近松研究 加藤順三(日本文學講義) ○近松時代物研究 黒木勘藏(同上) ○近松世話物研究 藤村作(同上)

ちがみの ちかゆき

上母殿 ○近松の藝術 近藤忠義(岩波講座日本文學) ○早稻田文學(明治三九、四、大正一五) 一〇〇 國語と國文學(大正一三、一〇、同一四ノ八) ○國文學踏査(郊北文學會編) ○演劇學(昭和七、五) (守隨)

茅上娘子

茅上娘子。茅上は細井貞雄手澤本及び無訓活字本に據つた。神田男爵藏本・西本願寺本・温故堂本には「茅上」。寛永版の流布本には、「茅上」となつてゐる。これは無訓本の「茅上」を誤つたので問題でないが、細井本・神田本の優劣は未定。今從來の通説に従つて「茅上」とつた。【閱歴】不詳。ただ萬葉集第十五卷の作品及び同巻の目錄に、「中臣宅守、妻藏部女、嫂、狭野茅上娘子之時、勅斷流罪、配越前國也。是於、夫婦相讓、別難會、各々陳動情、贈答歌六十三首」とある事から、中臣宅守が茅上娘子と通じたが故に、越前に流されて、娘子の悲戀の作が出来た事だけが分る。二人の結婚が何故有罪となつたか不明である。その流罪の年月も不明であるが、「續日本紀」天平十二年六月の條、天下に大赦して罪人を赦す記事のうちに、「中臣宅守不在赦限」とある故、天平十二年には宅守はまだ赦されずに越前に在つた事が分明であるから、流罪はその二三年前、天平十年前後の事であらう。この推定は、二人の相聞歌と共に卷十五に收められてゐる遺新羅使の歌が天平八年出發九年歸國の事件であつて、流罪もそれと同年頃の事件と考ふべきである、と云ふ事からも證據づけられる。これ等によつて茅上娘子が、聖武天皇の天平十一年の頃に、その青春時代を持つた奈良朝の女流作家なる事が分る。(宅守參照)

【作品】「萬葉集」の第十五卷を二分したその後の半分は、二人の贈答歌で埋まつてゐる。二人の作品が交互に、五六首づつをひと固めにして贈歌・答歌、贈歌・答歌とほぼ一つおきに並べてある。最初に斷罪即時の娘子の作をおき、次に宅守の越前迄の道中の作、後は次々に流罪地と都との贈答になつてゐる故、かなりの年月の間にとり交したものをこゝに纏めて集録したものと思はれる。宅守の四十首に對し、娘子の作二十三首である。凡て短歌。

【作風】萬葉歌人の、情熱的であつた事の證據として、いつも引かれる「君がゆく道の長手をくりたたね焼き亡ぼさむ天の火もがも」の一首は、能く茅上娘子の作風を語つてゐる。深い人生觀や複雑な味ひは見出せないが、その愛の純眞さと強さとが強く人に迫つてくる。宅守への愛を中心にして娘子の命全體が燃えてゐる感がある。これは全く作歌の動機そのものが、熱烈で純粹だつたことに基いてゐる。天平の中期以後は、歌が實際の具になりかけてゐた時期で、こんな純眞な動機から歌を作る風は次第に絶滅しつつあつた時期なのである。それを思ふと、そんな雰圍氣中からこんな作家の生れたことは不思議だとさへ考へられる。表現も當時の弊たる技巧に墮して却つて表現のために歌を害する如き事無く、必要以上の修飾や技巧を施さずして能く強い戀愛の氣持を出し得てゐる。情熱と技術を兼備した萬葉の代表的作家である。

千賀屋草

【著者】桂秀樹(多田義俊)【解説】公家・武家の故實、刀劍・弓箭・甲冑の談、言語の談、和歌の談、神道の談、醫方の談等を主とし、交ふるに卑俗の傳説等を以てして、童蒙を啓か

うとしたものである。卷一に天照大神を民家に祭る論以下、卷二に鑑きせながの事以下、卷三に言語のなまる訛らざる論以下、卷四に半頰の論以下、卷五に年始に佛事を忌む談以下、卷六に短歌・長歌の義以下各二十餘條を収めてゐる。傳寫に文字の誤脱が多い。(和田)

親行

【生歿】未詳。但し建保三年に萬葉集を書寫してゐるから、これより少くも二十年位前に生れたのであらう。而して建治三年にはなほ存命してゐるから、九十歳前後まで生きてゐたやうである。【閱歴】元久二年十一月、左



抄を完成せしめた(原中最秘抄奥書)。嘉禎二年

二月三日、源氏の校本中缺脱せる十五帖の再  
校合を始め、建長七年七月七日、やうやくこれ  
を完成した(鳳來寺所藏古寫本奥書)。寛元元年、  
將軍頼朝の命によりて「萬葉集」を校調し、兩  
證本を以て卷一を校合した(飛鳥井本奥書)。こ  
れ等の諸本は、仙覺の校本の基礎となつた。  
親行は特に「源氏物語」の學者として世に重ん  
ぜられ、「原中最秘抄」を作り、將軍實朝、頼朝  
及び宗尊親王の三代に互つて和歌所の奉行で  
あり、將軍の「源氏物語」の師範であつた(原中  
最秘抄奥書)。また定家より、その家集「拾遺愚  
草」の清書を依頼せられた時、假名遣の混亂せ  
るを一定せんとし、自己の意見によつて假名  
遣を定め、定家の檢閲をうけた。これが定家  
假名遣の根源であると傳へられてゐる(行阿假  
名文字遺序)。また雅有は親行の門弟となり、揚  
名介に關する秘説を授けられん事を懇望し、  
一首の和歌を贈つた(隣女和歌集・原中最秘抄奥  
書)ほどであり、後、徳大寺入道太政大臣は、  
親行の門弟となつて、その消息の表に、「光源  
式部大夫」の名を記し、衣笠内大臣家からの  
消息には、「親行爲當道之棟梁一向可存門弟之  
儀云々」の言葉があつて、親行の名聲は一世を  
風靡した(原中最秘抄奥書)。また一説に「東關紀  
行」の著者とも云はれるが、これは誤りであ  
る。(光行参照)【著作】勅撰集に六首、新葉和  
歌集に十二首、東撰和歌六帖に七首、拾遺風  
體和歌集に二首見える。○水原抄○原中最秘  
抄(各別項)

【参考】河内本源氏物語とその校訂者 山脇  
義文二二〇〇水原抄紫明抄の撰者同上(藝  
文二二〇〇)源光行親行年譜同上(藝文二二  
〇〇)定家の假名遣 吉澤義則(藝文二二〇  
〇)

【竹園抄】終りの方に、「爲顯入道殿小童

の時竹園にてをしへ給へる民部卿入道殿の言  
葉を爲顯殿のかきあつめ給ふなり。世間に未  
披露物也。穴賢不可有外見、可祕竹の苑にて  
御子にをしへ給へる爲家の詞なり。乃虎竹園

の書へにも、いさかひ果てゝの千切木」と  
開をあげて女房と家に歸る。【龜田】  
原爲顯【成立】終りの方に、「爲顯入道殿小童

の時竹園にてをしへ給へる民部卿入道殿の言  
葉を爲顯殿のかきあつめ給ふなり。世間に未  
披露物也。穴賢不可有外見、可祕竹の苑にて  
御子にをしへ給へる爲家の詞なり。乃虎竹園

の書へにも、いさかひ果てゝの千切木」と  
開をあげて女房と家に歸る。【龜田】  
原爲顯【成立】終りの方に、「爲顯入道殿小童

五〇源氏物語研究の初期山岸徳平(國語と國  
文學二一〇〇)源氏物語研究史の新資料橋  
本進吉(同上)

【地久】雅樂舞曲【異稱】地久樂、圓地  
樂【解説】高麗樂。新樂、中曲(又準大曲)。  
高麗双調曲に屬す。舞があり六人で舞ふ。舞  
人は常裝束を用ひ、甲は異なり、甲の下に帽  
をかぶり、鼻の高い假面を用ひる。この樂は  
催馬樂の櫻人(呂調)の歌に合ふといふ。番舞  
は「萬秋樂」。起原・傳來、共に不明。大槻如電  
は「其假面の狀貌より見る時は、進走禿・貴徳  
などと同じく渤海樂にやあらん」と言つてゐ  
るのは信ずるに足る。【田邊】

【乳姉妹】小説【作者】菊池幽芳

【發表】明治三十六年八月から大阪毎日新聞  
に掲載【刊行】同年、春陽堂前後二編。後明  
治大正文學全集(菊池幽芳篇)所收。  
【梗概】華族の落胤房江は、乳母お濱の手に育  
てられ、乳母の子君江と共に成長した。房江  
は性温順なれど、君江は虚榮心強き性であつ  
た。君江は情慾の冒險家高濱勇と戀に陥ち、  
未來を約した。一方房江は學校の教師、家庭  
教師となつて、益々崇高なクリスチャンとな  
つた。お濱の死期に際し、遺言した房江の素  
性を、君江はそのまゝ自分の素性として華族  
の落胤となりすました。一方房江の父は、房  
江を求めて止まず、落胤と名乗る君江を自分  
の子と思ひ、侯爵家に引取つた。老侯爵は乳  
母お濱への感謝のために、房江を我が子と知  
らず、己が屋敷に君江と共に迎へた。そして  
侯爵家に於ける二人の生活は始められたが、  
不思議にも、老侯は君江より房江に引きつけ  
られてゐた。のみならず養子昭信の心をも引  
きつけてゐた。併し房江は君江に對する義理

から、自分の戀を斷念してゐた。昭信との結  
婚の日も迫つた或る日、三年前別れた高濱に  
見出されて、かつて君江から彼に與へたバイ  
ブルの中から現はれた品に依つて、君江と房  
江と代つてゐるのを詰り、侯爵に打明けよう  
としたが、プライドに燃えた君江は、あく迄  
それを拒絶した上、祕密に終らせようとした  
ため、遂に高濱の怒りを買つて殺された。總  
てが暴露された結果、房江が侯爵令嬢なるこ  
とが明かになり、昭信の夫人となつた。  
【解説】同じ作者の「己が罪(別項)と共に、新  
聞小説として聲價甚だ高く、殊に大倉桃郎の  
「琵琶歌」などと共に、漸く衰へて來た家庭小  
説の末路に最後の光彩を添へたものである。  
これはベルサ・クレイ女史の或る小品からヒ  
ントを得たことを、著者はその自叙傳中に述  
べてゐる。【以上齋藤(昌)】

【上演】明治三十七年一月、大阪朝日座及び天  
滿座で同時に上演された。前者は高田、河合、  
秋月の一座、後者は喜多村、福井の一座であ  
る。翌年一月、東京でも東京座と本郷座とに  
同時に上演された。兩座の主なる役割は  
【東京座】高濱勇(市川高麗藏、後に松本幸四郎)、松  
平昭定(三宅滋(市川猿之助、後に市川段四郎)、松  
平昭信(澤村訥村、後に澤村宗十郎)、房江、市川女  
寅、後に市川門之助)、君江(中村芝翫、後に中村  
歌右衛門)(本郷座)高濱勇(高田實)、田川權作、  
畫家久米(水野好美)、三宅滋(佐藤蔵三)、松平昭  
信(山岡如華)、松平昭定(木村周平)、房江(藤田芳  
美)、君江(河合武雄)等

この競演は、勿論好劇家の間の問題になつた  
が、各々一長一短で、どつちが勝つたとも言へ  
なかつた。その後も屢々上演され、新派の主  
なる脚本の一つになつてゐる。【以上久保田】

【千種庵霜解】小説【作者】狂歌師【姓名】  
山中恒海、通稱要助【別號】霜解道和留【生  
歿】寶曆十一年生れ、文化八年(二四七)四月  
二十六日歿。享年五十一【去名】櫻井留吉

程であるが、大體に於て他家から主張せら  
れた平淡美の立場を見られる點で注意せられ  
る。その所説の中でも、親句・疎句の説の如き  
は、殆ど最初に見られる文獻である。【久松】

【連枷】能狂言【別名】花の頭【作者】  
金春四郎次郎・宇治彌太郎二代の内の作と傳  
へられる。【格式】本神文濟相傳の部(大藏流)

【題材】諍はてゝのちぎり木なる俚諺を捉へ  
て一曲の種としたもので、全曲の趣向は創作  
であるが、題名の示すやうに諺が中心になつ  
てゐる。この諺は、「源平盛衰記」四十三「成直  
降人の事」の文中にも、二月十七日は阿波勝  
浦の軍、二十一日には屋島を攻め落し、二十  
二日には讃岐志度を攻められけり。二十三  
日に梶原已下の兵屋島の渚に著く。諍終ての  
乳切木の風情なりとて、人皆口をすくむ」とあ  
り、「平家物語」十一「志度合戦」の條下には、  
「今は何用にか逢べき。六日の草蒲、會に逢は  
ぬ花、いさかひはてゝのちぎりきかなとぞ笑  
はれける」と見えてゐるから、相當古くから人  
口に膾炙してゐた諺のやうである。

【梗概】某が、あたりの者と連歌の初心講を結  
んで、丁度今日も當家に當つたので冠者を  
呼んで皆の衆を呼びにやる。所が近所の太郎  
なる者がいつも邪魔になるので、態と今日は  
觸れずにおかせる。するといよいよ、皆の者が  
集まつて、連歌を始めようとする頃、太郎が  
聞きつけ押しかけて來て、色々難辭を付け  
るので、一同申し合はせて太郎を叩き出す。  
太郎は悲鳴をあげて歸る所へ、女房が急を聞  
いて駆けつけ、刀を差させ棒を持たせ、仕返  
しに行けと口惜しががる。太郎は怖れて行きた  
がらぬが、女房は果して來ねば内へは寄せぬ、  
共々行くと云ふので、虎の威を借りて、當家  
を初めに皆々の家へ一軒々々尋ねて行くが、  
悉く居留守をつかつて相手にならぬので、門  
口で散々威張り散らし、「愛を訪へども留守と  
云ふ。彼處を訪へども留守と云ふ。是かや事

あるから、種々異本が出来た。滑稽文學全集  
第一・假名草子集(近代日本文學大系)所收。  
【梗概】山城國に、やぶくすし竹齋といふやせ  
法師があつて、都で食ひ詰め、にらみの介と  
いふ下僕をつれて、諸國を遍歴し、いづくで  
も心の落着く所に安住せんと、先づ京内参り

【批評】光廣は元和四年の春、近衛准后八條式  
部卿宮に隨伴して江戸に下り、「東の道の記」

に遊び、蒲ののこゝでその場を遊ばれ用で、三年  
程は名古屋に住んでゐたが、又こゝを立ち出  
で、にらみの介と共に、東海道を下る途すが  
ら、名所古蹟をたづね、狂歌を詠じなどして  
打興じつつ江戸に下り、諸所の見物を終る。

【批評】光廣は元和四年の春、近衛准后八條式  
部卿宮に隨伴して江戸に下り、「東の道の記」



風靡した(原中最秘抄奥書)。また一説に「東關紀行」の著者とも云はれるが、これは誤りである。(光行参照)【著作】勅撰集に六首、新葉和歌集に十二首、東撰和歌六帖に七首、拾遺風體和歌集に二首見える。○水原抄○原中最秘抄(各別項)

【参考】河内本源氏物語とその校訂者 山崎毅(藝文二二〇) 水原抄紫明抄の撰者同上(藝文二二〇) 源光行親行年譜同上(藝文二二〇) 〇定家の假名遣 吉澤義則(藝文二二〇)

竹園抄(ちくえん) 歌論書 一巻【著者】藤原爲顯(成立) 終りの方に「爲顯入道殿小童の時竹園にてをし給へる民部卿入道殿の言葉爲顯殿のかきあつめ給ふなり。世間に未披露物也。穴賢不可有外見。可祕竹の苑にて御子にし給へる爲家の詞なり。仍號竹園抄者なり」とある。爲家の聞書であるが、年代は未詳である。また偽書とする説もある。【諸本】刊本には寛永廿一甲申無射吉辰 藤屋三郎兵衛の奥附ある本があり、群書類従にも收められてゐる。東京帝國大學國文學研究室蔵の寫本二冊は、刊本と比すると小異がある上に、終りの方が、刊本に「凡誦おほしといへ共」云々とあるところ以後はなくて、その代りに、「歌おほしといへとも此歌十首に過べからず」云々とあり、その後色紙短冊など擧げ、奥に、「私云竹園抄は爲顯卿之作也。爲顯者爲家卿之三男ニテ爲教卿ノ弟ナリ尤歌道ノ專要是ニ過べカラズ。可信可祕」とある。【内容】歌に關する知識を擧げてあつて、一、歌可嫌病之事、二、可對詞之事、三、親疎句之事、四、六義之事、五、取本歌體之事、六、返事體之事、七、題存知之事、八、懷紙可書事、九、披講座席之事、十、名物題事、十一、風體之事に分けてある。この中、親句疎句の記述の如きは、句と句との接續の關係を説いて注意すべき言である。即ち親句をひびきの親句と正の親句とに分けて居り、「ひびきの親句」とは、音の上から接續する句であり、正の親句とは意味の上から接續する句である。又疎句とは、「ひびきも通ず、詞もきるれとも、心のはなれぬ歌」であるとしてゐる。【價值】本書は、偽書説もある

千種庵霜解(ちくさ) 狂歌師【姓名】山中恒海、通稱要助【別號】霜解道和留【生歿】寶曆十一年生れ、文化八年(一四七〇)四月二十六日歿。享年五十一【法名】釋淨利信士【墓所】淺草本戸慶養寺【閱歴】元、上總木更津に生れ、江戸に出て淺草馬道に住し、後、諏訪町に移轉して書肆を營んでゐた。狂歌を初代淺草庵市人(別項)に學び、後淺草側の判者となり、又狂歌集數種を自家から出版した。歿後門人勝田諸持が二世千種庵の號を襲いだ。【著書】夷曲花鳥集二冊(寛政十二年) 〇狂歌新集二冊(寛政年間) 〇狂歌幕之内二冊(享和二年) 〇堀川太郎新狂歌集三冊(享和三年) 【野崎】

竹齋(ちくさい) 假名字二卷二冊【作者】名はないが、「辨疑書目」に、「烏丸光廣竹齋」とあり、光廣の作と稱せられてゐる。【名稱】「竹齋物語」とも云ふ。竹齋は主人公の名。【成立】元和から寛永十二年までの間と推定される。【諸本】木活本が最も早いものであるが、刊記はない。これには「ちくさい」と假名で記され、繪が入つてをらぬ。次は整版で繪入本、これも刊行年月不明であるが、寛永版と稱するもの。その後江戸で寛文初年に覆刻したもの。竹齋狂歌ばなしといふ外題で四冊になつてゐる。又天和三年に鱗形屋で刊行したものは三冊に分れ、全く別版で菱川師宣の繪で有名である。外題は「下り竹齋」。これは竹齋が行はれて、江戸から京都へ、逆に行き「上り竹齋」といふ竹齋の擬作が出来たから、それと區別せんために、殊更に「下り竹齋」と附したものである。一時大層流行つたものであるから、種々異本が出来た。滑稽文學全集第一、假名字集(近代日本文學大系)所收。

【梗概】山城國に、やぶくすし竹齋といふやせ法師があつて、都で食ひ詰め、にらみの介といふ下僕をつれて、諸國を遍歴し、いづくでも心の落着く所に安住せんと、先づ京内参りをはじめ、清水より順次豊國・三十三間堂・大佛などを巡り、北野に行つて、連歌・三味線・能役者さまの興行物を見て、それより東を志し、尾州名古屋に足を留め、天下第一やぶくすし竹齋といふ看板を打ち、醫者をはじめたが、勿論數醫であるから、醫書は知らず、頓智轉轉の働きを以て、病者を診察して行く。先づ最初は、おこりを煩ふ者を見て、古墨古紙衣の黒焼を投じて、首尾よく癒し、それより種々療治を施してゐるうちには、失敗もあり成功もあるが、何れも稀代の療法で、或る時鍛冶屋の主人が、鐵屑を目に入れて苦しんでゐるのに對し、磁石の粉を張り付けて吸ひ出し、妊婦が生梅を好み、咽喉口に張り、首尾よく生梅は、飛び出したが、じんべん膏藥の效目で、目鼻までが吸ひ上げられ、却つて怒まれることもあり、又或る時小兒が井戸へ落ちたのを、竹齋が通りかゝり、戸板に例の吸出膏藥を一面に張り、井戸の蓋にし、今吸ひ上げるから見てをれと、言つてをるうちに時間が経つて、小兒は遂に死んで了ひ、兩親その他から袋叩き

聞をあげて女房と家に歸る。【編出】原爲顯【成立】終りの方に「爲顯入道殿小童の時竹園にてをし給へる民部卿入道殿の言葉爲顯殿のかきあつめ給ふなり。世間に未披露物也。穴賢不可有外見。可祕竹の苑にて御子にし給へる爲家の詞なり。仍號竹園抄者なり」とある。爲家の聞書であるが、年代は未詳である。また偽書とする説もある。【諸本】刊本には寛永廿一甲申無射吉辰 藤屋三郎兵衛の奥附ある本があり、群書類従にも收められてゐる。東京帝國大學國文學研究室蔵の寫本二冊は、刊本と比すると小異がある上に、終りの方が、刊本に「凡誦おほしといへ共」云々とあるところ以後はなくて、その代りに、「歌おほしといへとも此歌十首に過べからず」云々とあり、その後色紙短冊など擧げ、奥に、「私云竹園抄は爲顯卿之作也。爲顯者爲家卿之三男ニテ爲教卿ノ弟ナリ尤歌道ノ專要是ニ過べカラズ。可信可祕」とある。【内容】歌に關する知識を擧げてあつて、一、歌可嫌病之事、二、可對詞之事、三、親疎句之事、四、六義之事、五、取本歌體之事、六、返事體之事、七、題存知之事、八、懷紙可書事、九、披講座席之事、十、名物題事、十一、風體之事に分けてある。この中、親句疎句の記述の如きは、句と句との接續の關係を説いて注意すべき言である。即ち親句をひびきの親句と正の親句とに分けて居り、「ひびきの親句」とは、音の上から接續する句であり、正の親句とは意味の上から接續する句である。又疎句とは、「ひびきも通ず、詞もきるれとも、心のはなれぬ歌」であるとしてゐる。【價值】本書は、偽書説もある

この競演は、勿論好劇家の間の問題になつたが、各々一長一短で、どつちが勝つたとも言へなかつた。その後も屢々上演され、新派の主なる脚本の一つになつてゐる。【以上久保田】

に迷ひ、漸くのことその端を連れ出で、三年程は名古屋に住んでゐたが、又こゝを立ち出で、にらみの介と共に、東海道を下る途すがら、名所古蹟をたづね、狂歌を詠じなどして打興じつつ江戸に下り、諸所の見物を終る。【批評】光廣は元和四年の春、近衛准后八條式部卿宮に隨伴して江戸に下り、「東の道の記」一巻を撰してをり、その外にも度々江戸に下

聞きつけ押しかけて来て、色々難癖を付けるので、一同申し合はせて太郎を叩き出す。太郎は悲鳴をあげて歸る所へ、女房が急を聞いて駆けつけ、刀を差させ棒を持たせ、仕返しに行けと口惜しがらる。太郎は怖れて行きたがらぬが、女房は果して来ねば内へは寄せぬ、共々行くと云ふので、虎の威を借りて、當家を初めに皆々の家へ一軒々々尋ねて行くが、悉く居留守をつかつて相手にならぬので、門口で散々威張り散らし、爰を訪へども留守と云ふ。彼處を訪へども留守と云ふ。是かや事



(板年三和天) 齋竹り下

つたと云ふことであるから、「竹齋」は彼の實際の見聞に基づいた所が多いであらう。「東の道の記」は大納言の資格で書いたもの、「竹齋」は、衣冠束帯を脱いで赤裸々の光廣となつて書いたものと言つてよい。「まことに貧は諸道のさまたげ阿彌陀も錢ほど光る」と警句を吐

ちくえん ちくさい



いて、すべてを金の世の中に歸し、又「くすしには上手も下手もなかりけり、ひいき」の時のしあはせ」と狂詠し、有能が時に遇はず、無能が却つて世に蔓るといふ皮肉な世相の一面が、滑稽に展開されて居る。名古屋で試みた敷くすしの療法の如き、やゝ探りに墮してはゐるが、當時にあつては奇抜な構想であつたらう。文品も勝れてゐるところから、好評を博したのと思はれる。【影響】構想を摸擬したものに「上り竹齋」があり、又「新竹齋」(別項)がある。その他黄表紙等に影響を受けたものが多くある。また狂文的紀行、遍歴體の意匠を學んだものもある。淺井了意の「東海道名所記」(別項)の構想はその一例で、「上り竹齋」は、やはり東海道の行程を辿つたものである。

竹山

【参考】新撰列傳體小説史前編 水谷不倒(水谷)子慶。善太と稱す。【生歿】享保十五年大阪に生れ、文化元年(一四六四)二月二日歿す。享年七十五。【閨歴】覺庵の長子で、弟履軒と共に宋學を五井蘭洲に學び、出藍の稱があつた。また詩文にも長じてゐた。懷徳書院の院長となり、子弟を教授した。大正元年二月從四位を贈られた。【著作】逸史十二卷(草茅危言八卷)詩律兆四卷(非微七卷)【佐久】  
【發表】明治三十年十月號「太陽」【刊行】柳浪叢書前編。現代日本文學全集(廣津柳浪集)所収。

【挿話】某火災保險會社員の重三郎は、戀女房といふ程でもないが、見染めて一緒に住んでおもと新世帯を築きだしたが、四五日に迫つた妻の初産を前にして突然名古屋へ出張

を命ぜられた。跡にはお近といふ五十過ぎの雇婆と、主人を命の親としてゐる馬鹿正直の下男力造がゐるだけだつたから、まだ十九の初々しい妻の事を萬事頼んで、やむなく旅へ出たのである。おもよに産氣がついたのはそれから三日の後だつた。これまで度々取り上げの経験があるといふお近を力頼みに、刻々劇しくなる陣痛を忍んでゐたが、力造を幾度使にやつても、産婆がなかく来てくれなかつた。遂にその手を待たずに、出産すること

が出来たが、それは男女二人の嬰兒だつた。名古屋から歸つた重三郎は、初めて儲けた子が男だつたのを殊の外よろこんで、日ましに可愛く育つて行く重太郎を抱いては、わが身の幸福に酔つてゐた。しかし産後次第に陰鬱になつて来たおもよの様子に、重三郎の心を曇らせるのだつた。醫者に診せると血の道だといふので、治療を重ねたが、何の驗もなく益々泣蟲になるばかりだつた。夫婦が龍愛の的にしてゐる重太郎のことを話し合つても、喜んだ後はすぐにはわくもなく涙に洩るのだつた。おもよがただ沈み勝に目を暮らすにつれて、家事向きの事をまかされるやうになつたお近は、急に變つた圖々しい態度になつて、酒を啣るやら主人に言葉を返すやら、雇人としてあるまじい所作を見せるのだつた。重三郎は不快に堪へかねておもよに解雇するやうに迫つたが、おもよは「お産の時世話になつたから」とて、夫を宥めては涙ぐむばかりだつた。いつも泣顔ばかり見せる妻と、太々しく振舞ふ悪婆との間に、何か秘密な關係がなければならぬ、重三郎は妻の不義といふやうな暗い想像をさへした。しかしおもよが夫にも打ち明けずお近の脅迫のまゝに忍従してゐる

のは、そんな事のためではなかつた。いつか茶飲話に上つた因果な畜生腹のお産に際會した時、上總生れのお近に女の子を殺して貰つた秘密を握られてゐるからだつた。お産の苦痛で夢心地だつた自分は頼んだ覚えはないが、お近は頼まれて恥を除いてやつたと言ひ張つてゐるから、もしこの秘密を夫に知られりになるだらう。おもよは死んだ子を思ひ、今の情なきを思つては、泣き暮すばかりだつた。お近の増長と横暴はその極に達した。重三郎が解雇を言ひ渡すに及んで、食つてかゝつて罵り騒ぎまでする。それを見かねた力造は、おもよの秘密を胸一つに収めて、遂にこの呪ふべき過根を斷つた。お近を殺して自首したのである。主人に残した書置きに、「いつまでもなかく、ぼつちやんのおほきくなるのをあのおよからみてゐるとあつたが、夫婦の仲にはさきの日の和樂を求むべくもなかつた。【批評】所謂作者の悲慘小説の一つであつて、人の卑しむ畜生腹の恥に墜ちたおもよの苦惱を、お近の毒々しい脅迫を筆として漸次深めて寫してゐる。しかし今日から見れば、秘密を中にした夫婦の氣持が、だん／＼隔つて行く徑路の方が、無理がなくわれ／＼の胸に感じられる部分となつてゐる。山男のやうな異常人の力造を用意して、おもよの苦悶を解決させてゐるのは、作者の趣味的反覆のみ見られて、反つてこの作の眞實感を減するものではあるまいか。

【上演】花房柳外によつて五幕十一場に脚色され、明治三十一年四月東京川上座に、川上音次郎・佐藤三郎によつて上演され、後四十年四月東京眞砂座に再演された。【水木】

筑前琵琶

竹窓餘話

筑前琵琶 筑前「琵琶」を見よ。  
竹窓餘話 筑前「琵琶」を見よ。隨筆一卷 寫【編者】閑樓庵主人【成立】寫本の巻尾に、傳寫主稻垣氏の識語には「原書は享保六七比之録也」とある。【解説】我が國戰國時代の末頃から、江戸時代の初期までの武家將士の逸話類を記したもので、毎話の末に評言を加へてある。寛永八年八月豊島刑部の井上正就又傷 貞享元年八月稻葉正休の堀田正俊又傷の事、里見忠義所領没收、駿河大納言忠長の事、旗下坪内物兵衛の由緒、鳥勝猛の末路、小幡信世の節義、鳥居久五郎の義烈、石田・小西・安國寺の心事、蒲生郷舎の出處、立花宗茂の氣魄、生駒將監の奇智、松岡清右衛門の武士道、福島正則の暴戻等凡そ三十四條を収む。但し末の數條は漫言である。序跋はない。【和田】

竹田

竹田 畫家・漢詩人【姓名】田能村孝憲、字は君聲、通稱行藏【別號】雪月書堂、補拙廬【生歿】天保五年(一四九四)八月二十六日大阪に病歿す。享年五十九【閨歴】豊後岡の人、家は世々藩醫であつた。父は碩庵といふ。幼より文學を好み、やゝ長じて醫を學んだが、その志にあらざる故を以て、藩主特に命じて儒員とした。時に二十三歳。即ち江戸に出て、古屋昔陽・岳東海に就いて學び、傍ら谷文晁に畫を學んだ。又京都に往き村瀨榜亭に就いて經學を修めた。三十八歳、多病の故を以て致仕、専ら風流に遊んだ。頼山陽・篠崎小竹・雲華上人等と交情最も厚かつた。竹田は才藝に秀で、詩文書畫はもとより、茶道・香道にも通じ、就中、畫技に長じ、一家の風を成した。【著書】「填詞圖譜」外に田能村竹田全集(圖書刊行會)一卷がある。【佐久】

竹堂 儒者【姓名】嘉永五年(一五二二)閏二月十一日江戸に生れ、嘉永五年(一五二二)閏二月十一日江戸に歿す。享年三十八【閨歴】仙臺の人。世々伊達氏に仕へた。幼時江戸に出て増島蘭園に學び、後、昌平塾に入り、業大に進んだ。ついで關西地方を遊歴して郷に歸り、再び江戸に出て、

竹生鳥 龍神物の謡曲を見よ。  
竹婦人 浄瑠璃作者・俳諧師【本名】未詳。通稱天満屋仁左衛門【別號】俳號岩本乾竹。外に吳丈・満足庵・千歳庵・鷹一雙

竹窓餘話 筑前「琵琶」を見よ。隨筆一卷 寫【編者】閑樓庵主人【成立】寫本の巻尾に、傳寫主稻垣氏の識語には「原書は享保六七比之録也」とある。【解説】我が國戰國時代の末頃から、江戸時代の初期までの武家將士の逸話類を記したもので、毎話の末に評言を加へてある。寛永八年八月豊島刑部の井上正就又傷 貞享元年八月稻葉正休の堀田正俊又傷の事、里見忠義所領没收、駿河大納言忠長の事、旗下坪内物兵衛の由緒、鳥勝猛の末路、小幡信世の節義、鳥居久五郎の義烈、石田・小西・安國寺の心事、蒲生郷舎の出處、立花宗茂の氣魄、生駒將監の奇智、松岡清右衛門の武士道、福島正則の暴戻等凡そ三十四條を収む。但し末の數條は漫言である。序跋はない。【和田】

竹田 畫家・漢詩人【姓名】田能村孝憲、字は君聲、通稱行藏【別號】雪月書堂、補拙廬【生歿】天保五年(一四九四)八月二十六日大阪に病歿す。享年五十九【閨歴】豊後岡の人、家は世々藩醫であつた。父は碩庵といふ。幼より文學を好み、やゝ長じて醫を學んだが、その志にあらざる故を以て、藩主特に命じて儒員とした。時に二十三歳。即ち江戸に出て、古屋昔陽・岳東海に就いて學び、傍ら谷文晁に畫を學んだ。又京都に往き村瀨榜亭に就いて經學を修めた。三十八歳、多病の故を以て致仕、専ら風流に遊んだ。頼山陽・篠崎小竹・雲華上人等と交情最も厚かつた。竹田は才藝に秀で、詩文書畫はもとより、茶道・香道にも通じ、就中、畫技に長じ、一家の風を成した。【著書】「填詞圖譜」外に田能村竹田全集(圖書刊行會)一卷がある。【佐久】